

大坂城址Ⅱ

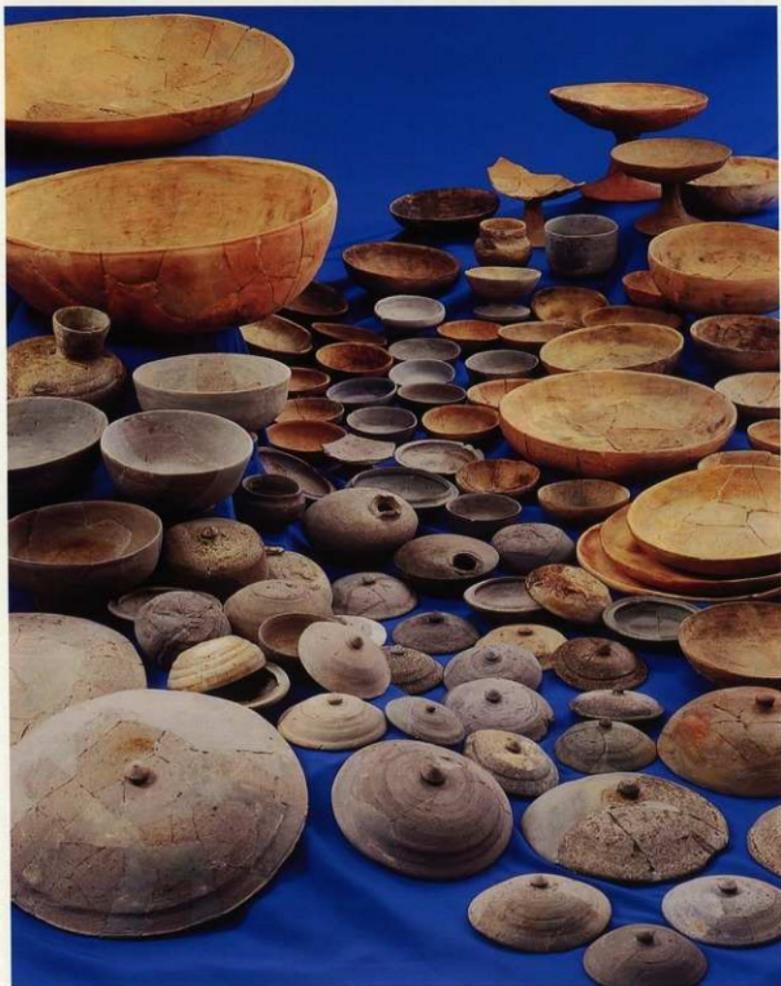
大坂城跡発掘調査報告書Ⅱ

—大阪府警察本部庁舎新築工事に伴う発掘調査報告書—

本文編

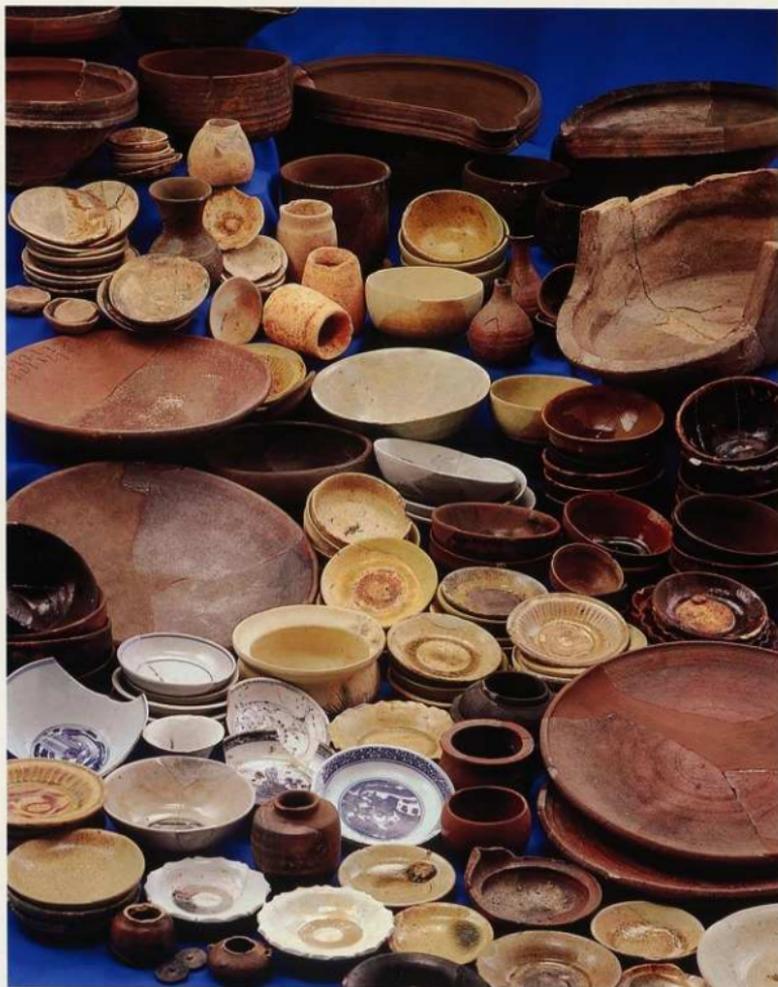
2002

(財)大阪府文化財調査研究センター



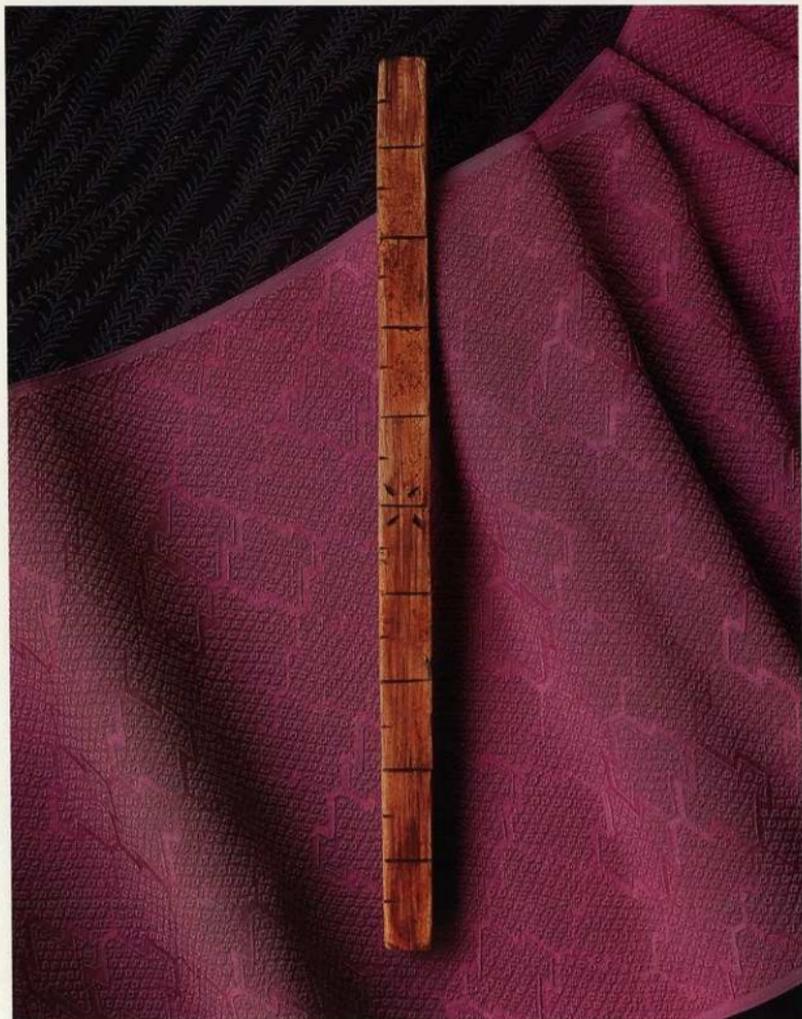
2. 古代の土器（飛鳥時代）

木簡群が出土した16層をはじめとする古代の包含層からは多量の土器が出土している。杯と呼ばれる食器類が多く、直径40cmをこえる鉢なども出土し、前期難波宮に関連する土器群として重要な位置を占めている。



3. 土器・陶磁器（豊臣大坂城時代）

調査地北半の7B地区では豊臣大坂城段階の生活面を重層的に検出している。それに伴い多種多様な遺物が出土しているが、そのうちでも最も多いのが土器と陶磁器である。国内各地の焼き物のほか、中国や朝鮮からもたらされたものも多い。



4. 物差し (豊臣大坂城時代)

豊臣前期の包含層から出土した1尺の尺度(物差し)であり、5分までの目盛りが刻まれている。長さは36cmを超え、標準尺である曲尺の1.2倍を測る。これまでの研究で、裁衣尺のうち、呉服尺と呼ばれる尺度が曲尺の1.2倍、鯨尺が1.25倍を測ることが指摘されている。したがって、本例は数少ない豊臣時代の呉服尺の実態を知る上での好例といえる。



5. 下駄（豊臣大坂城時代）

豊臣大坂城時代の下駄の出土数は200点を超えている。平面や歯の形は非常にバラエティーに富んでいるが、その中において正確に長さ7寸、幅3寸で作られた楕円形の下駄の一群を見いだすことができる。これらの下駄は鼻緒の穴の位置までもが正確に一致し、同一規格で生産された一群であることを知ることができる。



6. 羽子板 (豊臣大坂城時代)

大きさの異なる羽子板が6本出土している。このうちの2本には赤色顔料で模様がつけられている。



7. 犬形土製品 (豊臣大坂城時代)

手づくねの犬形土製品であり、100点以上出土している。最も小さいものは2 cmに満たない。犬が安産・多産の象徴とされることから、一説には安産のお守りとの指摘もある。

8. 難波宮と調査地

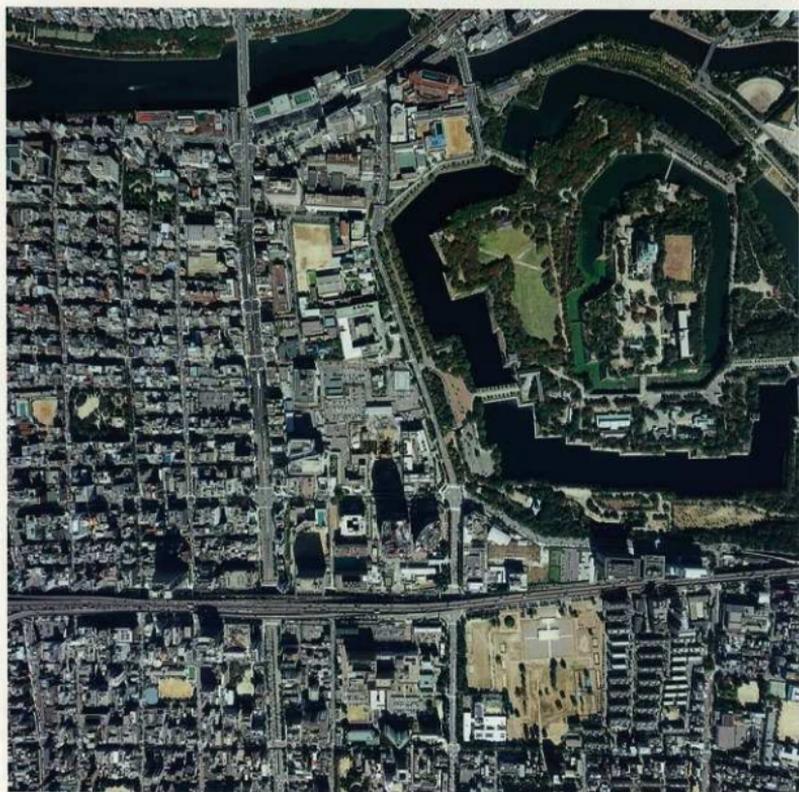
今回の調査は大阪府警察本部棟新築工事に伴うものである。

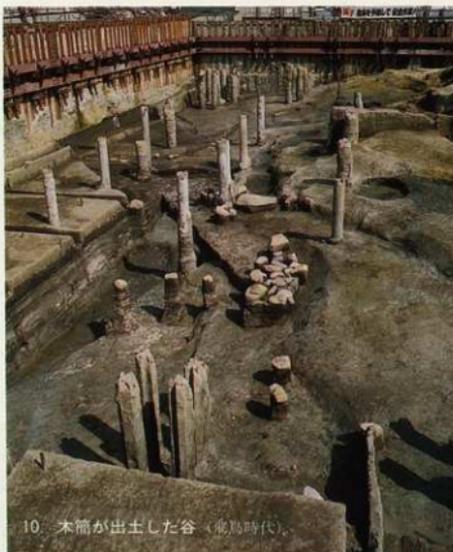
調査地は現在の大阪城の西側に位置する。

古代においては難波宮跡の北西隅近くに該当する。また、豊臣大坂城の時代においては、築城当初は惣構の中の城下町、後半は秀吉晩年に着工される三の丸に含まれる。近代以降は陸軍の所管する地域となる。



9. 調査地周辺航空写真

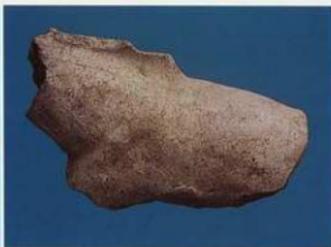




12. 16層出土の木簡群（飛鳥時代）
難波宮跡の北西において検出した谷から、30点を超える木簡が出土した。今回の木簡には西暦648年にあたる「戊申年」銘木簡が含まれる点できわめて重要な意味をもつものといえる。



13. 人形（飛鳥時代）



14. 土馬（飛鳥時代）

木簡群が出土した16層からは土馬2点のほか、祭祀に関わる木製品も出土している。

これらの遺物は、今回の調査で検出した谷の空間利用のあり方の一端を垣間見ることができる。



15. 木製品（飛鳥時代）



16. 絵馬（飛鳥時代）

木簡とともに出土した絵馬。大半を欠損するが、左後肢を上げた右向きの馬が描かれている。同時に出土した木簡や土器などの関係からみて、国内最古の絵馬と考えられる点で重要である。



17. 礎石建物跡（建物跡4）

（豊臣大坂城時代）

谷の中からは豊臣大坂城段階の生活面を重層的に検出している。

東から西への緩やかな傾斜面を段々に造成して区画を作り出している。

炉跡やトリベの出土などから、金属加工に関わる工房の存在も示唆されるなど、当時の景観を復原する上においてきわめて重要な成果をあげている。



18. トリベの集積

（豊臣大坂城時代）

谷の南側肩部付近で検出したトリベ集積遺構491からは輪の羽口などとともに100点を超えるトリベが出土している。

トリベの周辺には多量の炭層が広がっており、当地において金属の加工が行われていたことを示している。



19. 5連の竈（豊臣大坂城時代）

区画Cで検出した竈533。

上部は削平されているが、作り直しのある5連の竈である。

これ以外の竈では壁の部分に瓦片を積み上げたものや、底面に丸瓦を敷いたものなど、多様な竈を検出している。

今回の調査において、瓦では佐竹氏の家紋「扇に月丸紋」の軒丸瓦や多種の金箔押瓦が出土している。このうち、金箔押瓦では軒丸瓦・軒平瓦のほか、鬼瓦や蟻瓦も出土している。

そのほか、土師器の皿の口縁部に金箔を押したものが出土している。

また、今回の調査で多量に出土したトリベの一部には、純度の高い金が付着していることが明らかになり、製品の問題を含めて重要な位置を占めている。



20. 佐竹氏家紋瓦 (豊臣大坂城時代)



21. 金箔押瓦 (豊臣大坂城時代)



22. 金箔押土師器皿 (豊臣大坂城時代)



23. トリベ (豊臣大坂城時代)



24. 目貫

(豊臣大坂城時代)

多様な意匠をもつ目貫が出土している。

上段中央の大黒様は小槌と俵の部分に金の薄板を貼る。

左列3段目の家紋三双のものは後藤上三代の宋乗か乗真の作と考えられる。



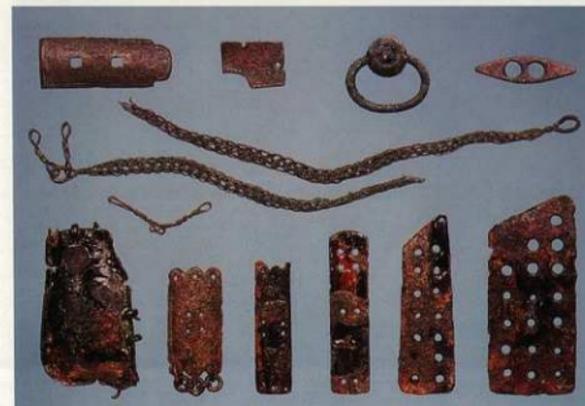
25. 刀装具

(豊臣大坂城時代)

刀装具の一部。

小柄・筭・鶴目・縁・切羽・賣金。

このうち、筭は豹虎の図像で、後藤宗家の光乗もしくは徳乗の作品であると考えられるものである。



26. 甲冑の金具

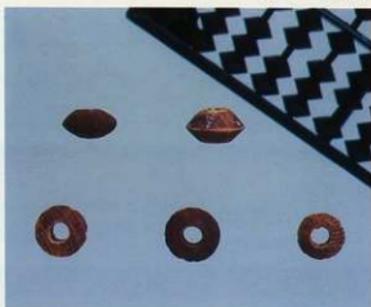
(豊臣大坂城時代)

甲冑に関わる金具類。押付・環・絆・小札など。左下は手甲の親指の部分で漆と金箔が残る。

鎖と飾り金具については甲冑に関わるものではないかもしれない。



27. 将棋駒・雙六駒・碁石・サイコロ(豊臣大坂城時代)



28. 算盤玉 (豊臣大坂城時代)



29. 銭貨 (豊臣大坂城時代)



30. 船の模型 (豊臣大坂城時代)



31. 数珠玉 (豊臣大坂城時代)



32. 焼けた土壁片 (豊臣大坂城時代)



33. 煙管 (豊臣大坂城時代)

34. 花押が
書かれた陶器片
(豊臣大坂城時代)



35. 枅の側板 (豊臣大坂城時代)

36. 木簡 (豊臣大坂城時代)



37. 棒杵・木瓜・蘭形分銅 (豊臣大坂城時代)



38. 漆器と箸（豊臣大坂城時代）



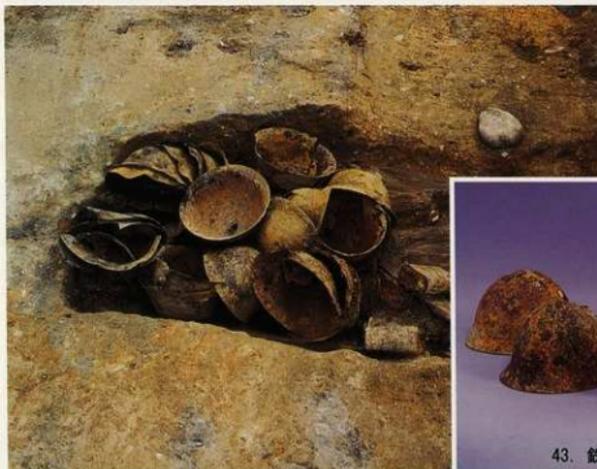
39. 漆器碗（豊臣大坂城時代）



40. 漆器碗（豊臣大坂城時代）



41. 金蒔絵漆器蓋（豊臣大坂城時代）



42. 土坑 1 (昭和時代)



43. 鉄帽と防毒マスク (昭和時代)



44. MEITO 衛生陶器 (昭和時代)



46. 陸軍食器ほか (昭和時代)



45. TOTO 衛生陶器 (昭和時代)



47. 認識票と襟徽章 (昭和時代)

序 文

大阪府中央区大手前および法円坂の一带は、東には大阪平野、西に大阪湾を望む上町台地の北端にあたります。当地は「難波の堀江」に比定される大川からも近く、古くより水上交通の拠点として瀬戸内海を通じて広く大陸ともつながっていました。

周辺の遺跡を概観すると、縄文時代では学史的にも有名な森の宮遺跡をはじめとし、古代では難波宮、さらに中世以降では大坂本願寺および豊臣・徳川両氏の大坂城などがあり、各時代を通して歴史上きわめて重要な位置を占めてきた地域であるといえます。

大阪府は府民の政治・行政ニーズに対応する大阪府庁を整備し、府民の共有スペースとして当該施設を中核にした周辺整備事業に取り組むこととなりました。また、一方、周辺地域はすでに記してきたように歴史的にみて、きわめて重要な地域に該当し、庁舎周辺整備事業に伴って実施してきたこれまでの発掘調査でも非常に重要な成果が蓄積されています。

本書は平成10・11年度に実施した大阪府警察本部庁舎新築工事に伴う大坂城跡発掘調査報告書です。今回の調査では北半から見つかった谷の中から、難波地域では初めてまとまった形で木簡が出土するという思いがけない発見がありました。出土した木簡の中には孝徳朝の年西暦648年の紀年銘木簡が含まれており、前期難波宮の研究に一石を投じる重要な歴史資料となりました。

これ以降でも豊臣・徳川大坂城に関連する遺構面を検出し、それに伴って多種多様な遺物が出土しています。とくに今回の調査では遺構のみならず、包含層についても水洗選別作業を行ったことにより、微細な遺物のほか、動物骨なども多数出土し、当時の景観復原に非常に重要な情報を得ることができたものと考えております。

また、近代以降では陸軍に関連する建物跡や戦後処理に関連すると考えられる遺物などを検出しています。本書では多くの紙幅を割く余裕はありませんでしたが、大坂城のその後を考える上においてきわめて重要な歴史資料であると考えています。

最後に調査にあたっては大阪府教育委員会文化財保護課、大阪府警察本部をはじめ、大阪府関係各位に多大なるご指導とご協力を賜っていることを明記しておきます。記して感謝するとともに、今後とも当センターの事業に一層の支援を賜るよう切に希望します。

平成14年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は、大阪府警察本部の新庁舎建設工事に伴う大坂城跡の2か年にわたる埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
2. 調査は、大阪府警察本部より財団法人大阪府文化財調査研究センターが委託を受け、調査部長井藤 徹・中部調査事務所長赤木克視（現：調査部調整課長）・調査第3係長国乗和雄の下、調査第3係技師江浦 洋・本田奈都子（平成13年9月退職）・仁木昭夫（平成13年7月逝去）・同専門調査員小林和美（平成13年3月退職）を担当者として実施し、写真は中部調査事務所調査第1係主査片山彰一、保存処理関係は主査山口誠治、専門調査員立花るり子（平成13年3月退職）の協力を得た。
本報告書作成に伴う整理作業は調査部長井藤 徹・中部調査事務所長藤田恵司・調査第2係長国乗和雄の下、調査第2係技師江浦 洋を担当として実施した。
3. 現地調査は、平成11年2月18日から平成11年11月30日まで実施した。整理作業は調査に引き続き中部調査事務所において平成12年3月31日まで終了報告書を作成し、遺跡の重要性を鑑みて調査速報として刊行した。その後、改めて本報告書作成のための整理作業を平成13年6月1日から平成14年3月29日まで中部調査事務所において実施し、平成14年3月29日をもって本報告書を刊行した。
4. 発掘調査および遺物整理作業の過程で次の方々をはじめとする多くの諸氏にご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である（敬称略、五十音順）。

相原嘉之・安部みき子・網 伸也・綾村 宏・池田一郎・池田裕英・石田成年・伊藤厚史・伊藤 純
井上直夫・岩田重雄・上田 睦・植野浩三・上野智史・内田好昭・梅崎恵司・大澤研一・大谷治孝
尾野善裕・金子裕之・鎌田元一・神谷正弘・川口宏海・川越俊一・木村有作・川崎 覚・黒崎 直
黒田慶一・小森俊寛・五味靖嘉・小山仁示・榮原永遠男・坂根宏子・狭川真一・佐藤重聖・佐藤 隆
清水真一・清水みき・十菱駿武・白石太一郎・鈴木昭典・鈴木靖民・積山 洋・前場幸治・館野和己
田中清美・田中 卓・玉井 功・次山 淳・寺崎保広・東野治之・豊田裕章・直木孝次郎・長山雅一
中尾芳治・西山要一・芳賀 満・秤屋健造・畑中英二・林部 均・平川 南・廣岡孝信・古市 晃
前川裕弘・松尾信裕・豆谷浩之・丸川義広・水野信太郎・宮本佐知子・三好美徳・村田光穂・森 毅
森 博達・森岡秀人・森屋直樹・八木 滋・安村俊史・山中 章・山中敏史・渡辺見宏・渡辺昌宏・和田 菜
大阪家庭裁判所・京都市立植柳小学校・柴犬研究会・㈱TOTO・㈱ドキュメンタリー工房
㈱鳴海製陶・秤の館・ピース大阪・㈱藤倉ゴム工業・防衛庁防衛研究所・前川軍装美術館

5. 発掘調査および遺物整理作業の過程では、以下の方々を中心に参加と協力を得た（五十音順）。
井上幸子・岩崎美紀子・宇川里香・江角 啓・奥村宏美・川田嘉代子・久木真美・倉奈津子・小泉陽子・斎藤陽子・里 百代・信田美津・正司真理子・曾和峻雄・伊達佳代・田中エミ子・田中 東・遠山美樹子・長尾恵・中島零士・中筋英子・沼澤順子・野方保美・増井英子・見市 諭・水取康人・浜田保子・林いず美・山下茅津子・山本麻理・行川 勝・米子千智・渡辺富彦
6. 調査の実施にあたっては、以下の自然科学分野からの分析を委託した。

微化石分析 株式会社古環境研究所

石材鑑定 神戸大学 田結庄良昭

大阪府立三国ヶ丘高校 佐藤隆春

金属分析 バリノ・サーヴェイ株式会社

7. 出土した人骨および動物骨については大阪市立大学の安部みき子氏に鑑定および分析をお願いし、玉槨を賜った。また、出土した大工道具ならびに建築部材に関しては前場資料館館長の前場幸治氏にご教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である。
8. 陶磁器および漆器の一部については、実測およびデジタル画像撮影、編集に関わる業務を縄文化財サービスに委託した。本文編中の図68～72・108～110・153～154はその成果である。
9. 本調査に関わる遺物・写真・カラーズライド・実測図等は財団法人大阪府文化財調査研究センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。
10. 本報告の題字は当センター理事長水野正好の揮毫による。

凡 例

1. 挿図の縮尺については遺構全体図を400分の1で統一、遺構図についても大半を20分の1としたが、一部縮尺の異なるものもある。遺構および断面図中の標高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値である。なお、本文中における標高の表記もとくに記さない場合はすべてT.P.値である。
2. 発掘調査に伴う地区割りは国土座標の第VI座標系に基づく表記方法をとっている。なお、本書で用いた北はいずれも座標北を基準としている。
3. 遺構図における断面位置は任意に行い、図面上に「L」形によってその位置を明記した。
4. 挿図における遺物番号は、基本的には各挿図内で完結する番号を付与している。ただし、下駄および銭貨、犬形土製品など、出土点数が多く個体識別が困難な遺物については作業の初期段階に通し番号を付与して整理を行っている。したがって、本報告においては無用な混乱を避けるために、そのままの固有番号を踏襲して記述を進めている。
5. 各遺物一覧表に掲げた遺物はとくに記さない場合、法量はcm、質量についてはgを単位とする。
6. 木簡および絵馬の写真はいずれも赤外写真である。また、木簡の実測図は赤外線カメラ映像を重視して行い、にじみやシミ等は除去するかたちで図化作業を行っている。
7. 木簡の特徴や調整についての事実記載については大阪市立大学教授栄原永遠男氏の観察結果および御教示に依拠する点が多い。
8. 木製品の樹種鑑定は当センターの山口誠治が行った。
9. 本書の執筆分担については目次に記した通りである。なお、豊臣大坂城関連の出土遺物についての記述に関しては小林和美（専門調査員：平成13年3月退職）が記した覚書に基づく点が多いことを明記しておく。また、編集は鹿野 皇（専門調査員）の協力のもと、江浦が行った。

目 次

巻頭カラー図版

1. 16層出土の主要木簡（飛鳥時代）
2. 古代の土器（飛鳥時代）
3. 土器・陶磁器（豊臣大坂城時代）
4. 物差し（豊臣大坂城時代）
5. 下駄（豊臣大坂城時代）
6. 羽子板（豊臣大坂城時代）
7. 犬形土製品（豊臣大坂城時代）
8. 難波宮と調査地
9. 調査地周辺航空写真
10. 木簡が出土した谷（飛鳥時代）
11. 「戊申年」銘木簡（飛鳥時代）
12. 16層出土の木簡群（飛鳥時代）
13. 人形（飛鳥時代）
14. 土馬（飛鳥時代）
15. 木製品（飛鳥時代）
16. 絵馬（飛鳥時代）
17. 礎石建物跡（豊臣大坂城時代）
18. トリべの集積（豊臣大坂城時代）
19. 5連の竈（豊臣大坂城時代）
20. 佐竹氏家紋瓦（豊臣大坂城時代）
21. 金箔押瓦（豊臣大坂城時代）
22. 金箔押土師器皿（豊臣大坂城時代）
23. トリべ（豊臣大坂城時代）
24. 目貫（豊臣大坂城時代）
25. 刀装具（豊臣大坂城時代）
26. 甲冑の金具（豊臣大坂城時代）
27. 将棋駒・雙六駒・碁石・サイコロ
（豊臣大坂城時代）
28. 算盤玉（豊臣大坂城時代）
29. 銭貨（豊臣大坂城時代）
30. 船の模型（豊臣大坂城時代）
31. 数珠玉（豊臣大坂城時代）
32. 焼けた土壁片（豊臣大坂城時代）
33. 煙管（豊臣大坂城時代）
34. 花押が書かれた陶器片（豊臣大坂城時代）
35. 柵の側板（豊臣大坂城時代）
36. 木簡（豊臣大坂城時代）
37. 桿秤・木瓜・蘭形分銅（豊臣大坂城時代）
38. 漆器と箸（豊臣大坂城時代）
39. 漆器椀（豊臣大坂城時代）
40. 漆器椀（豊臣大坂城時代）
41. 金蒔絵漆器蓋（豊臣大坂城時代）
42. 土坑 1（昭和時代）
43. 鉄帽と防毒マスク（昭和時代）
44. MEITO 衛生陶器（昭和時代）
45. TOTO 衛生陶器（昭和時代）
46. 陸軍食器ほか（昭和時代）
47. 認識票と襟徽章（昭和時代）

序 文 例 言 凡 例 目 次

第 1 章 調査に至る経過と方法	1
第 1 節 調査の経緯と経過	1
第 2 節 調査の方法	2
第 2 章 位置と環境	4
第 3 章 調査の概要と層序	8
第 1 節 調査の概要	8
第 2 節 層序	9
1. 7A 地区	9
2. 7B 地区	10

第4章	古墳時代以前の遺構と遺物	(江浦)	15
	第1節	遺構	15
	第2節	遺物	15
第5章	飛鳥・奈良時代の遺構と遺物	(江浦)	17
	第1節	遺構	17
	1.	前提	17
	2.	木簡等の出土状況	18
	3.	集石遺構	19
	第2節	遺物	22
	1.	木簡	22
	2.	絵馬	35
	3.	木製品	36
	4.	土器	40
	5.	瓦類	54
	第3節	小 結	55
第6章	中世の遺構と遺物	(江浦)	56
	第1節	遺 構	56
	1.	水田面	56
	第2節	遺 物	58
第7章	豊臣大坂城の遺構と遺物	(江浦)	59
	第1節	遺 構	59
	1.	前提	59
	2.	豊臣4面(10層上面)	62
	3.	豊臣3面(9層上面)	66
	4.	豊臣2面(8層上面)	67
	5.	豊臣1面(7層上面)	73
	6.	豊臣0面(5層・4c層上面)	83
	第2節	遺 物	(8・10を除き江浦) 93
	1.	土器・陶磁器	93
	2.	瓦類	113
	3.	土製品	125
	4.	木簡	133
	5.	木製品	138
	6.	下駄	151
	7.	櫛	168
	8.	漆器	(亀井) 171
	9.	銭貨	184
	10.	刀剣・刀装・装剣金具類	(三好) 207
	11.	甲冑関連遺物	219
	12.	鉄釘	222
	13.	その他の金属製品	224
	14.	鋳造関連遺物	228
	15.	石製品	231
	16.	骨製品	235
	17.	ガラス製品	235

	18. 布製品	235
	19. 計量関係遺物	236
第8章	徳川大坂城の遺構と遺物 (江浦)	244
第1節	遺構	244
	1. 前提	244
	2. 4層上面	244
第2節	遺物	249
	1. 前提	249
	2. 陶磁器	249
	3. 瓦類	249
	4. 銭貨	249
	5. その他	249
第9章	近・現代の遺構と遺物 (江浦)	255
第1節	遺構	255
	1. 前提	255
	2. 調査成果	255
第2節	遺物	258
第10章	自然科学的分析	263
第1節	7B地区谷部における古環境分析(株式会社 古環境研究所)	263
	1. プラント・オパール分析	263
	2. 花粉分析	266
	3. 珪藻分析	271
第2節	豊臣大坂城跡関連の金属分析(パリーノ・サーヴェイ株式会社)	278
	1. はじめに	278
	2. 試料	278
	3. トリベの分析	278
	4. 地金の分析—大坂城出土銅版の金属学的調査(大澤正巳・鈴木瑞穂)	284
	5. まとめ	288
第3節	7B地区谷部16層等検出の石材鑑定(田結庄良昭・佐藤隆春)	291
	1. はじめに	291
	2. 岩石記載(肉眼鑑定)	294
	3. 顕微鏡記載	295
	4. 全岩化学分析	296
第4節	出土無文銭・小形トリベ付着金属の蛍光X線分析(山口誠治)	303
	1. はじめに	303
	2. 蛍光X線分析による金属遺物の材質調査	303
	3. まとめ	304
第5節	大坂城跡出土の人骨・獣骨(安部みき子)	306
	1. 人骨	306
	2. 動物遺体	307
	3. 各層の特徴	312
第11章	総括 (江浦)	349

挿 図 目 次

図1 調査地の位置	1
図2 調査地と国土産標	2
図3 周辺の遺跡分布	5
図4 既往の調査地	6
図5 層序模式図	11
図6 土層断面図	13・14
図7 古墳時代遺構面	15
図8 古墳時代遺物 (17・18層ほか) ..	16
図9 16層木簡出土分布	18
図10 集石遺構1	20
図11 16層出土木簡(1)	32
図12 16層出土木簡(2)	33
図13 16層出土木簡(3)	34
図14 16層出土絵馬	35
図15 16層出土木製品(1)	37
図16 16層出土木製品(2)	38
図17 16層出土木製品(3)	39
図18 16層出土土師器・土馬	42
図19 14・15層・792～795出土土師器 ..	43
図20 16層出土須恵器	44
図21 792～795出土須恵器	45
図22 14・15層出土須恵器	46
図23 須恵器ヘラ記号	47
図24 古代瓦	54
図25 11層上面検出水田面	57
図26 水田面検出の足跡(部分)	58
図27 豊臣4面(B地区:10層上面) ..	60
図28 井戸744	63
図29 埋桶723	63
図30 井戸728	63
図31 井戸727(井戸487)	63
図32 豊臣3面(B地区:9層上面) ..	65
図33 井戸800	66
図34 豊臣2面(B地区:8層上面) ..	67
図35 石敷き523	68
図36 竈651	69
図37 竈527・544	69
図38 祭祀遺構609	72
図39 階段状遺構687	72
図40 埋桶663	72
図41 豊臣1面(A地区:地山面, B地区:7層上面)	74
図42 瓦敷き525	75
図43 土坑521	76
図44 埋桶534	77
図45 瓦溜め532	77
図46 竈533	78
図47 トリべ集積遺構491	80
図48 土坑536	80
図49 井戸328・329	82
図50 井戸329断面図	82
図51 井戸331	82
図52 井戸328断面図	82
図53 井戸328断面模式図	83
図54 豊臣0面(4c層上面)	84
図55 土坑318	85
図56 土坑293	85
図57 土坑482	85
図58 井戸247	86
図59 井戸518	86
図60 溝等出土陶磁器・土器	94
図61 土坑出土陶磁器・土器(1) ..	95
図62 土坑出土陶磁器・土器(2) ..	96
図63 井戸等出土陶磁器・土器	97
図64 井戸・土坑出土陶磁器・土器 ..	98
図65 6・7層出土陶磁器・土器	99
図66 7～9層出土陶磁器・土器	100
図67 7～13層出土陶磁器・土器 ..	101
図68 溝・土坑出土青花	102
図69 土坑・井戸・包含層出土青花等 ..	103
図70 6～10層出土青花等	104
図71 7～9層出土青花	105
図72 井戸・包含層出土陶磁器	106
図73 金箔押軒丸瓦・軒平瓦	114

図 74	金箔押道具瓦	115	図 113	椀・皿類の形態	177
図 75	軒丸瓦 (1)	119	図 114	椀・皿類の塗色	177
図 76	軒丸瓦 (2)	120	図 115	椀・皿類の文様	177
図 77	軒丸瓦・軒平瓦	121	図 116	銭貨の出土順位 (1)	185
図 78	軒平瓦・道具瓦	122	図 117	銭貨の出土順位 (2)	185
図 79	犬形土製品	127	図 118	銭貨の出土比率 (1)	187
図 80	犬形土製品の法量分布	130	図 119	銭貨の出土比率 (2)	187
図 81	同工品の法量分布	130	図 120	主要銭貨の直径と質量	187
図 82	土製品	132	図 121	銭貨 (1)	188
図 83	木簡 (1)	134	図 122	銭貨 (2)	189
図 84	木簡 (2)	135	図 123	銭貨 (3)	190
図 85	木簡 (3)	136	図 124	銭貨 (4)	191
図 86	木製品 (1)	139	図 125	銭貨 (5)	192
図 87	木製品 (2)	141	図 126	銭貨 (6)	193
図 88	木製品 (3)	143	図 127	銭貨 (7)	194
図 89	木製品 (4)	145	図 128	銭貨 (8)	195
図 90	木製品 (5)	146	図 129	柄前・精状木製品・刀剣類	209
図 91	箸法量グラフ	147	図 130	日貫・筭・小柄	211
図 92	下駄の分類	152	図 131	鳩目・鷓目・切羽・縁・小刀・その他	215
図 93	下駄の法量グラフ (I 1a 類)	154	図 132	甲冑関連遺物	220
図 94	下駄の法量グラフ (I 1a 類以外)	155	図 133	鉄釘	223
図 95	下駄の規格性	156	図 134	金属製品	225
図 96	下駄 (1)	157	図 135	トリペ・羽口	229
図 97	下駄 (2)	158	図 136	石製品 (1)	232
図 98	下駄 (3)	159	図 137	石製品 (2)	233
図 99	下駄 (4)	160	図 138	基石法量グラフ	234
図 100	下駄 (5)	161	図 139	骨格・ガラス製品	235
図 101	下駄 (6)	162	図 140	尺度	236
図 102	下駄 (7) と刻印拓影 (1)	163	図 141	橋	239
図 103	刻印拓影 (2)	164	図 142	橋の計測部位	241
図 104	刻印一覧 (模式図)	164	図 143	桿秤・分銅	242
図 105	下駄の計測・観察部位	164	図 144	江戸時代遺構面 (4 a 層上面)	245
図 106	櫛分類図	168	図 145	櫛列断面図	246
図 107	櫛	169	図 146	ビット 20	247
図 108	漆器 (1)	172	図 147	ビット 64	247
図 109	漆器 (2)	173	図 148	土坑 136	247
図 110	漆器 (3)	174	図 149	土坑 161	247
図 111	漆器の計測方法	175	図 150	土坑 190	247
図 112	椀・皿類の法量	176			

図 151	井戸 92	248
図 152	井戸 539	248
図 153	土坑 391 出土陶磁器	250
図 154	土坑出土陶磁器	251
図 155	江戸瓦類	252
図 156	銭貨	252
図 157	近・現代遺構面	256
図 158	近・現代主要遺構	257
図 159	近・現代遺物 (1)	259
図 160	近・現代遺物 (2)	261
図 161	近・現代遺物 (3)	262
図 162	11・12 層のプラント・オパール分析結果	265
図 163	11 層上面水田面のプラント・オパール分析結果	265

図 164	花粉ダイアグラム	268
図 165	花粉分析から想定される植生と環境の変遷	269
図 166	主要珪藻ダイアグラム	272
図 167	地金 1 銅素地と偏析夾雑物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果	289
図 168	地金 1 酸化物と偏析夾雑物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果	289
図 169	地金 2 銅素地と偏析夾雑物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果	290
図 170	地金 2 酸化物と偏析夾雑物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果	290
図 171	集石遺構 1・2 における鑑定対象石材 (トーンをかけた石材)	292

表 目 次

表 1	関連年表	7
表 2	集石遺構 1・2 石材観察表	21
表 3	須恵器ヘラ記号一覧	47
表 4	古代土器一覧 (1)	48
表 5	古代土器一覧 (2)	49
表 6	古代土器一覧 (3)	50
表 7	古代土器一覧 (4)	51
表 8	古代木製品一覧 (1)	52
表 9	古代木製品一覧 (2)	53
表 10	豊臣遺構一覧 (1)	87
表 11	豊臣遺構一覧 (2)	88
表 12	豊臣遺構一覧 (3)	89
表 13	豊臣遺構一覧 (4)	90
表 14	豊臣遺構一覧 (5)	91
表 15	豊臣遺構一覧 (6)	92
表 16	豊臣陶磁器・土器一覧 (1)	107
表 17	豊臣陶磁器・土器一覧 (2)	108
表 18	豊臣陶磁器・土器一覧 (3)	109
表 19	豊臣陶磁器・土器一覧 (4)	110
表 20	豊臣陶磁器・土器一覧 (5)	111
表 21	豊臣陶磁器・土器一覧 (6)	112

表 22	金箔押軒丸瓦一覧	116
表 23	金箔押軒平瓦一覧	116
表 24	金箔押道具瓦一覧	116
表 25	道具瓦一覧	118
表 26	軒丸瓦一覧	123
表 27	軒平瓦一覧	124
表 28	大形土製品一覧	131
表 29	豊臣木製品一覧 (1)	149
表 30	豊臣木製品一覧 (2)	150
表 31	下駄一覧 (1)	165
表 32	下駄一覧 (2)	166
表 33	下駄一覧 (3)	167
表 34	櫛一覧	170
表 35	漆器一覧 (1)	178
表 36	漆器一覧 (2)	179
表 37	漆器一覧 (3)	180
表 38	漆器一覧 (4)	181
表 39	漆器一覧 (5)	182
表 40	漆器一覧 (6)	183
表 41	豊臣銭貨一覧 (1)	196
表 42	豊臣銭貨一覧 (2)	197

表 43	豊臣銭貨一覧 (3)	198	表 79	16層-No. 3 安山岩と瀬戸内火山岩類との 比較	298
表 44	豊臣銭貨一覧 (4)	199	表 80	トリペー一覧	303
表 45	豊臣銭貨一覧 (5)	200	表 81	無文銭一覧	303
表 46	豊臣銭貨一覧 (6)	201	表 82	トリペの分析結果 (単位: X線強度 cps)	303
表 47	豊臣銭貨一覧 (7)	202	表 83	無文銭の分析結果 (単位: X線強度 cps)	304
表 48	豊臣銭貨一覧 (8)	203	表 84	人骨の出土表	315
表 49	豊臣銭貨一覧 (9)	204	表 85	動物遺体の同定表 (1)	316
表 50	豊臣銭貨一覧 (10)	205	表 86	動物遺体の同定表 (2)	317
表 51	豊臣銭貨一覧 (11)	206	表 87	動物遺体の同定表 (3)	318
表 52	刀装・装剣金具類一覧 (1)	217	表 88	動物遺体の同定表 (4)	319
表 53	刀装・装剣金具類一覧 (2)	218	表 89	動物遺体の同定表 (5)	320
表 54	小札一覧	221	表 90	動物遺体の同定表 (6)	321
表 55	金属製品一覧 (1)	226	表 91	動物遺体の同定表 (7)	322
表 56	金属製品一覧 (2)	227	表 92	動物遺体の同定表 (8)	323
表 57	トリペー一覧	230	表 93	動物遺体の同定表 (9)	324
表 58	豊臣石製品一覧	234	表 94	包含層の鳥類の出現頻度表	325
表 59	尺度の寸法	236	表 95	包含層以外の出現頻度表 (1)	326
表 60	拵一覧	240	表 96	包含層以外の出現頻度表 (2)	327
表 61	拵法量一覧	241	表 97	鳥類の上肢の計測表	328
表 62	秤関係遺物一覧	243	表 98	鳥類の下肢の計測表	328
表 63	軒丸瓦一覧	253	表 99	包含層の食肉類・霊長類・兔類の出現頻度表	329
表 64	軒平瓦一覧	253	表 100	包含層の齧歯類の出現頻度表	330
表 65	棟込瓦一覧	253	表 101	包含層の有蹄類の出現頻度表	330
表 66	江戸時代銭貨一覧	254	表 102	哺乳類の頭骨の計測表	331
表 67	ブランド・オパール分析結果	264	表 103	哺乳類の下顎骨の計測表	332
表 68	花粉分析結果	267	表 104	哺乳類の椎骨の計測表 (1)	333
表 69	珪藻分析結果	273	表 105	哺乳類の椎骨の計測表 (2)	334
表 70	胎土薄片観察結果	279	表 106	哺乳類の上肢の計測表 (食肉類) ..	335
表 71	トリペ付着物の化学組成	283	表 107	哺乳類の下肢の計測表 (食肉類) ..	336
表 72	供試材の履歴と調査項目	284	表 108	哺乳類の上肢の計測表 (霊長類・兔類・ 有蹄類)	337
表 73	石材鑑定結果一覧	291	表 109	哺乳類の下肢の計測表 (霊長類・偶蹄類・ 奇蹄類)	338
表 74	全岩化学分析の測定結果	297			
表 75	斑レイ岩の化学組成の比較	297			
表 76	生駒山に分布する斑レイ岩と集積遺構 2 -No. 37 の化学組成	298			
表 77	六甲花崗岩と集積遺構 2 -No. 36 の化学組成	298			
表 78	室生溶結凝灰岩との比較	298			

写真目次

写真1	調査風景	3	写真21	トリベ胎土薄片(491-73)	281
写真2	ライアープレートによる井戸328の調査	3	写真22	地金1・2の顕微鏡組織	286
写真3	井戸328調査状況	3	写真23	地金1銅素地及び酸化物と偏析夾雑物の特性X線像と定量分析値	287
写真4	土坑1(昭和)	8	写真24	地金2銅素地及び酸化物と偏析夾雑物の特性X線像と定量分析値	288
写真5	徳川大坂城遺構面(江戸)	8	写真25	石材の顕微鏡写真(1)	299
写真6	豊臣大坂城遺構面	8	写真26	石材の顕微鏡写真(2)	300
写真7	谷部水田面(中世末?)	8	写真27	石材の顕微鏡写真(3)	301
写真8	谷部古代遺構面(飛鳥)	8	写真28	石材の顕微鏡写真(4)	302
写真9	客土内に残る土層断面(1)	12	写真29	トリベ・無文銭の顕微鏡拡大写真	305
写真10	客土内に残る土層断面(2)	12	写真30	骨(ヒト)	339
写真11	谷部16層上面検出状況	19	写真31	骨(ウマ)	340
写真12	集石遺構と石材番号	20	写真32	骨(ブタ)	341
写真13	11層上面水田面検出状況	56	写真33	骨(イノシシ、ウサギ・テン・ニホンイタチ)	342
写真14	豊臣大坂城の遺構 (西:9層上面、東:10層上面)	61	写真34	骨(シカ)	343
写真15	昭和28年当時の検出建物	255	写真35	骨(タヌキ)	344
写真16	ブランド・オパール(植物珪酸体)の顕微鏡写真	275	写真36	骨(ネコ)	345
写真17	花粉・孢子・寄生虫卵の顕微鏡写真	276	写真37	骨(サル、カメ、イヌ)	346
写真18	珪藻の顕微鏡写真	277	写真38	骨(ネズミ、魚類・スポン)	347
写真19	トリベ胎土薄片(491-33)	281	写真39	骨(鳥類)	348
写真20	トリベ胎土薄片(491-68)	281			

付図目次

付図1	近世～現代遺構面(4a層)	付図5	豊臣3面(7B地区:9層上面)
付図2	豊臣0面(7A地区:4c層上面)	付図6	豊臣4面(7B地区:10層上面)
付図3	豊臣1面(7A地区:地山面、7B地区:7層上面)	付図7	中世遺構面(11層上面)
付図4	豊臣2面(7B地区:8層上面)	付図8	古代遺構面(17層上面)

写真図版目次

図版1 航空写真

1. 調査地周辺航空写真(昭和3年)

図版2 航空写真と調査前風景

1. 調査地航空写真(平成10年)
2. 調査前
3. 調査地周辺航空写真(昭和36年)

図版3 古墳時代以前 谷部

1. 谷部(7B地区)
2. 谷部(7B地区)
3. 谷部流路土層断面(7B地区)
4. 谷部(7B地区)
5. 谷部(7B地区)

図版4 古代 谷部

1. 谷部(7B地区)
2. 谷部(7B地区)
3. 谷部(7B地区)
4. 谷部(7B地区)
5. 集石遺構1・2(7B地区)

図版5 古代 谷部

1. 集石遺構1(7B地区)
2. 集石遺構1(7B地区)
3. 谷部土層断面(7B地区;10~16層上面)
4. 谷部土層断面(7B地区;10~16層上面)
5. 須志器提瓶出土状況(7B地区)
6. 偶蹄目動物足跡(7B地区)

図版6 中世 水田面

1. 水田面(7B地区)
2. 水田面(7B地区)
3. 水田面(7B地区)
4. 水田面東半部(7B地区)
5. 水田面西半部(7B地区)

図版7 中世 水田面

1. 水田面西端部(7B地区)
2. 畦畔779(7B地区)
3. 水口783(7B地区)
4. 水口784(7B地区)

5. 水口785(7B地区)

6. 溝782(7B地区)

図版8 中世 水田面

1. 水田面埋没状況(7B地区;6~10層)
2. 水田面埋没状況(7B地区;6~10層)
3. 水田777検出足跡(人)
4. 水田777検出足跡(人)
5. 水田777検出足跡(動物?)
6. 畦畔780盛土内遺物出土状況

図版9 7A地区 地山面

1. 地山面全景(4・5層除去面)
2. 地山面東半部(4・5層除去面)
3. 地山面西半部(4・5層除去面)
4. 地山面全景(4・5層除去面)
5. 地山面全景(4・5層除去面)
6. 地山面東半部(4・5層除去面)

図版10 7A地区 豊臣 井戸

1. 井戸247上層断面
2. 井戸247下層断面
3. 井戸247底面遺物出土状況
4. 井戸247底面細部
5. 井戸328・井戸329
6. 井戸328・井戸329断面

図版11 7A地区 豊臣 井戸

1. 井戸328上層断面
2. 井戸328全景
3. 井戸328 3段目井戸枠
4. 井戸328 5~6段目井戸枠
5. 井戸328調査状況
6. 井戸328調査用ライナープレート

図版12 7A地区 豊臣 井戸

1. 井戸328 6段目井戸枠
2. 井戸328完掘状況
3. 井戸328 16段目井戸枠
4. 井戸331断面
5. 井戸331完掘状況
6. 井戸331底面遺物出土状況

図版 13 7 B 地区 豊臣 7 層上面 全景

1. 7 層上面 (7B1~3 地区東)
2. 7 層上面 (7B1~3 地区東)
3. 7 層上面 (7B1~3 地区東)
4. 7 層上面 (7B1 地区東)
5. 7 層上面 (7B1 地区東)
6. 7 層上面 (7B1 地区東)

図版 14 7 B 地区 豊臣 7 層上面・8 層上面 全景

1. 7 層・8 層上面 (東 8 層・西 7 層上面)
2. 7 層・8 層上面 (東 8 層・西 7 層上面)
3. 8 層上面 (7B 地区東半部)
4. 7 層上面 (7B 地区西)
5. 7 層上面 (7B 地区西)
6. 7 層上面 (7B 地区西)

図版 15 7 B 地区 豊臣 8 層上面・9 層上面 全景

1. 8 層・9 層上面 (東 9 層・西 8 層上面)
2. 8 層・9 層上面 (東 9 層・西 8 層上面)
3. 8 層・9 層上面 (東 9 層・西 8 層上面)
4. 8 層・9 層上面 (東 9 層・西 8 層上面)
5. 9 層上面 (7B 地区東)
6. 9 層上面 (7B 地区東)

図版 16 7 B 地区 豊臣 8 層上面・9 層上面 全景

1. 8 層上面 (7B 地区西)
2. 8 層上面 (7B 地区西)
3. 8 層上面 (7B 地区南西)
4. 建物跡 4 (7B 地区北西)
5. 建物跡 4 (7B 地区西)
6. 建物跡 1 (7B 地区東)

図版 17 7 B 地区 豊臣 9 層上面・10 層上面 全景

1. 9 層上面 (7B 地区西)
2. 9 層上面 (7B 地区西)
3. 10 層上面 (7B 地区東)
4. 10 層上面 (7B 地区東)
5. 土層断面 (7B 地区東:6~8 層)
6. 土層断面 (7B 地区東:6~8 層)

図版 18 7 B 地区 豊臣 礎石

1. 建物跡 8 (7B1 地区)
2. 礎石 52・53 (7B1 地区)
3. 礎石 51・79 (7B1 地区)

4. 礎石 79 下部トリベ出土状況 (7B1 地区)

5. 礎石 245 (7B 地区東)

図版 19 7 B 地区 豊臣 礎石

1. 礎石 265 (7B 地区東)
2. 礎石 301・302 (7B 地区東)
3. 礎石 303 (7B 地区東)
4. 礎石 303 (7B 地区東)
5. 礎石 304 (7B 地区西)
6. 礎石 264 (7B 地区東)

図版 20 7 B 地区 豊臣 溝・暗渠

1. 溝 506 (7B1 地区)
2. 溝 506 (7B1 地区)
3. 溝 506 (7B1 地区)
4. 暗渠 702 (7B 地区西)
5. 暗渠 702 (7B 地区西)

図版 21 7 B 地区 豊臣 溝・木樋ほか

1. 溝 506 (7B1 地区)
2. 溝 580 (7B 地区東)
3. 方形木組み遺構 673 (7B 地区西)
4. 木樋 646 (7B 地区西)
5. 溝 542 (7B 地区西)

図版 22 7 B 地区 豊臣 土坑

1. 土坑 482 (7B 地区東)
2. 土坑 482 遺物出土状況 (7B 地区東)
3. 土坑 521 遠景 (7B 地区東)
4. 土坑 521 (7B 地区東)
5. 土坑 535 (7B1 地区)
6. 土坑 536 (7B 地区西)

図版 23 7 B 地区 豊臣 土坑

1. 土坑 541 (7B 地区東)
2. 土坑 595 遺物出土状況 (7B2 地区)
3. 土坑 596 (7B 地区東)
4. 土坑 596 金箔押瓦出土状況 (7B 地区東)
5. 土坑 501 遺物出土状況 (7B1 地区)
6. 土坑 618 (7B2 地区)

図版 24 7 B 地区 豊臣 井戸

1. 井戸 727・487 遠景 (7B 地区西)
2. 井戸 487 3・4 段目井戸枠 (7B 地区西)
3. 井戸 518 1・2 段目井戸枠 (7B4 地区)

4. 井戸 518 3 段目井戸枠 (7B4 地区)
5. 井戸 520 1 段目井戸枠 (7B 地区西)
6. 井戸 520 1 段目井戸枠 (7B 地区西)
- 図版 25 7 B 地区 豊臣 井戸
1. 井戸 800 1 段目井戸枠 (7B 地区東)
2. 井戸 800 1・2 段目井戸枠 (7B 地区東)
3. 井戸 800 1～3 段目井戸枠 (7B 地区東)
4. 井戸 539 1 段目井戸枠 (7B 地区東)
5. 井戸 728 1 段目井戸枠 (7B 地区西)
- 図版 26 7 B 地区 豊臣 井戸
1. 井戸 519 1 段目井戸枠 (7B4 地区)
2. 井戸 663 1・2 段目井戸枠 (7B 地区東)
3. 井戸 744 瓦製井戸枠 (7B 地区西)
4. 井戸 744 瓦製井戸枠細部 (7B 地区西)
5. 井戸 744 瓦製井戸枠 (7B 地区西)
6. 井戸 744 断面 (7B 地区西)
- 図版 27 7 B 地区 豊臣 竈
1. 竈 493 (7B1 地区)
2. 竈 493 (7B1 地区)
3. 竈 527 (7B4・5 地区)
4. 竈 527 (7B4・5 地区)
5. 竈 527 細部 (7B4・5 地区)
6. 竈 527 細部 (7B4・5 地区)
- 図版 28 7 B 地区 豊臣 竈
1. 竈 509 (7B1 地区)
2. 竈 533 (7B 地区西)
3. 竈 533 (7B 地区西)
4. 竈 533 (7B 地区西)
5. 竈 533 細部 (7B 地区西)
6. 竈 533 細部 (7B 地区西)
- 図版 29 7 B 地区 豊臣 竈
1. 竈 651・664 (7B 地区西)
2. 竈 651 被覆粘土除去後 (7B 地区西)
3. 竈 651 被覆粘土除去後 (7B 地区西)
4. 竈 651 被覆粘土除去後 (7B 地区西)
5. 竈 664 (7B4・5 地区)
6. 竈 759 (7B 地区東)
- 図版 30 7 B 地区 豊臣 埋桶
1. 埋桶 500 (7B1 地区)
2. 埋桶 534 (7B2・3 地区)
3. 埋桶 534 断面 (7B2・3 地区)
4. 埋桶 663 (7B 地区西)
5. 埋桶 723 (7B 地区西)
6. 埋桶 756 (7B 地区西)
- 図版 31 7 B 地区 豊臣 瓦敷き
1. 瓦敷き 525 遠景 (7B 地区西)
2. 瓦敷き 525 コーナー部分 (7B 地区西)
3. 瓦敷き 525 東辺 (7B 地区西)
4. 瓦敷き 525 細部 (7B 地区西)
5. 瓦敷き 525 下層 (7B 地区西)
6. 瓦敷き 629 (7B 地区西)
- 図版 32 7 B 地区 豊臣 石敷き・埦敷き
1. 石敷き 523 (7B1 地区)
2. 石敷き 523 (7B1 地区)
3. 埦敷き 672 (7B 地区西)
4. 埦敷き 672・溝 661 (7B 地区西)
- 図版 33 7 B 地区 豊臣 金属加工関連遺構
1. トリべ集積遺構 491 (7B1 地区)
2. トリべ集積遺構 491 細部 (7B1 地区)
3. 土坑 625 (7B 地区西)
4. 土坑 634 (7B 地区西)
5. 炉 585 (7B 地区西)
6. 炉 540 (7B 地区西)
- 図版 34 7 B 地区 豊臣 木組み・植樹痕跡
1. 木組み 492 (7B1 地区)
2. 方形木組み遺構 579 (7B2・3 地区)
3. 方形木組み遺構 579 南辺 (7B2・3 地区)
4. 方形木組み遺構 579 南辺 (7B2・3 地区)
5. 植樹痕跡 701 遠景 (7B 地区東)
6. 植樹痕跡 701 (7B 地区東)
- 図版 35 7 B 地区 豊臣 階段状遺構・
遺物出土状況
1. 階段状遺構 687 (7B 地区東)
2. 階段状遺構 687 (7B 地区東)
3. 瓦溜め 587 (7B2・3 地区)
4. 土坑 538 桶出土状況 (7B 地区西)
5. 土坑 700 漆器出土状況 (7B 地区西)
6. 瓦敷き 629 木簡出土状況 (7B 地区)

図版 36 7 B 地区 豊臣 遺物出土状況

1. 遺物出土状況 (7B1 地区; 6 層上面)
2. 桿秤出土状況 (7B2 地区; 6 層中)
3. 桿秤 蓋を開けた状態 (7B2 地区; 6 層中)
4. 桿秤細部 (7B2 地区; 6 層中)
5. 金箔押瓦出土状況 (7B1 地区; 6 層中)
6. 折敷出土状況 (7B4 地区; 7 層上面)

図版 37 7 B 地区 豊臣 遺物出土状況

1. 遺物出土状況 (7B1 地区; 7 層中)
2. 遺物出土状況 (7B1 地区; 7 層中)
3. 小刀出土状況 (7B 地区東; 7 層中)
4. 漆器出土状況 (7B1 地区; 7 層上面)
5. 遺物出土状況 (7B1 地区; 8 層上面)
6. 遺物出土状況 (7B 地区東; 9 層上面)

図版 38 江戸 全景

1. 4 層上面全景 (7A 地区東半部)
2. 4 層上面全景 (7A 地区西半部)
3. 4 層上面全景 (7A 地区)
4. 4 層上面全景 (7A 地区)
5. 4 層上面全景 (7A 地区東半部)
6. 4 層上面全景 (7A 地区東半部)

図版 39 江戸 櫓列・ピット

1. 櫓列 1 (7A 地区)
2. 櫓列 2・3 (7A 地区)
3. 櫓列 4 (7A 地区)
4. 櫓列 5 (7A 地区)
5. ピット 64 (7A 地区)
6. ピット 20 (7A 地区)

図版 40 江戸 土坑

1. 土坑 161 (7A 地区)
2. 土坑 91 断面 (7A 地区)
3. 土坑 190 (7A 地区)
4. 土坑 190 (7A 地区)
5. 土坑 293 (7A 地区)
6. 土坑 293 (7A 地区)

図版 41 江戸 井戸

1. 井戸 92 断面 (7A 地区)
2. 井戸 92 (7A 地区)
3. 井戸 92 断ち割り状況 (7A 地区)

4. 井戸 92 1 段目井戸枠細部 (7A 地区)
5. 井戸 92 2 段目井戸枠細部 (7A 地区)
6. 井戸 92 2 段目井戸枠細部 (7A 地区)

図版 42 江戸 断面・その他の遺構

1. 土坑 136 (7A 地区)
2. 井戸 539 (7A 地区)
3. 刻印石出土状況 (7B 地区南東隅部)
4. 土層断面 (7A 地区; 1~4 層)
5. 土層断面 (7A 地区; 4 層~地山面)
6. 土層断面 (7A 地区; 4 層~地山面)

図版 43 近現代 土坑 1

1. 土坑 1 東半部 (7A 地区)
2. 土坑 1 東半部 (7A 地区)
3. 土坑 1 西半部 (7A 地区)
4. 土坑 1 (7A 地区)
5. 土坑 1 (7A 地区)

図版 44 近現代 埋桶 3

1. 埋桶 3 (7A 地区)
2. 埋桶 3 鉄帽出土状況 (7A 地区)
3. 埋桶 3 襟章出土状況 (7A 地区)
4. 埋桶 3 (7A 地区)
5. 埋桶 3 (取り上げ後)
6. 埋桶 3 細部

図版 45 近現代 溝・集水枡ほか

1. 溝 463 (7B 地区)
2. レンガ列 468 (7B 地区)
3. 集水枡 469 (7B 地区)
4. 集水枡 469 断ち割り状況 (7B 地区)
5. 集水枡 472 (7B 地区)
6. 集水枡 472 断ち割り状況 (7B 地区)

図版 46 近現代 溝・土坑・石列

1. 溝 2 (7A 地区)
2. 石列 475 (7B 地区)
3. 土坑 5 (7B 地区)
4. 溝 333 (7B 地区)
5. 溝 333 断面 (7B 地区)

図版 47 古代 木簡

谷部 16 層出土木簡 赤外写真 1

図版 48 古代 木簡

谷部 16 層出土木簡 赤外写真 2
図版 49 古代 木簡
谷部 16 層出土木簡 赤外写真 3
図版 50 古代 木簡
谷部 16 層出土木簡 赤外写真 4
図版 51 古代 木簡
谷部 16 層出土木簡 赤外写真 5
図版 52 古代 木簡
谷部 16 層出土木簡 赤外写真 6
図版 53 古代 木簡
谷部 16 層出土木簡 細部
図版 54 古代 木簡・絵馬
谷部 16 層出土木簡細部・絵馬
図版 55 古代 木製品
谷部 16 層出土木製品 1
図版 56 古代 木製品
谷部 16 層出土木製品 2
図版 57 古代 木製品
谷部 16 層出土木製品 3
図版 58 古代 木製品
谷部 16 層出土木製品 4
図版 59 古代 土器
谷部出土土師器 1
図版 60 古代 土器
谷部出土土師器 2
図版 61 古代 土器
谷部出土土師器 3
図版 62 古代 土器
谷部出土土師器 4
図版 63 古代 土器
谷部出土土師器 5
図版 64 古代 土器
谷部出土土師器 6
図版 65 古代 土器・土製品
谷部出土土馬・墨書須惠器
図版 66 古代 土器
谷部 14 層出土須惠器 1
図版 67 古代 土器
谷部 14 層出土須惠器 2

図版 68 古代 土器
谷部 792 ~ 795 出土須惠器 1
図版 69 古代 土器
谷部 792 ~ 795 出土須惠器 2
図版 70 古代 土器
谷部 16 層出土須惠器 1
図版 71 古代 土器
谷部 16 層出土須惠器 2
図版 72 古代 土器
谷部 16 層出土須惠器 3
図版 73 古代 土器
谷部 15・16 層出土須惠器
図版 74 古代 瓦
図版 75 古墳時代 遺物
谷部 17・18 層ほか出土遺物
図版 76 豊臣 陶磁器・土器
溝・土坑出土陶磁器・土器
図版 77 豊臣 陶磁器・土器
溝出土陶磁器・土器
図版 78 豊臣 陶磁器・土器
溝・土坑出土陶磁器・土器
図版 79 豊臣 陶磁器・土器
土坑 292 出土陶磁器・土器
図版 80 豊臣 陶磁器・土器
土坑出土陶磁器・土器
図版 81 豊臣 陶磁器・土器
土坑 538 出土陶磁器・土器 1
図版 82 豊臣 陶磁器・土器
土坑 538 出土陶磁器・土器 2
図版 83 豊臣 陶磁器・土器
土坑 538 出土陶磁器・土器 3
図版 84 豊臣 陶磁器・土器
土坑出土陶磁器・土器
図版 85 豊臣 陶磁器・土器
土坑出土陶磁器・土器
図版 86 豊臣 陶磁器・土器
井戸出土陶磁器・土器
図版 87 豊臣 陶磁器・土器
井戸 487 出土陶磁器・土器

- 図版 88 豊臣 陶磁器・土器
井戸出土陶磁器・土器
- 図版 89 豊臣 陶磁器・土器
井戸出土陶磁器・土器
- 図版 90 豊臣 陶磁器・土器
遺構出土陶磁器・土器
- 図版 91 豊臣 陶磁器・土器
遺構・包含層出土陶磁器・土器
- 図版 92 豊臣 陶磁器・土器
6層出土陶磁器・土器 1
- 図版 93 豊臣 陶磁器・土器
6層出土陶磁器・土器 2
- 図版 94 豊臣 陶磁器・土器
6・7層出土陶磁器・土器
- 図版 95 豊臣 陶磁器・土器
7層出土陶磁器・土器 1
- 図版 96 豊臣 陶磁器・土器
7層出土陶磁器・土器 2
- 図版 97 豊臣 陶磁器・土器
6～10層出土陶磁器・土器
- 図版 98 豊臣 陶磁器・土器
7～9層出土陶磁器・土器
- 図版 99 豊臣 陶磁器・土器
8～10層出土陶磁器・土器
- 図版 100 豊臣 陶磁器・土器
9・10層出土陶磁器・土器
- 図版 101 中世・豊臣 陶磁器・土器
7～13層ほか出土陶磁器・土器
- 図版 102 豊臣 金箔押瓦
金箔押軒丸瓦
- 図版 103 豊臣 金箔押瓦
金箔押軒丸瓦
- 図版 104 豊臣 金箔押瓦
金箔押軒平瓦
- 図版 105 豊臣 金箔押瓦
金箔押道具瓦
- 図版 106 豊臣 軒丸瓦
- 図版 107 豊臣 軒丸瓦
- 図版 108 豊臣 軒丸瓦
- 図版 109 豊臣 軒丸瓦
- 図版 110 豊臣 軒平瓦
- 図版 111 豊臣 軒平瓦
- 図版 112 豊臣 軒平瓦・道具瓦
- 図版 113 豊臣 土製品
犬形土製品 1
- 図版 114 豊臣 土製品
犬形土製品 2
- 図版 115 豊臣 土製品
犬形土製品・土鎌・土玉ほか
- 図版 116 豊臣 木簡
木簡 1
- 図版 117 豊臣 木簡
木簡 2
- 図版 118 豊臣 木簡
木簡 3
- 図版 119 豊臣 木簡
木簡 4
- 図版 120 豊臣 木簡
木簡 5
- 図版 121 豊臣 木製品
将棋駒・形代ほか
- 図版 122 豊臣 人形
- 図版 123 豊臣 櫛
横櫛
- 図版 124 豊臣 羽子板
羽子板
- 図版 125 豊臣 下駄
下駄 1
- 図版 126 豊臣 下駄
下駄 2
- 図版 127 豊臣 下駄
下駄 3
- 図版 128 豊臣 下駄
下駄 4
- 図版 129 豊臣 下駄
下駄 5

- 図版 130 豊臣 下駄
下駄 6
- 図版 131 豊臣 計量関係遺物
桿秤
- 図版 132 豊臣 計量関係遺物
桿秤・齒形分銅・木瓜
- 図版 133 豊臣 計量関係遺物
尺度・枡
- 図版 134 豊臣 計量関係遺物
枡
- 図版 135 豊臣 木製品
箸・折敷
- 図版 136 豊臣 木製品
へら・しゃもじ・黒文字・算盤玉・灯明台ほか
- 図版 137 豊臣 木製品
数珠玉・塗染・形代・不明木製品ほか
- 図版 138 豊臣 木製品
刀装具
- 図版 139 豊臣 木製品
大工道具・木桶・蓋・柄杓・容器
- 図版 140 豊臣 銭貨
銭貨 1
- 図版 141 豊臣 銭貨
銭貨 2
- 図版 142 豊臣 銭貨
銭貨 3
- 図版 143 豊臣 銭貨
銭貨 4
- 図版 144 豊臣 銭貨
銭貨 X 線写真
- 図版 145 豊臣 刀・小柄・筭
- 図版 146 豊臣 目貫
- 図版 147 豊臣 目貫・切羽
- 図版 148 豊臣 鳩目・鳩目・縁・鐘ほか
- 図版 149 豊臣 覆輪・座金・責金・打出鮫ほか
- 図版 150 豊臣 甲冑関連遺物ほか
押付・鞆・紐金具・飾り金具・鏝・総鎖・鎖
- 図版 151 豊臣 甲冑関連遺物
小札
- 図版 152 豊臣 煙管・錠前・鈴・釣針ほか
- 図版 153 豊臣 火箸・工具・鍋・毛抜き・耳掻き
- 図版 154 豊臣 包丁・鎌・火打鎌
- 図版 155 豊臣 六器・壺金ほか
- 図版 156 豊臣 肘金・煽り止め
- 図版 157 豊臣 鉄砲玉・鐵・釘ほか
- 図版 158 豊臣 釘
- 図版 159 豊臣 基石・数珠玉・茶臼ほか
- 図版 160 豊臣 硯
- 図版 161 豊臣 トリベ
トリベ集積遺構 491 出土トリベ
- 図版 162 豊臣 トリベ・輪羽口
- 図版 163 豊臣 骨格製品・布ほか
- 図版 164 江戸 遺物
- 図版 165 江戸 瓦
- 図版 166 近・現代遺物
- 図版 167 近・現代遺物
- 図版 168 近・現代遺物

第1章 調査に至る経過と方法

第1節 調査の経緯と経過

現在の大阪府庁は、旧西区江ノ子島の府庁舎が大阪府の発展に伴う事務量の増大により手狭になったため、移転されたものである。移転先は、旧東区大手前之町の大坂城三の丸跡地にあった不要な陸軍用地であった。移転は、大正10(1921)年12月の通用府会で決定され、同12(1923)年5月12日に着工し、同15(1926)年10月31日に竣工、同11月7日に開庁式が執り行われている。今日「府庁本館」と呼ばれている建物が、その時に建築されたものである。

この府庁本館は、大阪大空襲をくぐり抜け、今なお威容を誇っているが、建築後70余年を経て老朽化が著しい。また、第2次大戦後、本館も手狭になり、別館や労働部庁舎など幾つかの建物が増築されたが、そのため庁舎の分散化に伴う事務の非効率性が憂慮されることになった。一方、政治・経済をはじめとする各分野のグローバル化やOAの進展に伴う高度情報化社会への対応など、府庁舎に新たな機能を付加しないと府民サービスに影響を及ぼす事態にもなってきた。

そこで、大阪府は、府庁舎の建て替えを計画し、昭和62(1987)年9月に「庁舎・周辺整備計画」を発表した。平成元(1989)年10月、大阪府庁舎・周辺整備基本計画が策定され、大阪府庁舎周辺整備事業として府庁舎の建て替えが開始されることになった。この建て替えは、現在の府庁舎の機能を保持しながら同じ敷地内に新庁舎を建築するという難工事であり、既存建築の撤去と仮移転、庁舎建築と入居を繰り返す必要があった。当初の建築順序としては、新別館、行政棟、議会議棟、警察棟と進む予定であった。

この府庁の敷地は、豊臣大坂城の三の丸跡地に当たる。新庁舎は、駐車場など大規模な地下施設の設置により地中深く掘削されるため、三の丸関連の遺跡やその上に築城された徳川大坂城の遺構を大きく破壊することとなる。そこで、建て替え事業を遂行する大阪府総合部庁舎周辺整備室と大阪府教育委員会文化財保護課との間で協議が行われ、財団法人大阪文化財センター(現:財団法人大阪府文化財調査研究センター)により発掘調査を実施することになった。

平成2(1990)年4月1日、庁舎周辺整備室とセンターの間で同年度までを工期とする第1次調査の委託契約が締結された。以降、新別館や仮設駐車場用地などを対象に、平成8(1996)年3月29日まで5次の発掘調査が継続された。

ところが、府財政の悪化に伴い、新別館完成以降の庁舎建設スケジュールが見直され、行政棟や議会議棟の建築が延期されることになった。そこで、発掘調査も中断されたが、昭和34(1959)年3月に建築された警察棟については、老朽化が著しい上に、府民の安全を守るための最新施設の導入が強く求められたため、建て替えを実施することになった。

なお、府警本部棟の新築工事は2分割で実施されるが、平成10年度には府警本部1期建設予定



図1 調査地の位置

地内に所在していた大阪家庭裁判所が取り壊され、I期分の調査対象地については平成11(1999)年2月18日から(財)大阪府文化財調査研究センターの手で発掘調査を開始し、同年11月30日には調査を終了している。

なお、調査終了後は引き続いて中部調査事務所において整理作業を行い、最古の紀年銘木簡をはじめとするきわめて重要な遺物群の存在を鑑み、平成12(2000)年3月31日に速報的役割を果たすべく終了報告書の刊行を行い、調査成果の一端を公にした。

第2節 調査の方法

今回の調査の地区割については当センターがこれまでにやってきた方法に準拠している。地区割については国土座標軸(第VI座標系)を基準線として大阪府全域を共通の方式で区画できるように、大小6段階の区画を設定している。

第I区画は、1/10000地形図の地区割図をそのまま利用したもので、縦6km、横8kmが1区画となる。南西端を基点とし、縦軸A~O、横軸0~8で表示する。第II区画は、1/25000地形図の地区割図をそのまま利用したもので、第I区画を縦1.5km、横2.0kmに16分割している。南西を1とし、北東端を16とする東方向への平行式の地区名表示である。第III区画は、第II区画内を100m単位で区画するもので、縦15、横20に区分される。表示は北東端を基点に縦A~O、横1~20となる。第IV区画は、第III区画内を10m単位で区画するもので、縦・横各10に区分される。

表示は北東端を基点に縦a~j、横1~10となる。第IV区画はさらに四分されて第V区画となるが、今回の調査では基本的に10m四方の第IV区画を最小単位として遺物の取り上げを行っている。

方位については、座標北を使用している。これは地区割や測量基準線も国土座標を使用している関係からである。ちなみに他の方位との関係は、真北が東へ $0^{\circ}15'39''$ 、磁北が西へ $6^{\circ}30'$ 振っている。

水準は、全国で共通基準となっている東京湾平均海面(T.P.)を使用している。大阪ではT.P.の他に大阪湾平均海面(O.P.)も併用されており、今も大阪府関係等の土木工事で盛んに使用されている。両者のレベル差は、 $T.P. \pm 0m = O.P. + 1.3m$ と定められている。

なお、今回の調査地は南北方向に長い変則的な矩形を呈しており、現場内の排土の仮置き場などの作業エリアを確保して調査を行うため、おおむねX=-146.200ラインを境として南北を二分して調査を実施している。

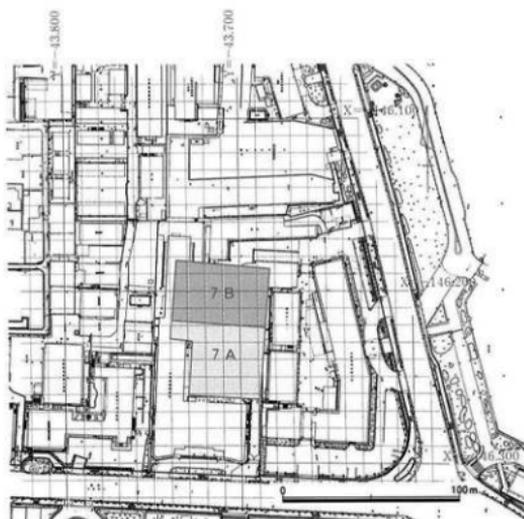


図2 調査地と国土座標

ちなみに、調査区は先行して調査を行った南半をA地区、北半をB地区としている。また、過去の調査との整合性をはかり、混乱を避けるため、調査区の冒頭には調査回数とあらわす数字を冠し、それぞれ7A地区、7B地区という名称を用いている。

なお、ここでは詳細は記さないが、北半の7B地区については土留支保工であるアースアンカー打設作業のための通路の確保などのため、さらに細分して調査を行っている。個々のトレンチについては調査の着手順に数字を付加した名称を与えており、それぞれ7B1トレンチ、7B2トレンチといったように調査区名を付している。

調査ではまず、現代の盛土層および攪乱層をバックホーによって除去する機械掘削を行い、その下部に堆積している包含層や遺構については人力による掘削を行っている。ただし、北側の7Bトレンチで検出した谷部に関しては、先行して2本のトレンチを掘削することによって、厚いところで3mにもおよぶ無遺物の盛土層を確認し、当該層に関しては機械掘削の対象としている。

また、これ以外に7A地区において検出した井戸328については井戸下部と底面の状況を知るためにライナープレートを用いた調査を実施し、井戸の底面を確認している(写真2・3)。

遺構面および個々の遺構の実測に関しては遺物出土状況図などの作製など、個別に手書きによる実測を行っているものもあるが、重層的に検出される遺構面に関してはレッカーによる写真測量を行い、20分の1の平面図を作製している。

なお、遺物の取り上げに際しては原則として冒頭に記した地区割に準拠して行っているが、豊臣大坂城段階の遺構埋土および包含層ならびに古代の包含層に関しては、微細ではあっても重要な遺物を含んでいる可能性がきわめて高いことから、すべての土を取り上げて仮置きし、水洗選別作業によって遺物をもれなく抽出すべく洗浄作業を行っている。ちなみに、この洗浄作業には、効率を考慮して当センターが遺物の取り上げに用いている5mmメッシュの青色のバスケットを用いた。なお、この水洗選別作業では種子や骨などのほか、古墳時代の白玉をも抽出している。



写真1 調査風景



写真2 ライナープレートによる井戸328の調査



写真3 井戸328調査状況

第2章 位置と環境

大阪城は大阪平野に突き出た上町台地の先端に立地する。

台地の北は大川に面しているが、東は縄文海進以降、淀川と旧大和川の著しい沖積作用によって形成された大阪平野が広がり、西には沿岸流が運んできた砂によってできた幅2kmの天満砂堆を主とする低地が上町台地に沿った形で北へとびている。

つまり南北長約20km、東西幅約2km、標高10～25mを測る細長い上町台地はまさに大阪市域を南北に貫く脊梁ともいべき姿を示す。台地の北端が標高約25mと最も高く、南に向かって低くなり、台地の北側と西側は比高10m前後の急崖によって画されるが、東側はなだらかな緩斜面となって低地部へ移行する。東側斜面には大規模な浸食谷が発達し、複雑な様相を呈す。

縄文海進によって汀線が生駒山西麓までおよぶ縄文時代中期に上町台地では、森の宮遺跡(5)において人々の暮らしが本格的に開始される。

台地の東斜面に位置する森の宮遺跡に形成された大規模な貝塚は、貝層の堆積がマガキからセタジミへと変化しており、河内湾から河内潟への変遷を如実に示す。しかし、縄文・弥生時代を通じて上町台地上では検出される遺構・遺物が稀少であり、実態は不明である。

古墳時代には上町台地にも古墳が築かれるが、御勝山古墳(30)などを除き難波宮造営や大坂城築城にあたって大半が消滅してしまい、地名や埴輪片などから存在を想定するのみである。また上町台地には応神天皇の大隅宮や仁徳天皇の高津宮があったと推定されている。これらはあくまでも推定の域をでないが、台地北端に難波の堀江が掘削され、難波津を中心に政権の重要拠点として発展していったことは確かであろう。周辺には集散する物資を管理する難波屯倉や外交をつかさどる役所の大郡や宿泊設備の難波館が設置されていたと推定されるが、難波宮下層遺跡で発見された5世紀代の大型倉庫群は難波津の繁栄を具体的に示すものといえる。

皇極4(645)年、中大兄皇子らによって蘇我氏が滅ぼされた乙巳の変を発端として数々の政策が打ち出されるが、そのひとつが飛鳥から難波長柄豊碓宮への遷都であった。孝徳天皇は白雉元(650)年から新宮の建設に着手し、白雉3(652)年に完成した宮は言葉に尽くしがたいほど壮麗であったという。白雉5(656)年には都は飛鳥に戻り、前期難波宮は朱鳥元(686)年の失火によって焼失する。

しかし、難波の地は難波津を中心とした外交機能は有しており、神亀3(726)年再び聖武天皇によって難波宮が造営される。やがて延暦3(784)年の長岡京遷都にともない難波宮も解体される。

1. 大坂城跡
2. 大坂城下町
3. 難波宮跡
4. 難波京朱雀大路跡
5. 森の宮遺跡
6. 今福遺跡
7. 同心町遺跡
8. 天満本願寺跡
9. 天神橋遺跡
10. 安曇寺跡
11. 佐賀藩蔵屋敷
12. 中之島2丁目所在遺跡
13. 北浜4丁目所在遺跡
14. 今橋4丁目所在遺跡
15. 高麗橋4丁目所在遺跡
16. 北浜3丁目所在遺跡
17. 安曇寺跡(大坂魚市場跡)
18. 駁本町1丁目所在遺跡
19. 馬喰町遺跡
20. 島之内1丁目所在遺跡
21. 大今里遺跡
22. 宰相山遺跡
23. 上本町北遺跡
24. 島之内2丁目遺跡
25. 細工谷遺跡
26. 石ヶ辻遺跡
27. 堂ヶ芝廃寺
28. 上本町南遺跡
29. 四天王寺旧境内遺跡
30. 御勝山古墳
31. 勝山南遺跡
32. 摂津国分寺
33. 伶人町遺跡
34. 大道1丁目所在遺跡
35. 河内川堀江推定地
36. 茶白山古墳
37. 北河堀町所在遺跡
38. 天王寺公園遺跡
39. 阿倍野筋北遺跡
40. 阿倍寺跡
41. 林寺遺跡
42. 難波貝層遺跡
43. 船出遺跡
44. 敷津遺跡
45. 長橋遺跡

図3の凡例



図3 周辺の遺跡分布

くつもの曲輪からなり、5層からなる天守閣は本瓦葺きで鯉瓦や軒瓦、飾り瓦には金箔が貼られた壮麗なものであった。同年7月、関白の地位に上り詰めた秀吉は、本丸を囲む二の丸工事に着手し、文禄3（1594）年には大坂城の城郭を強化するため惣構の建設を命じた。

これによって北は大川、南は空堀、東は猫間川、西は新たに掘削した東横堀によって画された広大な大坂城下町が完成する。さらに慶長3（1598）年、病床の秀吉は新たに三の丸の築造を命じる。この工事は惣構内に三の丸を築いて大名屋敷を伏見から移転させるため、すでにあった町屋を新たに惣構の外に整備した船場へ移すという大規模なものであった。

しかし、同年8月、秀吉は62年の生涯を閉じ、慶長19（1614）年の大坂冬の陣では、徳川家康の知略によって本丸を除く堀は全て埋められ、翌年の大坂夏の陣でついに難攻不落を誇った大坂城も、豊臣氏の命運とともに灰燼に帰した。

廃墟と化した大坂だったが、元和6（1620）年から10年の歳月をかけて松平忠明が徳川幕府の直轄都市として本丸と二の丸を復興する。

しかし、それは膨大な盛土に象徴されるように豊臣期の面影を完全に払拭したものであり、豊臣期の遺構は地下深くに眠ることとなる。

寛文5（1665）年、落雷によって天守閣は焼失し、慶応4（明治元）年、幕末の動乱の中、本丸から出火した火は城中大火となり再び大坂城は落城する。

その後、大坂城域とその一帯は、大阪鎮台や大阪砲兵工廠など軍施設が立ち並ぶ官有地となる。

大阪鎮台は明治21（1889）年、第四師団と改称され、大阪は軍都の色合いを強めていった。調査地が所在する旧大手前之町一帯の区画は、明治時代から昭和時代にかけて、土地利用の様相が大きく変化するが、この地域は師団司令部が置かれていた城内から近いこともあって、師団司令部直轄の施設が多く造営されている。

その後、太平洋戦争末期に至り、大阪城周辺一帯は米軍による無差別爆撃を受け、多くの尊い生命とともに、徳川期の建築物も多くの焼失している。

終戦後、辛くも戦火をくぐり抜けた中部軍管区司令部や旧大手前之町一帯の軍関係施設は昭和20（1945）年9月27日に大阪に進駐してきた米軍に接收される。

そして、進駐軍の撤収後、新たに大阪城天守閣博物館と大阪市立博物館に生まれ変わる。また、平成13（2001）年11月には法円坂に大阪歴史博物館が開館し、難波宮跡および大阪城一帯は史跡整備され、都心のオアシスとして現在に至っている。

表1 関連年表

時代	西暦	年号	記事	
吉	645	大化元	乙巳の家、都を藤原長柄豊碓に移す	
	650	白雉元	藤原長柄豊碓宮の造営開始	
	652	白雉3	藤原長柄豊碓宮の完成	
	660	斉明6	百濟救済軍発遣のため、難波宮へ行幸	
	679	(天武)8	難波に御城を置く(天武朝難波宮)	
	683	天武12	復都制の詔、難波を副都とする	
	686	朱鳥元	難波宮大藏省から出火、宮室全焼	
	726	神龜3	難波宮の造営に着手(聖武朝難波宮)	
	代	1496	明応5	本願寺8世蓮如、大坂に石山別院を建立
		1532	天文元	山科本願寺焼かれ、証如大坂に遷す
1580		天正8	本願寺焼如、信長と和睦し、紀州に退去	
1582		天正10	本願寺の滅、山崎の合戦	
1583		天正11	秀吉、摂津を占有 本丸築城開始	
1584		天正12	本丸完成	
1585		天正13	秀吉、関白となる	
1586		天正14	二の丸築造開始	
1588		天正16	秀吉、太政大臣となり豊臣姓を名乗る	
1590		天正18	二の丸完成 刀狩令 秀吉天下統一	
近	1591	天正19	関白を秀次に譲り、太閤となる	
	1592	文禄元	文禄の役	
	1594	文禄3	惣構築造開始	
	1595	文禄4	秀次から関白職を削奪、自殺させる	
	1596	慶長元	慶長伏見の大規模	
	1597	慶長2	慶長の役	
	1598	慶長3	三の丸築造開始 秀吉死す	
	1600	慶長5	関ヶ原の合戦	
	1603	慶長8	家康、征夷大将軍となり、江戸幕府を開く	
	1614	慶長19	大坂冬の陣、大坂城外堀を埋められる	
世	1615	慶長20	大坂夏の陣、大坂城落城、豊臣氏滅ぶ	
	1620	元和6	幕府による大坂城の修築工事開始	
	1629	寛永6	大坂城再築工事完成	
	1668	慶応4	明治維新の城中大火で大坂城ほぼ焼失	
	1871	明治4	政府、大阪城に鎮台を設置	
	1877	明治10	大阪鎮台を第四師団とする	
	1941	昭和16	太平洋戦争が始まる	
	1945	昭和20	太平洋戦争により大阪城古建造物焼失 終戦後、大阪城は米軍に接收	
	1948	昭和23	米軍撤収、大阪城は大阪府に返還される	

第3章 調査の概要と層序

第1節 調査の概要

今回の調査地を含む大阪城周辺地域は明治時代以降、陸軍の所管するところとなっており、周辺には第2次世界大戦段階では堺聯隊区司令部や憲兵隊本部など、第四師団に關わる主要施設が配置されていた区画にあたる。事実、これまでに行われてきた周辺部の調査でも、その遺存状態は必ずしも良好ではないものの、旧日本陸軍の諸施設に關連する建物跡の基礎部分や水路、防空壕が検出されている。また、これらの遺構に伴って戦後処理に際して掘削された廃棄土坑のほか、進駐軍に關連する廃棄土坑等も検出されている。

今回の調査でも明治時代から昭和時代にかけての旧日本陸軍に關連する遺構を多数検出、これに伴って多様な遺物が出土し、大正4年をはじめとする地図に記載された陸軍第四師団経理部被服倉庫に關わる施設であったことを裏付ける成果を挙げている。

徳川大阪城時代、すなわち江戸時代の主要な遺構としては、南北方向に平行してのびる5条以上の掘立柱による柵列を検出している。これ以外では数基の井戸や廃棄土坑など検出しているが、当該期の生活痕跡は近代以降の削平のためか、さほど多くはない。

しかしながら、今回の調査で検出した掘立柱柵列は、厳密な意味では年代を特定しがたいが、江戸時代の多くの絵図において空地地として表現されている調査地点の土地利用の一端を明らかにしたという点では評価できるものといえる。

豊臣大阪城に關わる遺構は地形的に高い南半部の7A地区では後世の削平が著しく、井戸などの深い遺構が残っていたに過ぎない。

しかしながら、北半の7B地区で検出した谷部では各時代の遺構面を重層的に検出している。この谷部は後述するように調査範囲内で最大3mにおよぶ盛土層が検出されている。この盛土層を挟んだ上下層の出土遺物の状況から、この盛土層は三の丸築造に伴うものである可能性が高いものと考えられる。

したがって、豊臣後期の遺構面についてはこの客土の上面から検出されるはずであったが、後世の削平が著しく、谷の



写真4 土坑1 (昭和)

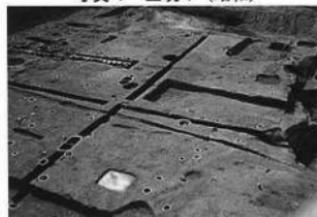


写真5 徳川大阪城遺構面 (江戸)



写真6 豊臣大阪城遺構面 (桃山)



写真7 谷部水田面 (中世末?)



写真8 谷部古代遺構面 (飛鳥)

肩部や掘削深度のある井戸などの遺構を検出したに留まる。

一方、豊臣前期にあたる盛土下層の遺構面は比較的、良好に遺存し、4面に細分される遺構面からは礎石建物跡や区画溝、井戸などの遺構を確認している。また、これらの遺構および整地層等からは多量の遺物が出土している。

なお、今回の調査では微細な遺物を抽出するために水洗による選別作業を徹底し、微細な人為的遺物以外にも種子や骨などを多数検出するなどの重要な成果を挙げている。

豊臣大坂城の下層からは谷部を利用した水田面を検出しており、上町台地上では希有な事例となる。大坂城築造に伴う盛土層に直接的に覆われていることから、石山本願寺期と考えるのが穏当であると判断される。自然科学分析の章でも報告されるように土壌化した作土層からは水田とするに足る量のイネのプラント・オパールを検出している。台地上の谷水田として、その帰属時期とともに重要な意味をもつものといえる。

古代の遺構面に関しては、今回の調査地から本町通を挟んだ南側の市立中央体育館跡地の調査で前期難波宮段階の内裏西方官衙と仮称される遺構群が検出されるなどの成果が報告されている。この調査で検出された倉庫群の西側を区画する一本柱塀であるSA301は今回の調査地がある北側に向かってのびていることが明らかとなっており、倉庫群の北側に別の区画が存在することが示唆されていた。

しかし、今回の調査では当該期の遺構検出が期待された南半の7A地区は豊臣、徳川両氏による大坂城の造営に伴って地山面に至るまで大きく削平され、顕著な遺構を検出することはできなかった。しかしながら、一方の北半部7B地区で検出した谷部の下層からは古代に遡る堆積層を確認し、ここからは木簡とともに多量の土器・木製品が出土している。

出土した木簡には現在のところ、国内最古の紀年銘木簡を含んでおり、しかも難波地域におけるまとまった形で木簡群の出土という点においてもきわめて重要な位置を占めるものといえる。

また、これらの木簡とともに、これも国内最古級となる絵馬や人形などの木製品もまとまって出土している。ここからは同時に多量の土器群が出土しており、7世紀代の難波宮周辺地域の状況を考える上においてもきわめて重要な成果であるといえる。

第2節 層序

今回の調査地では南半の7A地区が地形的に高く、北半の7B地区が東西方向の谷となって大きく落ち込んでいる。したがって、両調査区における層序は当然のことながら大きく異なっている。また、作業エリアの確保のために南北を2分して調査を行ったことは、すでに記してきた通りである。しかし、その境界線が結果的に北半部の7B地区で検出した谷部の肩口と重なることとなり、南半の7A地区との層のつながりが不明瞭な部分を残してしまったことは事実である。

その他、当センターや(財)大阪市文化財協会が行っている周辺の調査地とは近接するものの、直接的に連続したり、接することはない。したがって、以下の層位についての記述は当調査区にのみ限定されるものであることを付記しておく。以下では、上記のような状況を勘案して7A地区と7B地区に分けて記述を進めることにする。

1. 7A地区

1層 暗灰色シルトで2層に細分される。いずれも焼土塊、炭化物粒のほか、瓦片を多く含む。調査区全域に広がっており、近代以降の客土層である。

- 2層 灰白色～灰オリーブ色を呈する細砂～粗砂層で2層に細分される。砂質ではあるが、攪拌された客土層である。1層とは異なり、同層中には炭化物粒や遺物等の混入は少なく、上層の一部にはラミナがみられる部分もある。
- 3層 青灰色の粗砂混じりシルトで、ほぼ調査地全域に認められる。遺物等の混入はほとんどみられず、非常に硬く締まっている。遺物を包含せず、年代を特定できないが、人為的な整地のための客土層である。
- 4層 4層は分厚い客土層であり、3層に細分できる。上から順に4a～4c層とした。4層からは寛永通寶が出土しており、江戸時代以降の客土層である。
- 4a層は黄橙色～赤褐色を呈する礫および粘土ブロック混じりのシルト層であり、一部3～4層に細分される。部分的に多量の炭化物を含んでいる。4b層は灰オリーブ色を基調とする細砂混じりシルトであり、礫を若干含み、局地的に多量の炭化物を含む部分もみられる。4c層は黄灰色粘土とその上面に堆積した灰色細砂で構成される。非常に硬く締まっており、炭化物および細礫を若干含む程度で混入物は少ない。
- 5層 浅黄色を呈する細砂～粗砂であり、地山のブロック土を多量に含んでいる。ブロック土を単位として細分が可能であるが、その多くは水平に堆積することなく、斜めもしくは縦方向に層界が走る。当該層を切り込む遺構との関係から豊臣後期、すなわち三の丸造成時の客土である可能性が高いものと判断している。7A調査区ではこの5層が地山の直上層となる。

以上が7A地区における基本的な層序である。当該地区はもともと地山が高いことから、土層の堆積状況は人為的な削平と客土の繰返しを基本としている。ただし、これらの削平および客土は調査地全体にわたって、均質的に行われたものではなく、それ故に非常に複雑な様相を呈している。とくに、5層上面からは井戸247に代表される井戸などの遺構を検出している。ただし、当該層の上面は土壌化しておらず、しかも検出される遺構が井戸など掘削深度の深い遺構に限定されることから、上部はかなり大きく削平されているものと容易に判断できる。

ちなみに、この井戸247の底面からは焼け焦げた木製品などとともに唐津の製品が出土している。さらに、4層とした客土中に含まれる客土時の際にブロック土の状態では混入した土壌中には堆積構造をそのままの状態に残した部分が数カ所で確認できる(写真9・10)。ただし、これらについてはかならずしも堆積構造を正対して見たものとは限らないので、層の厚さは断面を斜めに切っている場合など、やや厚めにみえている可能性もある。ここでは単純に見えるままに記述しておく、5層とした地山起源の盛土層の上面には厚さ5～10cm前後の焼土層、その上面に焼土塊を含む炭化物層が10～15cmで堆積していた状況が看取される。先に記述した5層切り込みの井戸247の状況などを勘案すると、この焼土層は夏の陣に関わるものである蓋然性が高いものと判断される。したがって、整地層が完存しているわけではないが、5層に関しては三の丸造成段階、もしくはそれ以前の豊臣大坂城の造成に関わる整地層であると考えられる。

2. 7B地区

1～4層 1～4層については基本的に7A地区との状況とかわるものではない。7B地区では近年の攪乱が著しいこともあり、当該層の図化作業は行っておらず、したがって、図6の土層断面図中においても表現していないので留意されたい。

5層 7B地区で検出した谷部を埋める最大厚3.5mの客土層である。谷の断面に沿うように層厚50cm

から1m前後の大きな単位で客土が行われている。上方は上町層上部の中段段丘層を起源とする浅黄橙色～黄橙色を呈する細砂～シルトであり、ブロック土を含んでいる。一方、下方は暗緑灰色系の細砂～シルト層であり、局地的ではあるがラミナがみられる部分もある。基本的に遺物を包含しない。7A地区の場合と同様に当該層の上面は江戸時代以降に削平されている。当該層を挟んだ上下の遺構の関係から、三の丸造成時の客土であると判断する。

- 6層 5層が斜めに堆積していたのに対して、その下方で平行に堆積していた灰色系の客土層を6層として区別した。層厚は約1mで2層に分かれる。上層は灰色シルト、下層は灰色細砂であり、部分的にシルトブロックを含むものの、ラミナがみられる部分もある。5層とは異なり、比較的遺物を含んでいる。ただし、当該層上面では土壌化は認められず、大局的にみれば、5層と同様、三の丸造成時の客土層の一単位と捉えることが可能である。
- 7層 層厚10cm前後の褐灰色シルト層であり、豊臣1面とした遺構面の基盤層である。豊臣前期。
- 8層 地山を起源とする層厚50cm前後の灰黄色シルトによる客土層で豊臣2面の基盤層である。当該層上面の一部では北端部で土壌化した地表面が残る。時期は豊臣前期。
- 9層 層厚20cm前後の黄褐色細砂～粗砂層であり、豊臣3面とした遺構面の基盤層である。時期は豊臣前期。
- 10層 大きく2層に分かれる。上層を10a層、下層を10b層とした。10a層は上部が灰色シルトで炭化物を多く含んでいる。下部は黄褐色細砂でシルトブロックを含むほか、部分的に焼土および炭化物を層状に含んでいる。豊臣4面とした遺構面の基盤層である。10b層は層厚1m前後を測る客土層である。地山を起源とする黄褐色シルト～細砂であり、遺物はほとんど包含しない。他の客土層とは異なり、北から南に向かって層の境界線が傾斜しており、単純に解釈すれば、北側から埋められたものと判断できる。10b層上面の一部では土坑などの遺構を検出している。なお、この10層は下層の11層上面で検出した水田面を直接バックしており、11層上面で検出した水田面および足跡は10層とした地山起源の土砂で覆われる部分もある。下層の11層上面が水田面であり、それを埋めて宅地としている状況を勘案するならば、当該層は大坂城築造に際しての整地層と考えるのが妥当である。

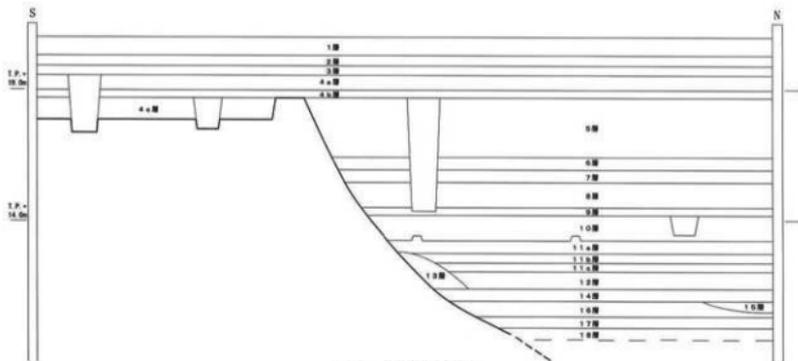


図5 層序模式図

- 11層 層厚約50cmで大きく3層に分かれる。上から11a層・11b層・11c層とした。いずれも灰黄色を呈するシルト～粘土層であり、当該層上面は基本的には先の10層でバックされており、当時の地表面がそのまま残る。上面では畦畔や水路を検出するとともに、多数の足跡を検出している。遺構の状況およびプラントオパールの数などから、当該層上面は水田面であったことはもはや疑いない。11a層が水田作土層、それ以下が基盤層となる。出土遺物が少なく時期は特定しがたいが、上層との関係からみれば、本願寺期であろうか。
- 12層 12層は黒褐色を呈するシルト～中砂であり、層厚30～40cmを測る。上面は土壌化しているものの、遺構は検出されず、しかも遺物を全く包含していない。人為的な客土層ではなく、自然堆積と見られる。上下層との関係からみると中世段階か。
- 13層 13層とした堆積層は谷部全体に広がるものではなく、谷部の斜面付近にのみ局地的に堆積していたものである。なお、当該層については調査時の判断ミスにより、谷部斜面に堆積した豊臣期の土層も一括して掘削してしまっており、結果的に年代的には幅のある遺物を包含している。
- 14層 層厚約20cmを測る黒褐色粘土層であり、上面を覆う12層とは対照的に遺物を多量に含む。後期難波宮期の瓦などを含んでおり、奈良時代以降の堆積層である。
- 15層 15層としたものは谷部全体に堆積するものではなく、下層の16層の一部を削り込むように流れていた流路内に堆積したものである。大きく2層に分かれ、肩部には中砂～粗砂が堆積し、それより以北では粘性の高い暗黒褐色粘土層が堆積している。遺物は砂層中から若干出土したのみである。
- 16層 層厚15cm前後を測る黒褐色粘土層である。14層に似るが、間層として15層を挟み、明確に区別できる。木簡をはじめとする木製品や土器を包含するとともに、花崗岩が集積した状態で検出されている。出土遺物からみて前期難波宮段階の堆積層である。
- 17層 層厚10cm前後を測る暗灰色粘土層である。若干、砂粒を含むものの全体に混入物は少ない。わずかながら、古墳時代の遺物を包含する。
- 18層 当該層は未分解の有機物を多量に含む黒色粘土層と淡黄色灰色粗砂～極細砂、青灰色シルト～粘土の互層を一括したものである。断続的な流水堆積物の集合である。最上部のみ古墳時代の遺物を包含するが、それ以下では遺物はまったく出土していない。なお、当該層以下については掘削限界深度に達したために不明である。



写真9 客土内に残る土層断面(1)



写真10 客土内に残る土層断面(2)

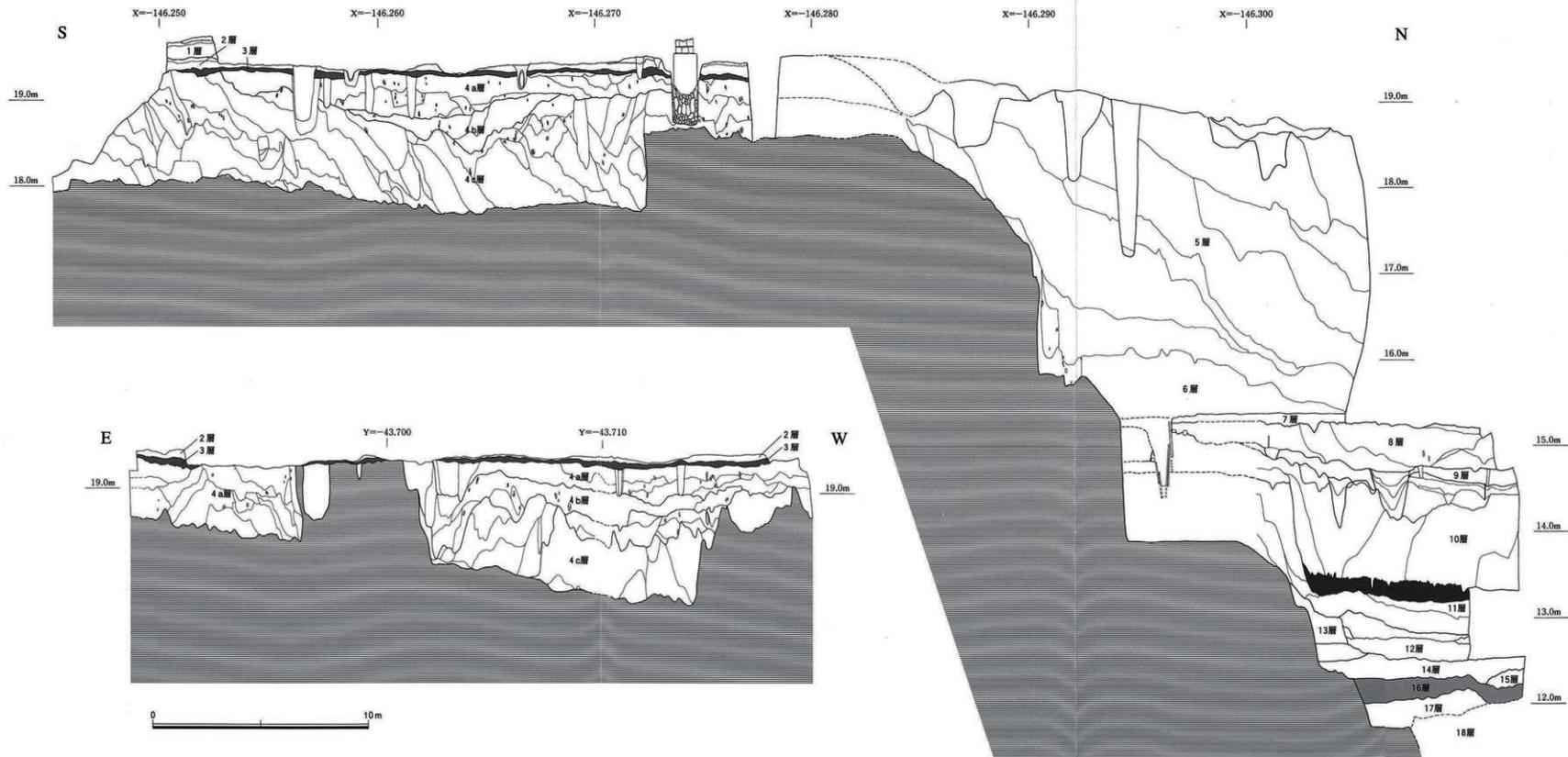


图6 土层断面图

第4章 古墳時代以前の遺構と遺物

第1節 遺構

調査地の北半の7B地区において深い谷を検出している。この谷は東西方向に軸線をもち、平面的な景観や堆積状況などから東側を谷頭とし、西側に向かって広がりつつのびていたことが確認される。

古墳時代の層準としては現地表面から約8m下で検出した17層および18層の最上部がこれに対応する。ただし、17層および18層ともに人為的な堆積層ではなく自然堆積層と考えられ、また、その上面にも顕著な形での土壌化や攪拌は認められない。したがって、古墳時代あるいは古墳時代以前の遺構としては、広義には自然の谷もしくはその中を断続的に流れていたと考えられる自然流路をあげることが可能となる。しかし、人為的な遺構に関しては少なくとも調査範囲内においては皆無である。

第2節 遺物 (図8・写75)

今回の調査では、弥生時代以前に遡る時期の遺物は僅少であり、わずかに縄文時代の無茎石鎌2点が後代の包含層に混じって出土しているのみである。

古墳時代の遺物は図8に掲げたものが、出土遺物をほぼ網羅したものであり、出土点数は多くない。

1～6は17・18層から出土した須恵器である。個々には詳述しないが、中期以前のものは出土していない。7・8は灰白色を呈する須恵質陶棺の蓋である。いずれも古代以降の遺構・包含層から出土したものである。直接的には接合しないが、図示していない別の細片2点(1点は写75-7)も含めて同一個体と考え

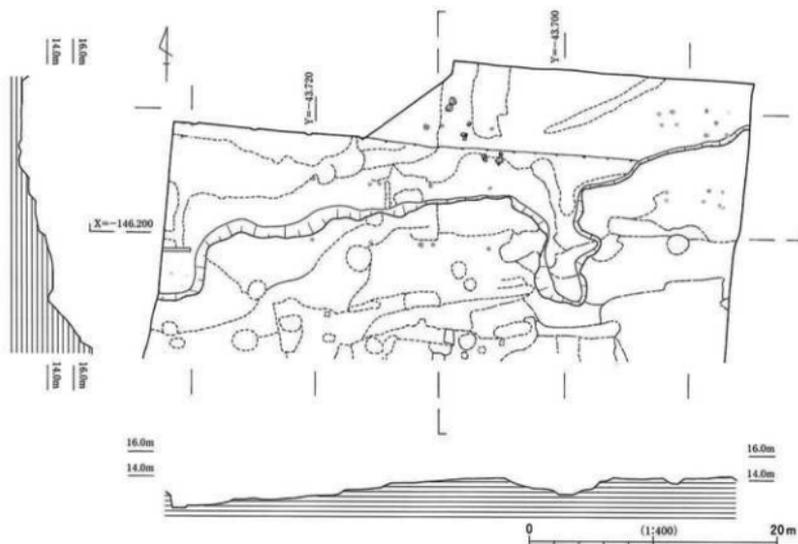


図7 古墳時代遺構面

られる。外面は幅広の突帯と竹管文を施し、内面には同心円文タタキ痕が残る。8は1箇所に焼成前の穿孔が確認される。

9～11は滑石製品で、いずれも古代以降の包含層から出土。9・10は白玉。9は直径5.03mm、厚さ3.47mm、穴径1.93mmを測り、10は直径6.31mm、厚さ3.97mm、穴径2.39mmを測る。11は紡錘車で上部を欠損する。直径3.7cm、残存厚1.4cm、穴径0.5cmを測る。

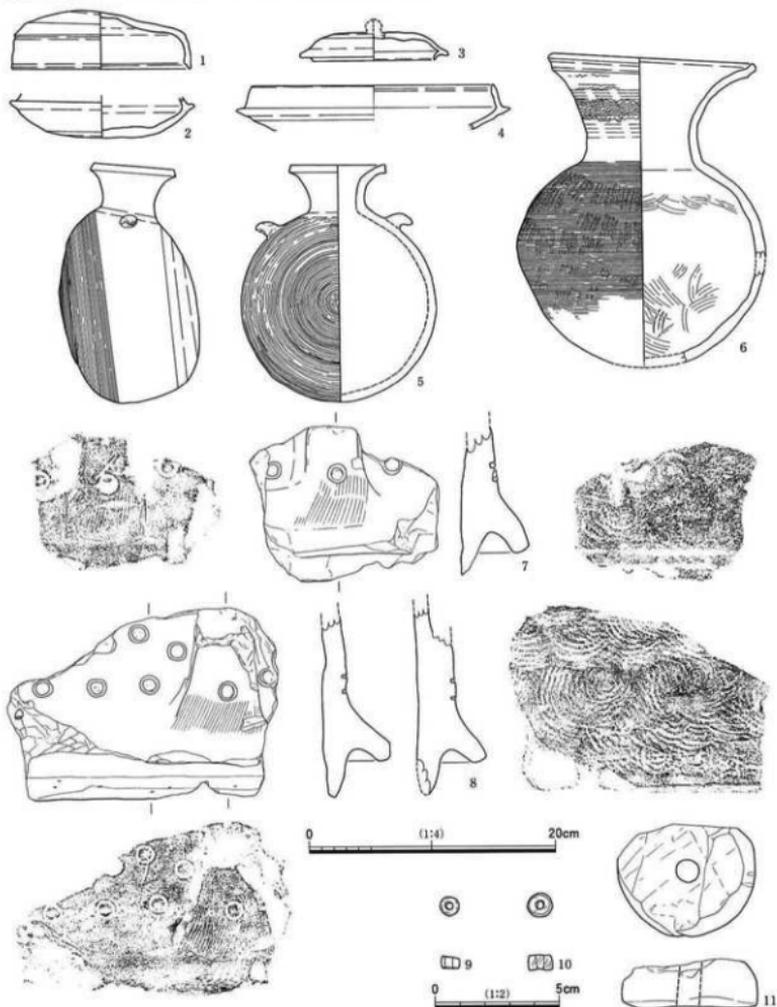


図8 古墳時代遺物 (17・18層ほか)

第5章 飛鳥・奈良時代の遺構と遺物

第1節 遺構

1. 前提

今回の調査地は冒頭でも記したように、地形的には難波宮跡に近い南側が高く、北側に東西方向の深い谷が埋没していることが明らかとなっている。また、本町通を隔てた南側で(財)大阪市文化財協会が行った調査では前期難波宮段階の倉庫群とそれを区画する柱列が検出されており(内裏西方官衙)、その西側を面する南北方向の一本柱塀の一つであるSA301が北側に位置する今回の調査区に向かってのびていることが判明していた。

したがって、今回の調査においても7A地区とした南側の高い部分についてはこれらに関連する遺構が存在する可能性が想定されるところであったが、結果的には江戸時代以降の徳川大坂城築造による大規模な地形改変によって、大規模な削平を受けていることが明らかとなっている。したがって、豊臣大坂城に関わる遺構ですら井戸などの深いものがかろうじて遺存していたのみであり、当然の結果として古代に遡る遺構については望むべくもない状態を呈していた。

しかし、調査地の北側の7B地区で検出した東西方向の谷からは古代に遡る包含層を検出し、多量の遺物が出土している。ただし、この谷の北側の肩は調査範囲外であるために幅は確定できない。しかし、既往の調査所見を勘案すると、その幅は少なくとも60m以上と推定され、深さは古代の段階でおよそ8mを測る。東から西に向けて緩やかに傾斜している。この谷の上層からは中世から近世初頭にかけての水田面や豊臣大坂城に対応する生活面等を重層的に検出し、それに伴って多種多様な遺物が出土している。

各時代の土地活用の状況および土層観察の所見からみると、豊臣大坂城の段階では盛土造成によって居住域となっているが、それ以前の段階では常に水が流れることはなかったとしてもかなり湿潤な沼状を呈していたことを窺うことができる。したがって、わずかに中世以降に水田等などの生産域として利用されるものの、それ以前には積極的に人の手が加わることがなかった、言い換えれば積極的に利用しがたい部分であったものと判断される。

なお、この水田面の作土(11a層)と基盤層(11b・c層)と下部に堆積した中世の堆積層(12層)を除いた段階、現地表面からおよそ7.5mから8.0mの深度(T.P.+12.0~12.5m)で古代以前の包含層を確認している。古代の包含層は一部で間層となる15層を挟んで大きく上下2層に分かれる。14層としたものは平均して厚さ20cmを測るものであり、同層からの出土遺物の多くは7世紀代の土器が占めるが、わずかに重圓文軒丸瓦のほか、奈良時代の土師器杯Aや須恵器杯Bを含むことからその堆積の時期を知ることができる。

なお、この14層の下部でとくに土器が集中する部分を数カ所で確認でき、これらについては調査段階に固有番号を与え(792~795)、まとまりのある遺物群として14・16層とは区別して取り上げを行っている。また、その下部には木簡群を出土した粘土層である16層が層厚約15cmで堆積している。なお、この16層は谷心線から北側では一時的に水が流れていたと考えられる流路(15層)によって削られている。15層は大きく2層に分かれ、肩部には中砂~粗砂が堆積し、それより以北では粘性の高い粘土が堆積している。遺物はさほど多くないが、出土遺物の大半は砂層からの出土である。

そのほか、14層の掘削過程で一辺1m以上の花崗岩が数箇所で見出し、結果的にこれらは16層中にお

いて花崗岩が集積した遺構であることが判明している。

以下では木簡の出土状況および集石遺構について、やや詳しく記述してゆくことにしたい。

2. 木簡等の出土状況

木簡は集石遺構2の東側の東西約15m、南北約10mの範囲でほぼ一定のレベルからまとめて出土している(図9)。

なお、図9に示した木簡等の出土分布のうち、●で示したものは原位置を確認して取り上げたものであり、一方、○で示したものは調査段階において原位置を避離したものや、もしくは遺物抽出のための土壌洗浄作業の過程で確認したもので、厳密な意味での出土位置が確定できないものである。

上記のように、一部の木簡については原位置を確定できないものの、各木簡の平面的な出土位置を微視的にみると、図9に示したように北東から12・15号木簡のA群、その西側で2・8・11号木簡を含むB群、その南側で14・18号木簡を含むC群、その西側で1・6号木簡を含み、東西に列状に木簡が分布するD群の4群にグルーピングが可能となる。

なお、木簡の多くは16層でもとくに粘性の高い粘土中から未分解の樹木の葉とともに出土しており、流路の水溜まり状に流れが停滞した淀み部分に集積して埋没したものである可能性が高い。上記のごとく、木簡がグルーピングされる状況はこのような埋没要因によるものである蓋然性が高く、さほど有意なものではない可能性も付記しておく。

また、同層からは木簡のほかには破片数にして5千点におよぶ土器片が出土し、これ以外に土馬などの土製品が出土している。土馬は2点出土しているが、うち1点(図18-17)は集石遺構1と集石遺構2の間の16層から、別の1点(写65-3)は795に包括される範囲からの出土である。

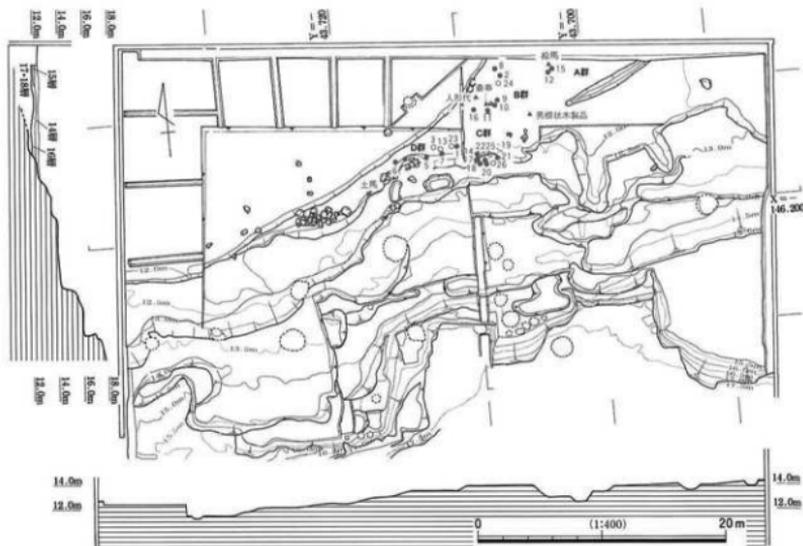


図9 16層木簡出土分布

また、同層からは絵馬や人形代、男根状木製品などの木製品が多量に出土している。このうち、絵馬(図14)はA群、人形代(図15-1)はB群、男根状木製品(図15-14)はB群の東側から出土している。なお、個別には出土位置を特定できないものの、木簡が分布するエリアを中心として多量の土器と木製品が出土している。

3. 集石遺構

(1) 集石遺構 1

集石遺構 1 は谷の南側底面に沿う形で検出したものである(図10)。東西4.6m、南北1.8mの範囲に30~80cm角の花崗岩等の石材27個がほぼ一定のレベルで集積したものを集石遺構 1 とした。

個々の石材の法量および石材種については表2に示した通りである。なお、個々の石材の固有番号についての対照は写真12に明示したほか、集石遺構 1 および2については図171に示している。

法量等の詳細については計測できたものを表2に掲げているので、ここでは繰り返さないが、比較的大小のものが多く見られる状況を確認することができる。また、石材の化学分析等によって、石材の一部は剣尾山・妙見山および生駒山を推定産地とする見解が導き出されており、これらの石材が上町台地に産するものではないことを含めて人為的に持ち込まれたものであることは他言を要さない。

なお、集石遺構 1 は図10に示した断面図に象徴されるように裏込め等は確認できず、先述したようにおおむねレベルが揃うもの、上方に面をもつように配置されたような状況は見出しがたい。したがって、この状態で石敷きなどといった機能を有していた可能性は低いものと判断している。

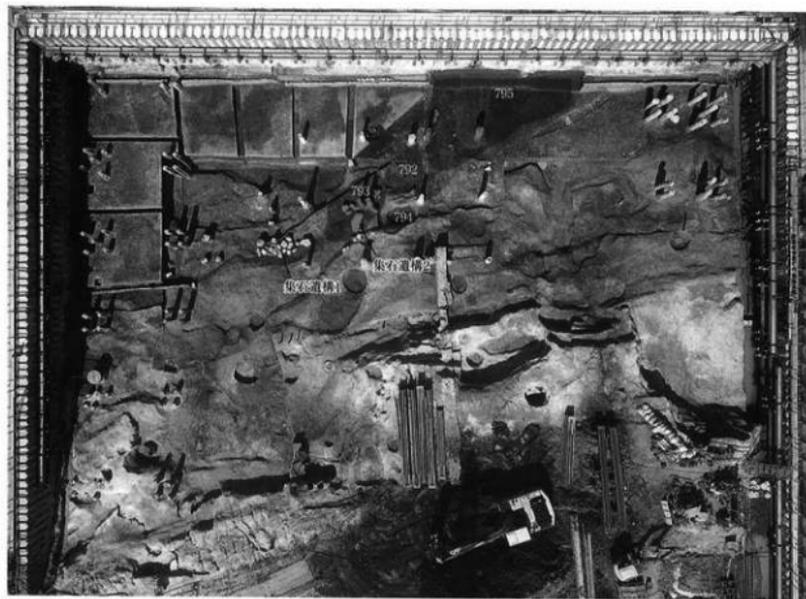


写真11 谷部16層上面検出状況

(2) 集石遺構 2

集石遺構 1 の東側では南北3.2m、東西1.4mの範囲に花崗岩等の石材17個が散漫ながらもまとまって検出されたものを集石遺構 2 とした。

集石遺構 2 は石材No.47とした長さ1.6m、幅0.8mを超える花崗岩の巨石を含んでおり、重量を計測することはできなかったが、重量を計測することができた他の石材の体積からみると1t近い重量を有するものであったと考えられる。なお、当該集石遺構には集石遺構 1 と同様に生駒山を推定産地とする花崗岩のほかに、六甲山や滋賀県上山・比良山、能勢三草山を推定産地とするものが含まれている。

集石遺構 1 とともに、石材自体は上町台地に産するものではないことは明白である。これらの石材は前期難波宮等の造営に伴って破壊された前代の構造物、たとえば古墳に伴うものである可能性も皆無とはいえないが、推定産地が非常にバラエティーに富むなどの点でその蓋然性は低い。層的に見た場合、前期難波宮段階のものと考えられ、難波宮の造営に伴って人為的に運び込まれたものである可能性を考えると、推定産地が各地に散らばっている状況も理解できるものと判断する。

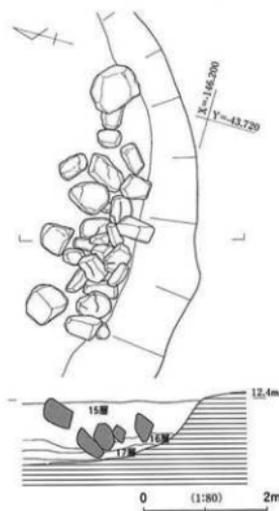


図10 集石遺構 1



写真12 集石遺構と石材番号

表2 集石遺構1・2石材観察表

NO.	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(kg)	石材種	推定産地	備考
1	68.0	59.0	42.0	未計測	中粒花崗岩		
2	43.0	30.0	20.0	48.62	中粒花崗岩		
3	33.0	26.0	17.0	34.00	閃緑岩		
4	48.0	30.0	20.0	61.90			
5	63.0	31.0	18.0	52.34	カリ長石・普通、中粒花崗岩		
6	48.0	25.0	35.0	66.70	カリ長石・普通、中粒花崗岩	銅尾山・妙見山	第11章第3節鑑定対象石材
7	38.0	37.0	19.0	32.06	カリ長石・少、中粒花崗岩		
8	57.0	49.0	27.0	73.00	カリ長石・多、中粒花崗岩		
9	19.0	17.0	14.0	8.98	閃緑岩		
10	35.0	32.0	14.0	30.02			
11	42.0	24.5	24.0	52.42	カリ長石・多、中粒花崗岩		
12	26.5	15.0	19.0	9.66			
13	30.0	13.0	30.0	38.60	糜レイ岩		
14	49.0	31.0	22.0	73.15			
15	39.0	35.0	28.0	86.80	カリ長石・多、中粒花崗岩		
16	34.0	16.0	12.0	14.84	角閃石糜レイ岩	生駒山	第11章第3節鑑定対象石材
17	27.0	26.0	16.0	18.76	閃緑岩		
18	50.0	27.0	15.0	37.28			
19	24.5	19.0	16.0	2.86	輝石角閃石糜レイ岩	生駒山	第11章第3節鑑定対象石材
20	40.0	26.0	18.0	40.38	中粒黒雲母花崗岩	銅尾山・妙見山	第11章第3節鑑定対象石材
21	44.0	16.0	14.0	22.14	輝緑岩		
22	40.0	14.0	15.0	22.60			
23	47.0	15.0	28.0	45.12	輝緑岩		
24	50.0	39.0	22.0	69.30	糜状花崗岩		
25	63.0	59.0	30.0	未計測			
26	52.0	35.0	28.0	81.70	細粒状角閃石黒雲母花崗岩	妙見山	第11章第3節鑑定対象石材
27	26.0	19.0	13.0	7.80	カリ長石・多、中粒花崗岩		
28	36.0	30.0	21.0	39.50	カリ長石・普通、中粒花崗岩		
29	38.0	28.0	17.0	25.76	カリ長石・多、中粒花崗岩		
30	40.0	23.5	16.0	26.00	カリ長石・普通、中粒花崗岩		
31	60.0	46.0	17.0	84.60	中粒花崗岩		
32	47.0	43.0	20.0	58.04			
33	55.5	35.5	24.0	80.05	カリ長石・普通、中粒花崗岩		
34	55.0	24.0	27.0	42.56	カリ長石・多、中粒花崗岩		
35	41.0	25.0	20.0	45.40			
36	49.0	41.0	24.0	80.15	中粒黒雲母花崗岩	六甲山	第11章第3節鑑定対象石材
37	33.0	28.0	13.0	30.58	細粒角閃石糜レイ岩	生駒山	第11章第3節鑑定対象石材
38	36.0	26.0	16.0	39.92			
39	35.0	35.0	22.0	57.58	カリ長石・少、中粒花崗岩		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
40	56.0	18.0	23.0	71.30			
41	40.0	22.0	23.0	38.84			
42	58.0	30.0	23.0	103.35	中粒花崗岩		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
43	40.0	25.0	26.0	87.00			
44	65.5	25.0	30.0	62.15	カリ長石・多、中粒花崗岩		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
45	53.5	50.5	22.0	119.95			
46	56.0	28.0	17.0	63.35	粗粒花崗岩	浜賀草田上山・比良山	第11章第3節鑑定対象石材
47	166.5	81.5	未計測	未計測	岡山以西の石材		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
48	33.0	15.0	19.0	24.72	カリ長石・少、中粒花崗岩		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
49	49.0	33.5	13.0	45.16	中粒花崗岩		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
50	41.5	28.0	16.0	44.38	文象斑岩	能勢 三草山	第11章第3節鑑定対象石材
51	29.5	17.0	6.5	3.60	文象斑岩	能勢 三草山	第11章第3節鑑定対象石材
52	28.5	15.5	20.0	27.80	カリ長石・普通、中粒花崗岩		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
53	60.0	42.0	34.0	未計測	中粒花崗岩		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
54	52.0	30.0	13.0	29.26	中粒花崗岩		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
55	38.5	25.0	15.5	20.78	閃緑岩		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
56	27.0	16.0	12.5	17.64	石英・長石多い		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
57	45.0	21.0	28.9	54.14	中粒花崗岩		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
58	26.5	17.5	12.0	18.12			
59	32.0	21.0	18.0	14.32			
60	32.0	24.5	20.0	21.50	粗粒花崗岩		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
61	33.5	27.0	18.0	7.52	中粒花崗岩		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
62	25.5	21.0	18.0	17.58	中粒花崗岩		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
63	61.0	41.5	24.5	119.10	中粒花崗岩		佐藤隆春氏による肉眼鑑定
64	50.0	39.5	24.0	111.90	中粒花崗岩		佐藤隆春氏による肉眼鑑定

第2節 遺物

1. 木簡

今回の調査で出土した木簡はいずれも谷部の16層からまとも出土したもので、可能性のあるものを含んで33点確認している。

そのうち、墨書や形状によって木簡であると判断できるものが31点あり、刻書が1点、欠損しているものの、形状から木簡である可能性が高いもの1点が出土している。

以下、積文の記載方法ならびに符号、形式番号、法量などは木簡学会の記載方式に、調整技法については山中章氏が示した呼称を参考に記述を進める。また、木簡の積文については奈良国立文化財研究所各位の他、直木孝次郎、東野治之、柴原永遠男、鎌田元一氏をはじめとする諸先学とともに行った観察結果に依拠する点、多きことを記しておく。

(1) 1号木簡 (図11-1、写47-1)

(104)・23・5 019 ヒノキ 板目

上端部が折れて欠損している以外は完存する。左右両側は丁寧に調整が行われている。下端はやや丸みを帯びた形状を呈し、平面ケズリと側面ケズリによって調整が行われている。

表裏両面とも、丁寧に整形されているが、裏面には墨痕は確認できない。表面の墨痕はきわめて明瞭であり、上部が欠損して不明である点と内容の解釈を別にすれば、墨書の「秦人凡国評」の積文には異論はない。

(2) 2号木簡 (図11-2、写47-2・51-5)

(107)・17・4 032 ヒノキ 板目

表面に「支多比」と記された完存する木簡である。上端は方頭で表裏両面からの平面ケズリによる整形を行い、上端の断面は山形を呈する。

切り込みは、左側はわずかにキリオトシ、右側はキリカキである(写51-5)。左右両側面はワリ、下端も上端と同様に方頭であるが、とくに面取りなどは行われず、オリ・ワリの可能性が残る。

なお、表面は丁寧な整形がされているが、それと比較した場合、裏面の整形はやや雑な感を受ける。ただし、これについては腐食などの二次的変化の程度の差である可能性も残る。表面側の墨痕は明瞭で積文に問題はない。裏面側は赤外線カメラの観察では中位に2文字前後の文字の痕跡らしき影を看取することができるが、文字として字面を追うことは困難である。

(3) 3号木簡 (図11-5、写47-3)

(59)・(16)・2 081 ヒノキ 柃目

上下端はともにオレ、左側面はワレている。右側面は下方に加工痕跡があり、ワリの後にケズリ整形が行われている。表面は比較的丁寧に整形を行っているが、裏面は材を割いたままの状態でケズリ等の整形を行っていない。

表面には4文字程度の墨痕が認められるが、墨が薄れていることや欠損していることなどから、判読は難しい。裏面には墨痕がない。

(4) 4号木簡 (図11-3、写47-4・53-1)

96・20・4 032 ヒノキ 板目

上端右側が欠損するが、それ以外は完存。上端は圭頭に整形されるが、遺存状態が悪く、調整技法等は

不明。左側の切り込みは、斜め下から刀子を入れたあと、斜め上から抉り取っている。右側切り込みは、破損がはげしいが、斜め下からの刀子の肩部分がかるうじて残っている。左右両側面は上部の破損部分を除いて整形面が残る。下端も左右からの側面ケズリで圭頭に整形されている。表裏を比べると、裏面の調整はやや雑である。墨はかなり薄れているが、3文字目までは問題ない。ただし、第1文字目の「委」についてはその左側に縦方向のシミがあり、ニンベンのある「倭」の可能性もあったが、左方向および下方に寄り過ぎていることなどの点でバランスが悪いことを考慮し前者を採っている。また第4文字目については上3文字と大きさのバランスや、それ自体のバランスが悪く、釈文では「栗」としているが、「西不」の2文字となる可能性も残されている。裏面に文字はない。

(5) 5号木簡 (図11-4、写47-5・52-5)

86・19・3 031 ヒノキ 板目

端部はいずれも左側部分を一部欠損するが、ほぼ完存する木簡。上端および下端は側面ケズリによって圭頭に整形されている。切り込みは上下両方の左右にあり、いずれも上側からの切り込みが側面に対して急角度であるのに対して、下側からの切り込み角度はそれよりも穏やかである。また、左右の切り込み部分をつなぐようにして幅約5mmで表面の色調がやや明るくなって異なっている部分が上下ともに観察できる。この部分に結束されていたヒモ等の痕跡である可能性も残る。

側面は、一部が腐食によって変形しているが、これ以外の部分では整形面が残っている。表裏ともに平滑に整形されるが、表面に比して裏面の方がわずかに荒れている。墨痕はかなり薄くなっており、鮮明ではないが、2文字が確認できる。なお、内容については赤外線カメラではある程度、筆跡を追うことが可能ではあったが、判読までには至っていない。裏面に墨痕はない。

(6) 6号木簡 (図11-6、写47-6・53-2)

(64)・23・4 019 スギ 板目

上端は折れているが、下端は方頭で端部が遺存している。上端は表面側の右斜め上から切り込みを入れて、その後上部を折り取っている。下半部にも同様の切り込みが裏面から行われており、文字の部分を切っていることなどから廃棄作業に伴うものである可能性が高い。

左右の側面は両面とも整形面が残っている。文字は表面に3文字が確認できる。第1文字目はオレのために末画しか残っておらず、判読しがたい。第2文字目は「面」の可能性が高いが、「西」の可能性もわずかに残す。ただし、第3文字目については、判読は難しいが「年」の可能性は乏しく、「子」などの可能性も指摘されている。裏面に墨痕はない。

(7) 7号木簡 (図11-7、写47-7)

(66)・22・4 051 ヒノキ 板目

上端は方頭で側面ケズリによる整形面が残る。上端左角部分はメンドリによって角を落としている。左右両側面もケズリによる整形面が残っており、表面側の左右端の角はケズリによってメンドリがなされている。下端は右側面から斜め下方にケズリが行われているが、本来の下端の形状は失われている。この右側面からの刀子については、切断後の廃棄作業によるものとも考えられる。

なお、表面は丁寧に整形が行われているが、これに比して裏面の調整はやや雑である。表裏とも文字が書かれており墨痕が観察できる。表面の第1文字目は「大」としても異論のないところであるが、第2文字目は「地」のほか、「世」や「地」などの可能性も残る。また、鎌田元一氏は「抛」の可能性も指摘されている。いずれにしても意味が取りにくく、第3文字目が確定できず、全体として内容は不明である。裏面は墨

痕のみが遺存しているが、横方向の墨痕がわずかに残るのみであり、文字数も確定できない。調整の程度や墨痕の残存状況などを勘案するならば、削り残しである可能性も示唆される。

(8) 8号木簡(図11-9、写48-1・53-3)

125・30・4 011 ヒノキ 柃目

下半部に調査段階に生じた欠損や傷があるものの、それ以外は完存する木簡である。上端部は左右からの側面ケズリで浅い圭頭に作り出されるが、その頂点は中心より左側にずれている。下端部はケズリによって整形され、メンドリによって左右隅角を削ることによって丸みをもった形状に仕上げている。

側面は左側はケズリによってほぼまっすぐに整形されているが、右側面は上端から約3.5cmまでは、斜めに整形され、下方に向けて幅が広がっている。したがって、当該木簡はシメトリな形状をもち、しかも表面の文字もやや左に寄り気味である。

なお、材は全体に右側が薄く、しかも腐食が進んでいる。

表面に比して裏面側は、木目が目立ち、若干荒れているような状況を看取することが可能である。裏面には墨痕は認められず、他の木簡同様に裏表の意識が存在していたものと考えられる。

第1文字目は「鳴」として異論のないところである。第2文字目は、東野治之氏のご教示によれば、上から順に「立」、「日」となり、その下の横棒は「心」を略したものであると考えられる。したがって、この文字は「意」であることはほぼ動かない。また、第3文字目は当初、「絲」である可能性も考えられていたが、旁が「糸」ではなく、「尔」であることが明瞭であり、偏についてはユミヘンを採り、第2文字目との関連から東野治之氏の指摘するように「意弥(オミ)」と読むことが妥当であると判断する。

第4文字目は「荷」であることに異論がない。第5文字目以下には「荷」にかかる数量や単位が後続すると予想される所であり、そのような視点でみると、第5文字目は横棒一本が明瞭に観察され、これがやや下方に寄り気味なので、「一」の可能性がわずかに残るものの、「二」もしくは「三」いずれかの数字である可能性も高い。そのほか、第7文字目は「八」として問題ないものと考えられる。

第6文字目については旁部分の残画と単位である可能性などを勘案し、糸の単位である「絢」が浮上するところとなるが、「八」が後続する点や、前の文字が「絲」とは読みにくいなどの点で、最終的には判読困難との結果に落ち着く。なお、「八」の下には2文字ないしは3文字の文字がはいるが、残りが悪く、字数すら確定できない。

(9) 9号木簡(図11-11、写48-2・53-5)

166・28・5 032 ヒノキ 板目

調査段階に材の下半部が4片に割れて分離しているが、全体としておおむね旧状に復することが可能となっている。上記の後世の改変を除けば、完形となる木簡である。

上端は方頭で表面側と裏面側ともに平面ケズリで整形を行い、したがって、断面では山形を呈している。なお、左右隅角は側面ケズリによってメンドリを行い、角を落としている。

切り込みは上部の左右にあり、ともにキリカキである。なお、切り込み部分は表面側の角のみを、左右両側ともメンドリして丁寧に仕上げている。ちなみに今回出土した木簡中、切り込み部分に対してこのような作業を行っているのは、本例のみであり、他例に比して丁寧な造作が加えられている。

左右両側とも完存しており、左側面ではワリのあとケズリ、右側面ではケズリによる整形が成されている。

下端も方頭で整形面が残る。ケズリの可能性が高いが、整形技法は不明。裏面は木目が浮いた状態を呈

しており、平滑に整形された表面に比べて明らかに整形の度合いが低いことが看取される。切り込み部分の整形を含め、整形段階において表裏の区別が明確に成されていることが窺われる。

全体に変色が進んでおり、肉眼ではほとんど文字は見えないが、赤外線カメラによる観察では表裏に文字が確認できる。

表面側の文字は、切り込みより下方の上半部に大きく「王母前」の3文字を書いている。第3文字目の「前」の字は割れた部分と重なっており、やや読みづらくなっているが、この3文字の釈文には異論がない。

また、その下方に小さく、かつ若干ではあるが、右寄せ気味に4文字を書いている。いずれも断片的であることから確定は困難であるが、第4文字目は「立」の可能性はあるほか、「五」の可能性も残すことが指摘されている。第5文字目は不明、第6文字目は「成」や「我」などのように掛掛けのある文字である可能性が高いが、判然としない。また、最下の文字については比較的明瞭に観察が可能であるが、確定はできない。「上」である可能性もわずかに残すが不明である。

また、下半の文字数については3文字である可能性もある。

裏面には表面と同様に一面に墨痕が確認できるが、下半の「廿六カ」以外には判読が不可能である。

なお、「六カ」については「足」とみて単位であるとする見解もある。

この木簡は表面の下半部および裏面がほとんど判読できないものの、非常に丁寧な作りである点で他例とは一線を画している。

また、表面の「王母前」については釈文に異論はなく、物品名である可能性は絶無ではないが、現状では宛先を示すものとみる見解が大勢を占める。

全体として意味をとりづらいが、当該木簡は今回出土した木簡群の性格を考える上できわめて重要な位置を占めるものといえる。

(10) 10号木簡 (図11-8、写49-1)

(173)・(12)・3 081 ヒノキ 板目

上下端とも折れており、さらに土圧によるためか、全体に表面側に反っている。左側面はケズリによる整形面が残っているが、右側面はワレている。裏面はケズリなどの整形が成されておらず、割ったままの状態である可能性が高い。表面は非常に丁寧な整形が成されており、現状では9文字分の文字が確認できる。いずれも文字の中心もしくはやや左側で割れているために、文字を特定することは困難である。なお、第1・3・6・8文字目は左半がカタカナの「フ」のように見える点で同じ文字である可能性もあり、「不」や「マ」などがその候補となるが、断定はできない。

(11) 11号木簡 (図12-1、写49-5)

(202)・(27)・3 019 ヒノキ 追柵目

上端および右側面の一部が原形を保つ以外は欠損している。上端は完存しないが、やや丸みをもった方頭である。現状での現存部分はわずかに斜め右下がりになっている。現存部分の右側の端面は側面ケズリで整形が成されている。墨書は表裏両面に確認でき、他の木簡とは異なり、異筆による書き込みがある。表面側の墨書は上端から約7cmの位置から「戊申年」ではじまる文字が書かれており、以下、現存部分のみで3文字が後続していることがわかる。また、欠損した左側面には「戊申年□□□」文字に対応するように墨痕や文字の一部が残っており、本来は同じ字配りで最低でも2行以上の墨書があったことになる。「戊申年」上方の異筆3文字を除いた場合、書き出し位置が低いようにみえるが、これについて

ては榮原永遠氏が指摘するように、大型の木簡におおぶりの文字で書かれていたと推察される点を勘案するならば、さほど不自然であるとはいえない。

なお、当該木簡に元來書き込まれたと考えられる紀年銘部分であるが、「戊」字については通例の文字とは異なり、非常に特徴的な字体である。しかし、これについてはすでに指摘されるように、法隆寺藏釈迦如來及脇侍像の光背裏銘の「戊子年」（推古36年；628）、根津美術館藏光背裏銘の「戊午年」（斉明4年；658）などの金石文にみえる「戊」と共通する要素である。また一方、木簡での類似例では早くに福岡澄男氏が指摘した韓国二聖山城出土の「戊辰年木簡」の「戊辰年」（608年〔推古18〕または668年〔天智7〕）の「戊」字が酷似した字体を示している。したがって、当該木簡の「戊」字については7世紀中頃以前の事例と共通する古い書体であることが看取される。

また、田中卓氏の教示によれば、知恩院本『上宮聖徳法王帝説』にみえる「代午年」についてはすでに家永三郎氏が『上宮聖徳法王帝説の研究』の中で「代【底本】戊の古體なるべし」との指摘を行っている点を付記しておきたい。

また、第2文字目の「申」については異論のないところであり、第3文字目についても「年」とすることに異論はない。ただし、「年」については榮原氏が指摘するように縦棒が上から下まで通っていないなどの点で、上半分に「上」、下半分に「丰」を書く字体である。これは、氏の指摘するところでは東京国立博物館藏菩薩半跏像の「丙寅年」（推古14年；606）や、東京国立博物館藏観音菩薩立像座銘の「辛亥年」（白雉2年）などの「年」、木簡では三条九ノ坪遺跡（兵庫県芦屋市）出土の「壬子年」（白雉3年；652）木簡、湯ノ部遺跡（滋賀県野洲郡中町）出土の「丙子年」（天武8年；676）木簡の「年」、また、金石文でも野中寺藏の弥勒菩薩半跏像の台座丸座銘の「丙寅年」（天智5年；666）の「年」が同じである。なお、年紀部分の下方の文字については残存部位が少なく判読できない。また、左列最下の文字については「連」の可能性が高いが、これも確定できない。また、上端部の3文字は異筆である可能性が高く、墨の濃淡や字体からみて、第1文字目と第2・3文字目もそれぞれ異筆である可能性が高い。

裏面は上端からすぐに2行が書かれ、下半は上半の行間の位置に1行書かれている。上半の右行は墨痕のみで判読できず、字数も不明、左行は、第1文字目は「佐」で、第4・5文字目は「十六」の可能性が高い。下半には4文字書かれているが、書き出しの位置や墨の濃淡、書風の相違などから異筆である可能性が高いものと判断する。

(12) 12号木簡 (図11-10、写50-1・54-3)

125・16・3 032 ヒノキ 板目

表面中央に「穴」と書かれた完形の木簡。上端は側面ケズリで圭頭整形されているが、頂点の位置は中心より右側にずれている。

上方にある切り込みは、左側より右側の位置がわずかに上になっている。左側の切り込みはキリオトシ、右側もキリオトシである。側面は両側ともに、材を割ったままのワリである。下端も上端と同様に左右側からの側面ケズリで圭頭状に整形する。なお、表面に比べて裏面は、木目が浮いたような状況を呈しており、未整形のままである可能性も高い。墨書は表面側のほぼ中央に「穴」の1文字が明瞭に観察でき、表面下方および裏面中位にシミがみられるが、墨書か否かは特定できない。

(13) 13号木簡 (図11-12、写48-3)

(90)・(13)・5 081 ヒノキ 追証目

上端は斜め方向のキリ・オリのために表面側がはぎ取られており、下端も同様であるが、刃物の痕跡は

見出せない。左側面はワレているが、右側面はケズリによる整形面が残っている。表面はカットグラス状ケズリが明瞭に確認でき丁寧に整形されている。中位上方に2文字前後の墨痕があるが、判読不能である上に文字数も不明である。

(14) 14号木簡(図12-2、写50-7)

(192)・(14)・2 081 ヒノキ 板目

上下端はオレ、左右側面はワレであり、いずれも原形を留めていない。裏面の整形は荒く、未整形である可能性が高い。墨痕は、2行にわたって認められるが、右行の数文字が比較的明瞭に確認できるので、左列は不明瞭である。いずれにしても文字数も内容も不明である。

(15) 15号木簡(図12-3、写51-3)

134・27・3 032 スギ 板目

2片に折れており、上端部右側を欠失する以外はほぼ完存する。上端は方頭であり、左側約3分の1は左側面に欠けて欠損し、切り込みについても右側はわずかに痕跡が残るのみである。なお、上端の残り3分の2は、ケズリによる整形面が残っており、右角を側面ケズリでメンドリしている。

切り込みは上方にあるが、上記のように左側のものはわずかに遺存するのみである。右側の切り込みは、下方からの斜めに刀子を入れ、つぎに上方からの刀子で三角形にキリカキ、さらに角度を変えて刀子を入れてキリオトしている。

側面は残存している部分ではいずれもケズリによる整形が行われている。下端は左右側からの側面ケズリで圭頭状に整形している。

なお、表裏ともに丁寧に整形が成されているが、裏面には墨痕が認められない。また、表面の墨書も肉眼ではほとんど判別できないほどに薄れており、赤外線カメラによる観察によって3文字分の墨痕が確認されるが、第2文字目が「支」のごとき文字である可能性がある以外は判読できない。

なお、当該木簡の折損部分については古い段階のものである可能性もあるが、破断面の状況からみて遺憾ながら調査段階に生じたものである可能性も否定できない。

(16) 16号木簡(図12-4、写50-2)

(108)・12・2 019 ヒノキ 板目

上端は整形面が残るが、整形技法は不明である。左側面はケズリによる整形面が残る。なお、上端から約1～5cmの範囲が焦げたように黒くなっている。右側面はケズリによる整形面が残るが、墨痕を切っているため、二次的整形であると考えられる。下端はオレている。墨痕は表面上右方に、横方向の棒が1本あるだけであり、天地方向も文字であるのか否かの判別もできない。したがって、厳密には上下もはっきりしないことになる。また、裏面には刃物の痕跡がみられるが、整形は雑であり、墨書も確認できない。

(17) 17号木簡(図12-5、写49-2)

(126)・(16)・4 081 ヒノキ 板目

上端はオレているが、下端には左斜め上から切られた痕跡が残る。左側面は文字列の中位前後でワレており、廃棄の際に行われた行為である可能性が指摘されている。右側面にはケズリによる整形面が残っている。下端の先端部はオレている。表面は平滑に整形されているが裏面は未調整のままである。

薄く残る墨痕によって、残存部分のみで大ぶりの文字が4文字書かれていたことがわかるが、判読できない。

(18) 18号木簡(図12-6、写51-1・54-1)

146・28・3 032 スギ 柾目

多くの木簡がヒノキの板目材を用いる中において当該木簡はスギの柾目材を用いている点で特徴的である。上方の耳を両方とも欠損する以外、完存しており、上端は左右側からの側面ケズリで圭頭に整形されている。上方にある切り込みは、左右ともキリカキである。左右両側面ともケズリによる整形面が残る。下端は左右両側からの側面ケズリで圭頭状に整形されているが、先端部は尖っていない。表面はきわめて丁寧に整形されているが、裏面はそれに比してややざらついており、整形の度合いが低いものと考えられる。表面中位には木簡に対してはやや小振りの字で「伊加比」の3文字が書かれている。墨が薄れているが、赤外線カメラでの観察では明瞭に文字が確認でき、釈文に異論はない。なお、裏面に墨痕はない。

(19) 19号木簡(図12-7、写52-3・53-4)

(67・61)・19・2 011 ヒノキ 追柾目

直接的には接合しない2片からなる刻書木簡。両片は木目の状況や材の状態、刻書の特徴などの諸属性などからみて、同一個体の木簡であることは明らかである。

上端は、表裏両側から平面ケズリで方頭整形され、山形を呈している。左右両側面とも、原形を留めており、右側面がケズリ、左側面はワリであると考えられる。上端とは異なり、下端は左右両側から側面ケズリで方頭整形している。なお、2片とも表裏に刻書があり、第1文字目は明瞭に字面を迫るものの不明であり、第2～5文字目までは下記の釈文の通りである。なお、第3文字目については明らかにニンペンであることが看取される。また、表面側最下の文字は「四」の可能性もある。裏面については数文字が判読可能であるが、結果的には全体としては意味をとりにくい状況にある。

(20) 20号木簡(図12-9、写48-4)

66・19・3 033 ヒノキ 柾目

完存する小型の木簡であるが、墨痕は不鮮明。材はヒノキの柾目板を用い、全体に左側が薄くなっている。上端は方頭で、表裏両面からの平面ケズリに加え、先端部分を側面ケズリで整形している。上方にある切り込みは左右ともキリオトシによるものであり、形状はやや丸みを帯びている。また、左右両側面とも、ケズリによる整形面が残っている。下方は、左右両側から材を削って斜めに細くしているが、先端部分は尖ることなく、幅6mmほどの平坦面を有している。

当該木簡に関しては表裏の整形度合いはほぼ同じであるが、表面側のみかすかに墨痕が確認できる。また、墨書に対応してわずかに高まっているような状況も看取されるが、字面を追うことはできない。文字数についても3～4文字程度かと推定されるが断定できず、内容についても不明である。

(21) 21号木簡(図12-8、写48-5・54-2)

41・27・4 019 ヒノキ 柾目

上端は左右から刀子で切り込みを入れて折っている。表面には直線的な切り込みの痕跡が明瞭に残り(写54-2)、廃棄作業に伴うものである可能性が高い。側面は右側面がワリもしくはワレ、左側面はワリの後、ケズリ整形。下端は方頭で側面ケズリによる整形を行っている。表裏面の整形は双方とも丁寧に、材の厚さも一定している。表面は第1文字目は文字の一部が残りに、「嶋」などの下部である可能性も残る。その下方の「不得」に異論はない。裏面には2行の文字があり、右行第1文字目は「非」の可能性が高く、第2文字目は「有」で問題ない。左行は鎌田元一氏による観察によって「三枝マ」の可能性が指

摘されている。

(22) 22号木簡 (図13-2、写50-4)

(64)・(24)・1 081 ヒノキ 柾目

上下端オレ、左右側面ワレであり、いずれも原形を留めていない。厚さも厚い部分で1mmを測るのみに、元来の厚さではない可能性が高い。とくに裏面は表面に比べて木目が目立つなどして荒れている。表面には3文字分の墨痕が認められ、第3文字目が東野治之氏によって「尊」と推定される以外は判読できない。

(23) 23号木簡 (図13-1、写52-1)

(177)・(38)・9 081 ヒノキ 柾目

上下の判断はできないが、整形面の残る短辺側を便宜的に上端とする。上端は方頭であり、分厚い。一方、下端はオレており、薄くなっている。左側面は墨痕を切っており、二次的にケズリによる整形がなされたものと考えられる。右側面はケズリ整形面が残る。表面は円弧を描くようにくぼんでおり、裏面は未整形のままである。表面の下方左側には残存部分で弧状の墨線が4本描かれている。少なくとも文字や記号とは考えにくいことから、(絵面カ)としたが、方向や何を表現したものかを明らかにすることはできない。

(24) 24号木簡 (図12-10、写49-6)

(41)・(27)・4 081 ヒノキ 柾目

上下端ともオレている。左側面はケズリによる整形面が残るが、右側面はワレている。裏面はささくれ立った状態であり、未整形のままである。表面には墨痕が認められるが、文字か否かの判別もできず、字数も不明である。

(25) 25号木簡 (図13-3、写51-4)

(57)・(12)・3 081 ヒノキ 追柾目

上下端ともオレ、左右側面ともにワレている。表面は比較的平滑に整形されるが、裏面は未整形である。表面には肉眼観察では墨痕が認められるが、赤外線カメラによる映像では逆に写りにくい。いずれにせよ、内容は判読不能であり、字数も不明である。

(26) 26号木簡 (図13-5、写51-2)

(101)・(17)・2 081 ヒノキ 板目

上下端ともオレている。左側面はワリの後、部分的にケズリ整形、右側面はワレている。裏面は未整形のままである。なお、裏面の下方は焼けたように黒くなっている。表面には墨痕が認められ、上方の横棒2本が比較的明瞭に観察できるものの、判読できず、字数も不明。

(27) 27号木簡 (図13-6、写49-4)

(57)・(9)・2 081 ヒノキ 追柾目

乾燥と土圧によって収縮、変形している。上端が整形面を残す以外、いずれも元来の形状を留めるものではない。側面は左右ともワレ、下端はオレている。

表裏ともに墨書があるが、調整については冒頭に記した収縮、変形のために判然としない。表面の墨書は残存部分で5文字とみられ、上の2文字は一見すると「西部」と読めるが、右半を欠失しており、断定はできない。裏面の墨書は残存部位が限られており、判読もできず、字数も確定しがたい。

なお、当該木簡は16層から取り上げた大量の木片を赤外線カメラによって確認する作業によって見出

したものであり、したがって厳密な意味では出土地点を特定することはできない。

(28) 28号木簡 (図13-7、写49-3)

(35)・(6)・2 081 ヒノキ 柾目

上下端ともにオレており、側面は左右ともにワレている。表面に比して裏面はやや荒れている。表裏面に墨書があり、表面側はほぼ一面に文字があるが、残存部分が限られていることもあって字数、内容ともに不明である。裏面も同様に墨痕が明瞭に確認できるが、残存部位はわずかであり、判読不明であり、字数も特定できない。

なお、当該木簡も27号木簡と同様に16層出土木片を赤外線カメラによって確認する作業によって見出したものであり、出土地点を特定することはできない。

(29) 29号木簡 (図13-4、写50-5)

(56)・(13)・1 081 ヒノキ 柾目

上下端ともにオレており、側面は左右ともにワレている。裏面は未整形のままである。表面に墨書があり、横棒2本が明瞭に確認できるものの判読不能である。したがって、字数も上下も不明である。

なお、当該木簡についても27・28号木簡と同様に16層出土の木片を赤外線カメラによって確認する作業によって見出したものであり、出土地点を特定することはできないものである。

(30) 30号木簡 (図13-9、写52-2)

(147)・(9)・1 081 ヒノキ 柾目

上端はオレ、下端には整形面が残る。左右両側面はワレ。表裏面ともに整形している。上端部付近に墨痕が確認できるが、判読できない。したがって、字数も上下も不明である。

なお、当該木簡は16層から取り上げた大量の木片を赤外線カメラによって確認する作業によって見出したものであり、したがって厳密な意味では出土地点を特定することはできない。

(31) 31号木簡 (図13-11、写50-3)

(115)・(15)・1 081 ヒノキ 柾目

上下端ともにオレ、側面は左右ともにワレている。裏面は未整形のままである。表面に横棒1本が確認できるものの文字か否かも不明である。したがって、字数も上下も不明である。

なお、当該木簡についても出土時点で認知することはできず、16層から取り上げた大量の木片を赤外線カメラによって確認する作業によって見出したものであり、したがって厳密な意味では出土地点を特定することはできない。

(32) 32号木簡 (図13-8、写50-6)

(88)・(34)・6 065 ヒノキ 柾目

隅丸方形から半円形に加工した木製品で、穿孔部反対側で割れている。表裏両面とも木目が浮き立つ。割れ目部分に墨痕らしきものが確認できることから、ここでは木簡として扱うことにした。表面にみえる墨痕らしきものは、比較的明瞭ではあるが、複雑に錯綜した部分もあり、文字か否かという点も方向も判断できない。なお、残存部分で直径4mm前後の穿孔がある。穿孔部分は表面とした墨書側で大きく、裏面で漏斗状に径を減じている。

なお、当該木簡についても出土時点では認知することができず、16層から取り上げた大量の木製品および木片の一つとして取り上げたものを赤外線カメラによって確認する作業過程で見出したものである。したがって、本例についても厳密な意味では出土地点を特定することはできない。

①	秦人凡国評 「V支多比」	$(104) \times 23 \times 5$	019	①⑦	□□□□	$(126) \times (16) \times 4$	081
②	□□□□	$(107) \times 17 \times 4$	032	①⑧	「V伊加比」	$146 \times 28 \times 3$	032
③	□□□□	$(59) \times (16) \times 2$	081	①⑨	「□止你乃止……」 〔四方〕		
④	「V委尔了栗□□」	$96 \times 20 \times 4$	032	①⑩	「□了在□□……□□」 〔六カ〕	$(67+61) \times 19 \times 2$	011
⑤	「V□□V」	$86 \times 19 \times 3$	031	②①	「V□□□□」	$66 \times 19 \times 3$	033
⑥	□面□	$(64) \times 23 \times 4$	019	②②	「□不得」(上端は二次的整形)		
⑦	・「大□□」 〔推カ〕	$(66) \times 22 \times 4$	051	②③	□□□□	$64 \times (24) \times 1$	081
⑧	・「 <u>輸意弥</u> □□八□□」 〔六カ〕	$125 \times 30 \times 4$	011	②④	□□□□	$(177) \times (38) \times 9$	081
⑨	・「V王母前□□□□」 〔立カ〕	$166 \times 28 \times 5$	032	②⑤	「〔絵面カ〕(左辺は二次的整形)」		
⑩	・「V□□□□」 〔井カ〕	$(173) \times (12) \times 3$	081	②⑥	□□□□	$(41) \times (27) \times 4$	081
⑪	・「 <u>異筆1</u> 」 〔異筆2〕 「 <u>稲稲</u> 」 〔異筆3〕			②⑦	□□□□	$(57) \times (12) \times 3$	081
	戊申年□□□□			②⑧	□□□□	$(101) \times (17) \times 2$	081
	支□乃□			②⑨	□□□□	$(57) \times (9) \times 2$	081
⑫	「V长1」	$(202) \times (27) \times 3$	019	②⑩	□□□□	$(35) \times (6) \times 2$	081
⑬	□□□□	$125 \times 16 \times 3$	032	②⑪	□□□□	$(56) \times (13) \times 1$	081
⑭	□□□□	$(90) \times (13) \times 5$	081	②⑫	□□□□	$(147) \times (9) \times 1$	081
⑮	□□□□	$(192) \times (14) \times 2$	081	②⑬	□□□□	$(118) \times (15) \times 1$	081
⑯	「V□□□」	$134 \times 27 \times 3$	032	②⑭	□□□□	$(88) \times (34) \times 6$	065
⑰	□□□□	$(108) \times 12 \times 2$	019	②⑮	□□□□	$(148) \times 21 \times 3$	059



图11 16層出土木簡(1)

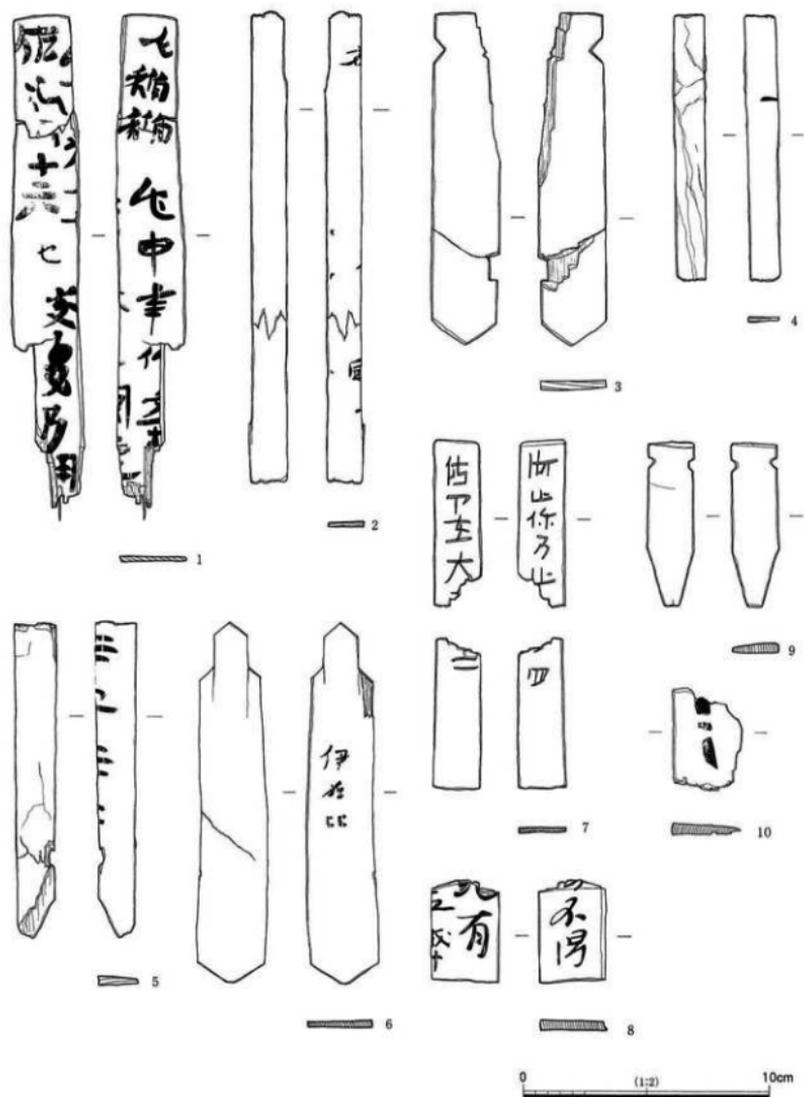


図12 16層出土木簡(2)

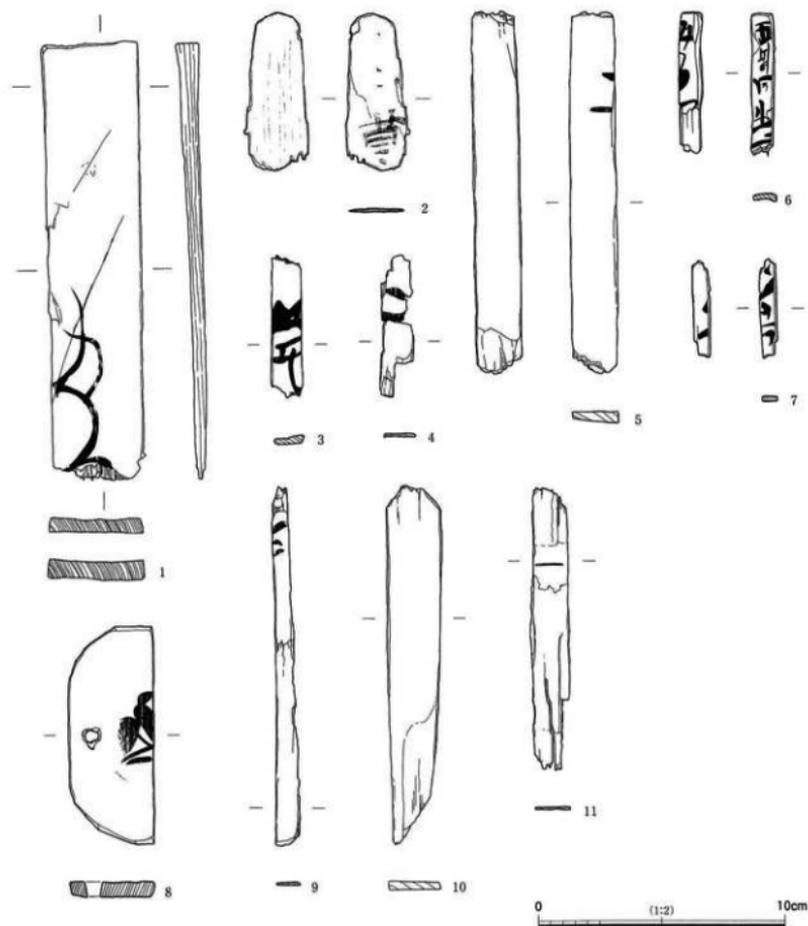


図13 16層出土木簡(3)

(33) 33号木簡(図13-10、写52-4)

(148)・21・3 059 ヒノキ 柁目

上記までの32点の木簡以外に赤外線カメラを通して墨痕が確認できないものの、切り込みをもつ付札状木簡に酷似する木製品が出土しているのでここでは33号木簡として報告しておく。なお、墨書は確認できないが、表裏ともに丁寧に整形されている。したがって、表裏については不明であり、便宜的に図13に示した面を表面とする。

上端は左右の切り込み部分でオレている。左右両側面にはケズリによる整形面が残っている。下端は右側面から右斜め下方向に切断されている。なお、上記のように表裏面ともにきわめて丁寧に整形されており、整形の度合いのみでは表裏に判別はできない。

なお、当該木簡についても出土時点では認知することができず、16層から取り上げた大量の木製品および木片の一つとして取り上げたものを観察する作業過程で抽出したものである。

したがって、本例も27～32号木簡と同様に厳密な意味では出土地点を特定することはできない。

2. 絵馬 (図14、写54-4・5)

絵馬は12・15号木簡 (A群) とともに16層中から出土したものである。ここでは他の木製品とは別に一項を設けて報告する。

絵馬は図14に掲げたように大半を欠損しているが、後肢と胴部の一部、尻尾が明瞭に確認でき、蹄の形態や平城京出土の類例との比較から絵馬であると判断できるものである。

法量は現存で横11.5cm、縦5.7cm、厚さは最大で0.5cmを測る。材は板目のスギである。絵馬全体からすると左下方の4分の1が残るのみである。

材の上端は割れているが、板目の材でありながらきわめて直線的であることなどから、人為的に割られた可能性も高い。下端は原形を留めており、ケズリによる整形面が残っている。左側面は刀子等によるキリオリであり、数度にわたる刃物の痕跡が残るとともに、裏面からの切り込みと表面側からの切り込みの不一致によって段差を生じている。右側面は原形を留めないが、一部に直線的な切断面らしき痕跡が確認できることから、上端と同様に人為的な切断によるものである可能性も残る。なお、表面の加工は非常に丁寧に平滑に仕上げられているのに対し、裏面は未調整である。

なお、法量については平城京二条二坊五坪の藤原麻呂邸の門前の二条大路上に掘られた溝SD5300から出土した絵馬に書かれた絵柄を対応させて、全体を復元すると横20cm、縦14cm前後であったと推定できる。上記の平城京例は長さ27.2cm、幅19.6cmで完存しており、これと比較すると今回の調査で出土した絵馬は小振りであり、おおむね3分の2の法量であったと考えられる。

馬は右向きに描かれる。左後肢を上げており、前肢が残っておらず断言はできないが、平城京例と同様に「側対歩」の歩様を表現したものであると考えられる。また、股間にみられる陰囊の表現から雄馬を描いたものとみられる。

なお、馬は輪郭および細部の絞線を墨で描き、その内側を彩色していたものと考えられる。実際、馬の輪郭の内側は白いままで酸化等による変色の度合いが低く、一部で墨によって描かれた輪郭を超えている部分も認められ、これも彩色が行われた可能性を証左する事実であると判断する (巻頭カラー16)。

ただし、顔料については出土時点においてもほとんど残っておらず、わずかに残る色合いから赤色顔料であった可能性が高いが不明である。

当該絵馬は右向きの馬を表現している点や後肢の上げ方、材の下端を地面とする意匠が全体復元の参考とした平城京SD5300

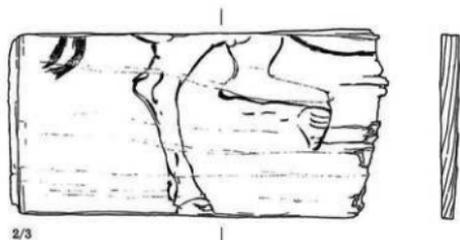


図14 16層出土絵馬

出土の絵馬と酷似している。

平城宮・京跡出土の絵馬を検討した次山淳は雄を右向きに、雌をひとまわり小さく左向きに、雌雄一対に作られていた可能性を示唆している(次山2000)。今回の出土例も過去の出土事例の中にあつて、雄を右向きに大きく表現する点で示唆的であるといえる。

なお、この絵馬は供伴土器の年代観から新しくとも7世紀第4四半期以降に下るものではないことは確実である。

3. 木製品(図15～17、写55～58)

16層からは土器とともに木簡をはじめ大量の木製品がまとまって出土した。法量および樹種については計測、鑑定したものを表8・9に掲げている。なお、出土した木製品のうち、板状を呈するものについては、木簡である可能性を考慮し、文字資料の遺漏を防ぐために、そのすべてを対象として赤外線カメラによって墨痕の確認作業を行っている。

出土した木製品のうち何らかの加工を施した木片数は3000点を越える。全体として用途不明のものが多いが、その大半が図17に掲げたような面取りをした棒状の製品である。また、これらの棒状製品の中でも先端が焼けて炭化しているものが約2000点含まれている。

15-1は側面全身人形代。材はヒノキの柁目板である。顔を右向きに置いた状態で上面となる片面にのみ吊り上った目が刻まれ、口の部分の面取りが行われている。このようにこの人形代には表裏の区別があり、右向きの側面像を意図して作られている。胴部には手足に対応する位置に2箇所の穿孔があるが、本来付随するはずの手足の部品は出土していない。

15-2は木簡様の扁平な角棒に刻みを施したものである。細く削り込まれた上端部には木簡のごとき、切り込みがある。下端部近くの二つの角には、ほぼ一定の間隔で規則的にキザミ目を施している。

15-3は独楽と考えられるものであり、同様に15-8も独楽の可能性が残る木製品である。

15-7はツグ製の横櫛である。両面ともに毛引き線が残り、挽突はかなり大きい。

15-14は男根状木製品であり、下方には括れが削り込まれている。15-15も同様に男根状木製品で陰囊部分までを表現したものである可能性がある木製品である。

15-17は表面が抉り込まれており、作りは稚拙ではあるが船形木製品である可能性が高いものである。

15-19は表裏とも丁寧に整形し、先端を尖らせた板状の木製品であり、斎串の可能性もある。

15-20は上端にホゾ状の切り込み、下端を肥厚させる棒状の木製品であり、工具の柄とも考えられるものである。鎌の柄である可能性も考えたが、上端部のホゾの方向が異なっており、結果的に用途は不明である。

16-27～30は曲物容器の底板あるいは蓋等であり、16-27はまな板として転用されていたためか刃物痕が顕著にみられる。

17-1～3は板状の木製品で上端を頭形に加工している。斎串の可能性も高いが、いずれも下方を欠損しているため、可能性を指摘するに留める。17-13～17は墨痕は認められないが、全体の形状・整形の度合いから一部には木簡が含まれている可能性もある。同様に16-18は上下端をやや細く加工した板状の木製品であり、表裏面ともにきわめて丁寧に整形されており、木簡の可能性を考慮して赤外線カメラでの観察を行っているが文字等は確認できなかった。

17-5・6・8・9は形状から刀などを模した形代である可能性もあるが、刃先などは成形されていない。

17-20～22、30～38は断面が円形の棒状に丁寧に加工し、先端を尖らせている。17-23～29は断面が

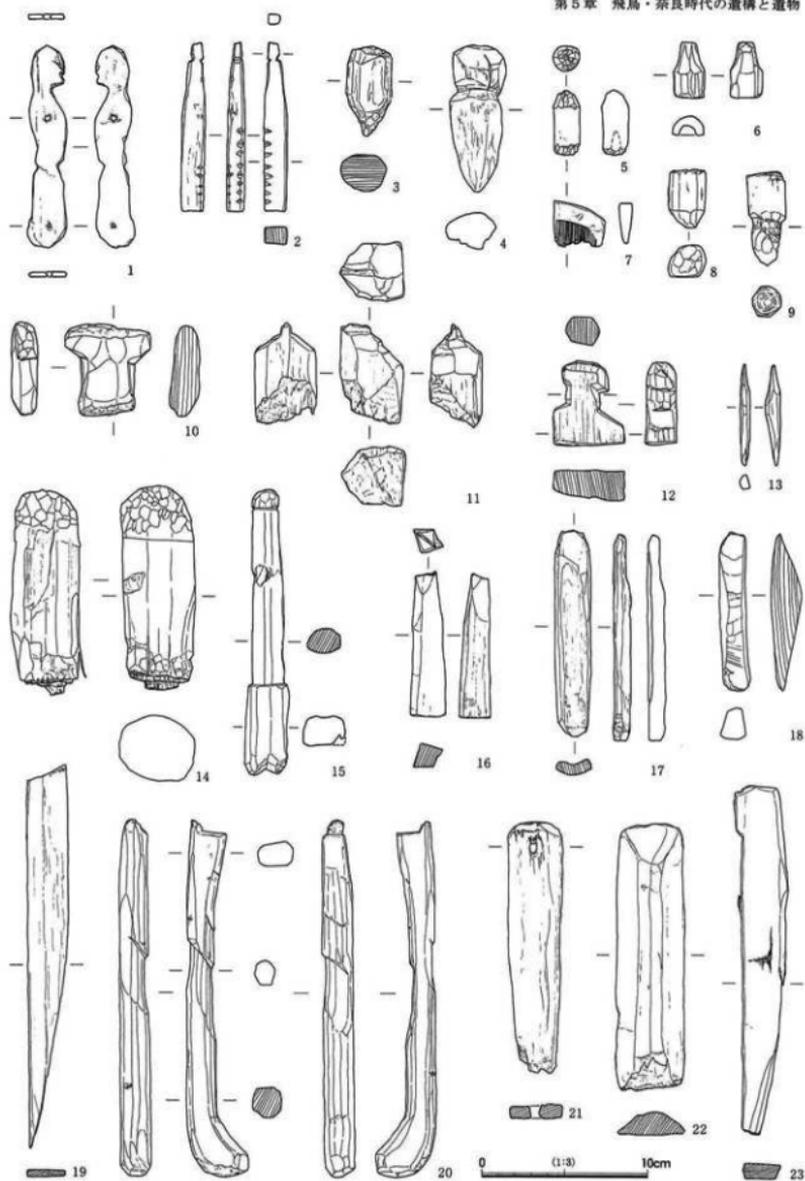


図15 16層出土木製品(1)



图 16 16 層出土木製品 (2)

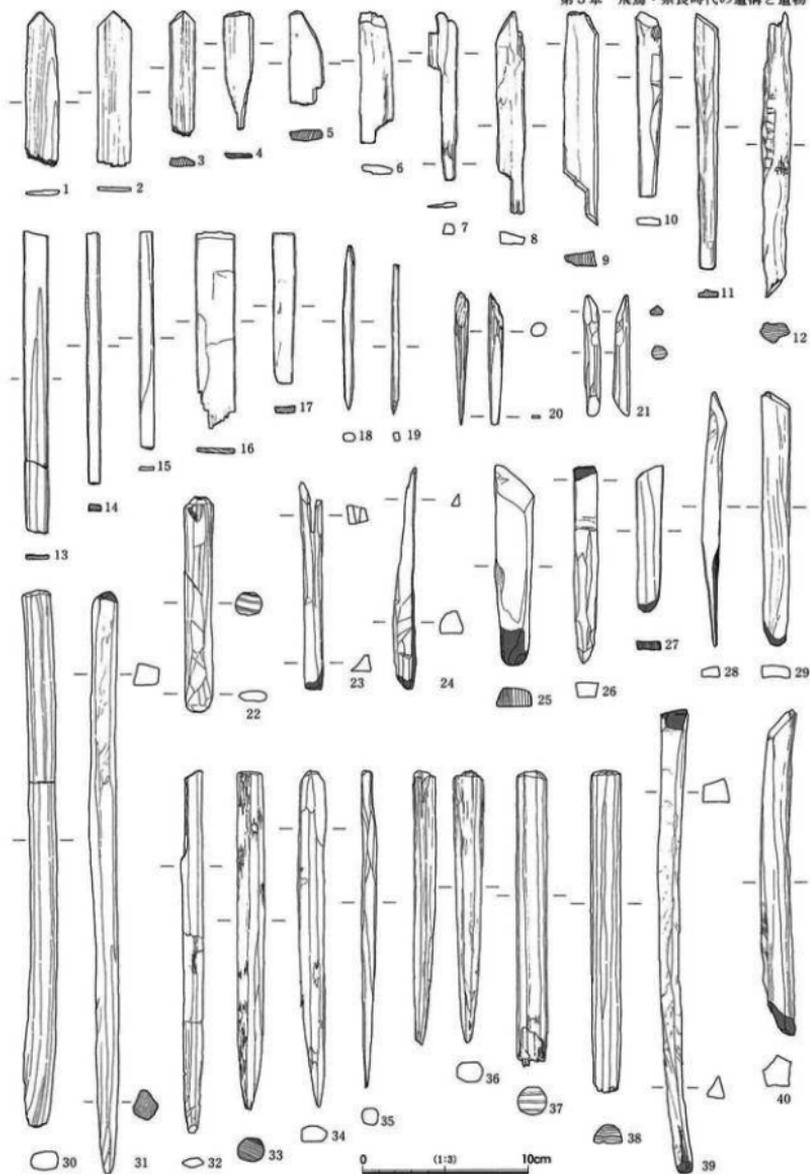


図17 16層出土木製品(3)

三角形もしくは四角形の棒状に加工され、先端が焼けて炭化している。

これらには上端が意図的に二つに割られているものや(17-23)、上端を尖らしたもの(17-24)、上端を斜めに切り落としたもの(17-25～29)などがあり、加工の方法にある程度の規則性が認められる。

この他、蔓をまいた把手状のもの(写58-7)や籠編物の一部が出土している(写58-3)。

4. 土器(図18～23、写59～73)

古代に帰属する14～16層からはすでに報告を行ってきた木簡や木製品とともに多量の土器片が出土している。出土点数は概算破片数で土師器が約1600点、須恵器が約1000点である。

なお、個々の土器の法量については表4～7にまとめているので、以下、出土層別別に全体を概観する形で報告してゆくことにしたい。

(1) 14・15層・792～795出土土師器(図19)

図19には14・15層および土器群792～795から出土した土師器を掲げている。ただし、一部の土器では16層との接合関係のあるものも含まれており、これについては、個々の遺物図に併記するとともに、一覧表にも記している。

出土した土師器には煮炊や貯蔵形態の土器もあるが、数量的には図に掲げた供膳形態の土器が圧倒的に多い。

杯は大半が杯Cで占められているが(1～21・26～29)、一部で杯Dに近いもの(24・25)やミガキや暗文を持たず、底面に指頭圧痕を明瞭に残す杯G系の杯(22)もみられる。

高杯は大きく2種類に分かれ、31～35のような一般的な形態をもつもののほかに、36のように肉厚で回転力を用いたナデ調整を行っているものもある。なお、後者は胎土が白っぽく、焼成が軟質である点で異質である。

そのほか、鉢や皿のほか、手捏ね土器や甕・鍋・甕などもわずかに出土している。

甕は基本的にはハケメをもつ通有のものであるが、南河内産の甕のほか、底部外面をケズリ、内面をハケ調整する近江型の長胴甕が少なくとも3個体は含まれている。

甕は外面をハケ調整する付底系の移動式甕である。

なお、皿では44に示したように明らかに奈良時代を下る皿Aも含まれている。

また、後述するように14層中からは後期難波宮段階の重圓文軒丸瓦も出土しており、出土土器の大半が7世紀代のものであることは動かないが、その堆積時期に関して言えば、その時期幅の下限は奈良時代にまで下降するものであることは確実である。

(2) 16層出土土師器(図18)

16層からプライマリーな状態で出土した土師器は多くないが、同層から出土した土馬とともに図18に掲げている。

杯は杯Cが主流を占める(1～6)。

高杯は一般的な形態をもつもの(7・8)と回転力を用いたナデ調整を行うもの(9・10)に分かれる。後者では杯部に1条の波状文をいれる点が特徴的であり、少なくとも別個体でこれ以外に2点を確認している(写63-3)。なお、この高杯には三方スカシの痕跡が確認でき、直接的には接合しないが、同じロクロ成形による10の脚部にも三方スカシの痕跡が残る。胎土は先に掲げた19-36と共通しており、同系統の高杯といえる。

11は蓋。内面には放射暗文を施す。外面はつまみ貼りつけ後に丁寧な分割ミガキを行う。

皿には2段の放射暗文を施すもの(12)、1段放射暗文のもの(14)、暗文を施さないもの(13)がある。甕はハケメを施す通有のものが多いが、いずれも細片で図示に耐えるものはない。図示した甕(18)は特徴的な口縁形態をもつが、いずれの地域のものかは不明である。

また、これ以外では特徴的な遺物としては大型の鉢(15・16)がある。15の鉢は直径41.6cmを測る深手の大型鉢であり、内面には2段暗文、外面は縦方向のハケ調整の後、部分的にミガキを加えている。16の鉢はさらに大きく直径が49.0cmにもなる。外面は横方向のミガキ調整で底面外面はケズリ調整、内面は非常に密な放射暗文を施している。大型品でありながら、焼成も堅緻で調整も丁寧である。

また、17は残りは悪いものの、わずかに残るタテガミの状況などから土師質の土馬と推定されるものである。欠損した左前肢の断面には直径約3mm、残存で深さ2.7cmの穿孔がある。なお、これ以外にも土馬と考えられる土師質の土製品の破片が、先に報告した795から1点出土している。この土馬も同じように足の断面に直径4mm、残存で深さ2.6cmの穿孔がある(写65-3)。

(3) 14・15層出土須恵器(図22)

図22には14層出土須恵器を上段、15層出土須恵器を下段に掲げている。

14層出土の須恵器を概観すると、杯では杯Gが主流を占めるが、杯Hも少なからずみられる。杯Hでは3などのようにやや大型で古い段階のものも少量含まれる。ただし、層位的に下層になる16層等には同様のものはみられない。

祖形の杯Bとも考えられる高台をもつ大型の杯も出土している(37)。

また、大型の皿(48)やそれに見合うかえりをもつ蓋も出土している(47)。なお、47の蓋は端部に面をもつ点が特徴的である。

そのほか、皿B(38)や壺H(45)など奈良時代に下るものもわずかではあるが含まれており、これは土師器で確認した状況と同様である。

また、33は甕の口縁部であると考えられるものであるが、精製の胎土や色調が異質である。東海系のものである可能性が残るが断定はできない。

このほか、14層からは奈良時代以降のものと考えられる杯Bの破片が数点出土しているが、いずれも細片で図示に耐えるものはない。

(4) 792～795出土須恵器(図21)

基本的には14層出土の須恵器群と様相を異にするところはなく、杯では杯Gが主流を占め、その中に杯Hが若干含まれる。

高杯は低脚の小型品が目立つ(41～43)。

かえりを有する蓋には大型品もあり、口径からみて20-46や22-37などのような高台をもつ大型の杯に伴うものが含まれているものと判断できる。これ以外には、さらに大型の蓋があり(53・54)、56や57などに対応するものと考えられる。

また、55は緻密な胎土をもち、非常に丁寧な成形を行うものであり、外面には浅い沈線が3条巡らされている。外面には火だすきが残る。

そのほか、1点のみであるが、墨書土器が出土している。破片である上に、器表面が荒れており、器種は特定できない。見込み部分に円周に沿う形で「人知」と読める2文字を記し、中心部付近にも2文字前後分の墨痕が残る。中心部の墨痕については、再三にわたって赤外線スキャナーでの読み取りを試みたが判読不能である。

(5) 16層出土須恵器(図20)

杯は杯Gが主流を占め、杯Hはその2分の1に満たない。杯Hには猿投産のものも含まれる(1)。

また、杯Bの祖形ともいわれる高台をもつ大型の杯が数点出土している(45・46)。45の高台には三方に小円孔が穿たれており、47も高台部分を残すのみであるが、同様の穿孔があり、同形態の杯である可能性が高い。

なお、この大型杯については口径がこれに見合うかえりをもつ大型の蓋も出土しており、これに伴うものとみて大過ないものと判断する。

このほか、さらに大型の蓋が出土しており、54および55はかえりをもつものであり、56はかえりをもたない大型の蓋でつまみの剥離痕跡がある。

なお、最も残りのよい杯Gの蓋の口径をみると、16層出土のものは平均7.89cmを測り、14層出土のものはやや大きく平均8.52cmを測る。点数も少なく、単純には割り切れないが、身や杯Hにも微妙な差異が認められ、時期差を反映したものである可能性も考慮しておきたい。

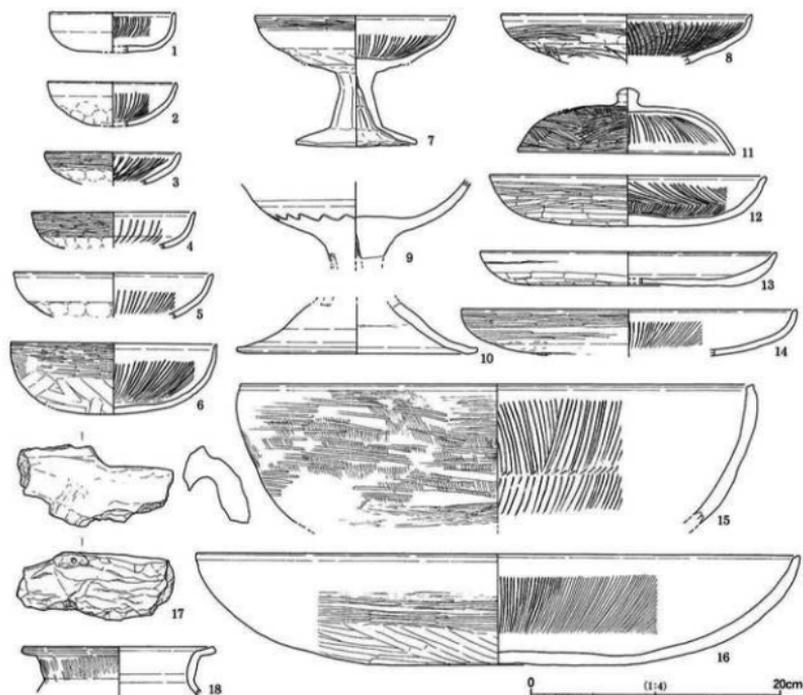


図18 16層出土土師器・土馬

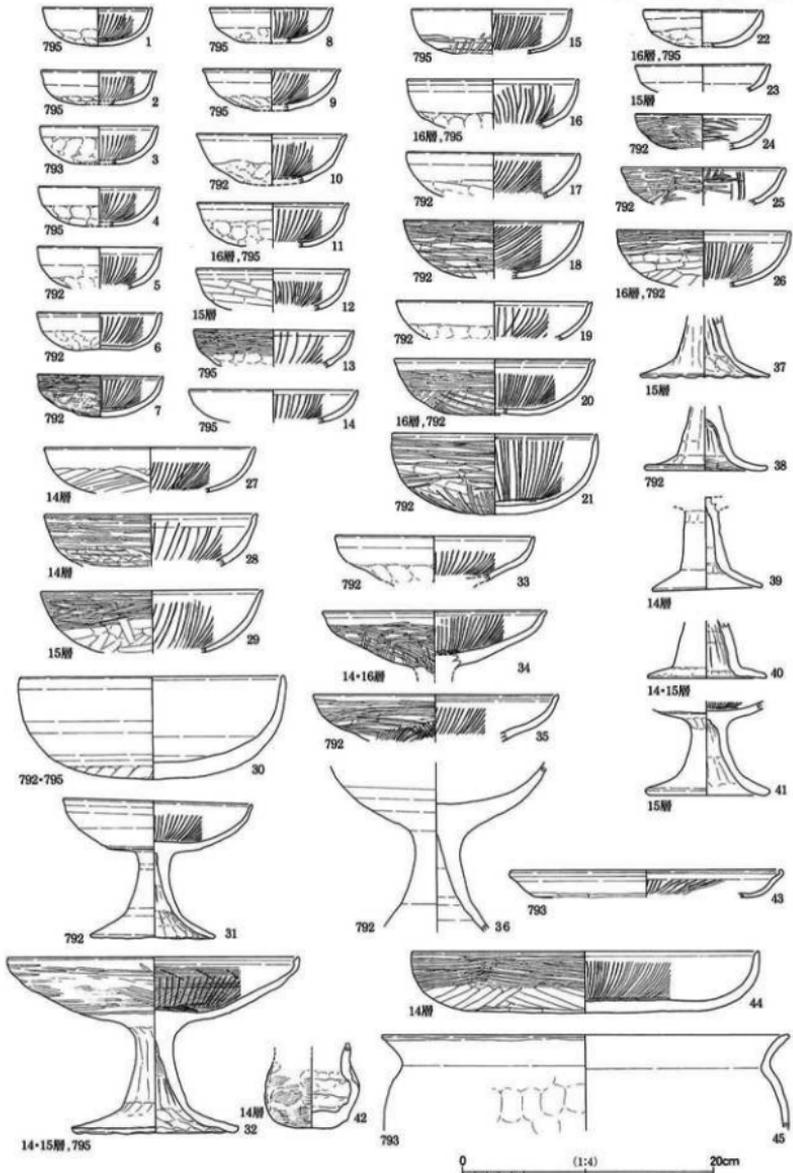


図19 14・15層・792～795出土土師器

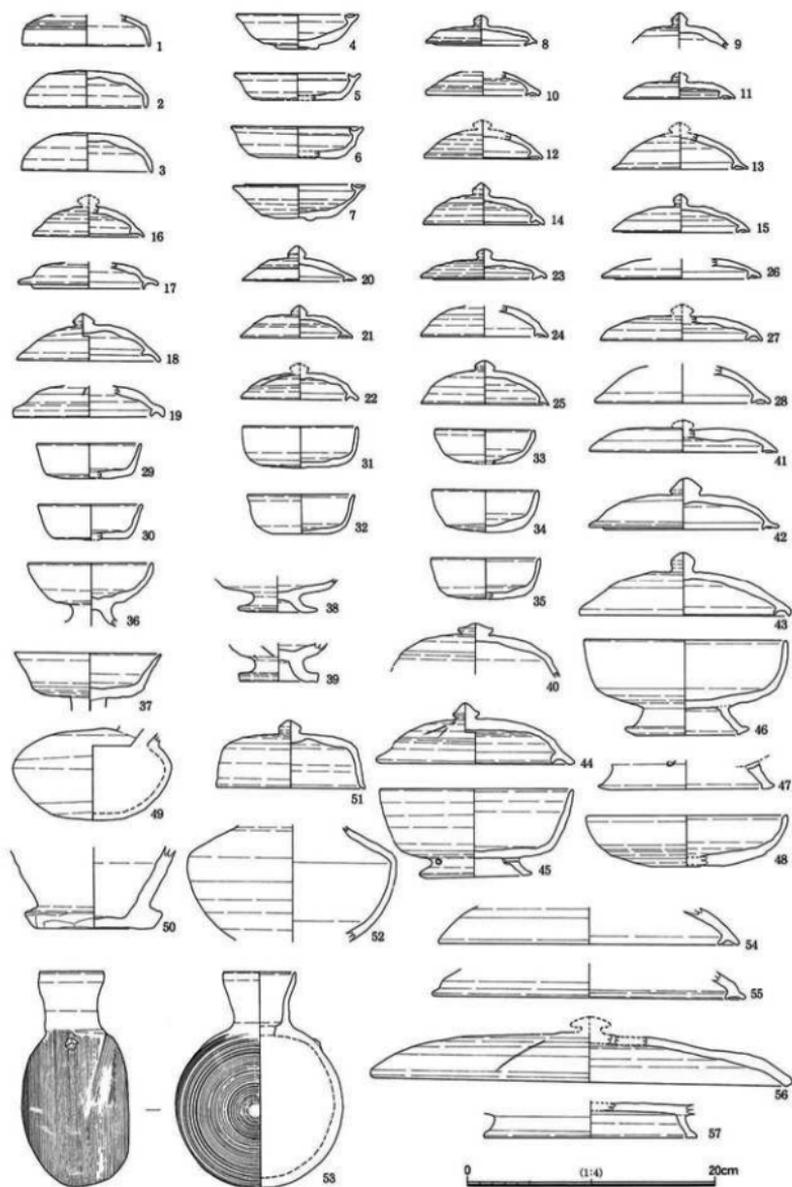


图20 16层出土须惠器

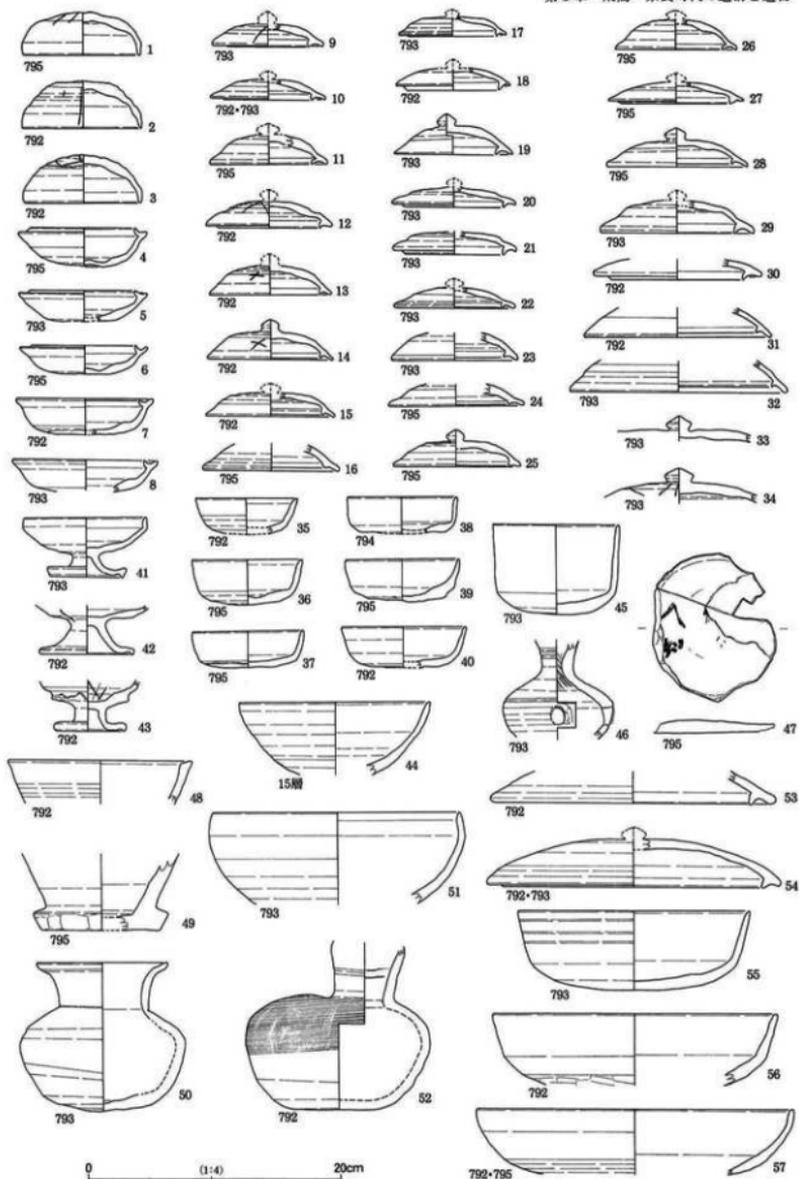


図 21 792 ~ 795 出土須恵器

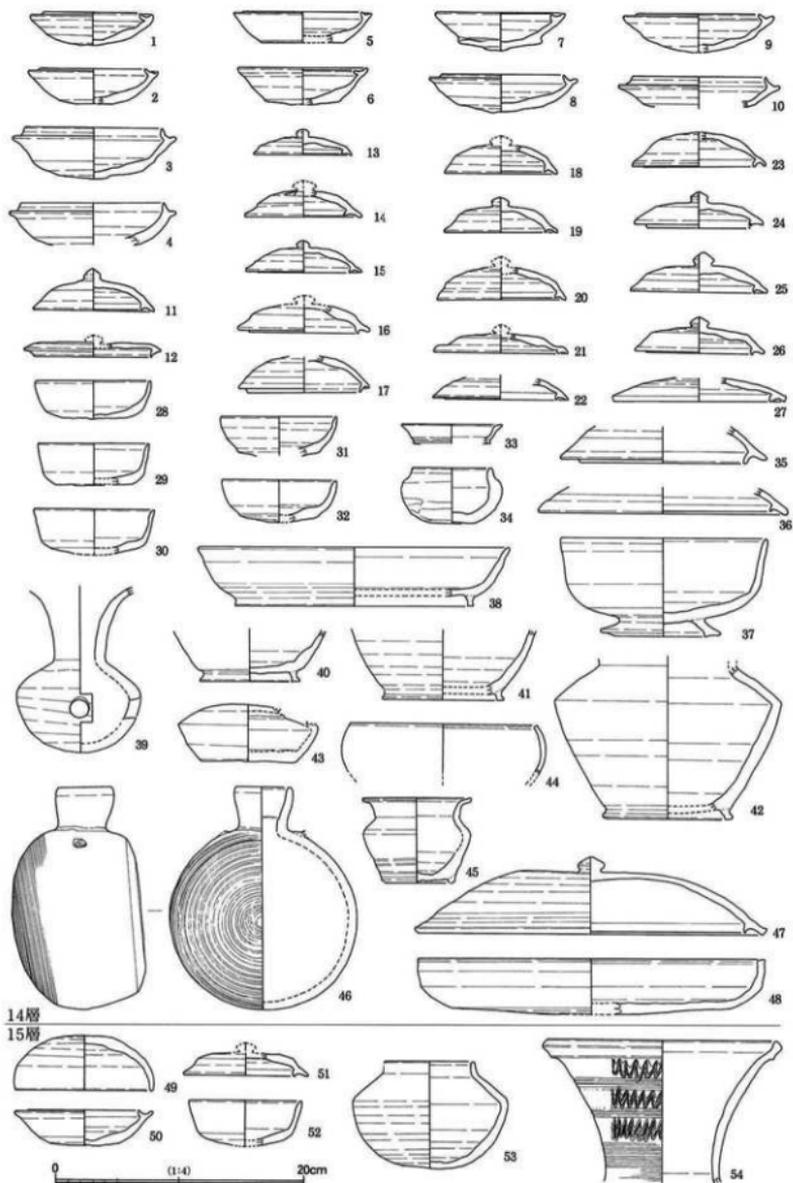


图22 14·15層出土須惠器

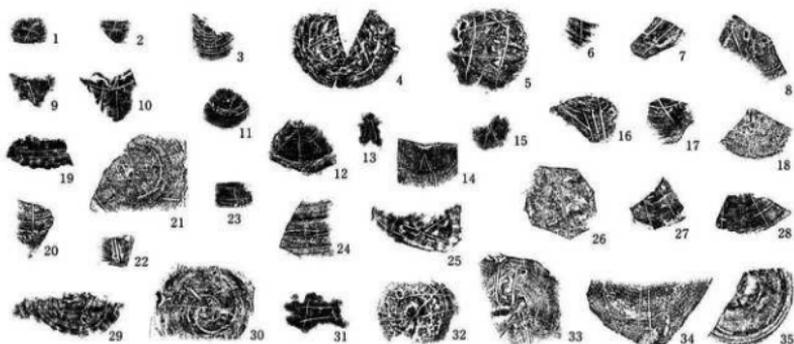


図23 須恵器ヘラ記号(1:4)

(6) 須恵器のヘラ記号 (図23)

須恵器のヘラ記号については、14～16層出土のものを一括して整理している。ヘラ記号の分類とそれぞれの集計については表3に示し、比較的残りがよく、ほぼ全容を知ることができるものの拓本を図23に掲げている。

ヘラ記号が確認できる須恵器は破片を含めて67点である。ほぼ全容が判明するものを参考に、表3に示したようにA～Jの10種類に分類している。ただし、細片の場合にはいずれか決しがたい場合も多く、結果的に半数弱が判別不能である。

器種別にみると杯類が圧倒的に多く、その内訳は杯G蓋が10点、杯H蓋5点、杯H身4点、杯G身2点の順である。ヘラ記号の種類別ではE類が8点と多いが、A類が7点、B・H・I類がそれぞれ5点で点数にさほど大きな多寡は認められない。

なお、ヘラ記号をもつ須恵器杯G蓋のうち、A類のヘラ記号をもつ21-13と21-14はヘラ記号の位置や大きさ、筆順までもが一致しており、土器自体の形態的特徴が共通することと相まって、同時に当地に供給された須恵器の一群である可能性を示唆している。

また、これと同様に見込み部分に複雑なヘラ記号を施すという特徴をもつ小型高杯(21-43)も、ヘラ記号はもとより、焼成や色調までもが酷似する別の同形の小型高杯が出土しており、これについては同時に焼成されて供給され、結果的に同時に埋没した可能性が考えられる点で重要な位置を占めている。

点数が少ない上に消費地での状況であり、顕著な特徴は見出せなかったが、基礎データとして提示しておく。

表3 須恵器ヘラ記号一覧

分類	種類	点数	合計
A X	杯G蓋	4	7
	杯H蓋	1	
	杯H身	1	
	不明	1	
B //	高杯	1	5
	杯H蓋	1	
	杯H身	2	
	不明	1	
C #	杯H蓋	1	1
D ///	杯H蓋	1	3
	杯H身	1	
	不明	1	
E /	杯H蓋	1	8
	杯G蓋	1	
	杯G身	1	
	不明	5	
F ^	杯G蓋	1	1
G T	杯G蓋	1	2
	杯G身	1	
H ^	杯G蓋	3	5
	不明	2	
I //	碗	1	5
	高杯	1	
	不明	3	
J ///	杯G身	1	2
	杯H蓋	1	
(不明)	判別不能	22	28
	未分類	6	
総合計			67

表4 古代土器一覽(1)

館藏番号	写真番号	寸法	層位	遺構名	器種	口径	最大径	器高	長さ	幅	厚さ	高さ	拓本	実測番号
18	1	62	87B	16層		土師器FC	10.2							K2216
18	2	62	107B	16層		土師器FC	10.4							K2224
18	3		7B	16層		土師器FC	10.8							K2256
18	4	62	67B	16層		土師器FC	13.0							K2240
18	5	62	57B	16層		土師器FC	16.0							K2238
18	6	62	77B	16層		土師器FC	16.6							K2300
18	7	63	47B	16層		土師器高杯	16.3							K2217
18	8		7B	16層		土師器高杯	20.4							K2231
18	9	63	37B	16層		土師器高杯								K2236
18	10		7B	16層		土師器高杯		19.6						K2218
18	11	62	97B	16層		土師器蓋	17.6							K2220
18	12	64	37B	16層		土師器皿A	22.7	23.0						K2212
18	13	64	27B	16層		土師器皿A	24.0							K2258
18	14	64	17B	16層		土師器皿A	27.0							K2230
18	15	63	67B	16層	793	土師器鉢	41.6							K2233
18	16	64	47B	16層	792-793	土師器鉢	45.0							K2224
18	17	65	27B	16層		土馬				(12.5)	(5.3)	(6.6)		K2208
18	18	63	17B	16層		土師器壺	15.2	15.7						K2302
19	1	62	27B		795	須恵器FC	8.9							K2219
19	2	59	57B		793	土師器FC	9.2							K2222
19	3	62	17B		795	須恵器FC	9.6							K2215
19	4	62	37B		795	土師器FC	9.8							K2250
19	5	60	37B		792	土師器FC	16.0							K2242
19	6	60	27B		792	土師器FC	16.0							K2214
19	7	60	17B		792	土師器FC	16.2							K2213
19	8	62	47B		795	土師器FC	16.0							K2303
19	9	60	47B		792	土師器FC	13.2							K2249
19	10	60	87B		792	土師器FC	11.5							K2248
19	11	61	17B	16層	795	土師器FC	12.3							K2259
19	12	59	37B	15層		土師器FC	12.3							K2255
19	13		7B		795	土師器FC	12.9							K2246
19	14		7B		792	土師器FC	13.6							K2312
19	15		7B		795	土師器FC	13.0							K2310
19	16	61	27B	16層	795	土師器FC	13.8							K2301
19	17		7B		792	土師器FC	13.8							K2293
19	18	60	57B		792	土師器FC	14.6							K2254
19	19		7B		792	土師器FC	15.4							K2307
19	20	60	97B	16層		土師器FC	16.2							K2239
19	21	60	77B		792	土師器FC	16.4							K2298
19	22	60	107B	16層	795	土師器FC	9.6							K2243
19	23	59	27B	15層		土師器FC	10.9							K2247
19	24	60	67B		792	土師器FC	11.0							K2252
19	25		7B		792	土師器FC	13.2	13.4						K2304
19	26		7B	16層	792	土師器FC	14.0							K2292
19	27		7B	14層		土師器FC	17.0							K2308
19	28	59	17B	14層		土師器FC	17.2							K2245
19	29		7B	15層		土師器FC	18.0							K2309
19	30	61	37B		792-795	土師器鉢	21.2							K2294
19	31	63	57B		792	土師器高杯	15.2	15.3						K2260
19	32	61	47B	14・16層	795	土師器高杯	23.4							K2225
19	33		7B		792	土師器高杯	16.1							K2253
19	34		7B	14・15層		土師器高杯	18.2	18.3						K2305
19	35		7B	16層	792	土師器高杯	20.0							K2232
19	36		7B		792	土師器高杯								K2221
19	37		7B	15層		土師器高杯		10.5						K2227
19	38		7B		792	土師器高杯								K2261
19	39		7B	14層	793	土師器高杯	9.0							K2297
19	40		7B	14・15層		土師器高杯		9.7						K2236
19	41	59	77B	15層		土師器高杯								K2244
19	42	59	97B	14層		土師器壺								K2214
19	43	59	67B		793	土師器皿A	22.0							K2306
19	44	59	87B	14層		土師器皿A	28.2	28.5						K2213
19	45	59	47B		793	土師器鉢	32.8							K2299
20	1		7B	16層		須恵器杯出蓋	(10.2)							K2256

表5 古代土器一覽(2)

図版番号	写真番号	シラ	層位	遺構名	器種	口徑	最大径	器高	長さ	幅	厚さ	高さ	拓本	実測番号
20	2	71	17B	16層	須恵器杯H蓋	9.7		2.9						K法 22
20	3		7B	16層	須恵器杯H蓋	10.6		3.1						K法 21
20	4		7B	16層	須恵器杯H身	7.6	9.8	2.8						K法 19
20	5		7B	16層	須恵器杯H身	8.4	10.2	2.2						K法 66
20	6		7B	16層	須恵器杯H身	8.5	10.6	2.6						K法 23
20	7	71	47B	16層	須恵器杯H身	8.7	10.7	2.7						K法 42
20	8	70	17B	16層	須恵器杯G蓋	7.0	9.0	2.4						K法 62
20	9		7B	16層	須恵器杯G蓋			7.8 (2.9)						K法 35
20	10		7B	16層	須恵器杯G蓋	7.0	9.2	(1.9)						K法 39
20	11		7B	16層	須恵器杯G蓋	6.7	9.0	(2.1)						K法 36
20	12		7B	16層	須恵器杯G蓋	7.2	9.5	(2.1)						K法 17
20	13		7B	16層	須恵器杯G蓋	8.5	11.0	(2.9)						K法 189
20	14		7B	16層	須恵器杯G蓋	7.8	9.8	3.4						K法 40
20	15		7B	16層	須恵器杯G蓋	9.2	11.2	3.1						K法 58
20	16		7B	16層	須恵器杯G蓋	6.7	9.0	(2.5)						K法 37
20	17		7B	16層	須恵器杯G蓋	9.0	11.4	(2.1)						K法 177
20	18	70	37B	14・16層	793・795 須恵器杯G蓋	8.6	11.6	3.8						K法 51
20	19		7B	16層	須恵器杯G蓋	10.1	12.1	(2.5)						K法 24
20	20	70	67B	16層	須恵器杯G蓋	7.2	9.2	2.8						K法 34
20	21		7B	16層	須恵器杯G蓋	6.5	8.6	2.6						K法 16
20	22	70	47B	16層	須恵器杯G蓋	7.6	9.9	(2.1)				23-29		K法 38
20	23		7B	16層	須恵器杯G蓋	7.9	10.2	2.4						K法 43
20	24		7B	16層	須恵器杯G蓋	8.0	10.3	(2.5)						K法 48
20	25		7B		795 須恵器杯G蓋	8.6	10.3	3.6						K法 68
20	26		7B	16層	795 須恵器杯G蓋	10.9	13.0	(1.6)						K法 90
20	27		7B	16層	須恵器杯G蓋	10.4	13.2	(2.0)						K法 41
20	28		7B	14・16層	須恵器杯G蓋	11.2	14.3	(3.0)						K法 89
20	29	70	87B	16層	795 須恵器杯G身	8.4		2.8						K法 86
20	30	70	97B	16層	須恵器杯G身	8.4		2.9						K法 63
20	31	66	77B	14層	須恵器杯G身	9.2		3.4						K法 59
20	32	70	107B	16層	須恵器杯G身	8.6		3.2						K法 60
20	33		7B	16層	須恵器杯G身	8.1		2.8						K法 65
20	34	70	77B	16層	須恵器杯G身	8.6		3.5						K法 11
20	35		7B	16層	須恵器杯G身	8.7		3.4						K法 61
20	36	71	67B	16層	須恵器高杯	10.0		(4.7)						K法 108
20	37		7B	16層	須恵器高杯	11.9		(4.7)						K法 134
20	38		7B	16層	須恵器高杯		9.6	(2.7)						K法 121
20	39		7B	16層	須恵器高杯			(3.1)						K法 135
20	40		7B	16層	795 須恵器高杯蓋			(4.2)				23-9		K法 109
20	41		7B	16層	須恵器杯B蓋	13.0	15.4	(1.9)						K法 149
20	42	72	27B	14・16層	須恵器杯B蓋	12.9	15.5	4.1						K法 70
20	43	72	17B	14・16層	須恵器杯B蓋	14.7	18.1	5.1						K法 52
20	44	72	37B	16層	須恵器杯B蓋	12.5	16.1	5.0						K法 45
20	45	72	57B	14・16層	792・793 須恵器杯B身	15.6		7.3						K法 111
20	46	72	47B	14・16層	須恵器杯B身	16.3	16.6	7.8						K法 83
20	47		7B	16層	須恵器杯B身			(2.5)						K法 138
20	48		7B	16層	須恵器鉢	16.2		4.1						K法 155
20	49	71	57B	16層	須恵器平皿		12.7	(7.0)						K法 98
20	50		7B	16層	須恵器ナリ鉢			(6.3)						K法 128
20	51	71	87B	16層	須恵器壺蓋	11.9	12.0	5.5						K法 44
20	52		7B	16層	須恵器壺		16.8	(9.3)						K法 170
20	53	73	57B	16層	須恵器提綱	5.9	13.5	17.5						K法 103
20	54		7B	16層	須恵器大型蓋	21.0	24.2	(3.0)						K法 150
20	55		7B	16層	須恵器大型蓋	25.0	25.5	(2.2)						K法 196
20	56	72	67B	14・16層	792・793 須恵器大型蓋	33.2	34.4	(4.1)						K法 288
20	57		7B	14・16層	792 須恵器皿?			(1.9)						K法 188
21	1	71	27B	16層	795 須恵器杯H蓋	9.2		3.5					23-33	K法 157
21	2	69	17B		792 須恵器杯H蓋	9.6		3.9						K法 1
21	3	69	27B		792 須恵器杯H蓋	9.3		3.9					23-6	K法 2
21	4	69	47B	14層	795 須恵器杯H身	8.4	10.3	3.1						K法 4
21	5		7B		793 須恵器杯H身	8.5	10.4	(2.5)						K法 101
21	6	71	37B	16層	795 須恵器杯H身	8.4	10.4	2.4						K法 87
21	7	69	57B		792 須恵器杯H身	8.6	10.8	2.9					23-4	K法 3
21	8		7B		793 須恵器杯H身	9.6	11.6	(2.6)						K法 171

表6 古代土器一覽(3)

図版番号	写真番号	1/2	層位	遺蹟名	器種	口径	最大径	器高	長さ	幅	厚さ	高さ	拓本	実測番号
21	9	68	1		793 須恵器杯G蓋	6.4	9.0	(1.8)						K主 5
21	10				792-793 須恵器杯G蓋	7.1	9.3	(1.7)						K主 92
21	11				795 須恵器杯G蓋	7.1	(9.4)	(2.3)						K主 181
21	12				792 須恵器杯G蓋	8.1	10.2	(2.2)					23-12	K主 7
21	13	68	2		792 須恵器杯G蓋	8.0	9.8	(2.4)						K主 8
21	14	68	3		792 須恵器杯G蓋	8.0	10.1	3.2					23-1	K主 9
21	15				792 須恵器杯G蓋	8.4	10.4	(1.9)						K主 137
21	16			14層	須恵器杯G蓋	8.6	10.9	(2.1)						K主 198
21	17				793 須恵器杯G蓋	7.1	8.7	(1.6)						K主 192
21	18				792 須恵器杯G蓋	7.4	9.3	(1.8)						K主 159
21	19	68	5		793 須恵器杯G蓋	7.0	9.6	3.2						K主 6
21	20				793 須恵器杯G蓋	8.0	10.0	(1.7)						K主 88
21	21				793 須恵器杯G蓋	7.9	10.0	(1.8)						K主 94
21	22				793 須恵器杯G蓋	9.3	9.8	(1.7)						K主 202
21	23				796 須恵器杯G蓋	7.9	10.2	(2.2)						K主 197
21	24				795 須恵器杯G蓋	8.6	11.0	(1.8)						K主 140
21	25	68	4		795 須恵器杯G蓋	9.6	10.3	3.0					23-15	K主 54
21	26				795 須恵器杯G蓋	7.5	9.8	(2.4)						K主 55
21	27				795 須恵器杯G蓋	8.8	11.0	(1.8)						K主 194
21	28	70	5		795 須恵器杯G蓋	8.0	11.4	3.2					23-23	K主 53
21	29				793 須恵器杯G蓋	8.2	12.2	(2.6)						K主 203
21	30				792 須恵器杯G蓋	10.7	13.6	(1.7)						K主 158
21	31				792 須恵器杯G蓋	12.6	15.2	(2.4)						K主 195
21	32				793 須恵器杯G蓋	15.0	17.4	(2.6)						K主 167
21	33				793 須恵器杯G蓋	(2.1)							23-13	K主 206
21	34				793 須恵器杯G蓋	(2.9)							23-34	K主 204
21	35				792 須恵器杯G身	8.1		2.9						K主 10
21	36	68	7		795 須恵器杯G身	8.8		3.7					23-11	K主 12
21	37	68	6		795 須恵器杯G身	8.9		2.9						K主 106
21	38				794 須恵器杯G身	8.9	9.0	(2.9)						K主 200
21	39	69	3		795 須恵器杯G身	9.2		3.5						K主 85
21	40				792 須恵器杯G身	10.0		3.3						K主 148
21	41	71	7		793 須恵器高杯	9.8	10.1	4.9						K主 120
21	42	68	9		792 須恵器高杯	(9.6)		(4.0)						K主 114
21	43	68	8		792 須恵器高杯	(4.0)		(4.0)					23-25	K主 166
21	44	73	4		793 須恵器高杯	15.3		(6.0)						K主 132
21	45	69	6		793 須恵器碗	10.1		7.4					23-31	K主 82
21	46				793 須恵器鉢		8.9	(7.9)						K主 113
21	47	66	1		795 須恵器? (黒書)		(9.7)							K主 313
21	48				792 須恵器すり鉢	14.6		(3.5)						K主 175
21	49				795 須恵器すり鉢		12.6	(6.2)						K主 122
21	50	69	7		793 須恵器壺	10.6	13.4	12.1						K主 211
21	51				793 須恵器鉢	20.0		(7.5)						K主 129
21	52	69	8		792 須恵器平皿			(13.2)						K主 15
21	53				792 須恵器大型壺	22.0	23.3	(2.3)						K主 176
21	54				792-793 須恵器大型壺	20.8	23.8	(3.6)						K主 147
21	55	67	1		14層 須恵器鉢	18.7		6.4						K主 105
21	56				792 須恵器鉢	22.8		(5.6)						K主 164
21	57				795-792 須恵器鉢	25.6		(5.3)						K主 142
22	1	66	8		14層 須恵器杯H身	7.7	9.9	2.7					23-19	K主 73
22	2				14層 須恵器杯H身	8.5	10.5	2.9						K主 102
22	3	66	10		14層 須恵器杯H身	10.7	12.9	4.2						K主 84
22	4				14層 須恵器杯H身	11.4	13.4	(3.4)						K主 146
22	5				14層 須恵器杯H身	9.5	11.1	3.0						K主 133
22	6				14層 須恵器杯H身	8.2	10.4	3.0					23-27	K主 118
22	7				14層 須恵器杯H身	8.3	10.3	3.1						K主 164
22	8	66	9		14層 須恵器杯H身	9.8	11.9	3.0						K主 71
22	9				14層 須恵器杯H身	10.0	12.2	3.2						K主 112
22	10				14層 須恵器杯H身	10.6	13.0	(2.4)						K主 199
22	11	66	1		795 須恵器杯G蓋	7.7	9.7	3.4						K主 80
22	12				14層 須恵器杯G蓋	9.4	11.0	(1.2)						K主 165
22	13	66	2		14層 須恵器杯G蓋	6.3	7.8	2.1						K主 97
22	14	66	4		14層 須恵器杯G蓋	6.5	9.4	(2.2)					23-14	K主 67
22	15				14層 須恵器杯G蓋	7.4	9.4	2.6						K主 156

表7 古代土器一覧(4)

図録番号	写真番号	形状	層位	遺構名	器種	口径	最大径	器高	長さ	幅	厚さ	高さ	拓本	実測番号
22-16		7B	14層		須恵器杯G蓋	8.7	10.6	(2.2)						K.3126
22-17		7B	14層		須恵器杯G蓋	5.0	10.5	(2.9)						K.3168
22-18		7B	14層		須恵器杯G蓋	7.0	9.0	(2.3)						K.3136
22-19		7B	14層		須恵器杯G蓋	7.3	9.1	2.8						K.3152
22-20		7B	14層		須恵器杯G蓋	8.6	10.4	(2.6)						K.3115
22-21		7B	14層		須恵器杯G蓋	9.3	10.8	(1.6)						K.3169
22-22		7B	14層		須恵器杯G蓋	9.9	10.9	(1.7)						K.3160
22-23		7B	14層		須恵器杯G蓋	9.0	10.8	(2.8)						K.3205
22-24		7B	14層		須恵器杯G蓋	(8.4)	10.3	(2.8)						K.3174
22-25	66	57B	14層		須恵器杯G蓋	9.1	11.0	3.3						K.3169
22-26	66	37B	14層		須恵器杯G蓋	8.5	10.5	3.1						K.3174
22-27		7B	14層		須恵器杯G蓋	11.4	13.8	(1.9)						K.3143
22-28	66	67B	14層		須恵器杯G身	9.2		3.1						K.3119
22-29		7B	14層		須恵器杯G身	8.8		3.4						K.3123
22-30		7B	14層		須恵器杯G身	9.6		(3.6)						K.3153
22-31		7B	14層		須恵器杯G身	9.2	9.4	(3.2)						K.3161
22-32		7B	14層		須恵器杯G身	9.1		3.5						K.3151
22-33		7B	14層		須恵器鉢	(8.2)		(1.6)						K.3157
22-34	67	47B	14層		須恵器短頸壺	6.2		4.4						K.3107
22-35		7B	14層		須恵器杯B蓋?	13.2	16.8	(3.0)						K.3141
22-36		7B	14層		須恵器杯B蓋?	17.4	20.0	(2.1)						K.3183
22-37	67	27B	14層		須恵器杯B身	16.6		8.0						K.3196
22-38		7B	14層		須恵器皿B	26.3		4.9						K.3226
22-39	67	57B	14層		須恵器鉢		(10.0)							K.3100
22-40		7B	14層		須恵器蓋			(4.1)						K.3127
22-41		7B	14層		須恵器蓋		(14.0)	(5.7)						K.3116
22-42		7B	14層		須恵器蓋			(12.9)						K.3125
22-43	67	77B	14層		須恵器平瓶		11.2	4.6						K.3228
22-44		7B	14層		須恵器鉢	15.2		(4.0)						K.3172
22-45	67	37B	13-14層		須恵器鉢B	8.9		6.9						K.3229
22-46	67	67B	14層		須恵器碗板	4.3		18.1						K.3199
22-47	67	87B	14-16層	792-795	須恵器大型蓋	27.9		6.3						K.3207
22-48		7B	14-16層	792-795	須恵器皿	28.0		4.5						K.3191
22-49	73	37B	15層		須恵器杯H蓋	11.1		4.5						K.3179
22-50		7B	15層		須恵器杯H身	9.0	11.2	2.9						K.3176
22-51		7B	15層		須恵器杯G蓋	7.7	10.0	(1.8)						K.3182
22-52		7B	15層		須恵器杯G身	9.1		(3.6)						K.3175
22-53	73	27B	15層		須恵器短頸壺	7.2	12.6	8.7						K.3104
22-54		7B	15層		須恵器蓋	18.5	19.4	(10.5)						K.3162
	63	27B	16層		土師器高杯	18.9		(6.4)						K.3295
	65	37B		795	土師				(7.3)	(2.7)	(4.8)			
	70	27B	16層		須恵器杯G蓋	6.8	9.3	(1.6)						K.3130
	71	97B	14-16層	793	須恵器平瓶		16.5	(4.8)						K.3241
	73	17B	15層		須恵器杯G蓋	7.8	10.2	(2.6)						K.3177
23-3		7B		795	須恵器杯G身							23-3		K.3284
23-6		7B		795	須恵器杯H蓋	8.8	8.9	(2.4)				23-6		K.3280
23-7		7B	16層		須恵器杯H?							23-7		K.3289
23-8		7B		795	須恵器杯H?							23-8		K.3209
23-9		7B	16層		須恵器杯H身	8.8	10.9	2.7				23-10		K.3120
23-16		7B		795	須恵器杯H?							23-16		K.3283
23-17		7B		795	須恵器不明							23-17		K.3285
23-18		7B		795	須恵器杯H蓋							23-18		K.3210
23-20		7B	14層		須恵器杯H身							23-20		K.3261
23-21		7B		793	須恵器杯H?							23-21		K.3277
23-22		7B	16層		須恵器杯G蓋							23-22		K.3270
23-24		7B		792	須恵器皿?							23-24		K.3273
23-26		7B	14層		須恵器皿							23-26		K.3264
23-28		7B		792	須恵器不明							23-28		K.3274
23-30		7B		795	須恵器杯H蓋							23-30		K.3282
23-32		7B		793	須恵器杯H身							23-32		K.3276
23-35		7B	14~17層		須恵器杯H身							23-35		K.3272

表8 古代木製品一覧(1)

図版番号	写真番号	H×W	厚	位	種別	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	撮影写真	発掘番号
11	11 47	1	7B	16層	1号木簡	ヒノキ	10.4	2.3	0.5		Kf2 1
11	2 47	2	7B	16層	2号木簡	ヒノキ	10.7	1.7	0.4	写51-5	Kf2 2
11	3 47	4	7B	16層	4号木簡	ヒノキ	9.6	2.0	0.5	写53-1	Kf2 3
11	4 47	5	7B	16層	5号木簡	ヒノキ	8.6	1.9	0.3	写52-6	Kf2 5
11	5 47	3	7B	16層	3号木簡	ヒノキ	5.9	1.6	0.2		Kf2 4
11	6 47	6	7B	16層	6号木簡	スギ	6.4	2.3	0.4	写53-2	Kf2 6
11	7 47	7	7B	16層	7号木簡	ヒノキ	6.6	2.2	0.4		Kf2 7
11	8 49	1	7B	16層	10号木簡	ヒノキ	17.3	1.2	0.3		Kf2 10
11	9 48	1	7B	16層	8号木簡	ヒノキ	12.5	3.0	0.4	写53-3	Kf2 8
11	10 50	1	7B	16層	12号木簡	ヒノキ	12.5	1.6	0.3	写54-3	Kf2 12
11	11 48	2	7B	16層	9号木簡	ヒノキ	16.3	2.8	0.4	写53-6	Kf2 9
11	12 48	3	7B	16層	13号木簡	ヒノキ	9.0	1.3	0.5		Kf2 13
12	1 49	5	7B	16層	11号木簡	ヒノキ	20.2	2.7	0.3		Kf2 11
12	2 50	7	7B	16層	14号木簡	ヒノキ	19.2	1.4	0.2		Kf2 14
12	3 51	3	7B	16層	15号木簡	スギ	13.4	2.7	0.3		Kf2 15
12	4 50	2	7B	16層	16号木簡	ヒノキ	10.8	1.2	0.2		Kf2 16
12	5 49	2	7B	16層	17号木簡	ヒノキ	12.6	1.6	0.4		Kf2 17
12	6 51	1	7B	16層	18号木簡	スギ	14.6	2.8	0.3	写54-1	Kf2 18
12	7 52	3	7B	16層	19号木簡	ヒノキ	6.7+6.1	1.9	0.2	写53-4	Kf2 19
12	8 48	5	7B	16層	21号木簡	ヒノキ	4.1	2.7	0.4	写54-2	Kf2 21
12	9 48	4	7B	16層	20号木簡	ヒノキ	6.6	1.9	0.3		Kf2 20
12	10 49	6	7B	16層	24号木簡	ヒノキ	4.2	2.8	0.5		Kf2 24
13	1 52	1	7B	16層	23号木簡	ヒノキ	17.8	4.0	0.6		Kf2 23
13	2 50	4	7B	16層	22号木簡	ヒノキ	6.4	2.4	0.1		Kf2 22
13	3 51	4	7B	16層	25号木簡	ヒノキ	5.9	1.2	0.3		Kf2 25
13	4 50	5	7B	16層	29号木簡	ヒノキ	5.6	1.3	0.1		Kf2 29
13	5 51	2	7B	16層	26号木簡	ヒノキ	14.8	1.9	0.5		Kf2 26
13	6 49	4	7B	16層	27号木簡	ヒノキ	5.7	0.9	0.2		Kf2 27
13	7 49	3	7B	16層	28号木簡	ヒノキ	3.5	0.6	0.2		Kf2 28
13	8 50	3	7B	16層	31号木簡	ヒノキ	8.9	3.4	0.6		Kf2 31
13	9 50	6	7B	16層	32号木簡	ヒノキ	14.7	0.9	0.1		Kf2 30
13	10 52	2	7B	16層	30号木簡	ヒノキ	12.7	2.3	0.3		Kf2 98
13	11 52	4	7B	16層	33号木簡	ヒノキ	11.5	1.5	0.1		Kf2 136
14	54	4	7B	16層	絵馬	スギ	11.5	5.7	0.5		Kf2 141
15	1 55	1	7B	16層	側面全身人形代	ヒノキ	12.3	2.3	0.3		Kf2 32
15	2 56	1	7B	16層	不明	スギ	10.3	1.4	1.0		Kf2 67
15	3 55	6	7B	16層	塗薬	スギ	5.5	2.8	2.2		Kf2 38
15	4 55	9	7B	16層	不明	アカガシ密属	7.0	3.2	2.4		Kf2 121
15	5 56	4	7B	16層	不明	ヒノキ	3.9	1.6	1.6		Kf2 36
15	6 55	8	7B	16層	不明	ヤブツバキ	3.4	1.9	0.6		Kf2 39
15	7 55	10	7B	16層	横櫓	ツグ	2.8	3.1	0.8		Kf2 37
15	8 57	3	7B	16層	不明	ヒノキ	3.6	2.3	1.9		Kf2 94
15	9 57	3	7B	16層	不明	ヒノキ	5.8	2.3	2.4		Kf2 95
15	10 55	5	7B	16層	不明	スギ	5.6	5.3	1.5		Kf2 40
15	11 58	4	7B	16層	不明	ヒノキ	6.1	3.8	3.6		Kf2 93
15	12 55	7	7B	16層	不明	スギ	5.2	4.3	1.8		Kf2 92
15	13 57	3	7B	16層	不明	ヒノキ	6.2	0.6	0.8		Kf2 88
15	14 55	4	7B	16層	男根状木製品	スギ	12.6	4.2	4.5		Kf2 34
15	15 55	3	7B	16層	男根状木製品	ヒノキ	17.4	2.5	2.5		Kf2 35
15	16 57	3	7B	16層	不明	ヒノキ	8.9	2.2	1.4		Kf2 86
15	17 57	3	7B	16層	船形木製品	ヒノキ	12.6	2.2	1.0		Kf2 66
15	18 57	3	7B	16層	不明	ヒノキ	9.7	1.5	1.8		Kf2 87
15	19 55	2	7B	16層	倉庫状木製品	コウヤツバキ	23.3	2.5	0.4		Kf2 33
15	20 56	2	7B	16層	櫛状木製品	スギ	21.7	3.7	1.8		Kf2 96
15	21 57	1	7B	16層	不明	ヒノキ	15.3	3.2	0.8		Kf2 115
15	22 57	2	7B	16層	不明	ヒノキ	16.3	4.0	1.4		Kf2 127
15	23 57	2	7B	16層	不明	ヒノキ	16.2	2.8	0.9		Kf2 114
16	1	1	7B	16層	不明	ヒノキ	10.2	1.1	0.6		Kf2 74
16	2 57	3	7B	16層	不明	ヒノキ	9.3	1.4	0.8		Kf2 90
16	3 57	3	7B	16層	不明	ヒノキ	7.8	1.6	0.9		Kf2 113
16	4 57	3	7B	16層	不明	ヒノキ	4.7	2.7	1.4		Kf2 108
16	5 57	3	7B	16層	不明	スギ	2.5	2.5	2.0		Kf2 75
16	6 57	3	7B	16層	不明	ヒノキ	5.2	1.8	0.6		Kf2 72
16	7 57	3	7B	16層	不明	スギ	3.6	2.4	1.0		Kf2 71
16	8 57	3	7B	16層	不明	スギ	5.0	2.2	1.7		Kf2 70
16	9 57	4	7B	16層	不明	ヒノキ	2.5	4.4	3.6		Kf2 123
16	10 57	4	7B	16層	不明	スギ	4.2	4.5	3.1		Kf2 120
16	11 57	3	7B	16層	不明	ヒノキ	6.7	2.7	0.7		Kf2 111
16	12 58	6	7B	16層	不明	コウヤツバキ	7.0	3.4	0.2		Kf2 85
16	13 57	4	7B	16層	不明	ヒノキ	9.5	4.6	3.3		Kf2 122
16	14 57	4	7B	16層	不明	ヒノキ	10.0	3.9	3.1		Kf2 119

表9 古代木製品一覧(2)

図版番号	写真番号	比尺	層位	種別	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	縮刷写真	実測番号	
16	15	57	4	7B	16層	不明	スギ	8.6	4.2	2.1	Kf117
16	16	57	5	7B	16層	不明	ヒノキ	11.2	4.3	1.1	Kf173
16	17	57	5	7B	16層	不明	ヒノキ	10.0	5.5	0.6	Kf116
16	18	56	3	7B	16層	不明	ヒノキ	26.6	2.5	0.5	Kf107
16	19	58	6	7B	16層	不明	ヒノキ	21.6	2.3	0.4	Kf59
16	20	57	5	7B	16層	不明	ヒノキ	21.8	6.0	1.4	Kf92
16	21	57	5	7B	16層	不明	ヒノキ	16.0	3.1	1.1	Kf109
16	22	57	5	7B	16層	不明	ヒノキ	16.5	2.9	1.1	Kf69
16	23	57	4	7B	16層	不明	ヒノキ	7.4	8.5	3.1	Kf124
16	24	57	4	7B	16層	不明	ヒノキ	10.0	2.3	1.8	Kf91
16	25	57	5	7B	16層	不明	ヒノキ	8.3	6.2	1.5	Kf118
16	26	57	2	7B	16層	不明	ヒノキ	27.6	4.7	2.8	Kf110
16	27	56	5	7B	16層	動物の底版	ヒノキ	19.7	11.5	1.0	Kf144
16	28	56	5	7B	16層	動物の底版	ヒノキ	19.6	4.8	1.4	Kf41
16	29	56	5	7B	16層	動物の底版	ヒノキ	16.6	7.7	0.9	Kf42
16	30	56	5	7B	16層	動物の底版	ヒノキ	13.6	8.8	1.0	Kf43
16	31	58	5	7B	16層	不明	ヒノキ	13.4	8.4	8.5	Kf97
17	1	56	3	7B	16層	香炉状木製品	ヒノキ	9.4	2.0	0.3	Kf68
17	2	56	3	7B	16層	香炉状木製品	ヒノキ	9.5	2.0	0.2	Kf102
17	3	56	3	7B	16層	香炉状木製品	ヒノキ	7.7	1.5	0.6	Kf106
17	4	56	3	7B	16層	不明	ヒノキ	9.3	1.7	0.3	Kf103
17	5	58	6	7B	16層	不明	ヒノキ	5.7	2.0	0.7	Kf63
17	6	58	6	7B	16層	不明	ヒノキ	8.0	1.9	0.5	Kf62
17	7	58	6	7B	16層	不明	ヒノキ	10.3	1.8	0.3	Kf112
17	8	58	6	7B	16層	不明	ヒノキ	12.4	1.7	0.7	Kf60
17	9	58	6	7B	16層	不明	ヒノキ	13.0	2.0	0.9	Kf61
17	10	56	3	7B	16層	不明	ヒノキ	12.3	1.4	0.5	Kf126
17	11	58	2	7B	16層	不明	ヒノキ	15.7	1.2	0.6	Kf125
17	12	58	2	7B	16層	不明	ヒノキ	17.4	1.7	1.2	Kf49
17	13	56	3	7B	16層	板状木製品	ヒノキ	18.4	1.4	0.3	Kf99
17	14	56	3	7B	16層	板状木製品	ヒノキ	15.3	0.8	0.4	Kf100
17	15	56	3	7B	16層	板状木製品	ヒノキ	13.2	0.9	0.2	Kf105
17	16	56	3	7B	16層	板状木製品	ヒノキ	12.0	2.3	0.3	Kf101
17	17	56	3	7B	16層	板状木製品	ヒノキ	9.2	1.2	0.4	Kf104
17	18	58	2	7B	16層	不明	ヒノキ	10.0	0.7	0.5	Kf133
17	19	58	2	7B	16層	不明	ヒノキ	9.2	0.4	0.5	Kf134
17	20	57	3	7B	16層	不明	ヒノキ	8.1	0.9	0.8	Kf89
17	21	57	3	7B	16層	不明	ヒノキ	7.3	1.0	1.0	Kf76
17	22	57	1	7B	16層	不明	ヒノキ	13.1	1.8	1.4	Kf45
17	23	58	1	7B	16層	焼木	ヒノキ	12.5	1.3	1.1	Kf138
17	24	58	1	7B	16層	焼木	ヒノキ	13.5	1.1	1.4	Kf140
17	25	58	1	7B	16層	焼木	ヒノキ	12.7	2.4	1.1	Kf79
17	26	58	1	7B	16層	焼木	ヒノキ	12.0	1.4	1.0	Kf81
17	27	58	1	7B	16層	焼木	ヒノキ	9.0	1.7	0.5	Kf130
17	28	58	2	7B	16層	焼木	ヒノキ	16.5	1.1	0.6	Kf128
17	29	58	1	7B	16層	焼木	ヒノキ	15.4	1.7	0.7	Kf129
17	30	57	1	7B	16層	不明	ヒノキ	32.6	1.6	1.1	Kf48
17	31			7B	16層	焼木	ヒノキ	35.4	17.2	1.6	Kf83
17	32			7B	16層	不明	ヒノキ	22.0	1.3	0.6	Kf58
17	33	57	1	7B	16層	不明	ヒノキ	20.5	1.7	1.4	Kf52
17	34	58	2	7B	16層	不明	ヒノキ	20.4	1.6	1.0	Kf57
17	35	58	2	7B	16層	不明	ヒノキ	19.3	0.9	1.0	Kf132
17	36	57	1	7B	16層	不明	ヒノキ	16.5	1.8	1.2	Kf50
17	37	57	1	7B	16層	不明	ヒノキ	17.9	1.8	1.7	Kf47
17	38	57	1	7B	16層	不明	ヒノキ	19.6	1.8	1.1	Kf46
17	39	58	2	7B	16層	焼木	ヒノキ	28.2	1.5	1.4	Kf84
17	40			7B	16層	焼木	ヒノキ	17.8	1.9	1.9	Kf131
		57	1	7B	16層	丸い棒		10.4	1.7	1.4	Kf54
		57	1	7B	16層	不明		5.7	1.6	2.0	Kf77
		58	1	7B	16層	不明					
		58	1	7B	16層	焼木		13.0	2.5	1.9	Kf80
		58	1	7B	16層	不明		15.6	1.6	1.2	Kf82
		58	1	7B	16層	不明		18.7	1.3	1.4	Kf137
		58	1	7B	16層	不明		17.5	1.7	1.0	Kf139
		58	2	7B	16層	不明					
		58	3	7B	16層	土の断片					
		58	6	7B	16層	不明		7.5	2.6	0.4	Kf64
		58	6	7B	16層	不明		5.2	1.4	0.5	Kf65
		58	7	7B	16層	製製品					

5. 瓦類 (図24、写74)

瓦類については一部が奈良時代の包含層である14層中から出土したものであるが、その数は他の遺物と同様に多くはない。したがって、ここでは後世の遺構や包含層に混入しているものも含めて、図24に掲げている。上記のように古代に遡る瓦の出土数は僅少であり、図24ではそのほすべてを網羅していることになる。

(1) 軒丸瓦

軒丸瓦では重圏文系と蓮華文系に分かれる。

1～3は重圏文軒丸瓦で、1・3は14層出土。1は部分的に瓦当が残るのみで、焼成はあまく、灰白色を呈する。6015A型式もしくは6016型式か。3は表面が黒色を呈して硬質である。6017型式。2は13層出土で一部に直立する外縁が残る。6013型式か。

4・5は蓮華文軒丸瓦である。4は豊臣期の井戸747から出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。丸瓦との接合部ではずれており、外縁は残らない。羅火によるものか、全体に煤が付着するとともに瓦当面の遺存状態が悪く、文様は全体に不鮮明である。

5は豊臣期の包含層である7層から出土した複弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当部がほとんど遺存せず、詳細は不明である。

(2) 軒平瓦

軒平瓦は6の重圏文軒平瓦1点が豊臣期の包含層である6層から出土している。6574型式と考えられる。

(3) その他の瓦

そのほか、豊臣期の包含層から斜格子のタタキ目をもつ平瓦の破片が出土している(7・8)。

また、道具瓦としては全容がわからないために豊臣期の項で扱っているが、写真図版112-7および112-5は古代に遡る可能性の高いものである。前者は須恵質の焼成であり、鷗尾の可能性を残すものである。一方、後者も須恵質焼成であり、鬼瓦の破片と考えられる。

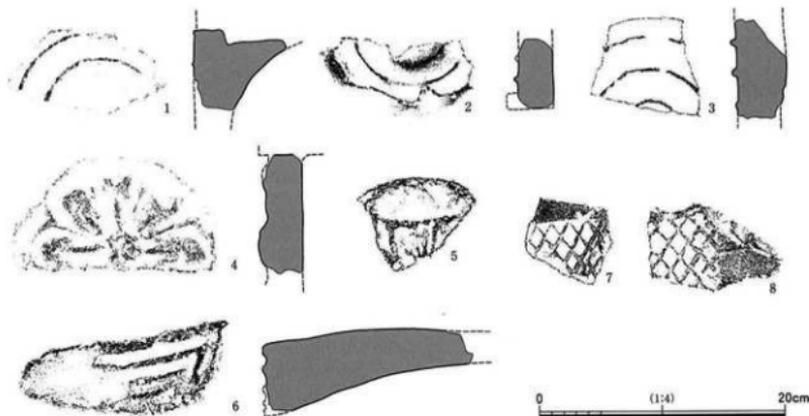


図24 古代瓦

第3節 小 結

今回の調査では本章の冒頭でも記したように、地形的には難波宮跡に近い南側が高く、北側に東西方向の深い谷が埋没していることが明らかとなった。

本町通を隔てた南側で(財)大阪市文化財協会が行った発掘調査では、内裏と仮称される前期難波宮段階の倉庫群とそれを区画する柱列が検出され、その西側を画する南北方向の塀であるSA301が北側に位置する今回の調査区に向かってのびていることが判明していた。したがって、今回の調査においても7A地区とした南側の高い部分についてはこれらに関連する遺構が存在する可能性が想定されるところであった。したがって、調査では古代の遺構群が検出される可能性を鑑みて慎重に調査を行ったが、結果的には江戸時代以降の徳川大坂城築造による大規模な地形改変によって、大規模な削平を受けていることが明らかとなった。そのため、豊臣大坂城に関わる遺構ですら井戸などの深いものがかるうじて遺存していたのみであり、当然の結果として古代に遡る遺構については望むべくもない状態を呈していた。

このように、今回の調査では南半では遺構・遺物ともにまったく検出できなかったが、少なくとも内裏西方官衙と仮称される区画の北側約100mは地形的に高かったことが判明し、十分な平坦面が確保できたものと判断される。北側に面する谷部から木簡や土器などの多量の遺物が出土したことを考えると、前期難波宮段階において何らかの施設が造営されていたことは確実であろう。

また、調査地の北半で検出した谷は既往の調査所見を勘案すると、その幅は少なくとも60m以上と推定され、深さは古代の段階で8mを超える。このように難波宮の北側近所に非常に深い東西方向の谷を確認した点では非常に大きな意味をもつ。上記のように顕著なかたちでは宮城の外郭線を示すような遺構は確認できなかった。しかしながら、少なくとも古代の段階、すなわち難波宮造営に際しては、この谷を整地して積極的に利用することがなかったことは事実であり、祭祀的関連遺物が出土し、また廃棄物を投棄するような場所であったことを考えると、この辺りを宮城の北限と推定する見解との整合性を見出すことも可能かもしれない。逆に前期難波宮の宮城の設定段階において今回の調査で見つかった推定幅60m以上、深さ8mを超える東西方向谷が影響を与えなかったとは考え難く、むしろこの谷に規制される形で難波宮の造営がなされた可能性も視座に据えて今後の検討を行うことが必要であろう。

また、今回の調査での最も大きな成果は谷部16層における紀年銘木簡を含む木簡群の出土である。11号木簡に記された年号は干支表記の「戊申年」で648年に該当する。出土した木簡は可能性のあるものを含めて33点。「支多比」・「穴」・「伊加比」などの食品の付札木簡が目立つが、人名を記したものや文書木簡も含まれる。また、9号木簡にみえる「王母前」については宛先を意味するものではないかとの見解もある。王母については道教の神仙思想にあらわれる「西王母」を略したもの、孝徳天皇の母である吉備姫王のことを示すものである可能性も指摘されている。

今回の調査では北側の谷部からは木簡群を含む多様な遺物が出土したものの、遺構は検出できず、結果的に当地に造営された施設を特定するには至らなかった。しかしながら、これまで実質的には限りなくゼロに近かった難波宮関連の木簡がまとまって出土したことは事実であり、今後の前期難波宮研究に一石を投じる資料であるといえる。

ただし、今回の出土木簡によってすべてが明らかになるものではないことは自明の事実である。なにより、難波宮周辺地域でも条件さえ整えば、さらなる木簡の出土が期待できることを示した点で非常に大きな意義をもつ調査であるといえよう。

第6章 中世の遺構と遺物

第1節 遺構

1. 水田面 (11層上面)

(1) 前提と層位 (写8-1・2)

古代と同様に南半の7A地区では、地形的に高かったこともあり、中世段階の遺構・遺物ともに削平により全く残っておらず、生活痕跡についてはその存否さえも不明である。

一方、7B地区の谷部では豊臣大坂城の造営に伴うと考えられる客土に覆われる形で水田面と考えられる遺構面を検出している。第11章で報告しているように、当該遺構面の土壌からはサンプリングを行ったすべての地点で2700～4700個/gのイネのプラント・オパールを検出している。したがって、当該遺構面は遺構の景観を含めて、水田遺構であることはもはや疑いようのない事実である。

なお、当該遺構面については、層位的にみると古代以降で豊臣大坂城築造以前であることは分かるものの、それ以外に年代を絞り込む術がない。したがって、ここでは中世の遺構面として扱っているが、狭義には豊臣大坂城造営に伴う客土によって埋没している可能性が高く、最終的には本願寺期にまで存続して埋没した遺構面と捉えることができる。

水田面は11層上面で検出したものである。すでに記したように11層は細分され、このうちの11a層が水田作土層に該当する。11a層は黒灰色を呈する細～中砂混じりシルトにシルト質粘土ブロック(10mm以下)が多く混じり、かなり攪拌されている状況が確認できる。なお、11b・c層には弱い攪拌がみられるものの、人為的なものではない可能性が高い。

また、当該水田面の上面は直接的に上町層上部(中位段丘層)を母材とする客土(10層)に覆われる部分が多いが、一部は平行ラミナが確認される灰色シルト質粘土とシルト～極細砂の互層にバックされる部分もある。これは客土による埋没前にけん濁物質が堆積したものと考えられる。

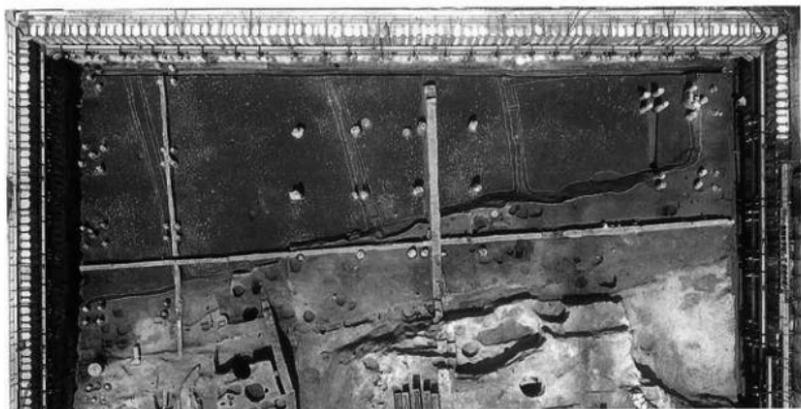


写真13 11層上面水田面検出状況

(2) 水田遺構 (図25、写6・7)

水田面は東西方向の谷部の最深部を掘り込んで平坦面を造成し、南側肩部には木杭などを用いて護岸して急峻な法面を造成している。なお、南辺の方向は谷の肩部と平行し、方位を指向したのではなく、いわゆる谷水田の様相を呈する。なお、平坦面造成のための法面は東側と南側は完結しているものの、北側および西側の大半が調査区外にのび、水田域全体の面積は不明である。現状での検出長は東辺で7.5m、南辺で49.5m、西端は18.9m、北端は48.8mを測る。したがって、検出した範囲での水田域の面積はおおむね644㎡を測る。

上記のように造成された水田域は、造成された平坦面が地形と同様に東から西に向かって傾斜しているため、その中を南北方向の3本の畦畔によって区画している。3本の畦畔は南側法面と直交して造成されており、結果的に各々はほぼ平行している。東側法面下端から畦畔779までの距離は13.7m、畦畔779から畦畔780までの心々間距離は13.1m、畦畔780と畦畔781の心々間距離は15.5mを測る。

畦畔は比較的規模が大きく、基底部に幅1m前後を測るものが多い。なお、畦畔のうち、東側の畦畔779の上面からは、畦畔に直交する形で幅約25cm、深さ約6cmの溝が検出され、水田775から水田776に導水するための水口であると判断している(水口783)。同様に畦畔780の上面からは二つの水口を検出している。北側の水口784は幅約24cm、深さ約5cm、南側の水口785は幅約42cm、深さ約4cmを測る。

各水田面はいずれも調査範囲外にのびているために全容は不明であるが、レベルをみると東側から西側に向かって段々畑状に下がっている。各水田面の作土上面のレベルについては図25中に斜体文字で記した通りである。東端の水田775の作土上面のレベルは平均して13.55mを測り、順に西側の水田へと目を移すと、水田776が13.35m、水田777が13.06m、水田778が12.95mを測る。したがって、各水田間の比高差は10～20cmを測る。

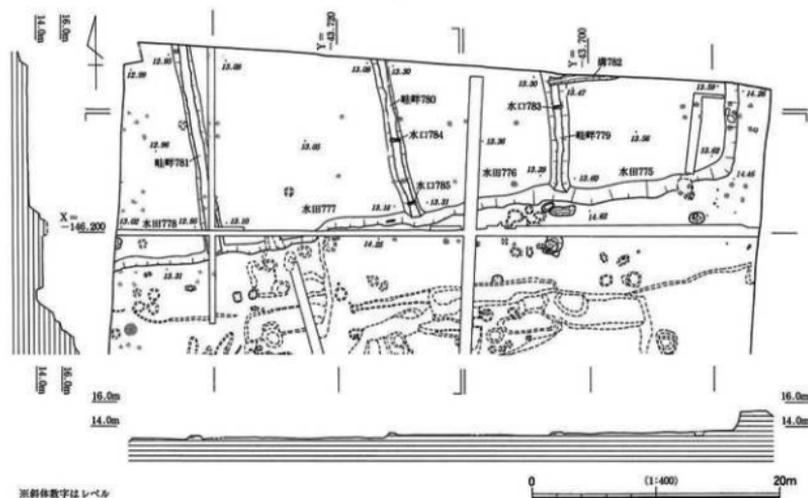


図25 11層上面検出水田面

また、調査範囲内では灌漑に関わる水利施設を検出することはできなかったが、水田775の北側で溝782を検出している。溝782は水田作土層および畦畔779を切り込む幅約50cm、深さ約6cmの溝であり、底面は西側に向かって緩やかに傾斜する。

田面を切り込む形で掘削されていることから、水田面への導水を意図したものというよりも水田面からの水抜きなど、排水目的で一時的に掘削されたものと考えられる。豊臣大坂城造成に伴う整地作業に先立って行われた排水作業に伴うものである可能性もある。

(3) 足跡 (図26、写8-3～5)

当該水田面は豊臣大坂城築造に伴う盛土(10層)で直接埋没している部分もあるが、田面の多くは先に記したように平行ラミナがある灰色シルト質粘土とシルト～極細砂の互層細砂の薄層に覆われて、溝や水口、足跡等もこの砂層で埋没している。田面からは人および動物(特定不能)の足跡群がほぼ全面で検出されている。作土がやや乾燥した状態であったのか、足跡はさほど深くまでは踏み込んでおらず、足の全形はもとより、歩行状態を追える足跡列も確認できない。ただ、状況としては非常にランダムに足跡が交錯しており、水田耕作に関わるものというよりも、先に報告した溝782と同様に水田を埋め戻して整地する際についた足跡群である可能性も考えられる。

第2節 遺物

当該遺構面是水田面という性格もあり、出土遺物はきわめて少ない。作土層中からの出土遺物は皆無であり、畦畔780の盛土中から青磁の破片が1点出土したのみである(写101-9)。当該磁器は残存長さ9.1cm、最大幅3.2cmを測る四角錐形を呈する破片で全容は不明である。内面にも施軸されており、4面ともに浅肉彫りの文様が施される。

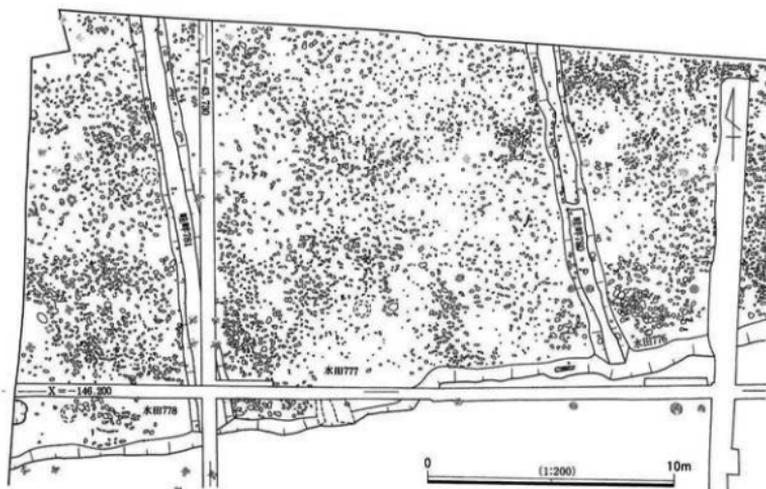


図26 水田面検出の足跡(部分)

第7章 豊臣大坂城の遺構と遺物

第1節 遺構

1. 前提

今回の調査地は、慶長3(1598)年、病床にあった秀吉が築造を命じた三の丸に包括される地域にあたる。この三の丸築造にあたっては、すでにそこに存在していた町屋を新たに惣構の外に整備した船場に移すという大掛かりな工事が行われている。

調査の結果は、中世以前の遺構面と同様に地形的に高い南半部の7A地区では、徳川大坂城の築造に際して、大規模な削平および客土を伴う造成を行っており、結果的に豊臣期の遺構に関しても井戸など掘削深度の深い遺構しか検出できなかった。しかしながら、北半部の7B地区では谷地形を基本的には大きく改変することなくそのまま利用し、雑壇状に平坦面を造成することによって、居住域を形成している。

なお、今回の調査では7B地区では5層とした分厚い客土の下層から4面の遺構面を検出している。各遺構面の名称については、調査時および概要報告時との整合を保つため、7層上面の遺構面を豊臣1面、8層上面の遺構面を豊臣2面、9層上面の遺構面を豊臣3面、10層上面の遺構面を豊臣4面として、下層から順に報告を行う。また、7A地区の4c層上面および7B地区の5層上面で検出した豊臣後期の遺構については、当時の地表面は残らないが、豊臣後期の遺構面として区別し、便宜的に豊臣0面とした。

なお、各遺構面については後述するように、必ずしも均一な厚さの客土で整地されているわけではなく、全域にわたって明確に4面の遺構面として認知できるわけではない。むしろ、各遺構面については、いずれも豊臣前期という短期間での変異であり、4面に分けて調査を行っているものの、厳密な意味では4層に細分して調査を行ったと表現する方が適切かもしれない。したがって、以下では調査段階における4面の調査を基軸として報告を行っていくが、上記のように厳密に峻別できなかった部分や、同時期の遺構であると考えられるもの、別の遺構面として調査してしまっているものも多いことを記しておく。

各遺構面は再三にわたって記述してきたように基本的には地形に則した形で造成されており、大局的にみた場合、東が高く、西に向かって緩やかに下がっていく傾向にある。なお、すでに記述してきたように宅地は雑壇状に造成されているが、各区画は地形に規制されるとともに、11層上面で検出した水田面の段差、すなわち畦畔の位置と呼応している部分も看取される。以下では豊臣1~4面ごとに個別に報告を行うが、各遺構面に共通する宅地の区画一つの単位として記述を進めてゆくことにしたい。

今回の調査で検出した谷は基本的には東西南方向を指向するものであり、すでに記述してきたように調査地点付近では幅60m前後と推定される。したがって、今回の調査では谷地形の南側約2分の1を検出したことになる。調査区南西隅では、東西南方向の溝584を検出しており、この溝は推定される谷の中軸線に近い部分にあつている状況が看取される。今回の調査範囲内においては街路と考えられる遺構は検出できなかったが、この溝584に関しては谷の中軸線付近に該当することから、谷の中心に設計された東西南方向の街路南側の側溝である可能性も示唆されるところとなる。したがって、今回の調査で検出した宅地の区画は北側に想定される街路の南側を南北に長い短冊形に区画したものである可能性が高い。

なお、ここでは豊臣大坂城関連の遺構としては最も下層にあたる豊臣4面とした10層上面での状況を概観し、各区画の相対的関係について簡単に整理しておくことにしたい。

図27に示したように、雑壇状に造成された平坦面は大きく6区画を検出している。そのうちの区画A~

Eとした5区画は谷底部に東西に並列する。これらの区画は先に推定したように、北側にその存在が示唆される東西方向の街路に北側で面している可能性が高いものであり、宅地としての正面は北側であったと想定される区画である。また、一方で区画Fとした区画は谷の南斜面を平坦に造成したものであり、炉跡が検出されるなど、金属生産に関わる工房であったと考えられる点においても他の区画とは一線を画している。このほか、規模等は不明であるが、区画Bの南側の地山の高まり部分を便宜的に区画Fと仮称しておくことにしたい。

区画Aは谷部の最も東側で検出した区画で、おおむねY=-43.690ラインを西端とする。豊臣4～2面では西側の区画Bとの境界部分は削平のためか、南北方向の段差があるのみで明確な区画はないが、豊臣1面では南北溝（溝524）を検出している。また、区画Bとの境界線に対応するように南側の谷部斜面が矩形に大きく削り込まれて平坦面が造成されている。東側と北側が調査範囲外にのびており、全容は不明である。検出範囲での規模は南北約25m、東西約8mを測り、面積は約200㎡を測る。当該区画は谷頭に近いにも関わらず、レベル的には区画Bよりも低く、東に向かって緩やかに傾斜している。

区画Bは東側の区画Aと隣接する。西側はY=-43.710ライン付近を境界として区画Cと隣接する。豊臣4面および1面では段差のみであるが、豊臣2面および3面では南北溝を検出している。南側は谷斜面を大きく削り取って平坦面を造成し、東西方向の溝を掘削している。また、溝を挟んで、さらに南側にも地山を掘り込んだ矩形の平坦面を造成している。北側のみが調査範囲外であり、現状では南北約19m、東西

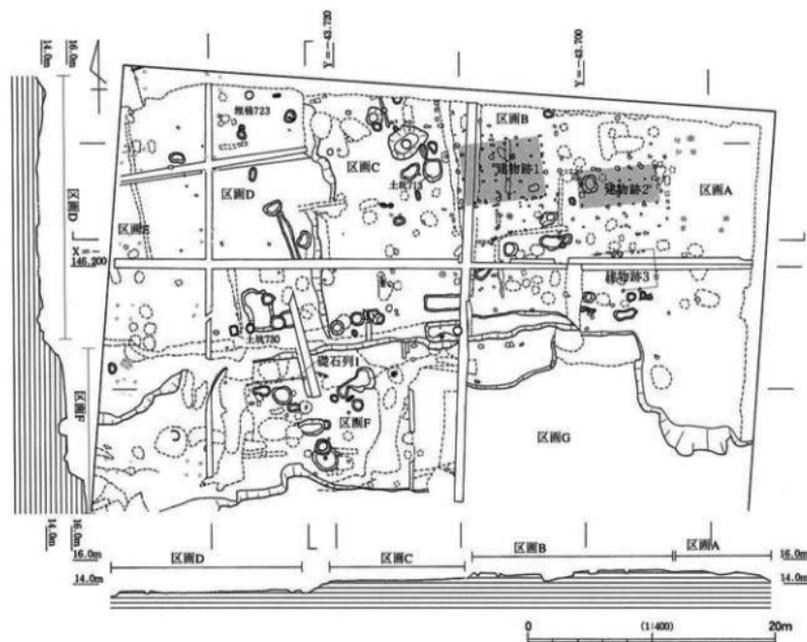


図27 豊臣4面（B地区：10層上面）

約16mを測る。既述のように東西方向の溝584の延長を北端とすると南北長は24m前後と考えられる。また、溝を超えて南側に張り出して造成された平坦面は東西約7m、南北約4mを測る。したがって、調査範囲内のみでの面積はおよそ330㎡を測り、上記のように南北長を24mと仮定した場合、410㎡前後の面積をもつ区画であったと推定される。なお、当該区画は調査範囲内では斜面を削り込んで造成を行っている区画Fを除けば、レベル的には最も高い区画となる。

上記のように区画Bは造成された平坦面の中では最も高く、しかも面積的にも後述する区画を凌駕するものである。

区画Cは東側の区画Bと隣接し、境界部分には南北の区画溝もしくは20cm前後の段差がある。西側はY=-43.720付近を境界として区画Dと隣接し、南側は東西方向の溝649で区画される矩形を呈する区画である。他の区画と同様に北側が調査区外であり、現状では南北約20m、東西約11mを測る。これまでに既述してきた区画同様に溝584の延長を北端と仮定すると、南北長は約24mとなり、この場合、260㎡前後の面積をもつ区画であったと考えられる。レベルは区画Bより20cm前後低い。

区画Dは区画Cの西側に隣接する。区画との境界部分は比高差0.9m前後の非常に大きな段差を有している。西側はY=-43.735ライン付近を境界として区画Eと隣接する。豊臣4面では区画Eとの境界部分に東西方向の区画溝を検出している。南側は区画Fと溝649を挟んで隣接する。レベル的にはすでに記したように区画Cとは0.9m前後の大きな比高差がある。後述する西側の区画Eよりも10cm前後低く、検出した区画の中では最も低い。なお、当該区画は矩形を呈しており、東西は約14m、南北は約24mを測る。したがって、335㎡前後の面積をもつ区画であったと考えられる。



写真14 豊臣大坂城の遺構（西：9層上面、東：10層上面）

区画Eは区画Dの西側に隣接するが、大半が調査範囲外である。区画Dとの境界部分には区画溝もしくは段差がある。南側は溝649を挟んで谷部の法面となる。レベルは区画Dよりも10cm前後高い。区画Dと同様に南北は約24mと考えられるが、東西長については不明である。

区画Fは西側の谷部法面を矩形に削り込んで平坦面を造成したものである。南側および東側は地山を1.0～1.2m前後で直線的に削り込んでいるが、西側は造成に際しての掘り込みラインが明確ではなく、ルーズに谷部法面にすりついている。なお、後に報告するように、当該区画からは炉跡などを検出しており、金属加工に関わる工房が営まれていた区画であると考えられる。

区画Gは区画Bの南側、区画Fの東側において谷部斜面を凸形に掘り残した高まり部分の便宜的呼称である。一部で削平を免れた遺構を検出したのみである。全容は不明ながらも区画Fとは階段状遺構でつながっており、かつトリベ集積遺構が検出されるなどしている点から、区画Fと合わせて金属加工に関わる工房が存在していた可能性が高い。

なお、以下の報告では各遺構面検出の個々の遺構についてはその数が多いこともあり、遺物が出土した遺構を中心に一覧表にまとめ、図や写真との対応についてもこれに記した。報告としては不十分ではあるが、以下では主要な遺構のみを抽出するとともに遺構群として総括的に報告することにした。

また、各遺構に関しては基本的に検出面で報告を行っている。多くの遺構は上面が削平された状態で検出されており、本来の掘り込み面はさらに上方であるものの、度重なる整地などで不明瞭となっている場合も多いことを付記しておく。

2. 豊臣4面(10層上面)

南半部の7A地区では、再三にわたって記述してきたように、後世の削平が地山にまでおよぶほど著しく、対応する遺構面は確認できない。北半部の7B地区では分厚い客土に覆われていたこともあり、豊臣大坂城段階の遺構面を重層的に検出している。豊臣4面は先に報告した11層上面検出の水田面を1m強の客土で整地した平坦面上で検出した遺構面である。

(1) 区画A

区画Aは南西では標高が15.2m前後を測るのに対して、北東では14.4m前後を測る。したがって、比較的平坦であるとはいえ、北東に向かって緩やかに傾斜している。当該区画では、顕著な遺構は全く検出されなかった。

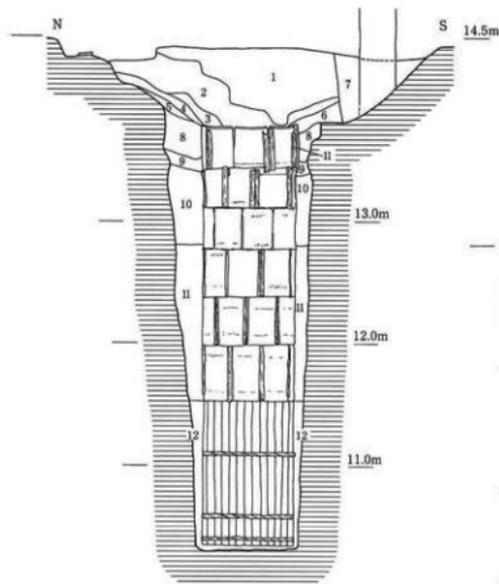
(2) 区画B

区画Bは標高14.7m～15.0mを測り、全体に平坦である。

当該区画内では直線的に並ぶ礎石列を検出しており、東西棟の建物跡を2棟を復元しているほか(建物跡1・2)、可能性のあるものとしてもう1棟の東西棟建物跡を想定している(建物跡3)。各建物跡はほぼ正方位を指向しており、重複することなく、同時に存在していたと考えられるものである。しかしながら、これらの建物群を構成する礎石とは別に直接的に関係しない礎石も多く検出している。これらの礎石には抜き取りなどによって建物として認識できないものの、本来は建物などの上屋構造物の礎石であったものが含まれているものと考えられる。

これ以外には土坑を数基検出している。土坑は建物跡1と建物跡2の間の空白部分に並んで検出したほか、建物跡の南側を中心に分布している。

建物跡1は区画Bの西側で検出した東西棟の礎石建物跡である。規模は東西約6.8m、南北約4.5m、面積は30.6㎡を測る。各辺ともに礎石の大きさと配列はまちまちである。また、建物内部では南北辺で検出



1. 10YR6/6 明黄褐色 細砂(黄褐色,灰色粘土アロクを混入する層状)
2. 7.5Y2/2 黒褐色 細砂混じりシルト(黄褐色,灰色粘土アロクを混入する層状)
3. 2.5Y6/2 灰黄色 中砂(細砂のウレチ含む)
4. 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト(粘土塊含む)
5. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト混じり中砂
6. 2.5Y7/3 浅黄褐色 粗砂(黄灰色シルトアロク含む)
7. 5Y4/1 灰色 シルト混じり細砂(塊状)
8. 10YR4/1 黄灰色 微砂混じりシルト-細砂
9. 2.5Y6/6 黄黄褐色 細砂
10. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色 細砂
12. 10YR6/1 青灰色 粗砂

図28 井戸 744



1. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト(灰色粘土アロク混入)
2. 5Y6/1 灰色 粘土混じり中砂(砂多し)
3. 2.5Y5/1 黄灰色 シルト混じり細砂

図29 埋桶 723

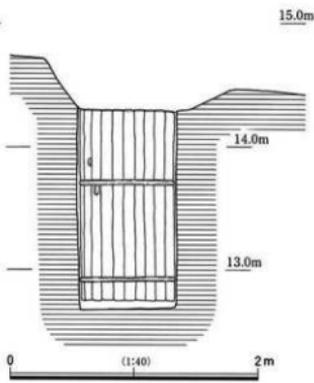
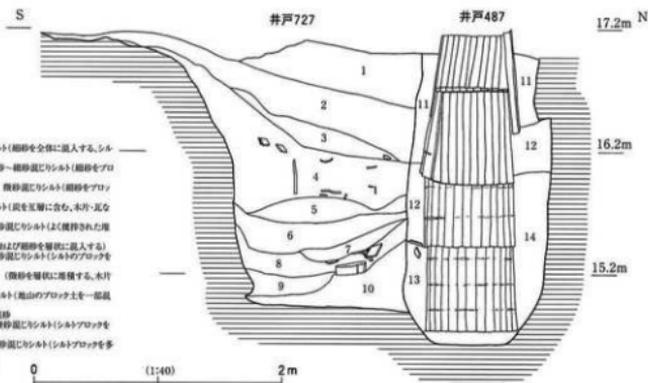


図30 井戸 728



1. 5Y5/3 灰オリーブ色 シルト(細砂を完全に混入する,シルトアロク多し)
2. 5Y4/3 暗オリーブ色 微砂-細砂混じりシルト(細砂をアロクに一部混入する)
3. 10YR5/3 濃い黄褐色 微砂混じりシルト(細砂をアロク混入する)
4. 5Y2/1 オリーブ黒色 シルト(炭を炭層に含む,木片・瓦など多量に混入,ウレチ混入)
5. 5Y5/2 灰オリーブ色 細砂混じりシルト(土塊層状の堆積上)
6. 5B2/1 黒褐色 炭(木片およびアロクを層状に混入する)
7. 5Y5/2 灰オリーブ色 細砂混じりシルト(シルトのアロクを一部混入)
8. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト (微砂を層状に堆積する,木片を多量に含む)
9. 10Y6/2 オリーブ灰色 シルト(堆土のアロク土を一部混入する)
10. 7.5Y5/1 灰色 細砂-粗砂
11. 10Y5/2 オリーブ灰色 微砂混じりシルト(シルトアロクを完全に混入する)
12. 5Y5/2 灰オリーブ色 細砂混じりシルト(シルトアロクを多量に混入する)
13. 5N/ 灰色 粗砂-粗砂
14. 5N/ 灰色 粗砂

図31 井戸 727 (井戸 487)

した礎石間をつなぐように南北方向の礎石列が確認でき、小規模な礎石を含めて東柱の礎石が含まれているものと考えられる。なお、当該建物跡の南側1m弱には南辺の礎石列と平行するように礎石が検出されている。これらの石材は豊臣2面で報告する方形木組み遺構579の護岸板材とほぼ正確に重複しており、その基礎として布置されたものである可能性が高い。したがって、当該建物については上層の豊臣2面で報告する方形木組み遺構579と一連の遺構である可能性を残している。この場合、建物跡1の構造としては、地面を方形に掘り込んで、その中に礎石を配置し、上屋を造営するという構造をもつものとなる。

建物跡2は区画Bの東側、建物跡1の東側2.7mで検出した東西棟の礎石建物跡である。規模は東西約6.0m、南北約2.9m、面積は17.4㎡を測る。桁行は4間と考えられ、主柱の礎石の間に小規模な東柱のものと考えられる礎石が配される部分もある。建物跡1と同様に建物内部には南北辺で検出した礎石間をつなぐような礎石列を検出しており、間仕切りもしくは東柱の礎石であると考えられる。

建物跡3は建物跡2の南側3.9mで検出した礎石列を北辺として想定した礎石建物跡である。大半の礎石は欠失している。規模は不明であるが、建物跡2とほぼ同規模である可能性が高い。

なお、建物以外では顕著な遺構を検出していないが、廃棄土坑と考えられる土坑群を検出している。土坑は全体として建物跡の南側に多いが、建物跡1と建物跡2の間からも検出されている。

このほか、当該区画の南西隅では**植樹痕跡701**を検出している。当該遺構は直径約30cmの断面半円形の土坑であり、埋土中から球形に編まれた麻縄を検出している。断言はできないものの、根切りされた樹木の根を球状に覆っていた縄の痕跡が高いものと判断し、植樹痕跡として報告を行っている。

(3) 区画C

区画Cは標高14.3m～14.5mを測り、全体として平坦である。区画の北東側では礎石がまとめて検出されているが、建物跡として復元するまでは至っていない。その他では井戸と土坑を数基検出している。

井戸744は区画の北東から検出したもので、上部は瓦を井戸枠とし、下部は桶枠である(図28)。上部は井戸枠瓦8枚を1段として6段分を積み上げている。各瓦の左右の継ぎ目の目地部分には粘土を充填したのちに半裁した細い竹を貼り、その上をさらに短冊形の薄板で覆ったあとに上下2段で縄を巻き付けている。なお、当該井戸は上層埋土の状況からみて、人為的に埋め戻されているものと判断される。出土遺物は多くないが、青花碗、備前焼壺・甕、瓦質土器等が出土している。

井戸728は南東隅の溝569内から検出したものである(図30)。切り合い関係からみて、溝569よりも新しいが、同じ場所に重複して掘削される溝によって上部は壊されている。現状では桶枠が1段残るのみである。出土遺物は多くはないが、土師器鉢、備前焼大皿・甕等が出土している。

これ以外では井戸744に近接して**竈719**を検出しているほか、北東側および南西隅では土坑群を検出しているが特筆すべき点はない。

(4) 区画D

区画Dは標高13.3m～13.4mを測り、全体に平坦である。わずかに礎石と考えられる石が検出されたが、建物跡を復元するまでには至らない。これ以外では東半部を中心に土坑群を検出しているほか、北東隅では桶を埋め込んだ遺構である埋桶723を、南端部では井戸731を検出している。

埋桶723(図29)は直径86cmの円形の掘り形のほぼ中心に直径約30cmの桶を埋め込んだ遺構である。最終的には人為的に埋め戻されている。

井戸731は直径約1.4m、深さ約1.4mを測る井戸である。検出時には井戸枠は残っていなかったが、埋土の状況から抜き取られた可能性が高い。出土遺物は多くはないが、国産陶磁器類のほか青磁碗、白磁

碗が出土している。また、これ以外では竈が出土している。

(5) 区画E

区画Eは標高13.3m前後を測る。大半が調査範囲外であり、土坑数基を検出しているものの、全体の状況は不明である。

(6) 区画F

区画Fは標高15.4m前後を測る。当該区画の北東では東西方向に直列する礎石列(礎石列1)を検出しているほか、土坑群ならびに井戸を検出している。

礎石列1は東西に4個の礎石がレベルを揃えて直列して検出されたものである。これと組み合う礎石は欠失しているが、正方位を指向することなどから、何らかの上屋の基礎であると考えられる。東端の礎石から西端の礎石までの距離は約3.8mを測る。ただし、当該礎石列については9層上面に帰属するものである可能性を残す。

井戸727は直径約1.9m、深さ約2.2mを測る素掘りの井戸である(図31)。底面付近からは桶が出土している。埋土には炭化物が互層になって入り込んでおり、土層断面図に示したように最大厚さ25cm前後で炭化物層が堆積している部分もみられる。また、最上層は地山を起源とする土で埋め戻されており、最終的には人為的に埋め戻されたものと考えられる。なお、当該井戸に関しては、その底面は湧水層に達しておらず、水溜めの機能を有するものであったと考えられる。

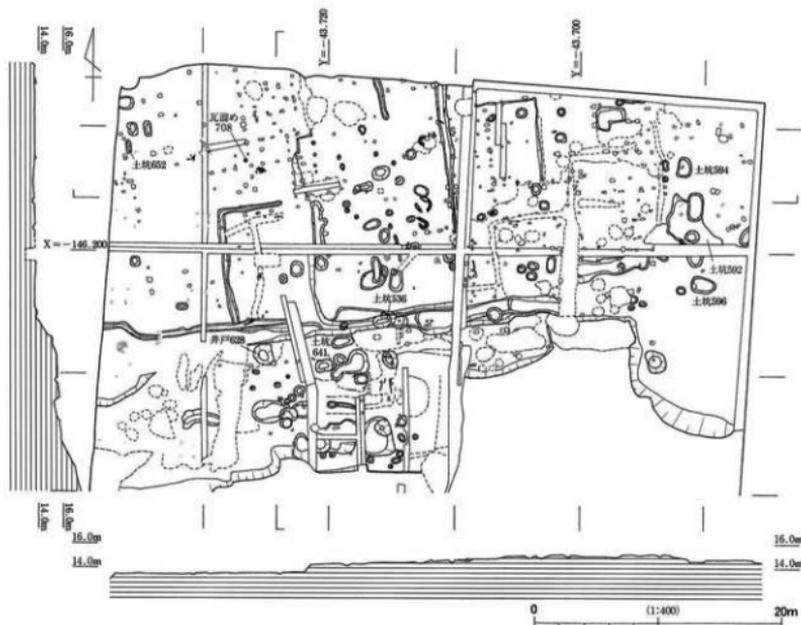


図32 豊臣3面(B地区:9層上面)

3. 豊臣3面（9層上面）

豊臣3面は先に報告した豊臣4面を厚いところで20cm前後の客土で整地して造成された遺構面である。ただし、この整地は調査地の全域にわたって均一に行われたものではなく、豊臣4面とのレベル差がほとんどない部分もみられ、結果的に両面の遺構や礎石の峻別が困難な部分も残っている。同様に調査地の西半部、すなわち区画C～Fにかけては8層上面との間に顕著な客土がみられない。この事実は大きく整地改変されることなく継続的に生活面として機能していたものといえる。

(1) 区画A

区画Aは豊臣4面と同様に南西部が高く北東に向かって緩やかに傾斜している。大半が調査範囲外であり、全容は明らかにしえないが、西端部では土坑群および井戸を検出している。

当該区画では礎石と考えられる石材が散在した状態で検出しているが、建物跡を復元するまでには至っていない。このうちの土坑592は不定形の落ち込み状の土坑である。当該遺構の埋土中からは土器・陶磁器類の他に多量の箸が出土している。

後述するように、当該遺構からは多量の箸が出土し、完形のを抽出しただけでも64本が確認される。後述するように、出土した箸はそのいずれもが8寸半以上の長い両口箸で占められる。このような状況は他の遺構にはみられない特徴であり、一括廃棄されたものである可能性が高いものである。

井戸800は土坑592の南側から検出したものである。この井戸は各遺構面を通じて区画A内から検出した唯一の井戸である。直径、高さともに約80cmを測る桶を逆位で3段重ねて積み上げて井戸枠としている。出土遺物は少なく、土師器皿等が若干出土しているのみである。

(2) 区画B

区画Bは豊臣4面と同様に隣接する区画AおよびCよりも高く、標高15.1m前後で平坦である。区画Cとの境界部分は南北区画溝を検出している。

なお、当該区画のほぼ全城からは礎石と考えられる石材を検出しているが、その大部分はすでに報告を行った豊臣4面に帰属する礎石と考えられるものであり、図中には重複して表現している。

しかしながら、当該遺構面に対応する礎石も確実に存在する。一部には直線的に並ぶものも見出すことができるものの建物跡として復元するには至っていない。

ただ、礎石の分布状況からみて、当該区画には豊臣4面と同様に数棟の建物が存在していたと考えるのが妥当である。また、当該区画の南西部では区画Cとの南北方向に並ぶ石列を検出している。

このほか、北東部および南西部を中心に土坑群を検出している。いずれも廃棄土坑と考えられるものである。

(3) 区画C～F

区画C～Fについては冒頭でも記したように8層上面の豊臣2面と共通する遺構面であり、これについては豊臣2面の項で詳述する。区画Cではピット群や土坑を検出しているほか、竈を数基検出している。区画Dでは規則性のある礎石を多数検出し、複数の建物跡が復元可能である。区画Eでは顕著な遺構は検出していない。

区画Fでは炉跡や土坑などの金属加工に関わる遺構群を検出している。

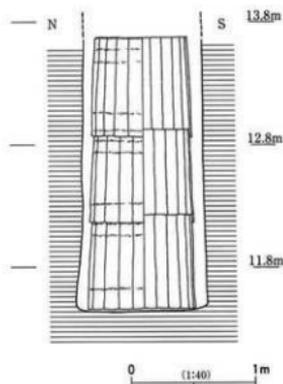


図33 井戸800

4. 豊臣2面（8層上面）

豊臣2面は先に報告した豊臣3面を厚いところで50cm前後の客土で整地して造成された遺構面である。ただし、この整地は調査地の全域にわたって均一に行われたものではなく、すでに記してきたように区画C～Fなどでは豊臣3面と間に顕著な客土がみられず、大きくは整地改変されることなく継続的に生活面として機能していたものといえる。

(1) 区画A

区画Aは豊臣3・4面同様に南西部が高く北東に向かって緩やかに傾斜している。大半が調査範囲外であり、南半部で土坑を数基を検出している以外に顕著な遺構はない。

(2) 区画B

区画Bは豊臣4面と同様に隣接する区画AおよびCよりも高い。標高は14.6m～15.4m前後であり、南北方向の溝576を挟んで東側が20cm前後高い。区画Aとの境界部分には直径50～70cmを測るピット列を検出している。5間分を検出したのみであるが、1本柱の塀であったと考えられ、当該区面の東を画するものと考えられる。また、西側の区画Cとの境界部分では南北方向の区画溝を検出している。

当該遺構面では比較的多くの遺構が検出されており、木組み護岸を有する溝・竈・埋桶・石敷遺構・土坑などを確認している。なお、当該区画においても散漫に分布する礎石を確認しているが、いずれも建物跡を復元するまでには至っていない。

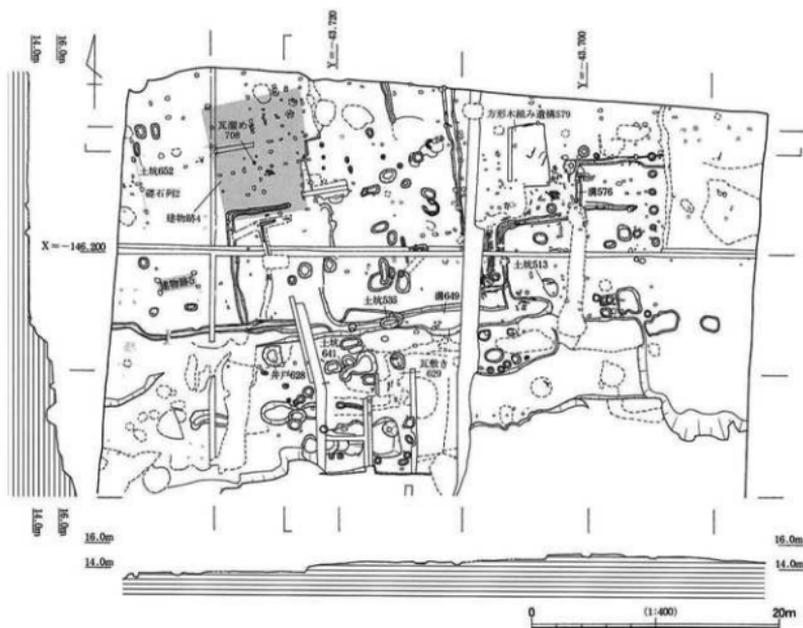


図34 豊臣2面（B地区：8層上面）

溝506・溝550・溝555・溝580は当該区画内を正方位で、直角に接続しながら区画Aとの境界部分から南東に向かって掘削された溝である。底面のレベルは地形と同様に東側の溝580が最も高く、南東の溝506が最も低い。基本的には杭と板材を用いて護岸を行うが、溝580では顕著ではない。なお、これら一連の溝は最終的には南側で検出した基幹排水路である溝569に接続する。

竈は削平等によって残りの悪いものもあるが、竈509・竈527・竈553・竈544・竈572を検出している。このうち、竈509・竈553・竈572は1連の竈であるが、土坑に切られるなどして遺存状態は悪く全容は不明である。一方、竈527・544としたものは、当該区画の北東部で検出したものであり、東西に長い矩形の土坑の

東側に2連の竈が造り付けられ(竈544)、南辺の東寄りに2連の竈が造られている(竈527)。なお、土坑の南辺、すなわち竈527の前面には細い角材を利用した杭が打ち込まれ、両竈の焚き口を塞いでいる。したがって、最終的には竈527は使われていなかった可能性が高く、東辺に造られた竈544が同じく2連で規模が大きいことなどを勘案するならば、造り替えが行われたものと判断できる。竈544は西側に焚き口を向ける2連の竈である(図37)。いずれの竈ともに床面の左右両側には凸面を上方向に向けた丸瓦2本を連結した状態で敷いている。

石敷き523は溝555の西側で検出した南北方向の石敷き遺構である(図35)。南は溝506までのびるが、北側は溝550と接続するコーナー付近で途切れている。南北約4.5m、幅0.6m前後で、拳大から人頭大前後の大きさの石をレベルを揃えて並べている。

また、直接的には連続しないものの、北側では溝550に沿うかたちでほぼ同じ大きさの石が並んだ部分があり、周辺では抜き取り痕跡を見出すことはできなかったが、本来は

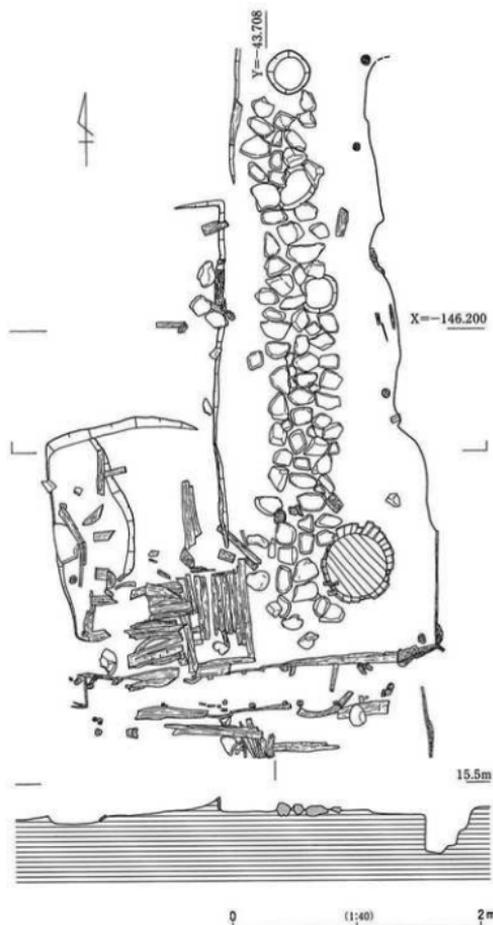


図35 石敷き523

東に折れて連続していた可能性もある。南側は上記のように溝506の北側で収束しているが、この西側では石敷きと同一レベルで建築部材などの角材が敷き詰めた状況で検出されている。この木材を敷いた遺構は幅約0.6mで西側に約1mのびて途切れるが、区画Cにつながる道であったと考えられる。

方形木組み遺構579は当該区画の北西において検出したものである。南北約5.1m、東西2.5m以上の矩形の土坑の壁面をコの字状に板材で護岸した遺構である。深さは南側で約0.4m、北側では約0.1mを測る。東辺では長さ2mを超える板材2枚が用いられている。

なお、当該遺構は豊臣4面として調査を行った建物跡1の礎石列とほぼ正確に重複する。したがって、先に建物跡1として報告を行った礎石建物跡に付随する遺構である可能性が高く、この場合、建物跡1は当該遺構面に帰属するものとなることを付記しておく。

このほか、ピットや土坑を検出している。ピットのうち、溝569の南側で検出したピット565およびピット567は礎石が据え付けられているが、周辺に対応するものが見出せず、上部構造は不明である。土坑は南半部から検出したものが多く、その大半は廃棄土坑と考えられるものである。

溝580の北側では掘り形と護岸板材の間から密教具の一つである六器と備前壺、青花皿が正置した状態で出土しており、状況から意図的に置かれたものとみて**祭祀遺構609**とした(図38)。

(3) 区画C

区画Cは標高14.2m～14.7mを測り、全体として平坦である。区画Bとの間では南北の両者を区画する溝650を検出している。また、南側は東西方向の溝649で区画されている。

中心部を除いて礎石と考えられる石材を散漫に検出しているが、規則的に配列されたものは見出しがたく、建物跡を復元するまでには至っていない。そ

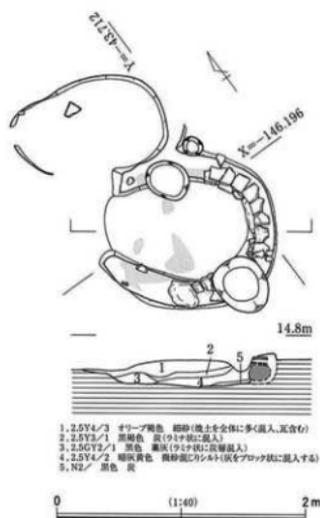


図36 竈651

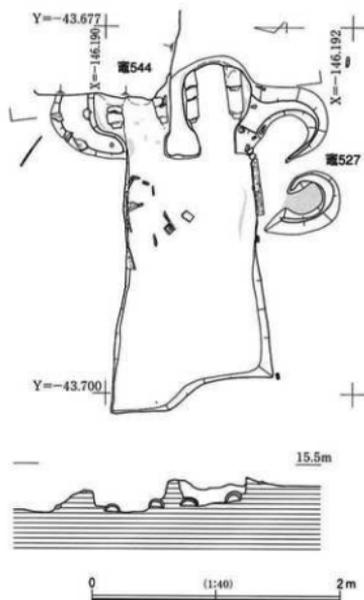


図37 竈527-544

のほかには、ビット・溝・土坑・竈等を検出している。

土坑は南半部を中心として検出している。いずれも廃棄土坑と考えられるものであり、いくつかの土坑には切り合い関係がみられる。

竈は北西部から竈651・竈664・竈665を検出している。いずれも上部は削平されている。このうち、2連の竈651(図36)と竈664は南北方向に直列し、いずれも北西方向に焚き口を向けている。竈651のうち、南側の竈は大振りで壁体の中に人頭大の石や瓦片を埋め込んでいる。瓦片は残存で3段前後積み上げていることが確認でき、一部では軒平瓦が瓦当面を小口に向けた状態で埋め込まれている。

その他、南半部では木樋646を検出している。この木樋は他の遺構とは異なり正方位を指向するものではない。板材をコの字状に組み合わせたものであり、底面のレベルは南西側が1cm低いみでほぼ水平である。長さ1.25m、幅12cm、深さ約5cmを測る。側板の上には釘が残っており、転用材である可能性もわずかに残すが、本来は蓋をもつ暗渠であったと考えられる。

先に報告した竈651および竈664に近接するとともに、竈の開口方向に直交する方位をもっていることから、台所の水場に関わる遺構と考えられるが、検出レベルがやや高く、周辺からも関連する遺構は見出しがたい。

また、溝740は丸瓦2点を凹面を上方に向けて溝底に敷いている。先の木樋646とは異なり、正方位を指向するものであり、本来は上面にも丸瓦がふせられた暗渠であった可能性が高い。

(4) 区画D

区画Dは標高13.6m～13.8mを測る。東側の区画Cとは大きな段差で画されており、南側は溝643で区画されている。また、西側の区画Dとの境界部分には建物跡と軸線を合わせた礎石列を検出している(礎石列2)。

当該区画では北東部と南西部を中心に礎石を多数検出しており、やや不確定要素を残すものの、数棟の建物跡が復元可能となっている(建物跡4・5)。また、南半部で溝、土坑等を検出しているほか、北半部でも土坑群および小形の方形木組み遺構を検出している。このほか、検出レベルはやや高いが埴を敷き並べた遺構等を検出している。

建物跡4は北東部で検出した南北棟の礎石建物跡である。建物跡の復元には検討の余地も残すが、現状では矩形で完結する礎石列を抽出して建物跡とした。規模は南北約9.8m、東西約6.5m、面積は63.7㎡を測る。付図4に示したように東西を正確に二分した軸線上に南北方向の礎石列が直列しているほか、同様に北辺から南に約5.9mで建物内部を東西方向に横断する礎石列を検出している。これら建物内を縦横断する柱列は間仕切りに関わるものと考えられ、建物が大小4つに区画されていた状況を取看することができる。

なお、上記の4つの区画のうち、北東の区画のみは内部にも外周の礎石に対応するように礎石が配置されている。これらは柱筋との関連などから床東柱の礎石である可能性が高く、したがって、この区画は床貼りの居住区画であったと判断する。一方、他の3区画については内部に規則性をもった礎石列が検出されず、土間であった可能性も示唆されるところである。

なお、当該建物跡の東辺礎石列の東側約1mからは平行する南北方向の礎石列が検出されており、何らかの付帯施設が付設されていたものと考えられる。そのほか、建物の北側では南北中軸線の延長部分に礎石が並んで検出されており、北側にも付帯施設もしくは別の区画が付設されていた可能性がある。

建物跡5は当該区画の南西から検出した礎石列である。西辺は後述する礎石列2の延長線上にほぼ一致

する。礎石は東西に長い1間×1間のみであるが、軸線が先に報告した建物4と共通している上に礎石の大きさがまとまっていることから、何らかの上屋構造物の基礎と考えられるものである。規模は東西が約3.0m、南北が約1.1mである。周辺からは関連する遺構が検出できなかったが、これで完結しているのであれば、門のごとき上屋構造物を想定するのが穏当であると考えられる。

礎石列2は区画Eとの境界部分で検出した南北方向の礎石列である。3間分の礎石を検出しており、最北から最南の礎石までの距離は6.3mを測る。南側の延長線上ではやや距離を置いてやや小振りの礎石を検出しているが、連続するものか否かは判断できない。西側は調査範囲外であるために、建物の東辺である可能性を残すが、上記のように区画Dと区画Eとの境界に位置することなどから、一本柱の塀などの構造物であった可能性を考えておきたい。

溝686と**溝685**は逆L字形で直角に曲がって接続し、南端の溝643につながる溝である。区画B内で検出した溝群と同様に基幹排水路である溝643に流れ込んでおり、区画内の排水を意図して掘削されたものといえる。なお、建物跡4とは重複関係にあり、時期的には古い。

同様にそのやや上層からはやや南東にずれて逆L字形につながる**溝661**と**溝674**を検出している。残りは良くないが、接続部分のコーナーでは木組みによる護岸がわずかに残り、南側では溝643に接続している。建物跡4とは重複せず、同時期に存在した排水路である可能性も高い。

また、溝661の延長線上からは方形の埴を敷き並べた遺構である**埴敷き672**を検出している。埴は長辺27cm、短辺23cmで7枚が1.9mの延長で直線的に並べられている。遺構の性格は不明である。

方形木組み遺構673は建物跡4の中央やや北寄り位置する。建物跡4の南北中軸線上の礎石間で検出したものである。平面形はほぼ正方形を呈し、一辺約34cm、深さ約12cmを測る。周囲を瓦片もしくは板石で囲んだ遺構であり、底面には炭化物が堆積している。囲炉裏である可能性もあるが、柱筋と一致する点を考えると、建物跡4とは直接的に関連するものではないものと考えられる。

(5) 区画E

区画Eは標高13.5m前後を測る。大半が調査範囲外であるが、先に報告した区画Dとの境界部分からは礎石列2を検出している。この礎石列2は建物跡である可能性を残すものであるが、区画DとEとを区画するものである可能性が高いと判断している。

当該区画内では礎石と考えられる石材が散在するが、大半が調査範囲外であることもあり、規則性を見出すことはできない。このほか、全体として検出遺構は少なく、土坑および埋構を検出したに留まる。

埋桶663は当該区画の南東隅から検出したものである(図40)。直径約71cm、深さ約48cmの桶を埋め込んだ遺構である。底面付近には黒褐色細砂が堆積しており、当該層中からはウリ科の種が出土している。区画Eの南東隅の最も奥まった場所からの検出であることや、埋土中に種子が含まれることなどから、科学的分析は行っていないが、トイレ遺構である可能性が高いものである。

(6) 区画F

区画Fは谷部法面を削り出して造成した区画であり、必ずしも水平の平坦面とはなっておらず、標高は15.4m～17.7m前後と幅がある。

当該区画中からは区画中央に密集してピット・土坑・溝・井戸のほか、炉や階段状の遺構を検出している。

検出したピットには規則性をもつものは見出しがたいが、土坑538の南側で東西に並んで検出した2基のピットは直径約45cm、深さ60cmを超えるものであり、何らかの上屋構造の柱穴とみられる。また、礎

石と考えられる石材が散在しているが、規則性を見出すことはできず、したがって上屋構造を復元するま
 だには至らない。

炉跡と考えられる遺構は区画の西半部から炉585および炉540を検出している。なお、炉540について
 は先行して掘削した試掘トレンチによって大半を破壊してしまったこともあり、全容は不明である。ただ
 し、壁面がほぼ垂直に立ち上がる炉跡であり、強い被熱により赤変している。残存部分からみて、内径90cm
 前後の炉であった可能性が高い。なお、試掘トレンチの西側壁面にも同様に被熱による赤変部分がみられ、
 先の炉540とはレベルが合わないことなどから、詳細は不明ながらも別の炉がもう1基、西側に並列して
 造営されていたことがわかる。

炉585は区画の南西から土坑群とともに検出したものである。直径約90cmの円形を呈するものであり、
 深さは約45cmを測る。炉壁は厚さ20cm前後を測り、内面は被熱により赤変する。北西から検出した東西
 約3.0m、南北約1.9m、深さ約0.7mを測る断面U字形の土坑541は埋土の大半が混じりのない炭化物
 で構成されており、炉跡585との位置関係からみて、炉の操業によって生じた炭化物を処理するための土
 坑であったと考えられる。

この他、金属生産に関わる遺構と考えられるものとして炉585の北側約1.5mからは土坑634を検出し
 ているほか、当該区画の南東隅からは土坑625を検出している。

土坑634は直径50cm弱の円形を呈する浅い土坑であり、埋土には多量の炭化物が含まれている。直接的
 な被熱痕跡は看取できない。土坑625は直径約25cm、深さ約10cmの円形を呈する土坑である。埋土は2
 層に分かれ、下層は灰色細砂、上層は混じりのない炭化物層である。壁面にはわずかではあるが、被熱に
 よる硬化と変色がみられる。土坑として報告しているが、埋土や被熱痕跡からみて金属加工に関わる遺構

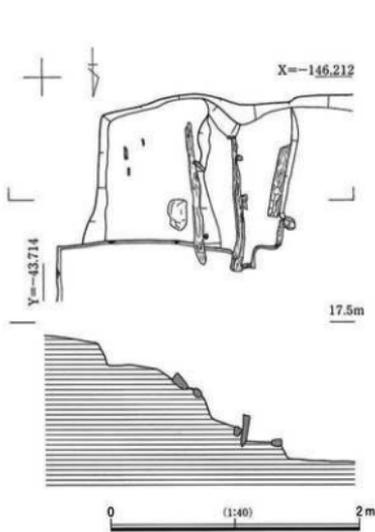


図39 階段状遺構 687

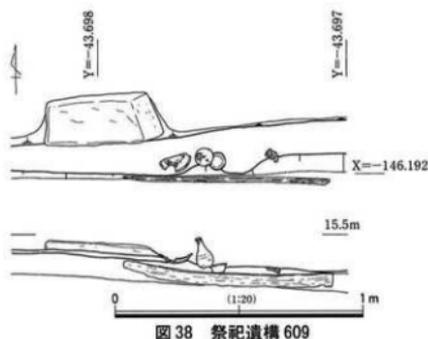
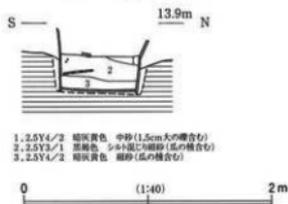


図38 祭祀遺構 609



1. 2.5Y4/2 暗灰黄色、中砂(1.5cm大の礫含む)
2. 2.5Y3/1 暗褐色、少中礫(100μm)の礫含む
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色、細砂(5μmの礫含む)

図40 埋桶 663

である蓋然性が高く、あるいは炉跡の基部である可能性も残している。

このほか、廃棄土坑と考えられる土坑群を多数検出している。このうちの土坑538は当該区画の南側で検出した土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、東西約5.9m、南北約3.3m、深さ約1.6mを測る。埋土中には多量の炭化物を含む。当該土坑からは次節以降で報告するように多種多様な遺物が多量に出土している。

井戸は西半部から井戸628を検出している。井戸628は当該区画の北西から検出したものである。素掘りで深さは約1.5mを測る。形状から井戸として報告しているが、底面は湧水層までは達しておらず、厳密には水溜り的な機能をもつ遺構であったと考えられる。埋没は人為的な埋め戻しによるものであり、埋土は地山起源の黄褐色シルトと炭化物層の互層である。

また、これ以外に特筆すべき遺構として階段状遺構687がある。階段状遺構687は区画東端の北寄りで検出したものである(図39)。地面を階段状に掘り込んで各段のコーナー部分に丸太を敷き、それを木杭で固定している。全体の幅は約1.2mで、各段の幅は約30cm、高さは15～20cm前後である。階段状遺構としているが、東側の高い区画へとつながる階段である蓋然性はきわめて高いものといえる。なお、この階段で接続する東側の区画からは、後述するようにトリベ集積遺構491を検出しており、金属加工に関わる一連の工房が存在していた可能性を示唆する点で重要な遺構である。

5. 豊臣1面(7層上面)

豊臣1面は7B地区において検出した豊臣期の遺構面である。先に報告した豊臣2面を厚いところでも10cm前後の客土で整地造成した遺構面である。これまでに報告してきた遺構面と同様に、この整地は調査地の全域にわたって均一に行われたものではなく、顕著な客土がおよばない部分も多く、したがって、下層の豊臣2面との間に変化のみられない部分もある。

また、7A地区については冒頭で記してきたように後世の削平などの改変が著しく、掘削深度の深い遺構のみを検出したのみである。図41には7A地区の平面図も含めた全体図を掲げているが、7A地区の遺構平面図は7B地区の遺構面とは厳密な意味では直接的に対応するものではなく、地山面で検出した遺構の平面図を接合したものである。また、同一図面上で表現しているが、7B地区検出の井戸487および井戸518は5・6層上面切り込みの井戸であり、後述する豊臣0面に対応する遺構面である。

本来であれば7A地区の報告を先行すべきところかもしれないが、ここではこれまでの報告との整合を保つため、7B地区の報告を区画毎に先行する。なお、これまで7B地区で検出した区画A～Fまでとして報告を行ってきたが、当該遺構面に関しては区画Bの南、区画Fの東側の高まり部分で削平を免れた遺構を検出しているため、この部分を区画Gとして報告することにしたい。

(1) 区画A

区画Aは標高14.7m～15.3mを測り、南西から北東にかけて傾斜している。区画Bとの境界部分には南北方向の区画溝である溝524を検出している。ただし、この溝524は幅80cm前後を測るものであり、調査地北端から約16mで東側にやや湾曲して途切れている。底面のレベルは北側が低い。

当該区画は上層からの攪乱がおよんでいることもあるが、顕著な遺構は検出できなかった。

(2) 区画B

区画Bは他の遺構面と同様に隣接する区画AおよびCよりも高い。標高は15.1m～15.6m前後である。先に報告したように区画Aとは溝524によって区画される。区画Cとの間には溝などは検出できなかったが、南北方向の明確な段差がある。当該区画からは建物跡を含む礎石群のほか、ピット・土坑・瓦敷き遺

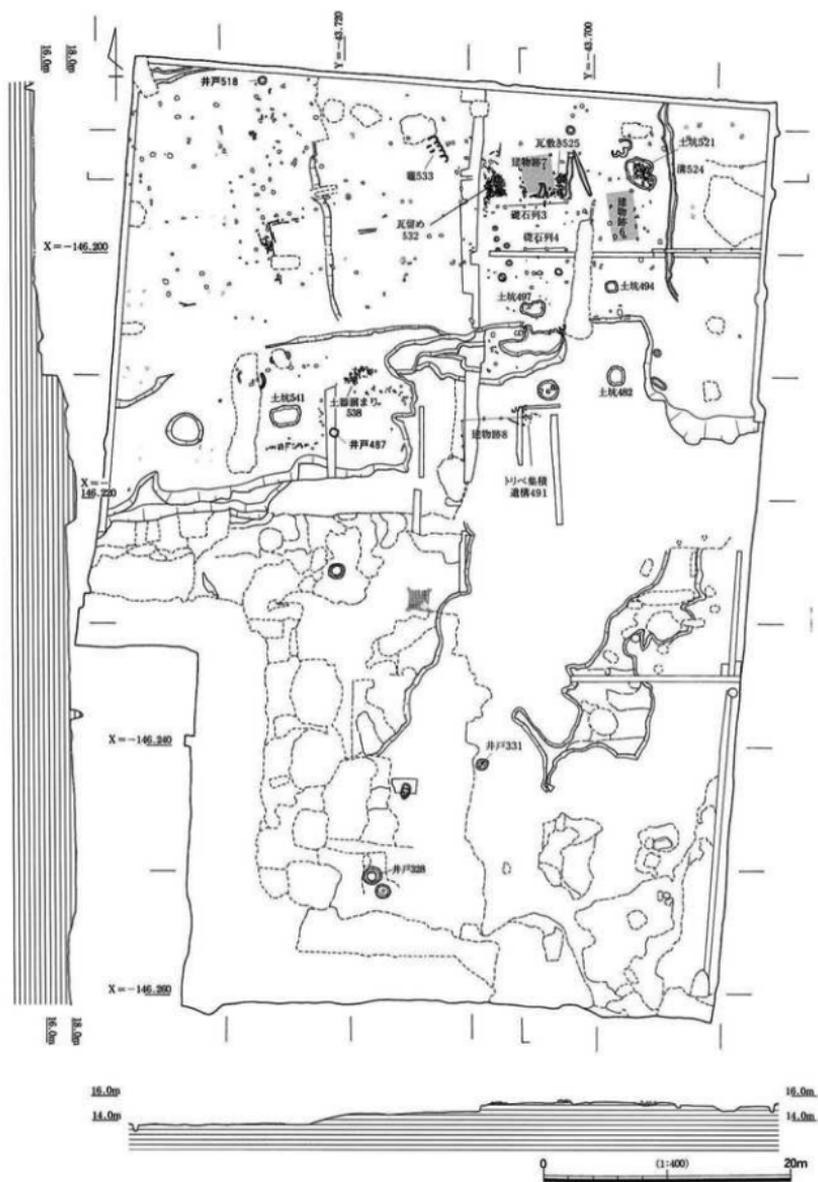


图41 豊臣1面 (A地区:地山面,B地区:7層上面)

構・瓦溜め・竈・木組み遺構・埋桶などを検出している。

礎石は区画の全域から検出している。そのなかには東西もしくは南北方向に直列するなどの規則性をもつ礎石列を抽出することが可能であり、2棟の建物跡を復元している。

建物跡6としたものは当該区画の東側で検出した南北棟の建物跡である。建物跡としての復元にはやや強引な部分もあるが、土坑521の南側で検出した南北に直列する礎石列はほぼ等間隔で配置されており、それと平行する西側の南北方向の礎石列を西側桁行として建物跡を復元している。必ずしも礎石は整然とは並んでいないが、桁行は西側で4間、東側で2間、梁行は南北とも2間である。規模は南北約4.2m、東西約1.8mを測る。面積は計算上約7.6㎡を測る。なお、この建物跡6は後述する建物跡7とは軸線を一にしている。

建物跡7は当該区画の中央やや西側で検出した建物跡である。北側および西側で礎石が欠落していたりして不明瞭となっているが、後述する瓦敷き525などとの関連から建物跡であることは確実である。規模は南北約2.9m、東西約2.5mで、計算上の面積は約7.3㎡を測る。東辺は2間で各礎石間の心々距離は1.5m弱で等分されている。東辺と同様に残りのよい南辺も2間で等分されており、南北長よりも短い点からみて東西が梁行であったと考えられる。なお、最も遺存状態のよい南東コーナー付近では礎石間をつなぐ

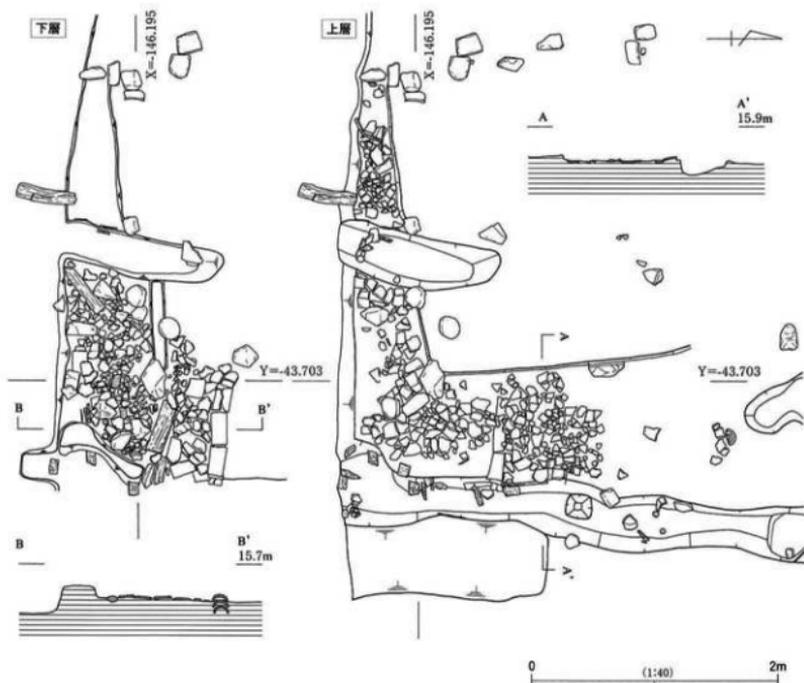


図42 瓦敷き525

ように割竹が敷かれている。

また、当該建物の南東では瓦敷き525を検出しており、礎石列との関係から当該建物に付帯する遺構であることは確実である。同様に瓦敷き525と東側の溝529とは切り合い関係がみられないことや丸瓦を重ねた暗渠状の遺構がこの溝に向かって流れ込んでいることなどから、建物跡7とは軸線を異にするものの、関連する溝であると判断できる。

このほか、建物跡としては復元できなかったが、建物跡7の南側では東西方向に直列する2列の礎石列を見出すことが可能である(礎石列3・4)。北側の礎石列3は4つの礎石が東西方向に直列するものであり、長さは4.8mを測り、約1.6mの等間隔で並んでいる。南側で検出した礎石列4は3つの礎石が東西方向に直列するものである。両礎石列は軸線が合うとともに礎石の配列も対応している状況を取査することができる。これを建物跡とすると最も小さく見積もっても、東西約4.8m、南北約3.6mの東西棟建物となる。ただし、礎石列の方向は先に報告した建物跡6・7とは異なり、正方位に近い方向を指向している。

瓦敷き525は建物跡7の南辺および東辺の外周から検出したものである(図42)。建物跡の周囲に平瓦細片を敷き詰めた遺構である。なお、建物跡7の南東コーナー付近のみは上下2層に瓦片が敷かれており、下層では瓦敷きの北端部分の東西方向に丸瓦が連結して並べられている。この丸瓦は凸面を上方向にした状態で3枚重ねになっており、東側で検出した溝529に向かって傾斜しており、排水を意図したものである可能性もある。

ピットのうち、西側で検出したピット495・496・504は約90cm間隔で南北に直列する。南北方向にはのびないが、先に報告した建物跡6・7と方向を一にしており、区画Cとの境界部分の施設である可能性もある。また、そのすぐ東側で検出したピット502およびピット508も同じ軸線で南北方向に並んでおり、何らかの構造物の柱穴であると考えられる。

土坑は廃棄土坑と考えられるものが多い。南西端部で検出した土坑503は竈493を壊して掘削された廃棄土坑であり、土坑501としたものは土坑503の東側肩部で柄杓や折敷、蓋などの木製品が集中して出土した箇所として別呼称を与えたものである。土坑521は建物跡6の北東から検出した浅い土坑である(図43)。わずかに陶磁器を含むものの、平瓦や丸瓦の破片が多量に出土している。また、北東側では瓦片に混じて銭貨が出土している。瓦片処理のために掘削された廃棄土坑であると考えられる。同様に建物跡7の西側で検出した瓦溜め532は土坑状にはならないが、平瓦や丸瓦の細片を集積した遺構である(図45)。瓦敷き遺構とは異なり、レンズ状に中心部が盛り上がった状態であり、 unnecessary になった瓦片を廃棄集積した遺構であると考えられる。

竈493は当該区画の南西の張り出し部分の東側で検出した大小2基の竈である。すでに報告してきた

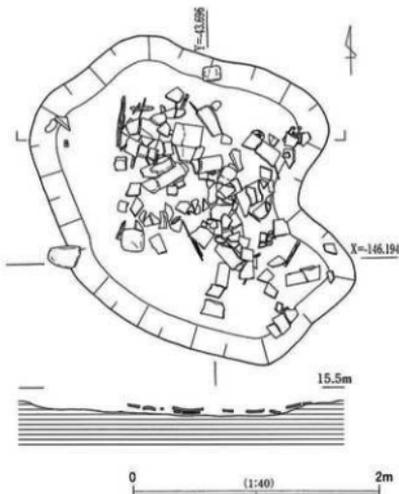


図43 土坑521

ように南側の竈は土坑503に切られており、一部が残るのみである。状況からみて西側が焚き口であったと考えられる。一方、北側の竈は小形で焚き口を北西方向に向けている。

直近で検出した土坑501では先に報告を行ったように柄杓や折敷、蓋などが出土しており、この張り出し部分が台所に関わる空間であったことを窺わせている。

木組み492は地山を削り込んだ法面の裾部を板材と杭を用いて土留めした遺構である。

埋桶500は区画の南西から検出した。直径60cmの桶を埋め込んだ遺構であり、深さは約50cmである。下層の石敷き523の一部を壊して掘り形が掘削されている。底面付近には黒褐色粘土が堆積し、細長い板材がまともって出土している。科学的分析を経たわけではないが、トイレに関わる遺構である可能性も高い。

埋桶534(図44)は区画の南東から検出したものであり、位置的には区画Aに帰属する可能性を残す。直径35cm、深さ26cmの桶を埋め込んだ遺構であり、桶の北側には口縁に接するように平瓦片が2枚敷かれている。埋土の最上層は地山を起源とする黄褐色シルト層であり、人為的に埋め戻された可能性がある。下層は先に報告した埋桶500と同様に黒褐色粘土が堆積しており、区画の中でも奥まった場所にあたることなどから、トイレに関わる遺構であると考えられる。

(3) 区画C

区画Cは標高14.7m～15.2mを測り、全体として平坦である。区画Bとの境界部分には50cm前後の段差がある。

礎石と考えられる石材を散漫に検出しているが、規則的に配列されたものは見出しがたく、建物跡を復元するまでには至っていない。そのほかには、ピット、土坑、竈等を検出している。

このうち、当該区画の東半部からは竈533を検出している。

竈533(図46)は南西方向に焚き口をもつ5連の竈である。竈自体の残りはさほど良くなく、南端の竈は部分的に検出したに留まり、さらに南に連続していた可能性も皆無ではない。個々の竈は壁体を共有しながら北西から南東に向かって並んでいるが、微視的にみると5連の竈は直列せず、やや円弧を描いて配置されている。同様に焚き口の方向も平行するのではなく、求心的に開口している。

壁体には平瓦の破片が埋め込まれているほか、袖の部分には木杭が打ち込まれている部



図44 埋桶534

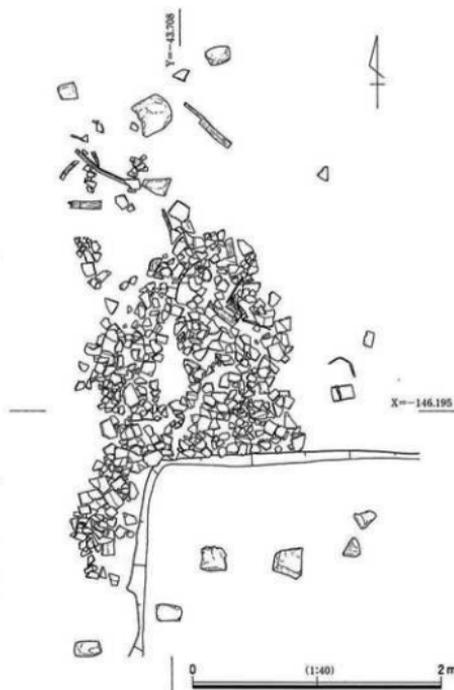


図45 瓦溜め532

分も看取される。なお、個々の竈を北から順に仮に①～⑤とすると、①が直径約50cmと大きく、次いで④および⑤が直径約35cmを測り、これらに挟まれた②および③は直径約30cmと小振りである。

なお、竈の前面には土手状の高まりがあり、①～③の前面には横方向の木材が敷かれている。また、この木材の西側では竈の基部と考えられる円形の被熱痕跡を検出しており、層位関係からみて、時期的に古い段階の竈であると考えられる。そのほか、最も北側の①とした竈では薪が数本出土し、竈の内部にあたる部分のみが炭化している。

なお、当該区画の南東隅で検出した井戸520は5・6層中に掘り形が確認できることから、当該面掘り込みの遺構ではなく、上層からの井戸である。したがって、当該井戸については後述する。

(4) 区画D

区画Dは標高13.4m～13.8mを測る。東側の区画Cとは比高差50cm前後の大きな段差で画される。北側は東西方向の溝である溝584を検出して。すでに記したように、この溝584は幅60cm前後と考えられる谷の中軸線近くにあっている。また、幅約60cm、深さ約40cmと規模的にも他の溝よりも大きく、板材による護岸がみられるなどの点で他の溝と様相を異にしている。したがって、この溝については大半が調査範囲外ではあるが、谷心線に造られた街路の南側の側溝である可能性が高いものと想定している。

当該区画からはほぼ全域で礎石を検出している。ただし、礎石の大半はすでに豊臣2面で報告を行った建物跡4の礎石が表出したものである。したがって、別の遺構面として報告を行っているが、基本的な景観については変化がないものといえる。

このほかでは、瓦敷き543を検出している。当該遺構は先に報告を行った溝674の西側で検出したもの

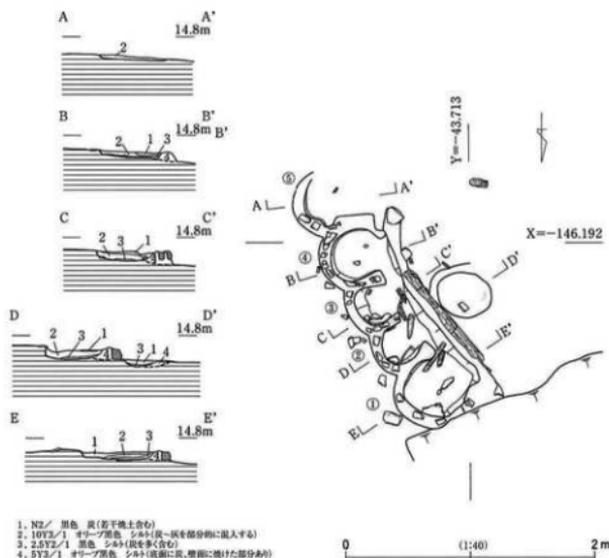


図46 竈533

で、平瓦等の細片を敷き詰めている。位置の関係および層位的関係からみて、溝674と関わる遺構である可能性が高い。

なお、当該区画の北側で検出した井戸518は区画Cで検出した井戸520と同様に5・6層中に掘り形が確認できる井戸である。したがって、当該遺構については豊臣1面に帰属する遺構ではない。したがって、当該井戸については後述する。

(5) 区画E

区画Eは標高13.6m前後を測る。大半が調査範囲外であることもあり、顕著な遺構は検出できなかったが、基本的な景観は豊臣2面と大きく変わるものではない。

(6) 区画F

区画Fは谷部法面を削り出して平坦面を造成した区画である。溝、土坑、瓦敷き、井戸などを検出している。

溝542とした遺構は法面の下端で検出した東西方向の浅い溝に瓦の細片が堆積したものである。浅い溝の中に瓦片が廃棄された遺構とみることできるが、一方では瓦を敷き詰めた道状の遺構である可能性も残している。

瓦敷き629は瓦片を敷き詰めたものである。必ずしも遺存状態はよくないが、東西方向に帯状を呈して延びている状況を看取することができる。先に報告を行った階段状遺構687の西側延長線上に位置することなどからみて、道の路面に敷き詰められたものである可能性もある。

土坑541はすでに豊臣2面で報告した通りである。土坑589および土坑590は擾乱によって部分的に残るのみであるが、両者ともに埋土の下層が混じりのない炭化物層で占められている。底面付近は弱いながらも被熱痕跡が認められ、金属加工に関わる遺構である可能性を残す。

井戸487は先に報告した井戸518や井戸520と同様に上層の客土層上面から切り込まれた遺構であり、当該遺構面に帰属するものではない。

(7) 区画G

区画Bの南側で谷部法面を凸形に掘り残した部分を便宜的に区画Gと呼称しておく。すでに再三にわたって記してきたように調査地南半の7A地区は後世の削平が著しく、豊臣大坂城段階の遺構は井戸などの掘削深度のある遺構のみを検出したに留まる。しかしながら、ここで区画Gとした部分は北側に向かって緩やかに落ち込んでいく谷の法面にあっていたこともあって、わずかな面積ではあるが豊臣大坂城段階の遺構がかろうじて遺存している。

また、すでに報告してきたように豊臣2面では区画Fから当該区画へと続く階段状遺構を検出している点を改めて付記しておくことにしたい。

この区画Gからは礎石列、土坑、井戸、トリベ集積遺構を検出している。このうち、土坑482および井戸485は地山面での検出であり、掘り込み面が確定できず、厳密にいうと帰属する時期が不明である。ただし、土坑482に関しては埋土の大半が炭化物で占められている上に木製品にも焼けたものが含まれている。このような遺構のあり方はこれまでに報告してきた遺構面検出の遺構とは様相を異にしている。短絡的に結びつけるわけにはいかないが、当該遺構については大坂夏の陣以降に埋没したものである可能性もあり、時期を特定する遺物に欠けてはいるが、豊臣0面において報告することにしたい。

一方、トリベ集積遺構491はその埋土の上層に据えられた礎石列を検出しており、層位的に確実に2時期に分かれることが確認できる。したがって、ここでは下層にあたるトリベ集積遺構491を豊臣1面対応

として報告し、その上層にあたる礎石列については豊臣0面として報告することにした。

また、土坑536とした遺構は削り込まれた谷部法面に多量の遺物が廃棄された状態で検出されたものであり、土坑として報告するが、土器溜まり的な性格を有する遺構といえる。平面的な位置は区画Cの南西隅ともいえるが、遺物の廃棄は上方、すなわち南側から行われている状況が看取されることから、当該区画の遺構として報告する。

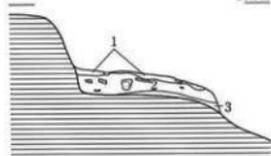
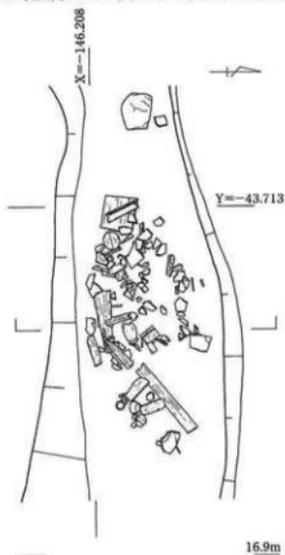
トリベ集積遺構491(図47)は南北約2.1m、東西約2.8m、深さ約15cmの不定形落ち込みからトリベや輪羽口などが出土した遺構である。南側および北東側は後世の造成によって削られており、本来はもう少し広がっていたものと考えられる。埋土は地山起源の黄褐色シルトを基本としているが、多量の炭化物が層を成して堆積している。埋土中からはランダムにトリベが出土し、北端ではままとまって集積した部分も看取される。出土遺物の多くは小形のトリベであるが、輪の羽口や下駄、木簡などの木製品も出土している。

底面や壁面には直接的な被痕痕跡は見られず、当該遺構そのものが、金属加工に関わる工房などに関わる施設であるとは考えがたい。下駄などを含むことや炭化物を多量に含むことなどから、不要となった金属加工に関わる道具類を炭とともに廃棄した土坑であると考えておきたい。



- | | |
|------------------------------------|--|
| 1. 2.5Y3/3 黄褐色 細砂混じりシルト(一部灰含む) | 8. 10YR4/1 黄褐色 シルト-細砂(地山をカットした遺土) |
| 2. 10YR4/3 におい黄褐色 シルト(粘土の沈着層あり) | 9. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 微砂混じりシルト(細砂-種々のフロックを混入する。一部灰含む) |
| 3. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト(粘土を少量含む) | 10. 10YR6/8 暗黄褐色 細砂混じりシルト(地山をカットした遺土) |
| 4. 10YR5/4 におい黄褐色 シルト(粘土を大量に含む) | 11. 2.5Y5/2 暗灰褐色 シルト(粘土を大量に含む) |
| 5. 10YR5/8 黄褐色 シルト (地山をフロック状に混入する) | |
| 6. 3Y5/2 暗オリーブ色 シルト(粘土を混入する) | |
| 7. 2.5Y5/6 黄褐色 細砂(シルトをフロックで混入する) | |

図47 トリベ集積遺構491



- | |
|--|
| 1. 2.5Y3/2 黄褐色 シルト混じり細砂(黄褐色シルトをフロック混入) |
| 2. 2.5Y3/1 黄褐色 中砂混じりシルト |
| 3. 10YR1.7/1 黒色 シルト混じり細砂 |

図48 土坑536

なお、詳細は遺物の報告で記述するが、当該遺構から出土したトリベには金の細粒が付着しているものが、少なからず認められ、階段状遺構687でつながる区画Fとの関係においても重要な意味をもつ遺構である。

土坑536(図48)は先に記したように、段々に造成された谷部法面下端の平坦面に多量の遺物が廃棄された状態で検出されたものである。東西約2m、南北約1mの範囲で土器、陶磁器、木製品が集中して出土したものであり、一括性の高い遺物群であるといえる。

井戸485はトリベ集積遺構491の北東から検出したものである。直径約1.7mを測る掘り形をもつ井戸であるが、井戸枠は抜き取られ、最終的には人頭大の石とともに人為的に埋め戻されている。完掘することができず、層的にも出土遺物からも時期決定は困難ではあるが、ここで取り上げておく。

(8) 7A地区の遺構

これまで7B地区において検出した遺構を区画ごとに記述してきた。すでに冒頭でも記したように調査区の南半部にあたる7A地区については徳川大坂城の築造に関連すると考えられる大規模な造成によって、上面を大きく削平されていることが明らかとなっている。したがって、当該調査区では掘削深度の深い井戸などの一部の遺構が遺存するのみであり、上部を削平されていることもあり、本来の掘り込み面が不明なものが多い。

しかしながら、後に報告する井戸247などは地山面での検出ではなく、4c層とした客土を切り込んでいる。この井戸からは唐津焼の陶器が出土するなど、豊臣後期以降の井戸であることが判明する事例である。一方、井戸328、井戸329、井戸331とした遺構は上部を大きく削られ、地山面においてはじめて検出した井戸であり、層的にも年代を決定することが困難な遺構群である。

このうち、井戸331については年代決定に足る出土遺物もなく、帰属する時期を決しがたい。しかし、井戸328が出土遺物の組成からみて豊臣前期におさまるものである可能性が高いことから、あわせてここで報告しておくことにしたい。

井戸328(図49・52・53)は井戸329とともに7A地区の南西から検出したものである。上面は大坂家庭裁判所の基礎工事に伴って削平されており、地山面での検出した井戸である。検出面のレベルは17.3mである。直径1.44mの円形の掘り形のほぼ中心に桶を逆位で連結した井戸枠を埋め込んでいる。

上記のように上部は大きく削平されていることから、元来の掘り込み面の高さは不明である。しかし、完全に形状を残す桶の上方にわずかではあるが、桶の側板の一部が残っており、低く見積もってもさらに1m前後高いところから掘り込まれていたものと考えられる。

なお、この井戸328については断ち割り調査の過程で非常に深い井戸であることが判明し、ライナープレートを用いた調査工法に切り替えて底面までの調査を行っている。

井戸枠は桶で16段分を確認している。桶は16段目のものが小振りである以外は直径約0.76m、高さ1.20mを測るほぼ同一規格のものである。なお、16段目の桶は直径60cm、高さ53cmである。底面の調査は湧水が激しいために充分ではないが、最大で拳程度の河原石を敷き詰めていることを確認している。底面のレベルは2.9mを測り、検出面からの深さは14.4mとなる。すでに記したように上部が1m前後、削平されていることを考えると、少なくとも15mを超える深さの井戸であったことになる。

当該井戸からは多くの出土遺物があるが、遺物の取り上げは井戸枠の桶1段を単位として行い、すべての埋土を水洗して微細遺物の抽出も行っている。遺物の報告において「3段目」や「11段目」と表記しているのは、上記のように井戸枠に用いられた桶の上からの段数を示しており、したがって、段数の数字が

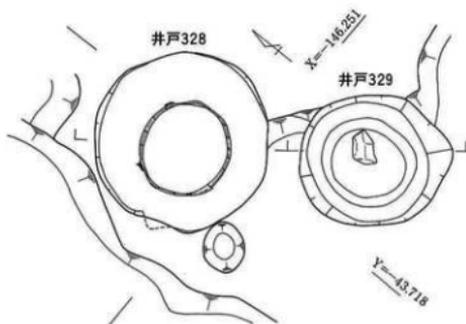


図49 井戸328・329

1. 5Y3/2 オリーブ灰色 細砂混じり粘土(黄褐色の粘土ブロックの混入が多い、反含む)
2. 2.5Y3/1 赤褐色 細砂-粗砂混じり砂(土行多し混入)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粗砂(シルトブロック多し混入)

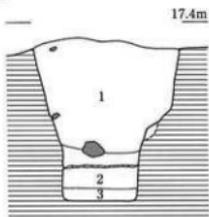
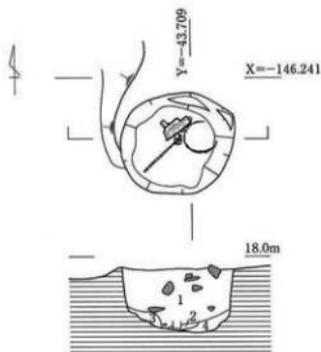


図50 井戸329断面図

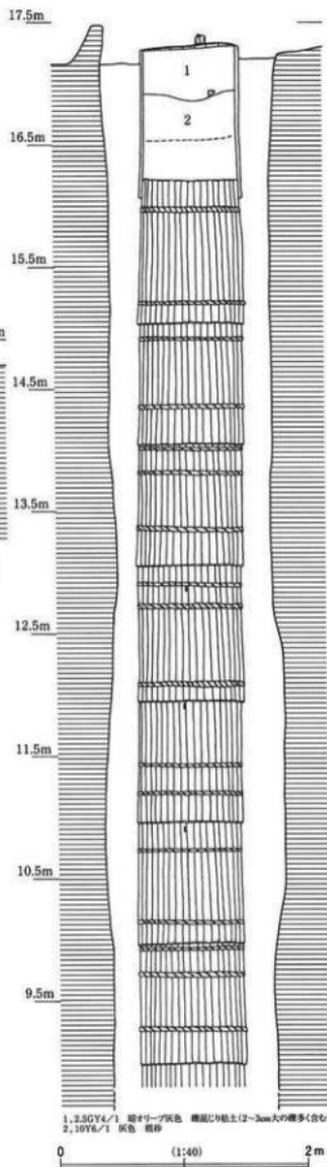
0 (1:40) 1m



1. 10Y4/1 灰色 5-6mm(泥若干混入、塵多し混入)
2. 9G6/1 緑灰色 微砂混じりシルト
3. 10Y2.5/4 褐色 微砂混じりシルト
4. 10Y2.5/6 黄褐色 微砂混じりシルト

0 (1:40) 2m

図51 井戸331



1. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 細砂混じり粘土(2-3mm大の塵多し含む)
2. 10Y6/1 灰色 粗砂

0 (1:40) 2m

図52 井戸328断面図

多くなればなるほど井戸としては下層にあたることになる。

なお、埋土は基本的には人為的な埋め戻し土であると考えられるものである。遺物は土器・陶磁器に関しては細片を含めば、破片数では2000点近くの出土が確認できる。各段における出土破片数は2段目が5点、3段目が124点、4段目が1点、5段目が178点、6段目が127点、7段目が76点、8段目が127点、9段目が131点、10段目が264点、11段目が118点、12段目が144点、13段目が0点、14段目が254点、15段目が92点、16段目が47点である。4段目や13段目からの出土遺物が少ない以外にはさほど集中して出土するような傾向は看取できず、細片が多いのも特徴といえる。また、底面からもまとまった形での遺物の出土は確認できなかった。

出土遺物のうち、土器・陶磁器類では唐津焼や志野焼、織部焼などはまったく含まれず、豊臣前期に帰属する井戸であるといえる。

井戸331(図51)は7A地区のほぼ中央で検出したものである。上面は後世の削平により大きく削り取られており、地山面で検出した遺構である。検出面のレベルは18.0mである。上部が大きく削平されている可能性を考慮して井戸としているが、湧水層には達しておらず、土坑とすべき遺構かもしれない。

平面形は円形を呈し、直径85cm前後、深さは残存で約50cmを測る。埋土は大きく上下層に分かれ、上層は礫を多く含む人為的な埋め戻し土である。一方、下層は当該遺構が存続していた段階での埋土と考えられ、出土遺物も底面直上の下層からのみ出土している。

出土遺物は底面から竹製の柄杓のほか、直径24cmを測る竹のタガのみが遺存した状態で出土している。

6. 豊臣0面(5層・4c層上面)

豊臣0面は7A地区では4c層上面、7B地区では谷部を埋める分厚い客土層である5層上面を遺構面としたものである。

7B地区ではこの客土を挟んだ下層からは唐津焼・志野焼・織部焼はまったく出土せず、一方、客土を切り込む井戸などからは唐津焼や志野焼が出土している。したがって、冒頭でも記したように、当該客土は三の丸築造時の客土であると考えられ、豊臣0面とした当該遺構面は三の丸築造に伴う大規模な整地後、すなわち豊臣後期の遺構面ということになる。

しかしながら、すでに再三にわたって後世に変更が著しいことを記してきた7A地区と同様に7B地区の5層上面は江戸時代以降の削平や現代の掘削によって遺存状態は必ずしも良くない。

また、7B地区の客土層である5層については、ほとんど遺物を含まないことに加えて土量が多いため当初より機械掘削の対象と

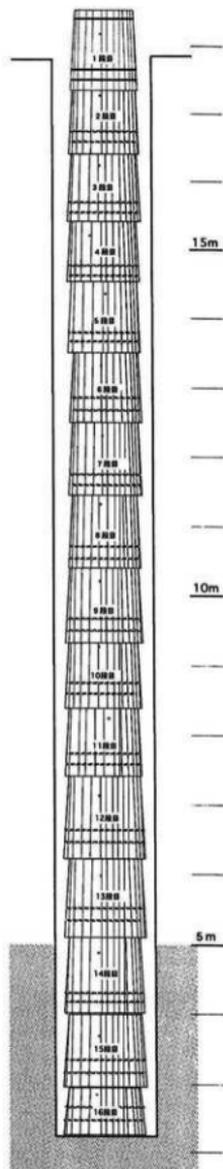


図53 井戸328断面模式図

した設計がなされていた。その機械掘削の深度の確認作業のために東西2箇所を試掘トレンチを設定し、これをバックホーを用いて掘削した。しかし、結果的にはこの作業のために5層上面をバックホーが走行したことによって、地下水を含んだ5・6層が液状化現象を起こすこととなった。これによって、井戸などの遺構の掘削および調査はきわめて困難となり、機械掘削の過程でできる限りの記録を残すことを心がけたものの、十分な記録を残すこともできず消滅した遺構も多い。

したがって、以下で報告する7B地区の遺構は5・6層を対象として行った機械掘削の過程でかろうじて残すことができたものである。一方の7A地区の遺構については江戸時代以降の削平によって、そのほとんどが遺存していないものの、掘削深度が深かったり、削平の度合いが少なかったりしてかろうじて遺存したものである。とくに7A地区の遺構に関しては7B地区の5層に対応する4c層上面検出の遺構は層位的に同時期と分かるものであるが、地山検出の遺構については出土遺物の組成の検討により、当該遺構面に帰属するものとしたものもある。

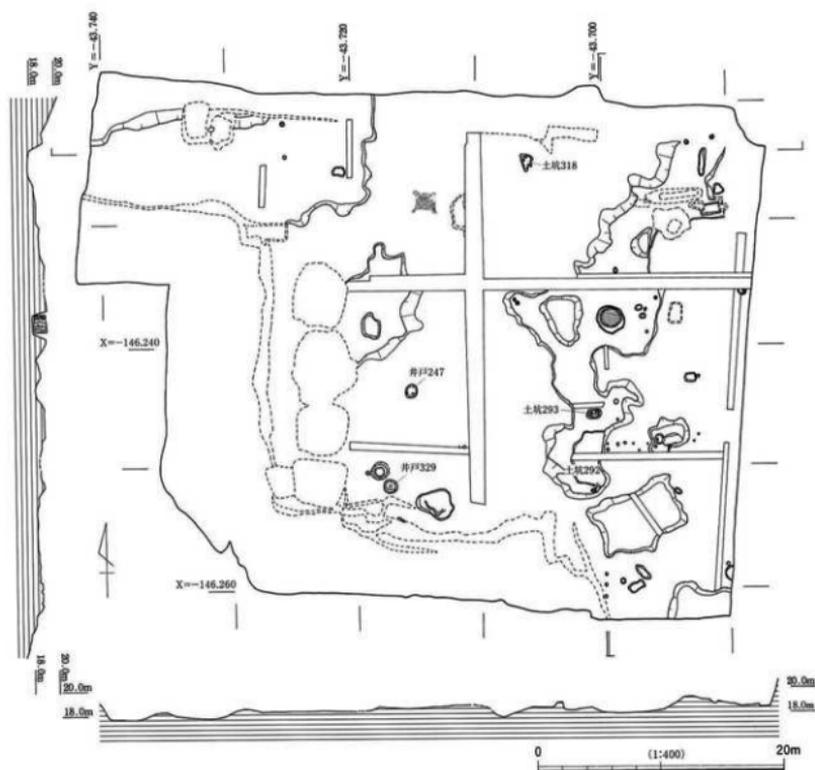


図54 豊臣0面(4c層上面)

(1) 7A地区の遺構

7A地区で検出した遺構のうち、4c層上面検出の遺構および地山検出遺構のうち、出土遺物の組成から豊臣後期に帰属すると考えられる遺構を豊臣0面に関わる遺構として報告する。

土坑293(図56)は7A地区の東半部で検出した。南北方向に地山が高く掘り残された部分から検出した土坑である。埋土は2層に分かれ、下層から丸瓦および平瓦片が密集して出土している。地山上面での検出であり、かつ出土遺物が瓦片のみであることから、時期的には前後する可能性のある遺構である。**土坑318**(図55)は7A地区の北側の4c層上面での検出した不定形土坑である。底面近くには東西約50cm、南北約20cmの平面形が長方形を呈する炭層を検出している。その上面からは塩壺および唐津焼皿がほぼ完形で出土している。**井戸247**(図58)は7A地区の中央やや南西寄り検出したものである。他の遺構と同様に上面を削平されているが、4c層を切り込んだ遺構である。底面からは焼け焦げた木製品のほか、焼けた土壁片がコンテナ2箱分出土している(巻頭カラー32)。**井戸329**は井戸328の南東で検出したものである。井戸328同様上面は大阪家庭裁判所の基礎工事に伴って削平されており、地山面で検出したものである。規模は直径約1.2m、深さは残存で約1.3mを測る。湧水層には達しておらず、井戸としているが、水溜めの性格を有する遺構である可能性が高い。断面は漏斗状を呈し、下方では元来は桶の側板を縮めていたと考えられる竹のタガが掘り形に沿って遺存している。しかしながら、井戸枠に転用されていたと考えられる桶はまったく残っておらず、埋め戻し時に抜き取られたものと判断される。埋土もこれに呼応するように下層の一部を残して一気に埋め戻された状況を示している。出土遺物は陶磁器片が20片前後出土したのみであるが、最下層出土の遺物には唐津焼の皿が含まれている。

(2) 7B地区の遺構

すでに記してきたように、7B地区では基本的には三の丸造成時の客土であるとされる5層を切り込んだ遺構を豊臣0面に対応するものとして報告する。

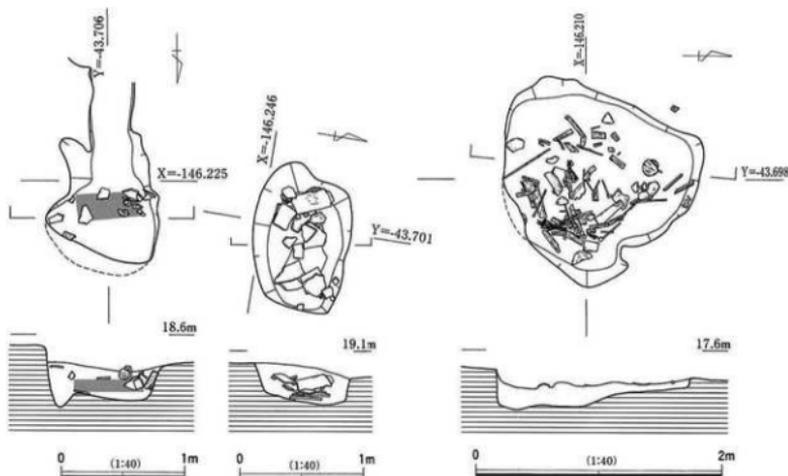


図55 土坑318

図56 土坑293

図57 土坑482

既述のように掘削深度の浅い遺構は削平を受けて消失しており、結果的に検出遺構の大半は井戸である。

土坑482(図57)は区画Gと仮称する南半の高まりで検出した土坑である。層位的にも出土遺物からも時期を決しがたいものであるが、焼けた木製品の出土や埋土の大半が炭層であることなどから、豊臣後期の遺構と考えている。南北約1.6m、東西約1.7m、深さ約0.3mを測る不定形の土坑であり、上記のように主として焼けた木製品が炭層とともに廃棄されている。大坂夏の陣後の廃棄土坑であろうか。

井戸487は図31に記したように井戸727を切って5層上面から掘り込まれた井戸である。上部は削平されているが、逆位にした桶を4段以上に積み上げて井戸枠としている。埋土中からは土器、陶磁器類のほか、漆器碗などの木製品もまとめて出土している。なお、陶磁器の中には唐津焼の皿が含まれている。

井戸518(図59)は調査地に北端で検出したものである。上部は攪乱によって削平されているが、桶を転用した3段の井戸枠を積み上げている。5層を切り込んでいるとともに志野焼の碗が出土しており、豊臣後期以降の井戸である。井戸520は区画Cの南半で検出した井戸である。桶を転用した井戸枠が1段遺存していたのみである。なお、7B地区の5層上面では井戸485・井戸489・井戸490・井戸492・井戸519を検出している。しかしながら、すでに既述したように5層の液状化により充分な調査ができなかった。このうち、井戸489および井戸519は桶を井戸枠に転用している。その他の井戸は素掘りもしくは井戸枠が抜き取られている。

また、トリベ集積遺構491の上面ではL字形に礎石が残る建物跡8を検出している。北側の礎石列は長さ5.47m、西側の礎石列は長さ3.26mを測る。南東側では礎石が残っておらず、正確な規模は不明であるが、少なくとも18㎡以上の面積をもつ建物であったといえる。

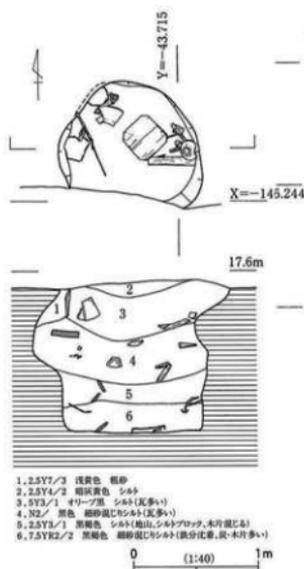
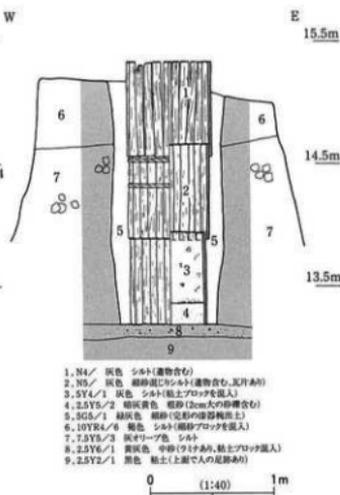


図58 井戸247



- 1, N4/ 灰色 シルト(遺物含む)
- 2, N5/ 灰色 細砂混じりシルト(遺物含む、瓦片未見)
- 3, S4/1 灰色 シルト(粘土・アロックスを混入)
- 4, 2.5Y6/2 暗灰黄色 細砂(2cm大の砂礫含む)
- 5, 9G5/1 緑灰色 細砂(10分位の遺物混入)
- 6, 10Y8/4 褐色 シルト(腐植質・アロックスを混入)
- 7, 7.5Y8/3 灰青緑色 シルト
- 8, 2.5Y6/1 黄灰色 中砂(ワレ木あり、粘土・アロックス混入)
- 9, 2.5Y2/1 黒色 粘土(上面で人の足跡あり)

図59 井戸518

表12 豊臣遺構一覽(3)

遺構名	地区	遺構種類	面積	長さ	高さ	遺構の位置	遺構の用途	遺構の構造	年代	本文	遺構	出土遺物	出所	備考
土向131	78	堀の上端	1.18×0.71	0.61					豊臣石垣				131-18, 107-18, 131-207, 208, 130-141, 131-18, 131-22	4
土向132	78	堀の上端	0.81×0.81	0.52					豊臣石垣					4
土向133	78	堀の上端	0.81×0.81	0.52					豊臣石垣					4
土向134	78	堀の上端	0.81×0.81	0.52					豊臣石垣					4
土向135	78	堀の上端	0.81×0.81	0.52					豊臣石垣					4
土向136	78	堀の上端	0.81	0.49					豊臣石垣	22	131-5	131-2, 131-25, 99-215	77-4-3	4
土向137	78	堀の上端	0.81	0.49					豊臣石垣	22	131-5	98-214		4
土向138	78	堀の上端	1.42×1.64	0.14					豊臣石垣					4
土向139	78	堀の上端	0.80×0.61	0.15					豊臣石垣					4
土向140	78	堀の上端	0.63	0.09					豊臣石垣					4
土向141	78	堀の上端	1.20×0.82	0.08					豊臣石垣					4
土向142	78	堀の上端	4.98×3.22	0.20					豊臣石垣	66		131-5, 131-16, 79-4, 98-13, 131-18, 131-20, 131-20	131-5, 111-4, 131-4, 131-14	4
土向143	78	堀の上端	1.38×0.81	0.14					豊臣石垣					4
土向144	78	堀の上端	1.60×1.13	0.22					豊臣石垣					4
土向145	78	堀の上端	0.87×0.44	0.13					豊臣石垣	13	131-2, 131-206, 131-210	106-2		4
土向146	78	堀の上端	0.81×0.81	0.15					豊臣石垣					4
土向147	78	堀の上端	0.81×0.81	0.15					豊臣石垣					4
土向148	78	堀の上端	0.81×0.81	0.15					豊臣石垣					4
土向149	78	堀の上端	1.83×1.09	0.31					豊臣石垣					4
土向150	78	堀の上端	0.29×0.43	0.05					豊臣石垣					4
土向151	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向152	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向153	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向154	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向155	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向156	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向157	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向158	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向159	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向160	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向161	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向162	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向163	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向164	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向165	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向166	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向167	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向168	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向169	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向170	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向171	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向172	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向173	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向174	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向175	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向176	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向177	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向178	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向179	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向180	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向181	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向182	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向183	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向184	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向185	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向186	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向187	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向188	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向189	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向190	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向191	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向192	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向193	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向194	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向195	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向196	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向197	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向198	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向199	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向200	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向201	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向202	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向203	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向204	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向205	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向206	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向207	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向208	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向209	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向210	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向211	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向212	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向213	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向214	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向215	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向216	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向217	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向218	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向219	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向220	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向221	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向222	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向223	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向224	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向225	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向226	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向227	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向228	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向229	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向230	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向231	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					4
土向232	78	堀の上端	0.81×0.81	0.09					豊臣石垣					

表13 豊臣遺構一覧(4)

遺構名	地区	遺構種類	面積(㎡)		長さ(m)	高さ(m)	築年(推定)	調査者	調査年	本文	遺構写真	遺構写真	出土遺物	写真	中国	備考
			面	積												
セツノ	5009	75 御膳所	0.49	0.41	0.11										4	
セツノ	5010	75 御膳所	1.40	0.33	0.11										4	
セツノ	5019	75 御膳所	1.40	0.43	0.14										4	
セツノ	5020	75 御膳所	1.13	0.35	0.14										4	
セツノ	5021	75 御膳所	1.13	0.35	0.14										4	
セツノ	5022	75 御膳所	1.43	0.26	0.14										4	
セツノ	5044	75 御膳所	0.47	0.38	0.09										4	
セツノ	5045	75 御膳所	0.47	0.38	0.09										4	
セツノ	5046	75 御膳所	1.49	1.16	0.17										4	
セツノ	5047	75 御膳所	1.49	1.13	0.17										4	
セツノ	5048	75 御膳所	2.42	1.93	0.42										4	
セツノ	5049	75 御膳所	1.70	0.51	0.28										4	
セツノ	5050	75 御膳所	11.40	0.80	0.28										4	
セツノ	5051	75 御膳所			0.28										4	
本町	6022	75 御膳所	1.09	0.42	0.15										4	
本町	6023	75 御膳所	1.21	0.43	0.23										4	
本町	6024	75 御膳所	1.03	0.41	0.23										4	
本町	6025	75 御膳所	1.03	0.41	0.23										4	
本町	6026	75 御膳所	1.21	0.47	0.29										4	
本町	6027	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6028	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6029	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6030	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6031	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6032	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6033	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6034	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6035	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6036	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6037	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6038	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6039	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6040	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6041	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6042	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6043	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6044	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6045	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6046	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6047	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6048	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6049	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6050	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6051	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6052	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6053	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6054	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6055	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6056	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6057	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6058	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6059	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6060	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6061	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6062	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6063	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6064	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6065	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6066	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6067	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6068	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6069	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6070	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6071	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6072	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6073	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6074	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6075	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6076	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6077	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6078	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6079	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6080	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6081	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6082	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6083	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6084	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6085	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6086	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6087	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6088	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6089	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6090	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6091	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6092	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6093	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6094	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6095	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6096	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6097	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6098	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6099	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6100	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6101	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6102	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6103	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6104	75 御膳所	0.81	0.66	0.19										4	
本町	6105	75 御膳所	0.81	0.												

第2節 遺物

今回の調査では、とくに調査地北半の7B調査区が谷として落ち込んでいたこともあり、土器・陶磁器類のみならず、木製品などの多種多様な遺物が非常に良好な状態で出土している。

本来であれば、各種の遺物を網羅的に報告する必要があるが、時間的な制約が大きいこともあり、必ずしもすべての遺物を掲げているわけではない。とくに、多量に出土した当該期の木製品の多くは一通りは目を通したものの、報告書に掲げたものは全体からするとごくわずかである。同様に瓦類のうち、平瓦や丸瓦についてはほとんど手付かずの状態である。

以下では、出土遺物を種別ごとに報告する。ただし、すでに報告してきたように豊臣後期の遺構はきわめて少ない。本来であれば豊臣前期と後期は厳密に峻別すべきところであるが、遺構と同様に遺物も僅少であることから、本文中もしくは表中に明記して一括して記述をすすめることにしたい。

なお、今回の報告では青花および国産陶磁器、漆器の一部を対象としてデジタルトレースに画像処理を行ったデジタル画像を添付した実測図を掲載している。これらによって原色に近いカラー情報を提供することが可能となるとともに、漆器などでは質感までもが表現されるという利点がある。モノクロ印刷などでは表現できない呉須の色合いや濃淡が実態に近い状態で資料化される点できわめて有効な方法であるといえる。

1. 土器・陶磁器

今回の調査では7B地区を中心として多量の土器・陶磁器類が出土している。すべてを網羅的に掲載したわけではないが、遺構出土のものについてはできる限り組成を反映するように心掛けた。個々の遺物について報告する余裕はなく、以下では遺構および包含層出土の土器・陶磁器類の概要を記述するに留める。

出土した土器・陶磁器には国産品では土師器・瓦質土器・瀬戸美濃焼・唐津焼・備前焼・丹波焼などがある。一方、輸入陶磁器には青花・白磁・青磁・施釉陶器などの中国・朝鮮の製品がある。

(1) 遺構出土の土器・陶磁器 (図60～64・68・69、写76～91)

豊臣前期 すでに報告してきたように、今回の調査で出土した土器・陶磁器類は三の丸造成に伴うと考えられる客土下層で検出した遺構面に伴うものである。したがって、その多くはいわゆる豊臣前期に包括される遺物群であるといえ、各遺構から出土した土器・陶磁器類の組成はさほど格差がみられない。ここでは、7B地区では5層上面から掘り込まれた遺構および7A地区の4c層上面検出遺構もしくは出土遺物の組成から豊臣後期のものと判断されるものは後述することとし、豊臣前期に包括される遺構出土の土器・陶磁器類の概要を先行して記述する。

土器・陶磁器類の挿図を一瞥しても分かるように施釉陶器はほぼ瀬戸美濃焼で占められている。瀬戸美濃焼では鉄軸の天目碗が最も多く、これに内売の灰軸丸皿、折縁ソギ皿が続いている。これ以外では鉄軸ヒダ皿、灰軸および鉄軸の丸碗、鉄軸小碗などが出土している。志野焼は5層上面から掘り込まれた井戸518などから少数が出土しているのみで、三の丸造成に伴う客土の下層からは包含層出土遺物を含めても出土は確認できない。唐津焼についても基本的に志野の出土様相と同様であり、客土下層からはまったく出土していない。土師器では皿が最も多く、これ以外では土塼、土釜などが出土している。土師器皿では口縁端部を丸くおさめるものが主流である。そのほか、井戸731からは移動式竈が出土している。瓦質土器には鉢などのほかに小型の土釜や香炉などが出土している。

焼締陶器には備前焼・丹波焼などがあり、播鉢はほとんどが備前焼で占められている。これ以外では大

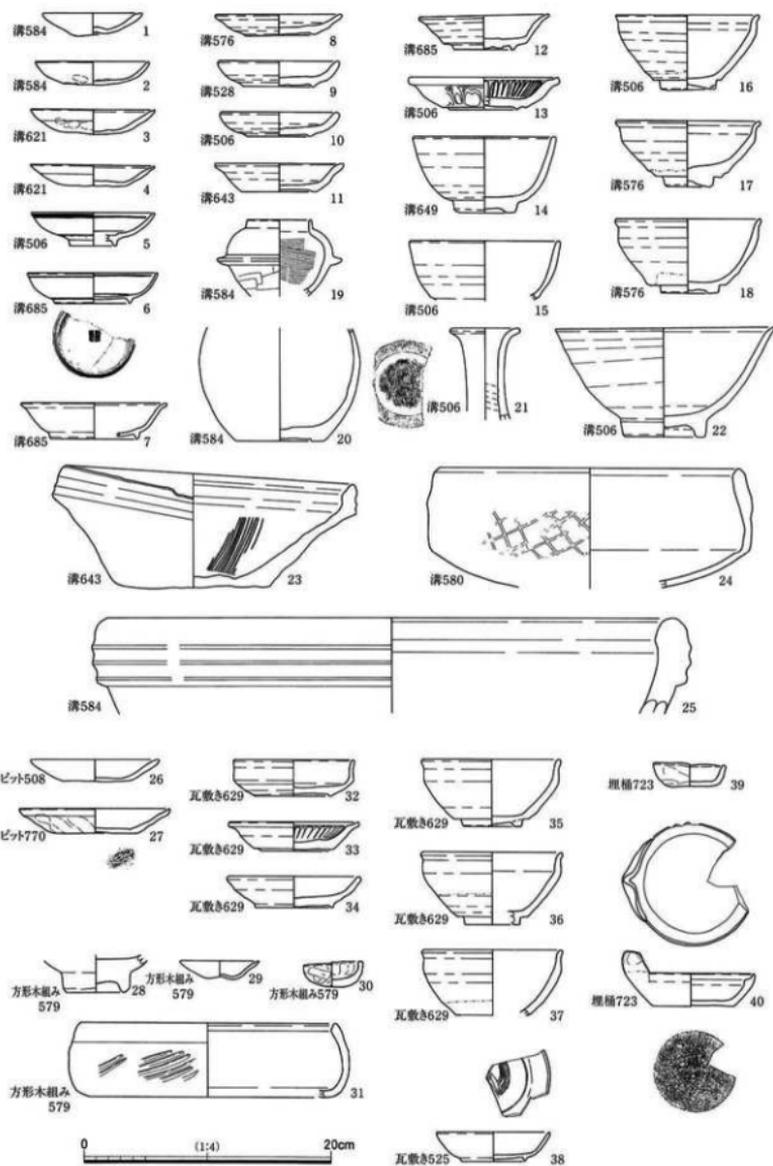


図60 溝等出土陶磁器・土器

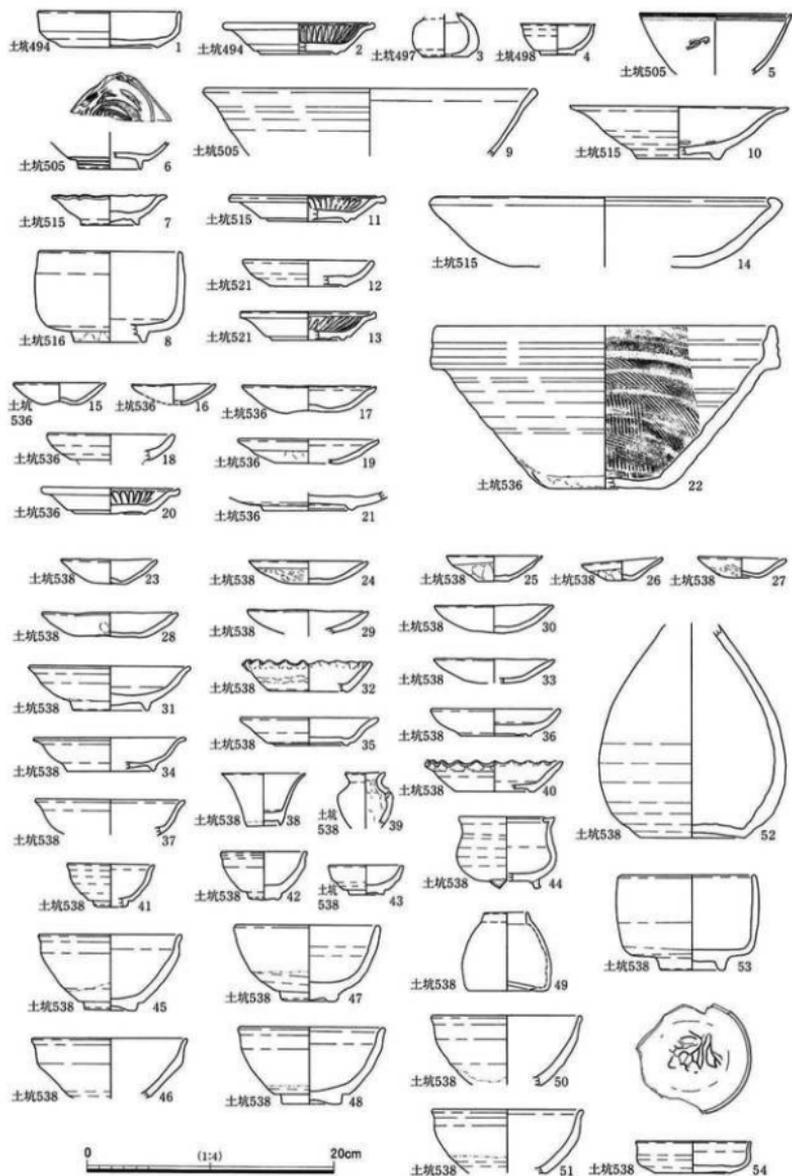


図61 土坑出土陶磁器・土器（1）

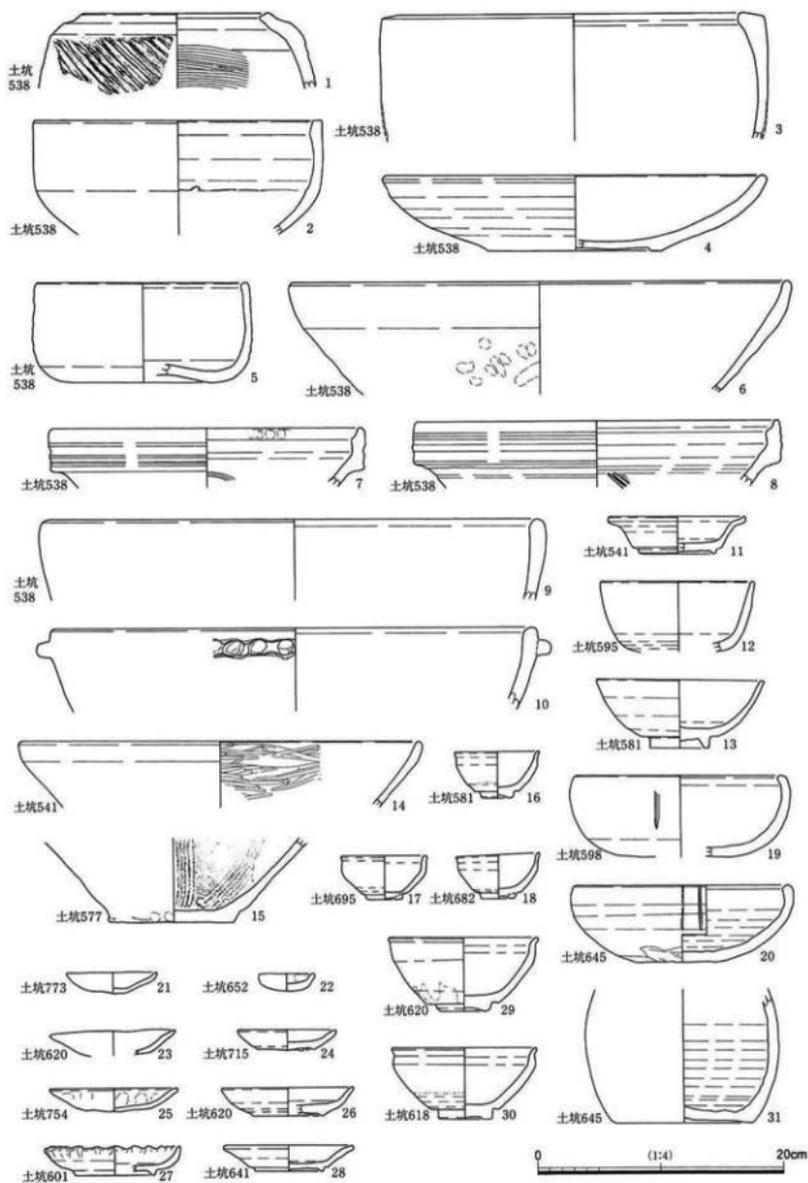


图62 土坑出土陶磁器·土器(2)

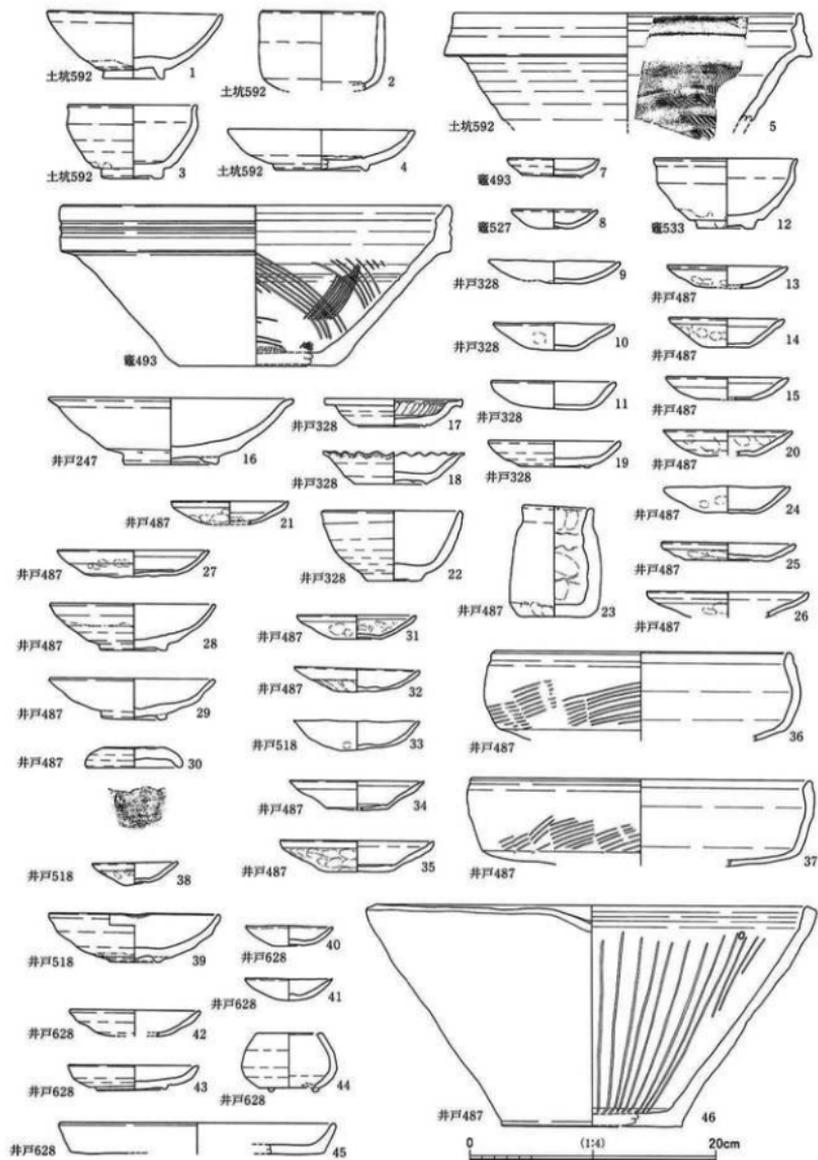


図63 井戸等出土陶磁器・土器

平鉢、壺、瓶、鉢などが出土しているが、その多くは備前焼である。

輸入陶磁器は青花が多く、李朝の白磁および施釉陶器も出土している。青花は碗、皿、小杯、大皿が出土しているが、碗には粗製のものが少なからず含まれている。

なお、蛇足ながら金箔押しの土師器皿が井戸328および溝643から4片出土している。前者は口縁部の内外面に金箔を押したものであり（巻頭カラー22下段）、後者は口縁内面のみ金箔を押すもので、2片だが同一個体の可能性が高い（巻頭カラー22上段）。

豊臣後期 遺構出土の遺物として掲載したもののうち、井戸247・487・518・628および土坑237・292・318は層位関係もしくは出土遺物の組成から豊臣後期以降と考えられる一群である。

施釉陶器では瀬戸美濃焼の灰釉丸皿等がわずかに出土しているが、量的にはきわめて少ない。天目碗はほとんど出土しない一方で志野や織部の出土が確認される。

当該期の遺構は少なく単純には比較できないが、井戸487から出土した播鉢は丹波焼であり、これまでに指摘されている傾向を証している。また、同様に土塙の外周タタキは前期では格子タタキであったものが、井戸487出土のものでは平行タタキとなっている。輸入陶磁器はほとんど出土していない。

なお、井戸247の埋土からは初期伊万里の碗が出土しており、豊臣後期として報告しているが、その埋没は徳川初期段階に下るものである可能性が高いものであることを付記しておく。

(2) 包含層出土の土器・陶磁器（図65～67・69～72、写91～101）

豊臣期の包含層は三の丸造成時の客土下層であり、基本的には豊臣前期に包括される段階のものとして理解される。全体的傾向としては遺構出土の土器・陶磁器類の様相と大きくかわるところはないので、特徴的な遺物についてのみ付記しておく。

遺構出土の土器・陶磁器にはみられなかった茶入れの蓋（65-29、67-27）なども出土している。また、4層から出土した志野灯明具（72-5）は完形であり、青織部向付（72-6）は被火により釉薬が溶け出しているが、一辺が20cmを超える大型品である。このほか、特徴的な遺物としては65-27に掲げた白磁の見込み部分には「金上カ」の文字が点描されているほか、67-35には「福」の字が、67-43には花押と考えられる墨書がある。また、67-46はやや古い段階の土師器皿と考えられるが、見込み部分に人物と考えられるものを描画し、その周囲を円で囲んでいる。

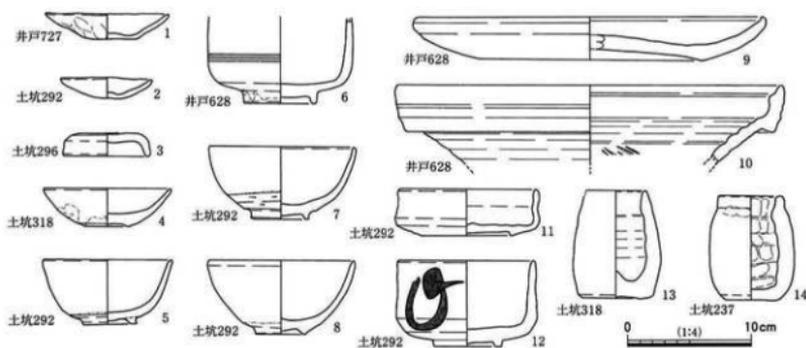


図64 井戸・土坑出土陶磁器・土器

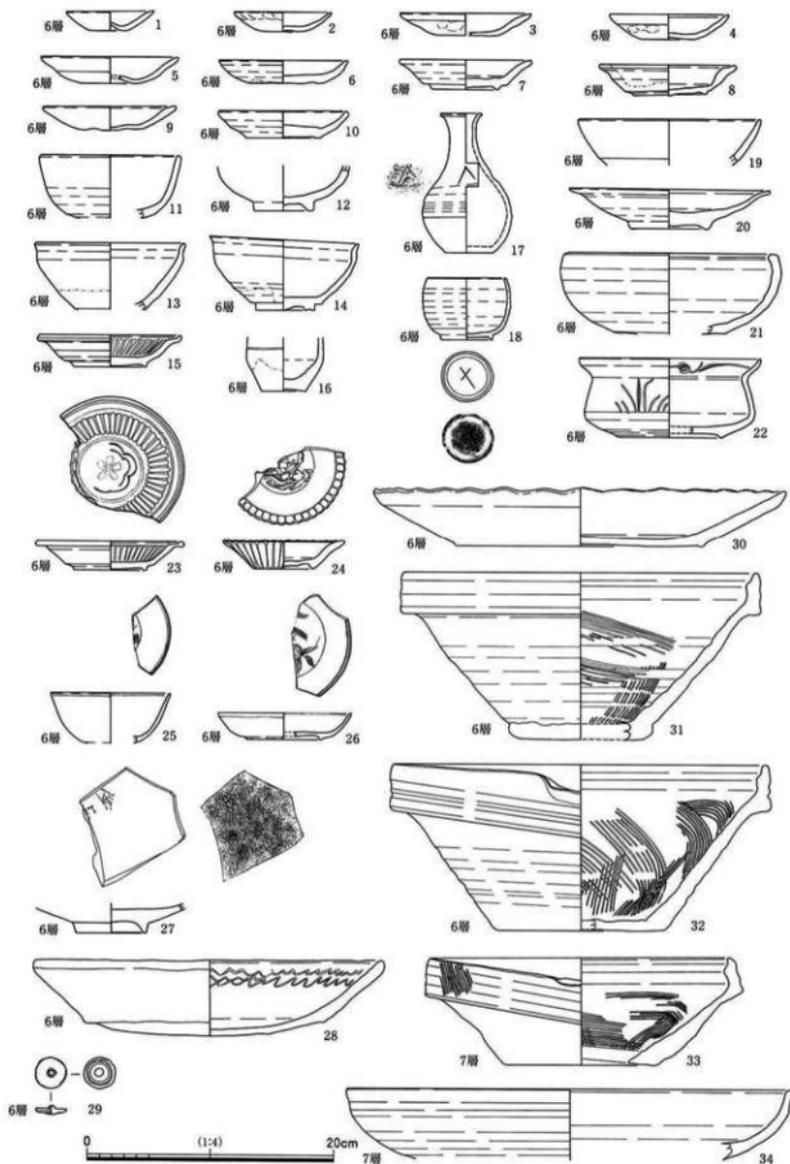


図65 6・7層出土陶磁器・土器

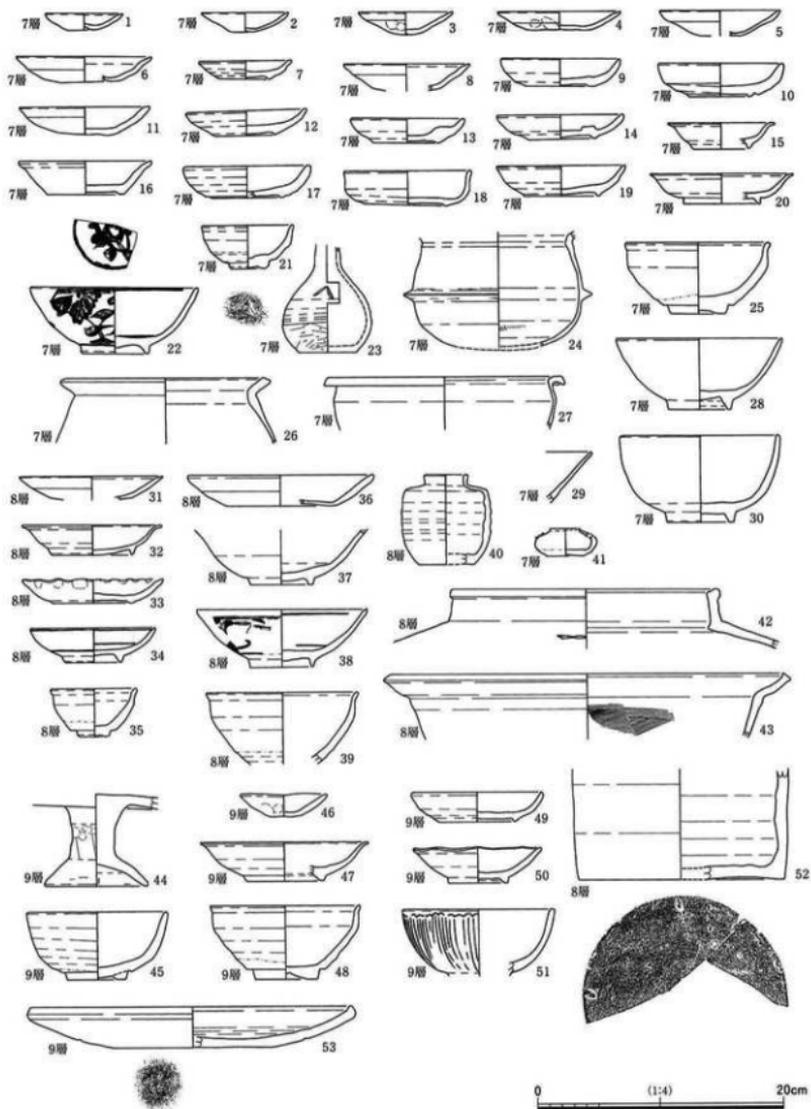


图66 7~9層出土陶磁器・土器

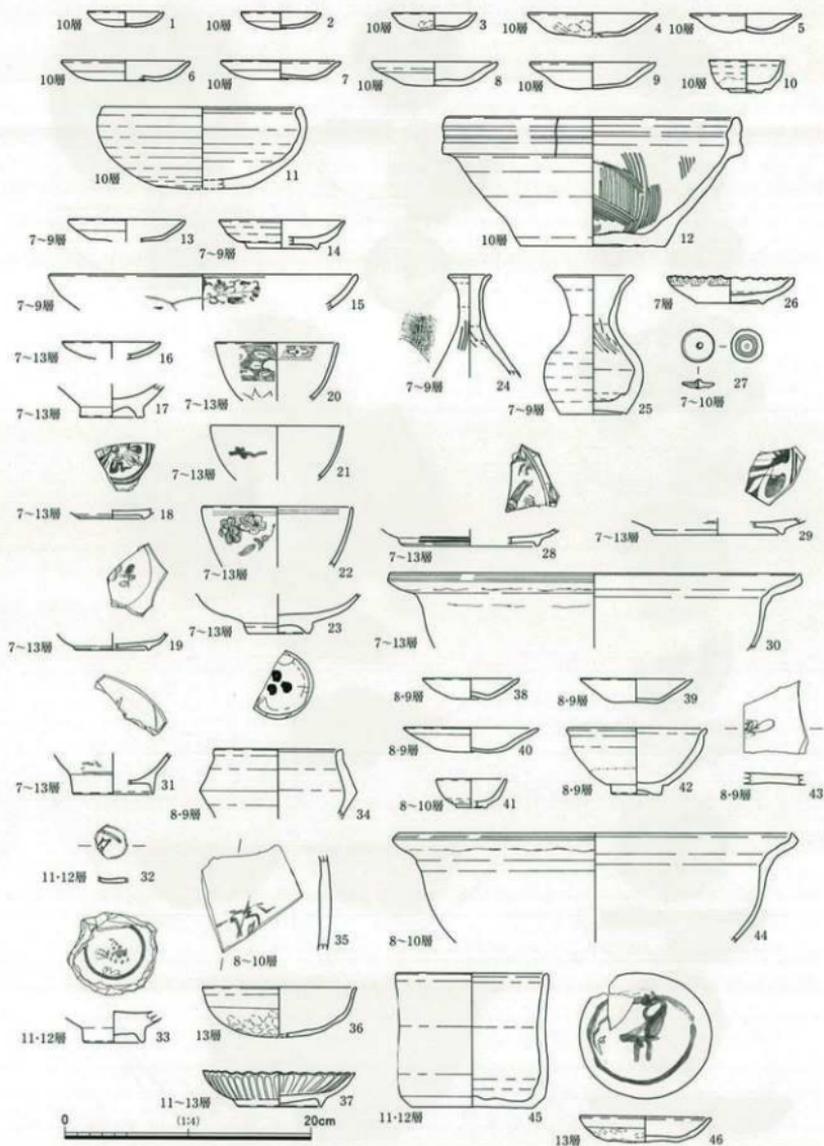


図67 7~13層出土陶磁器・土器

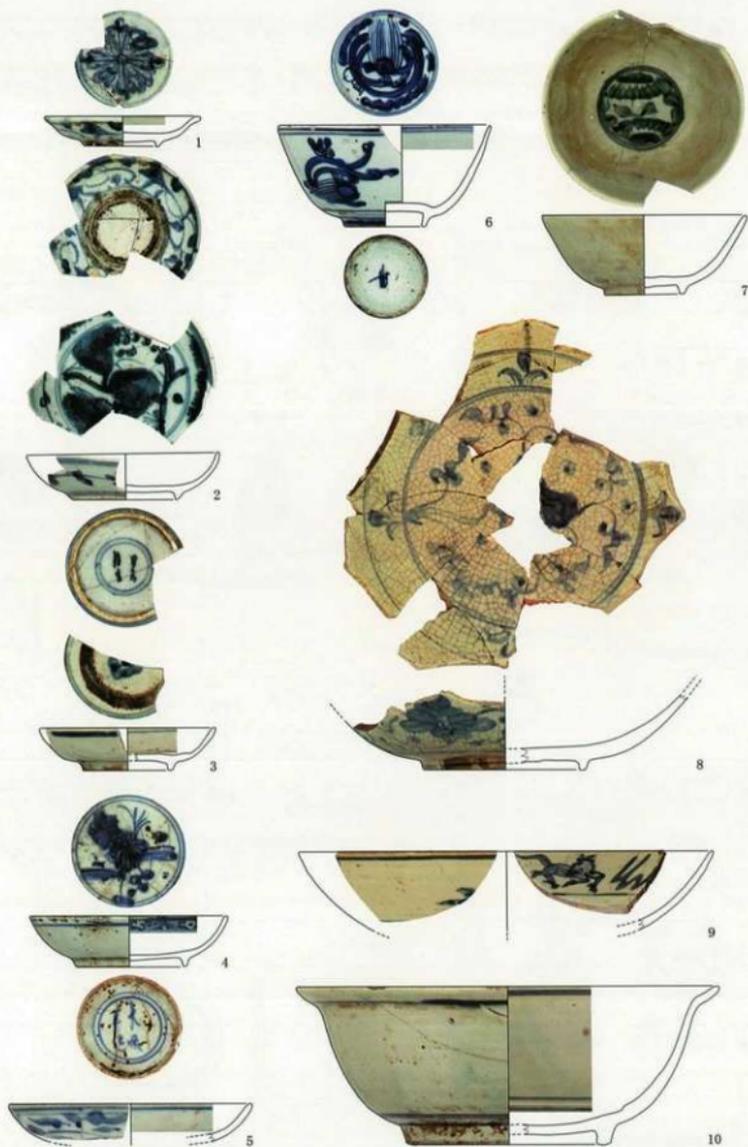


图 68 清·土坑出土青花(1:3)

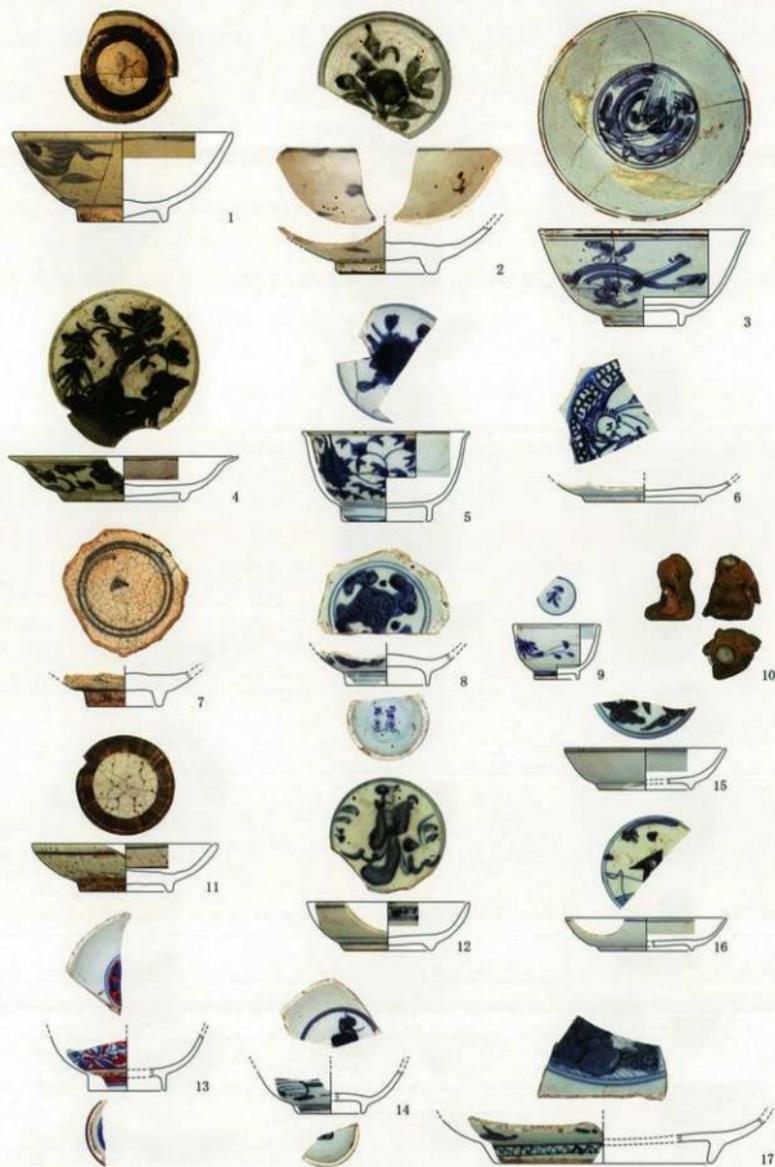


図69 土坑・井戸・包含層出土青花等(1:3)

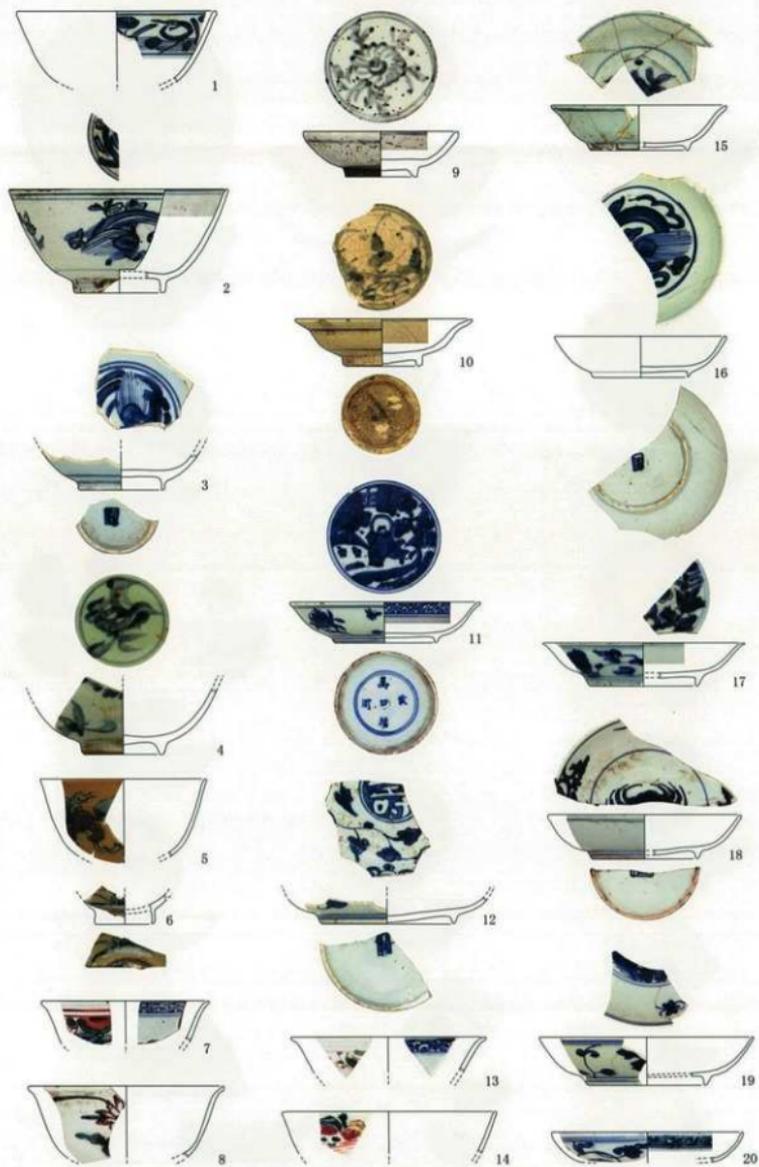


图70 6~10层出土青花等(1:3)

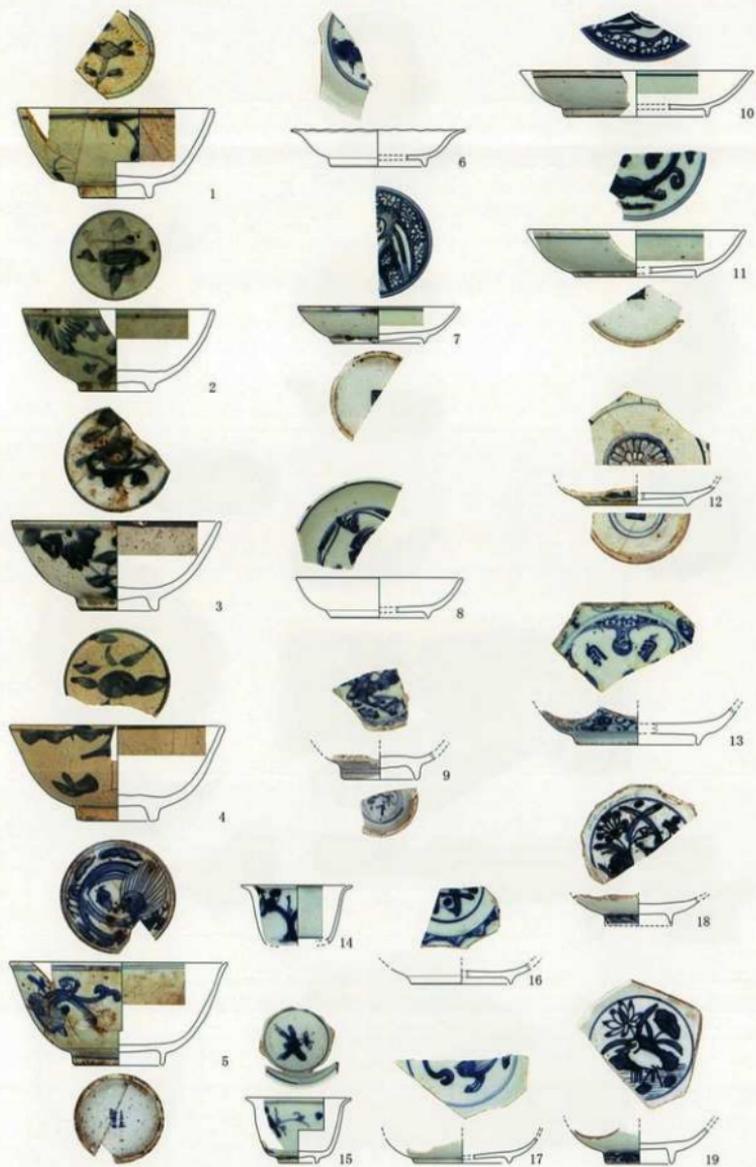


図71 7～9層出土青花(1:3)



图 72 井戸・包含層出土陶磁器(1:3)

表16 豊臣陶磁器・土器一覽(1)

図版番号	写真番号	HP	層位	遺構名	器種	口径	最大径	底径	器高	長さ	幅	厚さ	実測番号
00	1	77	7	7B	埴土	唐04	土師器 皿 (灯明皿)	8.0		1.9			T8199
00	2	77	6	7B	埴土	唐04	土師器 皿 (灯明皿)	9.2		1.9			T8149
00	3	77	5	7B	埴土	唐621	土師器 皿	10.0		2.0			T8291
00	4	77	4	7B	埴土	唐621	土師器 皿	10.0		1.9			T8290
00	5		7B	埴土	唐506	青花 皿	9.9		3.8	2.7			T8163
00	6	78	3	7B	埴土	唐685	青花 皿	6.0		2.5			T8274
00	7	78	2	7B	埴土	唐685	白磁 燗飯皿	11.6		3.0			T8278
00	8	77	1	7B	埴土	唐576	瀬戸美濃焼 灰輪丸皿	9.8		1.8			T8148
00	9	76	6	7B	埴土	唐528	瀬戸美濃焼 灰輪丸皿	9.8		2.1			T8430
00	10	76	1	7B	埴土	唐506	瀬戸美濃焼 灰輪丸皿	9.4		2.0			T8157
00	11	77	9	7B	埴土	唐643	瀬戸美濃焼 鉄輪燗飯皿	10.3		2.3			T8278
00	12	78	1	7B	埴土	唐685	煎鉢 皿	10.5		2.9			T8276
00	13	76	3	7B	埴土	唐506	瀬戸美濃焼 灰輪新緑ソノ皿	11.9	12.1				T8162
00	14	78	4	7B	埴土	唐649	瀬戸美濃焼 灰輪丸皿	11.3	11.5				T8234
00	15		7B	埴土	唐506	瀬戸美濃焼 灰輪丸皿	11.8	12.1		(4.9)			T8161
00	16	76	3	7B	埴土	唐506	瀬戸美濃焼 天目皿	11.5		4.4	6.2		T8160
00	17	77	2	7B	埴土	唐576	瀬戸美濃焼 天目皿	11.4			5.4		T8437
00	18	77	3	7B	埴土	唐576	瀬戸美濃焼 天目皿	11.6			6.1		T8270
00	19	77	8	7B	埴土	唐584	瓦葺土師 土皿	5.0	10.0		(6.3)		T8196
00	20		7B	埴土	唐584	備前焼 皿					(9.2)		T8242
00	21		7B	埴土	唐506	瀬戸美濃焼 鉄輪惣利形皿	5.2			(7.4)			T8159
00	22	76	4	7B	埴土	唐506	瀬戸美濃焼 燗鉢	17.7			9.0		T8202
00	23	77	10	7B	埴土	唐643	備前焼 燗鉢	23.0			10.1		T8316
00	24	76	7	7B	埴土	唐580	土師器 土皿	27.7	26.0		(9.8)		T8241
00	25		7B	埴土	唐584	備前焼 書	47.8			(7.8)			T8216
00	26		7B	埴土	ビット508	土師器 皿	10.2	10.2			1.8		T8230
00	27	90	1	7B	埴土	ビット770	土師器 皿	11.8			2.9		T843
00	28		7B	埴土	方形木組み579	青磁 鉢			4.7	(2.6)			T8212
00	29	91	1	7B	埴土	方形木組み579	土師器 鉢	6.2	6.4		1.5		T8249
00	30	91	4	7B	埴土	方形木組み579	土師器 鉢?	4.8			2.1		T845
00	31		7B	埴土	方形木組み579	土師器 土皿	20.6			6.9			T8213
00	32	90	6	7B	埴土	瓦敷き629	瀬戸美濃焼 向付	9.6			2.3		T8160
00	33	90	3	7B	埴土	瓦敷き629	瀬戸美濃焼 灰輪新緑ソノ皿	10.4	10.6		2.5		T831
00	34	90	2	7B	埴土	瓦敷き629	瀬戸美濃焼 灰輪丸皿	10.3	10.7		2.6		T8250
00	35	90	4	7B	埴土	瓦敷き629	瀬戸美濃焼 鉄輪天目皿	10.6	11.2		5.4		T8420
00	36	90	5	7B	埴土	瓦敷き629	瀬戸美濃焼 鉄輪天目皿	11.4			5.4		T8419
00	37	90	7	7B	埴土	瓦敷き629	瀬戸美濃焼 鉄輪天目皿	11.4			5.9		T8421
00	38		7B	埴土	瓦敷き525	青花 皿	9.1			2.4			T8166
00	39		7B	埴土	燗鉢723	土師器 鉢?	5.8			1.9			T844
00	40	90	8	7B	埴土	燗鉢723	備前焼 石明具	10.0	10.7		4.4		T8428
01	1	80	2	7B	埴土	土灰494	瀬戸美濃焼 向付	11.6			3.0		T8433
01	2	80	1	7B	埴土	土灰494	瀬戸美濃焼 灰輪新緑ソノ皿	12.3			2.5		T8434
01	3	80	10	7B	埴土	土灰497	瀬戸美濃焼 茶入		5.2		(3.6)		T849
01	4	80	11	7B	埴土	土灰498	瀬戸美濃焼 小瓶	6.0			2.5		T8338
01	5		7B	埴土	土灰365	青花 鉢		16.2			(5.0)		T8205
01	6		7B	埴土	土灰365	青花 鉢			4.9		(2.2)		T8229
01	7	76	8	7B	埴土	土灰315	白磁 皿	6.9	9.2		2.4		T8126
01	8	80	3	7B	埴土	土灰316	瀬戸美濃焼 鉄輪燗飯皿	11.2	12.0		7.4		T8232
01	9		7B	埴土	土灰365	瀬戸美濃焼 燗鉢	16.4				(5.6)		T8206
01	10	76	5	7B	埴土	土灰315	白磁 皿	17.6			4.2		T8127
01	11		7B	埴土	土灰315	瀬戸美濃焼 灰輪新緑ソノ皿	12.2			2.1			T8126
01	12	80	5	7B	埴土	土灰321	瀬戸美濃焼 灰輪丸皿	10.4	10.7		2.3		T8130
01	13	80	6	7B	埴土	土灰521	瀬戸美濃焼 灰輪新緑ソノ皿	10.8			2.2		T8207
01	14		7B	埴土	土灰515	備前焼 大平鉢	26.4	28.2		5.7			T8231
01	15		7B	埴土	土灰336	土師器 皿	7.2	7.4		1.8			T8169
01	16	80	7	7B	埴土	土灰336	土師器 皿	6.7			1.7		T8203
01	17	80	8	7B	埴土	土灰336	土師器 皿	10.7	10.9		2.1		T8167
01	18		7B	埴土	土灰336	瀬戸美濃焼 灰輪丸皿	10.1	10.3		2.1			T8171
01	19		7B	埴土	土灰336	土師器 皿	11.2			2.0			T8172
01	20	80	9	7B	埴土	土灰336	瀬戸美濃焼 灰輪新緑ソノ皿	10.9	11.1		2.2		T8168
01	21		7B	埴土	土灰336	瀬戸美濃焼 灰輪皿			7.1	(1.1)			T8173
01	22		7B	埴土	土灰336	備前焼 燗鉢	27.0			13.3			T8174
01	23	81	1	7B	埴土	土灰338	土師器 皿	7.6			2.0		T8176
01	24	81	10	7B	埴土	土灰338	土師器 皿	9.5			1.9		T8177
01	25	81	6	7B	埴土	土灰338	土師器 皿 (灯明皿)	7.6			2.1		T842
01	26	81	2	7B	埴土	土灰338	土師器 皿	6.4			1.8		T841
01	27	81	3	7B	埴土	土灰338	土師器 皿	7.0			1.7		T8187
01	28	81	9	7B	埴土	土灰338	土師器 皿	10.7	10.9		2.0		T8134
01	29	81	5	7B	埴土	土灰338	土師器 皿	9.8			(1.9)		T8146
01	30	81	11	7B	埴土	土灰338	土師器 皿	9.4			2.3		T8145
01	31	81	13	7B	埴土	土灰338	白磁 皿	12.7			3.6		T8138
01	32		7B	埴土	土灰338	瀬戸美濃焼 鉄輪ヒダ皿	10.0			3.6			T8209

表17 豊臣陶磁器・土器一覽(2)

図録番号	写真番号	口径	厚さ	遺構名	器種	口径	最大径	底径	器高	長さ	幅	厚さ	実測番号
61	35	81	4	7B	埴土	土坑S38	土師器 黒		9.8	9.7		2.0	T-132
61	24	81	8	7B	埴土	土坑S38	白磁 磁文瓦		12.0			2.7	T-170
61	35	81	12	7B	埴土	土坑S38	瀬戸美濃焼 反輪椀		11.0		5.9	2.3	T-178
61	26	81	7	7B	埴土	土坑S38	瀬戸美濃焼 反輪丸皿		10.2			2.2	T-139
61	37		7B	埴土	土坑S38	土坑S38	白磁 磁文瓦		11.9			(2.9)	T-137
61	28	82	3	7B	埴土	土坑S38	白磁 杯		6.8		2.7	4.4	T-179
61	29	82	4	7B	埴土	土坑S38	瀬戸美濃焼 鉄輪水引?		3.2			(4.8)	T-191
61	40		7B	埴土	土坑S38	土坑S38	瀬戸美濃焼 鉄輪七ツ皿		11.2	11.3		2.5	T-236
61	41	82	7	7B	埴土	土坑S38	瀬戸美濃焼 鉄輪小碗		6.9	7.0		3.5	T-237
61	42	82	8	7B	埴土	土坑S38	瀬戸美濃焼 鉄輪小碗		6.7	6.8		4.9	T-136
61	43	82	8	7B	埴土	土坑S38	瀬戸美濃焼 鉄輪小碗		5.9	6.1		3.4	T-133
61	44	85	5	7B	埴土	土坑S38	備前焼 香炉		7.6			5.8	T-143
61	45	82	1	7B	埴土	土坑S38	瀬戸美濃焼 鉄輪天目皿		11.4			6.3	T-144
61	46	82	1	7B	埴土	土坑S38	瀬戸美濃焼 鉄輪天目皿		12.2	12.4		(4.9)	T-192
61	47	82	9	7B	埴土	土坑S38	瀬戸美濃焼 反輪丸皿		11.8			6.2	T-140
61	48	82	2	7B	埴土	土坑S38	瀬戸美濃焼 鉄輪天目皿		11.5			6.3	T-141
61	49	83	3	7B	埴土	土坑S38	土師器 香炉		3.5			5.4	T-209
61	50		7B	埴土	土坑S38	瀬戸美濃焼 鉄輪天目皿		12.0			(5.6)	T-181	
61	51		7B	埴土	土坑S38	瀬戸美濃焼 鉄輪天目皿		12.0			(5.2)	T-142	
61	52	85	6	7B	埴土	土坑S38	備前焼 惣料理瓶				8.2	(17.2)	T-261
61	53	85	1	7B	埴土	土坑S38	瀬戸美濃焼 鉄輪形煎鍋		10.7	11.2		7.7	T-135
61	54	82	4	7B	埴土	土坑S38	瀬戸美濃焼 内付		9.3			2.6	T-210
62	1		7B	埴土	土坑S38	土師器 火舎		14.6			(6.1)	T-173	
62	2		7B	埴土	土坑S38	瓦質土師		22.7			(9.2)	T-189	
62	3		7B	埴土	土坑S38	瓦質土師		27.4			(16.4)	T-190	
62	4	83	7	7B	埴土	土坑S38	瀬戸美濃焼 大皿		30.5	30.8		6.2	T-233
62	5	83	2	7B	埴土	土坑S38	備前焼 湯水		16.8			8.1	T-264
62	6		7B	埴土	土坑S38	土坑S38	瓦質土師 鉢?		39.7			(9.1)	T-186
62	7		7B	埴土	土坑S38	備前焼 磁鉢		24.5	25.3		(4.8)	T-195	
62	8		7B	埴土	土坑S38	備前焼 磁鉢		28.9			(5.4)	T-165	
62	9		7B	埴土	土坑S38	土師器		38.8			(6.7)	T-163	
62	10		7B	埴土	土坑S38	土師器		37.9			(6.7)	T-194	
62	11	85	2	7B	埴土	土坑S41	瀬戸美濃焼 鉄輪磁文瓦		11.2			3.1	T-431
62	12		7B	埴土	土坑S36	瀬戸美濃焼 反輪丸皿		12.2			6.7	T-219	
62	13	84	4	7B	埴土	土坑S41	青磁 碗		13.5			5.6	T-379
62	14		7B	埴土	土坑S41	瓦質土師 鉢?		31.4	32.2		(5.4)	T-228	
62	15		7B	埴土	土坑S77	瓦質土師 鉢					(6.8)	T-230	
62	16	84	5	7B	埴土	土坑S61	瀬戸美濃焼 鉄輪小碗		6.7			3.7	T-213
62	17	85	9	7B	埴土	土坑S65	瀬戸美濃焼 鉄輪小碗		6.4	7.0		3.5	T-425
62	18	84	6	7B	埴土	土坑S62	瀬戸美濃焼 鉄輪小碗		6.2	6.7		3.7	T-422
62	19	85	10	7B	埴土	土坑S68	備前焼 鉢		16.2	17.8		6.6	T-244
62	20	85	11	7B	埴土	土坑645	備前焼 鉢		17.0	18.0		6.3	T-186
62	21	85	1	7B	埴土	土坑773	土師器 皿		7.2	7.3		1.7	T-184
62	22	85	8	7B	埴土	土坑652	土師器 小型杯		4.2	4.5		1.4	T-151
62	23	84	1	7B	埴土	土坑620	土師器 皿		9.9	10.1		2.0	T-245
62	24	85	6	7B	埴土	土坑715	瀬戸美濃焼 反輪丸皿		7.9			1.7	T-152
62	25	85	4	7B	埴土	土坑754	土師器 皿		10.0	10.2		1.8	T-432
62	26		7B	埴土	土坑620	瀬戸美濃焼 反輪丸皿		10.4			2.4	T-222	
62	27	85	5	7B	埴土	土坑601	瀬戸美濃焼 鉄輪七ツ皿		10.4			2.4	T-220
62	28	85	3	7B	埴土	土坑641	瀬戸美濃焼 鉄輪磁文瓦		10.0	10.4		2.2	T-433
62	29	84	2	7B	埴土	土坑620	瀬戸美濃焼 鉄輪天目皿		11.8			6.0	T-221
62	30	84	8	7B	埴土	土坑618	瀬戸美濃焼 鉄輪天目皿		11.8			5.8	T-417
62	31		7B	埴土	土坑645	備前焼 惣料理瓶					11.0	(16.8)	T-267
63	1	84	3	7B	埴土	土坑S92	白磁 碗?		13.9			5.2	T-200
63	2		7B	埴土	土坑S92	瀬戸美濃焼 鉄輪形煎鍋		9.6			(6.4)	T-217	
63	3	84	7	7B	埴土	土坑S92	瀬戸美濃焼 鉄輪天目皿		10.2			6.0	T-218
63	4		7B	埴土	土坑S92	瀬戸美濃焼 鉄輪皿		14.9	15.1		3.4	T-198	
63	5		7B	埴土	土坑S92	備前焼 磁鉢		27.7	29.4		(8.9)	T-197	
63	6		7B	埴土	甕493	備前焼 磁鉢		30.8			13.0	T-315	
63	7	91	10	7B	埴土	甕493	瀬戸美濃焼 反輪丸皿		7.2	7.5		2.0	T-424
63	8	91	3	7B	埴土	甕527	土師器 皿		6.8			1.6	T-208
63	9	91	7	7B	埴土	甕527	土師器 皿		10.4	10.6		1.9	T-232
63	10	86	7	7A	土層断面5	井F228	土師器 皿		9.5	9.8		2.2	T-410
63	11	86	8	7A	4段目	井F228	土師器 皿		10.2			2.3	T-411
63	12	91	12	7B	埴土	甕533	瀬戸美濃焼 鉄輪天目皿		11.3			5.7	T-209
63	13		7B	4段目	井F487	土師器 皿		9.6			1.8	T-381	
63	14	87	5	7B	2段目	井F487	土師器 皿		9.2			2.3	T-286
63	15	87	4	7B	4段目	井F487	土師器 皿		9.8			2.0	T-284
63	16	86	5	7A	土層断面6	井F247	滑津焼 皿		19.7			5.4	T-405
63	17	86	4	7A	4段目	井F228	瀬戸美濃焼 反輪形鉢ノ半皿		11.2			2.3	T-407
63	18	86	9	7A	14段目	井F229	瀬戸美濃焼 鉄輪七ツ皿		11.4			2.6	T-406
63	19	86	3	7A	10段目	井F228	瀬戸美濃焼 反輪丸皿		10.2	10.7		2.2	T-408

表18 豊臣陶磁器・土器一覧(3)

図版番号	写真番号	1/4寸	層位	遺構名	器種	口径	最大径	底径	器高	長さ	幅	厚さ	実測番号
62	20	86	6	7B	4段目 井戸487	土師器 皿	10.3		2.0				T2329
62	21		7	5段目 井戸487	土師器 皿	9.4			1.9				T2388
62	22	86	10	7A	埋土 井戸228	瀬戸瓦唐焼 区輪丸蓋	11.4		6.7				T2409
62	23	87	9	7B	4段目 井戸487	焼飯卓 蓋	5.4	7.2		5.1			T2 38
62	24	86	1	7B	4段目 井戸487	土師器 皿	9.9	10.1		2.1			T2125
62	25	87	3	7B	4段目 井戸487	土師器 皿	10.5	10.6		1.5			T2 54
62	26		7	4段目 井戸487	土師器 皿	13.0			2.1				T2393
62	27	87	1	7B	埋土 井戸487	土師器 皿	12.1		2.2				T2395
62	28	87	6	7B	埋土 井戸487	滑津焼 皿	13.1		3.9				T2399
62	29	87	7	7B	3段目 井戸487	滑津焼 皿	13.4		3.2				T2402
62	30	87	8	7B	4段目 井戸487	焼飯卓 蓋	7.5	7.8		1.6			T2 37
62	31		7	4段目 井戸487	土師器 皿	9.5		1.9					T2392
62	32	86	2	7B	掘り埋埋土 井戸487	土師器 皿(灯明蓋)	11.0		2.3				T2 22
62	33	86	1	7B	3段目 井戸518	土師器 皿	10.0	10.2		2.4			T2129
62	34		7	3段目 井戸487	土師器 皿	10.8			2.3				T2399
62	35	87	2	7B	4段目 井戸487	土師器 皿	12.4		2.5				T2 33
62	36		7	3段目 井戸487	土師器 土皿	23.6		(7,2)					T2392
62	37		7	3段目 井戸487	土師器 土皿	27.0			7.0				T2395
62	38	86	2	7B	1段目 井戸518	土師器 皿	6.8		1.9				T2164
62	39	86	5	7B	3段目 井戸518	滑津焼 向付	13.6		3.9				T2 30
62	40	86	3	7B	埋土 井戸628	土師器 皿	7.0		1.7				T2223
62	41	86	4	7B	埋土 井戸628	土師器 皿	7.0		1.8				T2224
62	42		7	埋土 井戸628	土師器 皿	10.4			2.1				T2248
62	43	86	6	7B	埋土 井戸628	瀬戸瓦唐焼 区輪丸蓋	10.3	10.4		2.1			T2247
62	44	89	5	7B	埋土 井戸628	瓦葺上蓋 香炉	5.2	7.6		4.8			T2249
62	45		7	埋土 井戸628	土師器 甕	22.0	22.2		2.5				T2246
62	46		7	1段目 井戸487	丹波焼 楕鉢	34.6		18.0					T2258
64	1	89	1	7B	埋土 井戸727	土師器 皿	9.7		2.0				T2153
64	2	79	1	7A	埋土 土坑292	土師器 皿	7.0	7.2		1.7			T2416
64	3		7	埋土 土坑296	焼飯卓 蓋	6.8	7.0		1.9				T2 36
64	4	78	5	7A	埋土 土坑318	滑津焼 皿	10.2	10.2		3.1			T2403
64	5	79	7	7A	埋土 土坑292	滑津焼 鉢	10.3		5.4				T2427
64	6	89	3	7B	埋土 井戸628	瀬戸瓦唐焼 区輪四形蓋	11.0	5.8		7.1			T2418
64	7	79	6	7A	埋土 土坑292	滑津焼 鉢	11.9		5.9				T2414
64	8	79	5	7A	埋土 土坑292	滑津焼 鉢	11.6		6.0				T2413
64	9	88	7	7B	埋土 井戸628	備前焼 大平鉢	27.6		3.6				T2376
64	10		7	埋土 井戸628	備前焼 楕鉢	30.6		(6,5)					T2225
64	11	79	2	7A	埋土 土坑292	志野 向付	11.2		3.4				T2412
64	12	79	3	7A	埋土 土坑292	志野 煎茶碗	11.0		7.0				T2415
64	13	78	6	7A	埋土 土坑318	焼飯卓 蓋	4.8		8.5				T2404
64	14	80	4	7A	埋土 土坑237	焼飯卓 蓋	5.0	6.6		8.5			T2 39
65	1	91	2	7B	6層 土師器 皿	7.0		1.6					T2113
65	2	91	9	7B	6層 土師器 皿	7.8		1.6					T2292
65	3	91	5	7B	6層 土師器 皿	10.4		1.8					T2300
65	4	91	8	7B	6層 土師器 皿	9.4		2.1					T2393
65	5		7	6層 土師器 皿	10.8		2.2						T2391
65	6	92	6	7B	6層 瀬戸瓦唐焼 区輪丸蓋	10.7		1.9					T2401
65	7	92	1	7B	6層 瀬戸瓦唐焼 区輪楕蓋	10.4		2.5					T2204
65	8	92	3	7B	6層 瀬戸瓦唐焼 皿	10.8		2.5					T2436
65	9	91	6	7B	6層 土師器 皿	10.3	10.7		2.1				T2251
65	10	92	7	7B	6層 瀬戸瓦唐焼 区輪丸蓋	10.4		2.2					T2371
65	11		7	6層 瀬戸瓦唐焼 区輪丸蓋	11.0	11.3		(5,1)					T2243
65	12		7	6層 瀬戸瓦唐焼 区輪丸蓋				4.6	(3,6)				T2340
65	13		7	6層 瀬戸瓦唐焼 鉄輪天目碗	11.8		(5,4)						T2260
65	14		7	6層 瀬戸瓦唐焼 鉄輪天目碗	12.0		5.9						T2377
65	15	92	8	7B	6層 瀬戸瓦唐焼 区輪折縁ソダ蓋	11.2		2.6					T2355
65	16		7	6層 鉄輪 鉢			3.5	(4,4)					T2273
65	17	93	5	7B	6層 備前焼 徳利煎飯	3.2	7.0		16.3				T2 48
65	18	94	4	7B	6層 備前焼 鉢	6.1		5.1					T2370
65	19		7	6層 瀬戸瓦唐焼 区輪鉢	14.4		(3,8)						T2378
65	20	94	5	7B	6層 李朝白磁 皿	16.0		6.3	3.3				T2374
65	21		7	6層 備前焼 鉢	16.2		6.6						T2363
65	22	94	2	7B	6層 美濃戸 鉢	14.4		8.1	6.5				T2358
65	23	93	6	7B	6層 瀬戸瓦唐焼 区輪折縁ソダ蓋	11.3		2.4					T2348
65	24	93	4	7B	6層 白磁 皿	9.8		4.8	2.2				T2392
65	25		7	6層 青花 鉢	9.4		(4,1)						T2332
65	26		7	6層 青花 鉢	10.8		5.9	2.2					T2226
65	27	94	6	7B	6層 白磁 皿?			5.6	(2,5)				T2381
65	28	92	9	7B	6層 備前焼 大平鉢	27.6		6.2					T2228
65	29	97	9	7B	6層 茶入 皿		3.5		6.7				T2550
65	30		7	6層 備前焼 大平鉢	32.7		19.8	4.6					T2259
65	31		7	6層 備前焼 楕鉢	28.1		10.1	13.7					T2318

表19 豊臣陶磁器・土器一覽(4)

図版番号	写真番号	1/10	厚	位置	遺構名	器種	口径	最大径	底径	器高	長さ	幅	厚さ	実測番号
60	32	94	7	7B	6層	備前焼 磁鉢	19.8		13.4	10.6				T3320
60	33	96	3	7B	7層	備前焼 磁鉢	23.8		12.2	8.7				T3321
60	34			7B	7層	備前焼 大平鉢	35.4			(5.7)				T3383
66	1	94	8	7B	7層	土師器 皿	6.1			1.4				T3294
66	2	94	10	7B	7層	土師器 皿	7.0			1.7				T3296
66	3			7B	7層	土師器 皿	7.6			1.9				T3297
66	4			7B	7層	土師器 皿	9.8			1.6				T3298
66	5	95	1	7B	7層	土師器 皿	9.6			2.1				T3303
66	6	94	11	7B	7層	土師器 皿	10.8			2.2				T3302
66	7	95	3	7B	7層	瀬戸瓦焼焼 灰輪丸皿	7.4			1.5				T3118
66	8			7B	7層	土師器 皿	10.0			2.2				T3299
66	9	95	6	7B	7層	瀬戸瓦焼焼 灰輪丸皿	9.4	9.6		2.3				T332
66	10	95	9	7B	7層	瀬戸瓦焼焼 灰輪丸皿	9.8			2.8				T3114
66	11	94	9	7B	7層	土師器 皿	10.3			2.4				T3295
66	12	95	2	7B	7層	瀬戸瓦焼焼 灰輪丸皿	9.5			2.1				T3115
66	13	95	7	7B	7層	瀬戸瓦焼焼 灰輪丸皿	8.9	9.2		2.0				T3119
66	14			7B	7層	瀬戸瓦焼焼 灰輪丸皿	9.6	10.2		2.2				T3439
66	15	97	2	7B	7層	白磁 器反皿	8.6			2.3				T3117
66	16	95	4	7B	7層	瀬戸瓦焼 煎粉皿	10.4		6.0	2.8				T3272
66	17	95	5	7B	7層	瀬戸瓦焼焼 灰輪丸皿	11.8			2.6				T3279
66	18	97	5	7B	7層	瀬戸瓦焼焼 向付	10.3			2.9				T3116
66	19	95	8	7B	7層	瀬戸瓦焼焼 灰輪丸皿	10.4			2.5				T3294
66	20	97	1	7B	7層	白磁 皿	14.0			2.5				T3400
66	21	94	3	7B	7層	瀬戸瓦焼焼 鉄輪小鍋	7.0	7.4		3.6				T3440
66	22			7B	7層	青瓦 甕	13.4			5.4				T3324
66	23	97	4	7B	7層	備前焼 埴形板		7.2		(6.7)				T3347
66	24			7B	7層	土師器 土蓋		19.0		(9.3)				T3288
66	25	96	1	7B	7層	瀬戸瓦焼焼 鉄輪天目碗	11.4			4.5	3.8			T3329
66	26			7B	7層	土師器 土蓋?	15.8	16.8		(5.4)				T3252
66	27			7B	7層	土師器 蓋?	18.8			(4.3)				T3300
66	28	97	6	7B	7層	白磁 甕	13.2			4.9	5.8			T3354
66	29			7B	7層	土師器 鉢?				(4.2)				T3295
66	30	95	3	7B	7層	瀬戸瓦焼焼 灰輪丸皿	12.5		5.2	7.1				T3364
66	31			7B	8層	土師器 皿	11.4			1.9				T3304
66	32	98	6	7B	8層	白磁 器反皿	11.2			2.5				T3319
66	33	98	9	7B	8層	瀬戸瓦焼焼 鉄輪七才皿	11.0	11.2		1.9				T3325
66	34	98	10	7B	8層	青瓦 皿	10.0			2.8				T3389
66	35	99	4	7B	8層	瀬戸瓦焼焼 鉄輪小鍋	6.8			4.0				T3438
66	36	98	6	7B	8層	土師器 皿	14.8			2.0				T3305
66	37			7B	8層	施釉陶器 皿			5.1	(4.5)				T3286
66	38	98	7	7B	8層	青瓦 甕	13.7		8.1	4.8				T3342
66	39			7B	8層	瀬戸瓦焼焼 鉄輪天目碗	12.2			(5.9)				T3211
66	40	99	7	7B	8層	備前焼 茶入	3.5		4.2	7.5				T3267
66	41	95	7	7B	7層	瀬戸瓦焼焼 水注			5.0		2.3			T3346
66	42			7B	8層	甕	21.2			(4.4)				T3284
66	43			7B	8層	土師器 土蓋?	21.4			(5.3)				T3285
66	44			7B	9層	瓦質土器 脚部			8.0	(7.3)				T3266
66	45	99	6	7B	9層	瀬戸瓦焼焼 灰輪丸皿	11.3		4.6	5.6				T3425
66	46	99	1	7B	9層	土師器 皿	6.9			1.8				T3121
66	47			7B	9層	白磁 皿	13.3		6.0	3.2				T3260
66	48	100	5	7B	9層	瀬戸瓦焼焼 鉄輪天目碗	12.0			5.0	6.0			T3253
66	49	100	4	7B	9層	瀬戸瓦焼焼 灰輪丸皿	10.6		6.1	2.4				T3251
66	50			7B	9層	白磁 皿	10.1		4.8	2.9				T3272
66	51			7B	9層	青瓦 甕	11.8	12.1		(5.4)				T3252
66	52			7B	8層	備前焼 水甕			16.4	(9.4)				T3273
66	53	99	10	7B	9層	備前焼 大平鉢	25.4	26.2		3.4				T3254
67	1	100	3	7B	10層	土師器 皿	6.1			1.2				T3214
67	2	100	1	7B	10層	土師器 皿	6.4			1.4				T3213
67	3	100	2	7B	10層	土師器 皿	6.8			1.5				T3212
67	4	100	10	7B	10層	土師器 皿(灯明皿)	10.4			1.9				T3244
67	5	100	9	7B	10層	土師器 皿	8.7			1.6				T3214
67	6			7B	10層	土師器 皿	10.2			1.6				T3212
67	7			7B	10層	土師器 皿	9.6			1.5				T3211
67	8	100	8	7B	10層	土師器 皿	10.0			2.0				T3210
67	9	100	7	7B	10層	土師器 皿	10.1			2.2				T3209
67	10	100	11	7B	10層~	瀬戸瓦焼焼 鉄輪小鍋	6.0			2.6				T3280
67	11			7B	10層	備前焼 鉢	16.0			6.6				T3282
67	12	100	12	7B	10層	備前焼 磁鉢	13.1			10.5				T3217
67	13			7B	7~9層	土師器 皿	9.2			1.8				T3206
67	14	98	1	7B	7~9層	瀬戸瓦焼焼 灰輪丸皿	10.1			2.3				T3291
67	15			7B	7~9層	青瓦 大甕	24.8			(2.9)				T3235
67	16			7B	7~13層	施釉 灯明皿	7.8			1.4				T3223

表20 豊臣陶磁器・土器一覧(5)

図録番号	写真番号	44分	層位	遺構名	器種	口径	最大径	底径	器高	長さ	幅	厚さ	実測番号	
67-17			7~13層		青花 瓶				5.0	(2.6)			T&S325	
67-18			7~13層		青花 瓶				5.2	(6.5)			T&S327	
67-19			7~13層		青花 皿				5.8	(1.3)			T&S331	
67-20			7~13層		青花 瓶	9.8			(4.7)				T&S329	
67-21			7~13層		青花 瓶	10.6			(4.4)				T&S328	
67-22			7~13層		青花 瓶	12.0			(5.0)				T&S326	
67-23	101	6	7~13層		白磁 皿			5.0	(3.2)				T&S396	
67-24			7~9層		横紋焼 徳利形瓶	3.2			(8.4)				T&S261	
67-25	98	4	7~9層		横紋 瓶	6.2		5.4	11.2				T&S265	
67-26	95	4	7層		瀬戸美濃焼 鉄輪ヒゲ皿	10.2		5.4	2.1				T&S426	
67-27	97	10	7~10層		茶入 蓋		2.6		0.7				T&S551	
67-28			7~13層		青花 皿			10.6	(1.4)				T&S324	
67-29			7~13層		青花 皿			10.2	(1.2)				T&S330	
67-30			7~13層		土師器 鉢	32.8			(6.1)				T&S256	
67-31			7~13層		青磁 瓶				6.4	(3.2)			T&S322	
67-32			7層		土師器 皿(転用円板)					(2.6)	(2.7)	0.3	T&S 50	
67-33			7層		青磁 瓶				4.6	(2.0)			T&S336	
67-34			8~9層		横紋焼 建水?	10.2	12.7		(5.6)				T&S369	
67-35	99	9	7層		瀬戸美濃焼 傘(覆書)						(7.7)	0.9	T&S122	
67-36			13層		土師器 杯	12.2			4.1				T&S359	
67-37	101	5	7層	11~13層	青磁 菊風	12.1			6.0	3.0			T&S356	
67-38	99	2	7層	8~9層	土師器 皿	7.7			1.7				T&S307	
67-39	98	5	7層	8~9層	土師器 皿	9.0	9.1		2.0				T&S120	
67-40	99	3	7層	8~9層	土師器 皿	10.8			2.0				T&S308	
67-41			7層	8~10層	瀬戸美濃焼 鉄輪小皿	5.6		2.4	2.3				T&S334	
67-42	99	5	7層	8~9層	瀬戸美濃焼 鉄輪天目鉢	11.0		4.1	5.3				T&S349	
67-43			7層	8~9層	横紋焼 瓶? (花押覆書)						(6.6)	0.9	T&S110	
67-44			7層	8~10層	土師器 鉢	31.6			(8.9)				T&S257	
67-45	101	7	7層	11~12層	横紋焼 建水	12.1		9.6	11.0				T&S247	
67-46	101	8	7層	13層	土師器 皿(覆書土器)	10.6			2.6				T&S111	
68-1			7層	埋土	横566	青花 皿(覆書土器)	9.2		4.3	1.9			T&S158	
68-2			7層	埋土	横590	青花 皿	11.5		6.2	2.9			T&S255	
68-3			7層	埋土	土坑538	青花 皿	10.7		5.4	2.7			T&S184	
68-4			7層	埋土	土坑538	青花 皿	11.3		6.2	2.0			T&S186	
68-5			7層	埋土	土坑538	青花 皿	13.0	13.3	(3.2)				T&S182	
68-6			7層	埋土	土坑536	青花 瓶	12.7		4.6	8.2			T&S 25	
68-7			7層	埋土	横599	青花 瓶	12.8		4.6	4.8			T&S214	
68-8			7層	埋土	横599	青花 鉢			9.8	(4.4)			T&S491	
68-9			7層	埋土	土坑521	青花 皿	25.0		(4.9)				T&S388	
68-10			7層	埋土	土坑526	青花 鉢	25.6		11.0	9.7			T&S131	
69-1			7層	埋土	土坑539	青花 瓶	13.2		5.4	5.6			T&S147	
69-2			7層	埋土	土坑538	青花 瓶			6.1	(3.0)			T&S188	
69-3			7層	埋土	土坑616	青花 瓶	12.6		4.3	5.9			T&S493	
69-4			7層	埋土	熱気遺構609	青花 皿	13.8		7.1	2.8			T&S201	
69-5			7層	4段目	井戸487	青花 瓶	10.2		5.1	5.6			T&S 26	
69-6			7層	14段目	井戸528	青花 皿			7.0	(1.1)			T&S496	
69-7			7層	石敷き523	青花 瓶				4.1	(2.1)			T&S165	
69-8			7層	埋土	土坑726	青花 瓶			5.1	(1.9)			T&S494	
69-9			7層	埋土	土坑539	青花 小杯	8.1		2.0	3.4			T&S183	
69-10			7層	埋土	土坑538	瀬戸美濃焼 人形					4.0	3.0	3.9	T&S492
69-11			7層	6層	青花 皿	11.1			5.0	2.9			T&S500	
69-12			7層	6層	青花 皿	9.8			4.9	2.9			T&S501	
69-13			7層	6層	横紋赤絵 瓶				4.6	(3.5)			T&S375	
69-14			7層	6層	青花 瓶				2.8	(2.6)			T&S505	
69-15			7層	6層	青花 皿	9.8			5.2	2.6			T&S503	
69-16			7層	6層	青花 皿	9.8			5.6	2.1			T&S227	
69-17			7層	6層	青花 大皿				13.0	(2.6)			T&S502	
70-1			7層	6~7層	青花 瓶	11.9			(4.4)				T&S508	
70-2			7層	6層	青花 瓶	13.0			4.9	6.3			T&S506	
70-3			7層	6層	青花 瓶				5.0	(2.4)			T&S333	
70-4			7層	6~7層	青花 瓶				4.6	(4.0)			T&S509	
70-5			7層	7~10層	磁器? 瓶	10.0			(4.8)				T&S532	
70-6			7層	7層	磁器? 瓶				3.4	(1.3)			T&S510	
70-7			7層	7層	青花 瓶	10.1			(2.6)				T&S512	
70-8			7層	7層	青花 瓶	11.6			(4.4)				T&S511	
70-9			7層	7層	青花 皿	9.4			4.0	2.8			T&S513	
70-10			7層	7層	青花 皿	10.7			4.4	2.9			T&S337	
70-11			7層	7層	青花 皿	11.3			6.0	2.5			T&S 28	
70-12			7層	7層	青花 皿				8.0	(1.6)			T&S514	
70-13			7層	7~8層	横紋赤絵 瓶	11.8			(2.3)				T&S527	
70-14			7層	7~10層	横紋赤絵 瓶				13.0	(2.6)			T&S531	
70-15			7層	7層	青花 皿	10.6			5.8	2.8			T&S516	

表21 豊田陶磁器・土器一覽(6)

図録番号	写真番号	H/P	層位	遺物名	器種	口径	最大径	底径	器高	長さ	幅	厚さ	測測番号	
70	16		7B	6層	青花 皿	10.4		5.6	2.5				T2504	
70	17		7B	6層~	青花 皿	12.2		6.3	2.7				T2507	
70	18		7B	7層	青花 皿	11.5		6.2	2.7				T2515	
70	19		7B	7層	青花 皿	13.0		6.9	3.0				T2518	
70	20		7B	7層	青花 皿	11.6			(1.9)				T2517	
71	1		7B	7層	青花 碗	11.7		3.9	5.5				T2521	
71	2		7B	8-9層	青花 碗	12.0		4.4	5.4				T2343	
71	3		7B	8層	青花 碗	12.4		4.4	5.5				T2535	
71	4		7B	7層	青花 碗	12.7		3.9	5.8				T2522	
71	5		7B	7層	青花 碗	13.0		5.1	6.3				T2523	
71	6		7B	7層上面	青花 皿	10.4		5.6	2.3				T2526	
71	7		7B	8層	青花 皿	9.8		5.5	2.2				T2534	
71	8		7B	8-9層	青花 皿	10.0		5.6	2.5				T2536	
71	9		7B	7~13層	青花 碗			4.3	(1.5)				T2533	
71	10		7B	7-9層	青花 皿	14.0		8.5	2.8				T2530	
71	11		7B	9層	青花 皿	13.2		7.2	2.9				T2539	
71	12		7B	9層	青花 皿			6.1	(1.2)				T2541	
71	13		7B	7層	青花 皿			7.2	(2.1)				T2519	
71	14		7B	7層	青花 杯	6.8			(3.5)				T2520	
71	15		7B	7-8層	青花 杯	6.4		2.2	4.0				T2529	
71	16		7B	7層	青花 碗?			5.9	(1.4)				T2525	
71	17		7B	7-8層	青花 皿			5.7	(1.6)				T2528	
71	18		7B	7層	青花 皿			3.9	(1.5)				T2524	
71	19		7B	8層	青花 碗			3.9	(2.1)				T2540	
72	1		7B	8層	青花 皿	10.4		4.9	2.6				T2538	
72	2		7B	8層	青花 皿	10.7		4.8	2.8				T2387	
72	3		7B	8-9層	青花 碗			5.6	(3.3)				T2537	
72	4		7B	埋土	井P518 志野 碗	13.1			(6.7)				T2497	
72	5		7A	6層	志野 灯明皿	5.1	8.0	4.7	3.6				T2523	
72	6		7B	埋土	井P247 青磁器 向付	21.0			5.2				T2495	
72	7		7A	6層	青津焼 皿	13.2		4.4	(4.4)				T2498	
72	8		7A	土層断面6	井P247 切懸伊万里 碗	10.0		3.9	5.9				T2341	
		78	7	7A	埋土	土坑291								
		79	4	7A	埋土	土坑292								
		79	8	7A	埋土	土坑292								
		85	7	7B	埋土	土坑690	11.7		4.2	4.0				
		89	2	7B	埋土	井P731	10.3		4.5	2.5				
		89	4	7B	埋土	井P731			4.8					
		91	11	7A	1~3層	青津焼 皿	11.7		4.4	3.3			T2362	
		92	2	7B	6層	瀬戸式焼物 皿	10.9		5.5	2.5				
		92	4	7B	6層	瀬戸式焼物 鉄輪7.5尺 皿	10.5		5.4	2.2				
		93	1	7B	6層	瀬戸式焼物 鉄輪天目碗	12.2		5.4	6.4				
		93	2	7B	6層	瀬戸式焼物 鉄輪天目碗	11.9		4.9	6.1				
		93	3	7B	6層	瀬戸式焼物 鉄輪天目碗	11.6		4.1	5.5				
		94	1	7B	6層	瀬戸式焼物 鉄輪丸皿	10.9		3.9	5.3				
		95	10	7B	7層	瀬戸式焼物 鉄輪皿	10.3		6.1	2.3				
		96	2	7B	7層	瀬戸式焼物 鉄輪天目碗	11.4		3.9	6.2				
		96	4	7B	7層	瀬戸式焼物 鉄輪天目碗	11.9		5.2	6.0				
		96	5	7B	7層	瀬戸式焼物 鉄輪天目碗	11.4		4.3	6.2				
		96	6	7B	7層	瀬戸式焼物 鉄輪丸皿	11.1		5.2	5.3				
		97	3	7B	7層	白磁 菊皿	13.3		8.2	2.7				
		97	7	7B	7層	瀬戸式焼物 鉄輪天目碗	12.4							
		97	8	7B	7層	瀬戸式焼物 鉄輪天目碗	10.6		4.2	5.9				
		98	2	7B	7層	瀬戸式焼物 鉄輪皿	9.8		5.4	1.9				
		100	6	7B	9層	瀬戸式焼物 鉄輪天目碗	11.5		4.3	5.8				
		101	1	7B	13層	瀬戸式焼物 鉄輪丸皿	8.5		4.7	2.3				
		101	2	7B	13層	瀬戸式焼物 鉄輪丸皿	10.7		5.3	2.0				
		101	3	7B	13層	土師器 皿	10.4			2.2				
		101	4	7B	13層	瀬戸式焼物 鉄輪丸皿	10.3		5.1	2.6				
		101	9	7B	埋土	継群780 青磁					9.0	3.2		T2155

2. 瓦類

今回の調査では北半部の7B地区を中心として多くの瓦類が出土している。出土瓦の多くは丸瓦および平瓦で占められている。ただし、冒頭でも述べたようにこれらの瓦類についてはほとんど手付かずの状態であり、ここでは軒瓦および道具瓦を対象として報告を行う。また、少なからず出土している金箔押瓦類については個別に報告する。なお、土器・陶磁器と同様に豊臣後期の遺構が僅少であることにより、必然的に当該期の瓦の出土点数も多くなく、ここでは一括して報告する。

(1) 金箔押瓦

今回の調査ではすでに記してきたように豊臣後期に対応する遺構面である豊臣0面については、その上面が大きく削平されていることもあり、掘削深度の深い井戸などの遺構がかろうじて遺存していたに留まる。金箔瓦についても一部で井戸247や4層から出土したものがあるなど、その埋没時期が豊臣後期に下るものも散見されるが、その大半は豊臣前期に帰属するものである。

なお、金箔瓦の出土遺構および層位、点数については表22～24に種別ごとに網羅的に記している。本来であれば、豊臣前期と後期を厳密に峻別して記述を進めることが望ましいが、上記のように豊臣後期に下る金箔瓦は僅少であることから、基本的には一括して報告を行ってゆくことにしたい。

①金箔押軒丸瓦 (図73-1～13、写102-103)

金箔押軒丸瓦は41点が出土している。そのうちの約半数にあたる20点は小片のために同范関係等を判別できないものである。一方、瓦当面が残り、同范か否かを判別できるものについては便宜的に金丸A類から金丸M類の13類に分類している。なお、金丸K類(73-13)および金丸M類(73-12)とした菊花文の瓦については飾瓦の可能性も残す。また、金丸J類(73-10)および金丸L類(73-11)は断片ながらも形状および丸瓦上面にも金箔が押されることから鳥衾瓦と考えられるものである。

出土遺構および層位からみて、大半は豊臣前期のものと考えられるが、井戸247から出土した金丸F類(73-6)については豊臣後期に帰属するものである。

出土遺構および層位が異なるので単純には割り切れないが、金箔押軒丸瓦の平面的出土分布をみると、区画Bに包括される範囲からの出土が最も多く、次いで区画C、区画Dの順で続き、区画A・E・Fからは出土は確認できない。後述する軒平瓦においても同じような出土傾向がみられる。

金丸A類～J類はいずれも素文の外縁をもつ三巴文である。巴巻きはいずれも左巻きであり、金丸A類～C類(73-1～3)は内区の團線をもつ。また、金丸I類(73-9)のみ珠文をもたない。完形で出土したのは豊臣後期の金丸F類(73-6)のみであるが、法量を見るとこの金丸F類が直径15.4cmであるのに対して、他例は17cm以上の直径をもつ。なお、金丸L類(73-11)は細片で瓦当文様の全容は不明であるが、二重菊花軒丸瓦であると考えられるものである。

②金箔押軒平瓦 (図73-14～23、写104)

金箔押軒平瓦は55点が出土している。そのうちの19点が小片のために同范関係等を判別できないものである。一方、細片ではあっても同范関係を判別可能なものについては便宜的に金平A類から金平H類の8類に分類している。点数的には決して多いとはいえないが、先に報告した軒丸瓦では出土点数にさほど多寡がみられないものの、軒平瓦では金平A類およびB類が他例に比して明らかに多い点は留意される。

軒丸瓦と同様に出土遺構および層位が異なるので単純には割り切れないが、平面的出土分布の傾向をみると、区画Bの西半からの出土点数が最も多く、次いで区画C・F、区画Dの順で続いている。なお、軒丸瓦と同様に区画A・Eからは出土していないが、とくに区画Eは部分的に検出したものであり、これが



图73 金箔押軒丸瓦·軒平瓦

実態を示すものかは不明である。区画Fからの出土が確認される点が軒丸瓦の出土分布とは重ならないが、その他の平面的な出土分布は出土比率の点からみても、重なりをみせている。ただし、両者の平面的な出土分布は遺構密度とも呼応し、後述する金箔押しではない通常の軒丸瓦との出土分布とも重なる部分が多い。

出土点数が11点の金平A類(73-15・16)は葉脈のある三葉を中心飾りとする唐草文の軒平瓦である。同様に金平C類(73-14)および金平F類(73-17)も葉脈を表現した三葉の中心飾りをもつものである。なお、金平C類は三葉の右に星形を配し、右第4支葉に子葉を表現するなどの特徴から、過去の調査で中央体育館地区において出土しているものおよび姫路市八正寺、姫路城西ノ丸で出土している瓦と同范瓦である。金平F類(73-17)は平瓦部の凹面側に段をもち、焼成前の線刻がある。文字であれば2文字分が残るが、1文字目が「十」であると考えられるものの全容は不明である。

出土点数が12点と最も出土数が多い金平B類(73-20・21)は放射状の子葉を表現した中心飾りをもつ3回反転の唐草文の軒平瓦である。金平G類(73-23)およびH類(73-22)は中心飾りが残らないものの、唐草文の様相から異種と判断できるために独立した分類としたものである。

このほか、金平E類(73-19)は半円形の波文からC字対向の蕨手がのびる中心飾りを有する瓦であり、瓦当厚が厚い滴水瓦系の軒平瓦である。金平D類(73-18)は菊花紋の左右下方に半円形の波文を配した中心飾りをもつもので、金平E類と同様に滴水瓦系の軒平瓦である。

③金箔押道具瓦(図74、写105)

金箔押道具瓦はいずれも破片で14点が出土している。うち、10点は細片であったり、部分的な断片であったりして全容が不明なものである。形状が判明するものでは鬼瓦、鯪瓦、花狭間がある。鬼瓦(74-4)は大品型であり、側面の一部にも金箔が貼られている。鯪瓦(74-3)は口から胴部にかけての破片であり、眼球部分にのみ金箔が貼られている。胴部にはU字形の型押しによって鱗が表現されている。

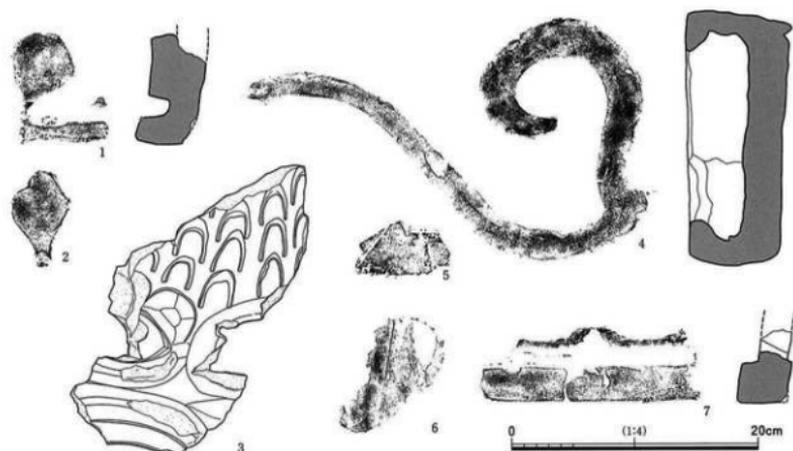


図74 金箔押道具瓦

表22 金箔神軒丸五一覧

図面番号	写真番号	1/2分	分類	直径	外径区径	内径		外区径		丸五層	胎土	点数	遺積・層位	美濃番号	備考				
						厚さ	厚さ	厚さ	厚さ										
73-1	1021	1	金平A類	(17.8)	12.2	10.0	左	1.2	(18)	1.1	0.3	2.8	0.9	2.9	-	2	土灰596・濃621	T-2-110	
73-2	1022	2	金平B類	(17.8)	(12.7)	(9.4)	左	1.8	9	0.9	0.3	2.2	0.9	-	-	2	濃621	T-2-120	
73-3	1023	3	金平C類	(17.8)	(12.2)	(9.4)	左	1.4	9	1.0	0.3	2.8	1.0	-	-	2	井610・6層	T-2-125	
73-4	1024	4	金平D類	(18.2)	(12.8)	(9.8)	左	1.5	9	0.9	0.3	2.4	1.1	2.4	-	3	濃621	T-2-126	
73-5	1025	5	金平E類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.6	(13)	1.0	0.3	2.1	1.1	2.4	-	3	濃621	T-2-117	
73-6	1026	6	金平F類	(18.2)	(12.8)	(9.8)	左	1.3	9	0.9	0.3	2.1	0.6	2.3	27.7	-	3	濃621・井610	T-2-111
73-7	1027	7	金平G類	(18.2)	(12.8)	(9.8)	左	1.5	9	1.0	0.2	2.7	0.9	2.7	-	1	井6217	T-2-121	
73-8	1028	8	金平H類	(18.2)	12.0	8.6	左	1.5	(16)	0.9	0.3	2.7	0.9	2.4	-	1	土灰596	T-2-122	
73-9	1031	2	金平I類	(19.1)	(14.9)	(12.9)	左	1.0	9	-	2.1	1.0	-	-	-	2	金平濃621	T-2-112	
73-10	1032	3	金平J類	(21.3)	(16.1)	(13.5)	左	1.3	9	1.0	0.2	2.6	1.0	-	-	3	井68層	T-2-110	
73-11	1033	3	金平K類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-116	
73-12	1034	4	金平L類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-118	
73-13	1035	6	金平M類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-141	
73-14	1036	6	金平N類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-132	
73-15	1037	6	金平O類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-133	
73-16	1038	6	金平P類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-134	
73-17	1039	6	金平Q類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-135	
73-18	1040	6	金平R類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-136	
73-19	1041	6	金平S類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-137	
73-20	1042	6	金平T類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-138	
73-21	1043	6	金平U類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-139	
73-22	1044	6	金平V類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-140	
73-23	1045	6	金平W類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-141	
73-24	1046	6	金平X類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-142	
73-25	1047	6	金平Y類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-143	
73-26	1048	6	金平Z類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-144	
73-27	1049	6	金平AA類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-145	
73-28	1050	6	金平AB類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-146	
73-29	1051	6	金平AC類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-147	
73-30	1052	6	金平AD類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-148	
73-31	1053	6	金平AE類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-149	
73-32	1054	6	金平AF類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-150	
73-33	1055	6	金平AG類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-151	
73-34	1056	6	金平AH類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-152	
73-35	1057	6	金平AI類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-153	
73-36	1058	6	金平AJ類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-154	
73-37	1059	6	金平AK類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-155	
73-38	1060	6	金平AL類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-156	
73-39	1061	6	金平AM類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-157	
73-40	1062	6	金平AN類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-158	
73-41	1063	6	金平AO類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-159	
73-42	1064	6	金平AP類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-160	
73-43	1065	6	金平AQ類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-161	
73-44	1066	6	金平AR類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-162	
73-45	1067	6	金平AS類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-163	
73-46	1068	6	金平AT類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-164	
73-47	1069	6	金平AU類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-165	
73-48	1070	6	金平AV類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-166	
73-49	1071	6	金平AW類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-167	
73-50	1072	6	金平AX類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-168	
73-51	1073	6	金平AY類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-169	
73-52	1074	6	金平AZ類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-170	
73-53	1075	6	金平BA類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-171	
73-54	1076	6	金平BB類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-172	
73-55	1077	6	金平BC類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-173	
73-56	1078	6	金平BD類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-174	
73-57	1079	6	金平BE類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-175	
73-58	1080	6	金平BF類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-176	
73-59	1081	6	金平BG類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-177	
73-60	1082	6	金平BH類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-178	
73-61	1083	6	金平BI類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-179	
73-62	1084	6	金平BJ類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-180	
73-63	1085	6	金平BK類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-181	
73-64	1086	6	金平BL類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-182	
73-65	1087	6	金平BM類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-183	
73-66	1088	6	金平BN類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-184	
73-67	1089	6	金平BO類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-185	
73-68	1090	6	金平BP類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-186	
73-69	1091	6	金平BQ類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-187	
73-70	1092	6	金平BR類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-188	
73-71	1093	6	金平BS類	(18.2)	(13.0)	(9.9)	左	1.3	9	-	3.4	1.1	-	-	-	3	濃621	T-2-189	
73-72	1094	6	金平BT類	(18.2)	(13.0)	(

(2) 軒丸瓦 (図76・77、写106～109)

金箔押瓦と同様に豊臣後期に下る遺構が僅少であることから、軒丸瓦についても豊臣前期と後期については文中では適宜触れるが、基本的には一括して報告する。

軒丸瓦の瓦当文様はその大半が巴文であるが、わずかに家紋系の瓦当文様をもつものも出土している。瓦当文様が残る軒丸瓦は破片を含めて285点が出土しているが、うち146点については細片であったりして、范種の異同が判別できないものである。残る139点は同范関係の判定が可能であり、51種の范を確認している。

出土した巴文の軒丸瓦は大半は左巻きの三つ巴文であり、分類については近年、報告書が刊行された『難波宮址の研究第十一』(大阪市文化財協会2000)に準拠した。

I類は外区に珠文帯をもたないもの、II類は外区に珠文帯をもち、内区との境を圏線で画するものである。III類は外区に珠文帯をもつが、内区との境に圏線をもたないものである。なお、各巴の尾が接して圏線状を呈しているものについてはII類にはせず、III類とした。

また、今回の報告では巴文以外の家紋系などの軒丸瓦についてはIV類として区別した。

なお、軒丸・軒平瓦の分類については、上記の大分類に基づき、枝番を付してそれを細分する方法をとったが、その作業の最終段階で一部に江戸時代の瓦を混同していたことが発覚したため、分類の番号がかならずしも整然と並ばず飛んでいる。本来であれば、分類番号を整理して報告すべきところであるが、すでに当該分類に基づいて収納を含めたすべての作業を行っており、非常に煩雑ではあるが、無用な混乱をさけるためにそのまま提示しているので注意されたい。

なお、各種軒丸瓦の出土位置の平面分布図を作成して、遺構の項で報告した区画との関連の抽出を試みたが、結果的には同種の軒丸瓦が比較的多く出土している遺構も皆無ではないが、全体の出土数が少ないこともあって区画毎の相違を見出すまでには至っていない。ただ、豊臣後期の井戸247では先に報告した金箔押瓦を含む多種の軒丸瓦が出土しているのが特徴的であり、軒平瓦が少ないのに対して軒丸瓦の出土比率が高いのも特筆される点である。

I類は2種を確認している。丸I-1類(75-1)としたものが1点のみの出土であるのに対して、丸I-2類(75-2)は8点を数え、比較的多く出土している。多くは北半の7B地区から出土しているが、7A地区の井戸328からの出土も確認される。精製な胎土をもち、焼成も良好である。

II類は9種を確認している。このうち、井戸247から出土した丸II-4類(75-5)および土坑292から出土した丸II-10類(75-11)は埋没時期が豊臣後期に下るものである。いずれも1点ずつの出土である。

III類は39種を確認している。うち、32種は1点のみの出土である。一覧表にも示したように井戸247から多種の瓦が出土しているが、これらはいずれも豊臣後期以降に埋没したものである。なお、丸III-2類(75-12)の1点および丸III-14類(76-2)は烏衾瓦である。また、丸III-12類(76-1)および丸III-42類(77-5)は隅巴で、後者には丸瓦部上面に線刻が確認される。完存していないので全容は不明であるが、文字ではなく「折れ松葉」である可能性が高い(写109-7")。

IV類は3種を確認している。丸IV-1類(77-12)は佐竹氏の家紋である「扇に月丸紋」の軒丸瓦である。1点のみの出土ではあるが、過去の調査では今回の調査区の西側においてその出土が確認されており、現状では同系の軒丸瓦の東限である。丸IV-2類(77-13)および丸IV-4類(77-14)ともに家紋系の軒丸瓦であり、前者は桐紋、後者は桔梗紋の軒丸瓦である。いずれも豊臣後期以降の遺構、包含層からの出土である。

(3) 軒平瓦 (図77・78、写110～112)

瓦当が残る軒平瓦は細片を含めて163点が出土している。うち、80点は細片のために范の異同が判断できないものである。同范関係が判明するものでは38種を確認しており、波紋の軒平瓦2点を除けば、いずれも均整唐草文と考えられるものである。

唐草文軒平瓦をⅠ～Ⅳ類に分類し、波紋軒平瓦をⅤ類とした。唐草文軒平瓦は中心飾りを基軸として分類している。

Ⅰ類は中心飾りが三葉のもので16種24点を確認している。平Ⅰ-8類(77-24・25)が8点出土している以外には1点もしくは2点の出土である。このうち、井戸247から出土した平Ⅰ-1類(77-15)および平Ⅰ-23類(77-28)、井戸487から出土した平Ⅰ-7類(77-21)は豊臣後期に帰属する。

Ⅱ類は中心飾りが三葉以上で放射状に広がるものなどで7種8点を確認している。いずれも1点もしくは2点の出土であり、主流を占めるものではない。

Ⅲ類は中心飾りが桐紋で4種10点を確認している。平Ⅲ-1類(78-9)が区画BおよびCを中心に6点出土している以外、いずれも少量の出土である。

Ⅳ類は中心飾りが宝珠、もしくは円形のものなどで9種39点を確認している。

平Ⅳ-1類(78-15)が22点、平Ⅳ-2類(78-13・14)が9点出土するなど、出土総数が少ないものの出土点数では他の例を凌駕している。

軒丸瓦と同様に各種の軒平瓦の平面分布をみると、最も点数が多い平Ⅳ-1類は区画Bからの出土が目立っている。また、同類は他の区画からも出土しているが、いずれの場所でも軒丸のうちで最も出土点数が多い丸Ⅲ-3類(75-14)と分布が重なる傾向を見出すことができ、セット関係を成すものである可能性が示唆される。

Ⅴ類は波紋の軒平瓦で2種2点が出土している。時期的には遡るものではあるが、平Ⅳ-1類(78-22)は2つに割られて豊臣期の竈651の壁体に利用されていたものが接合したものである。

(4) 道具瓦 (図78、写112)

飾瓦・鬼瓦などが出土している。

破片で出土したものが多く、写真のみを掲載しているものが多い。なお、すでに記したように鬼瓦などの一部のものについては古い段階のものが含まれている可能性が高い(写112-5・7)。同様に当該期のものと考えられる棟込瓦も出土しているが、そのすべてが江戸時代以降の遺構から出土したものであり、江戸時代の項で報告することとした。

図78-25・26はマネキ屋根につけられるエブリ板と考えられるものである。これ以外では板状の飾り瓦と考えられるものが多

いものの、全容が判断としない資料が多い。

ただし、写112-8はその形状から、鯨瓦の鱗の先端部の破片である可能性が高い。

表25 道具瓦一覧

図版番号	写真番号	寸法	幅	高さ	厚さ	点数	遺構・層位	実測番号		
78	25	112	9	7B	16.5	32.4	2.5	1	土坑636	Tみ257
78	26	112	13	7B	20.4	29.9	2.4	1	溝542	Tみ256
		112	3	7B	14.8	15.4	2.5	1	井戸628	
		112	4	7B	12.5	13.1	4.6	1	6層	
		112	5	7B	16.1	22.6	6.0	1	7～10層	
		112	6	7B	16.7+8.9	22.1+8.7	3.9	1	10層	
		112	7	7B	12.6	8.6	5.4	1	9層	
		112	8	7B	19.6	14.4	3.7	1	6層	
		112	10	7B	15.1	13.8	4.1	1	6層	
		112	11	7B	5.2	4.0	2.1	1	7層	
		112	12	7B	13.7	13.6	3.6	1	7層	

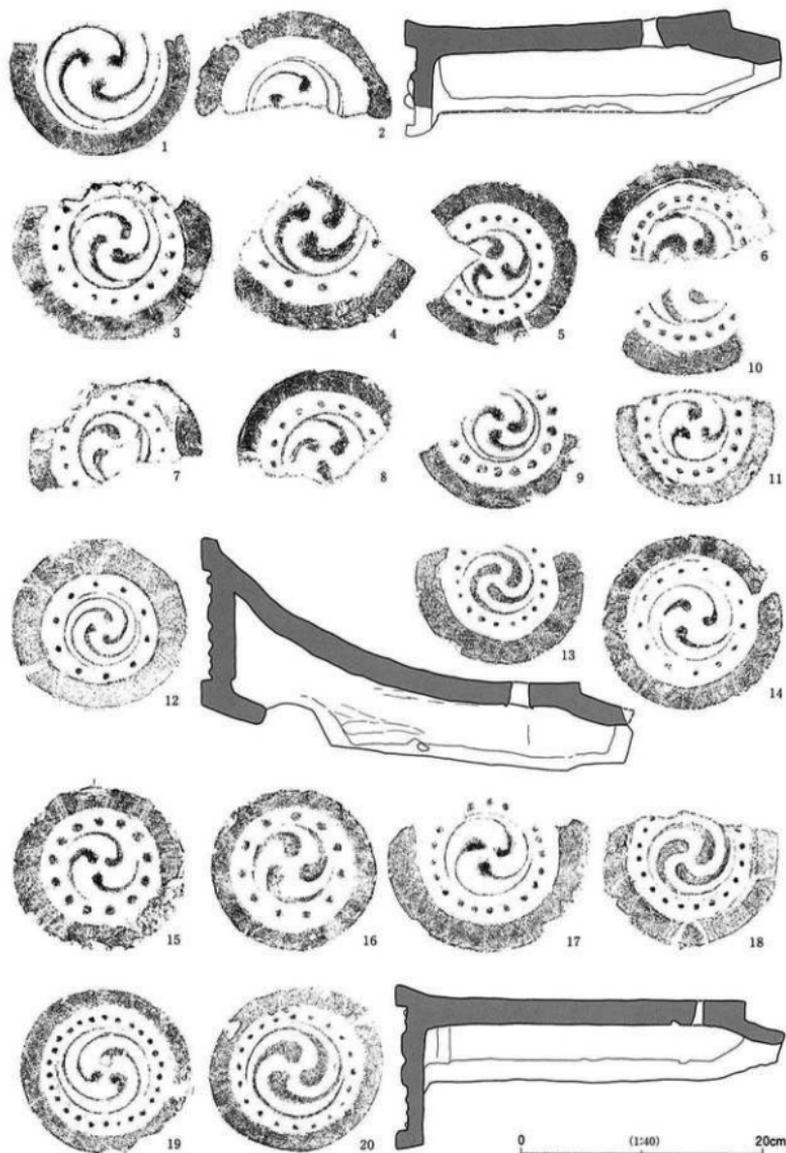


图75 軒丸瓦(1)

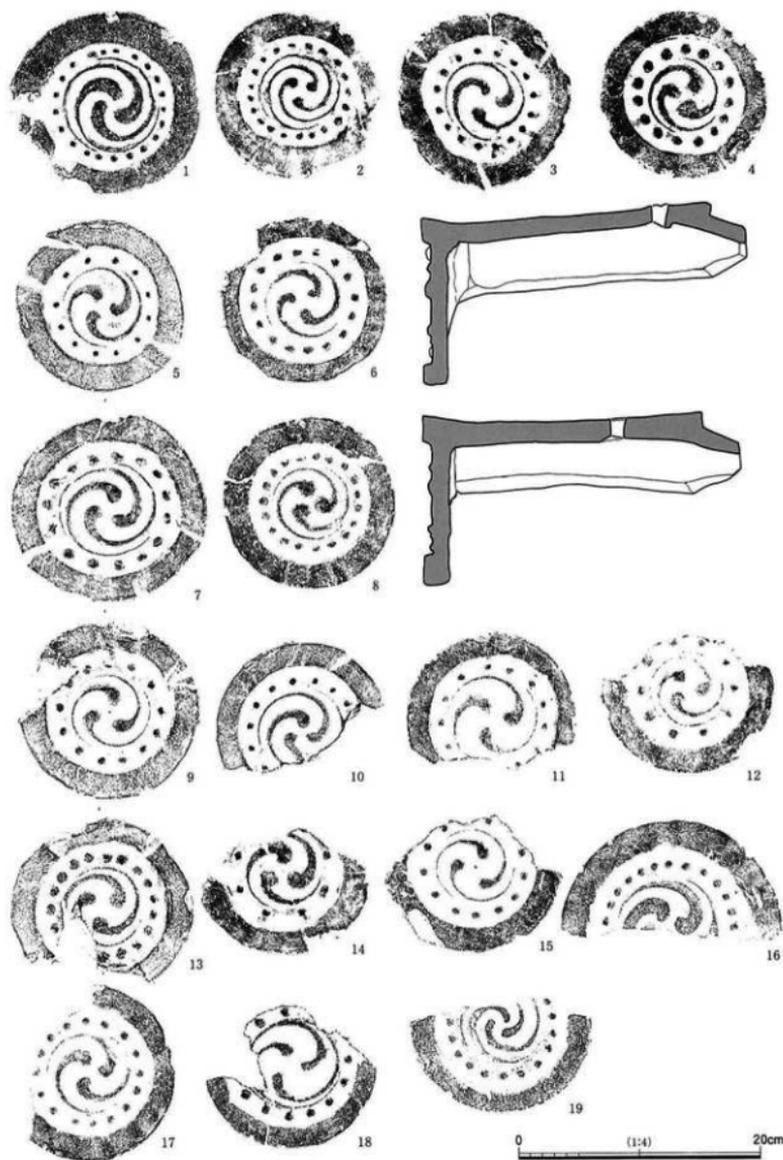


图76 軒丸瓦(2)



图77 軒丸瓦・軒平瓦

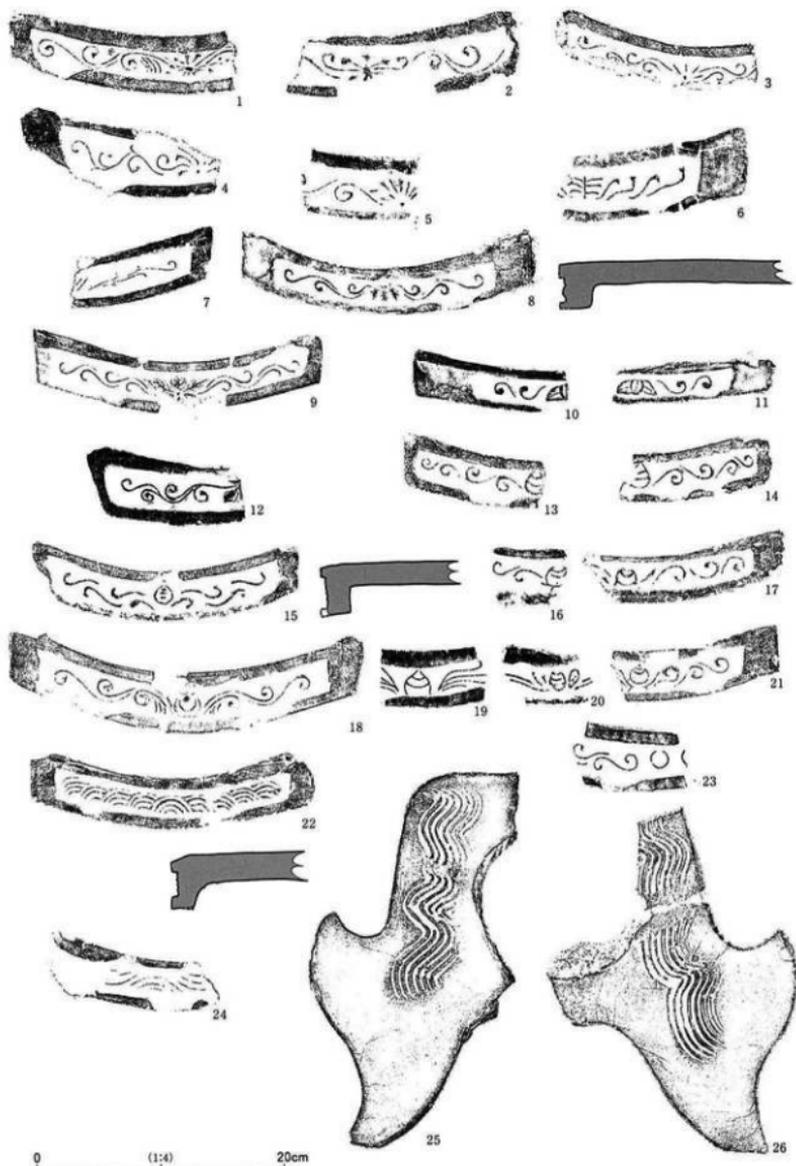


图78 軒平瓦·道具瓦

表26 軒丸瓦一覽

図面番号	写真番号	部分	分類	面積	文様配置	内区	軒瓦の積立				外区外壁	瓦当群	全瓦	丸瓦数	粘土	数量	通稱・部位	瓦割番号	備考
							数	積立	数	積立									
751	1061	1	丸瓦	14.1	10.0	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.5	2.5	-	1個	8	井戸323-番506-番512-土割584+土割517+土割	174159	
752	1062	2	丸瓦	14.8	9.9	7.0	1.3	2.9	1.3	2.9	1.3	31.2	31.2	3.5	3.5	1個	1	土割584	174200
753	1063	3	丸瓦	15.3	10.7	8.0	1.4	1.8	1.2	0.4	2.3	1.0	2.4	-	1個	1	土割584	174201	
754	1064	4	丸瓦	13.3	8.0	6.0	1.4	1.7	0.7	0.3	2.5	0.5	1.7	-	2.0	5ヶ小割	1	井戸347	174202
755	1065	5	丸瓦	15.1	11.1	7.9	1.2	2.8	1.0	0.3	2.2	1.0	3.4	-	2.0	5ヶ小割	1	7ヶ~12ヶ	174203
756	1066	6	丸瓦	13.4	9.4	6.6	1.4	1.6	0.8	0.2	2.1	0.9	2.3	-	2.6	4ヶ小割	1	井戸	174204
757	1067	7	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174205
758	1068	8	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174206
759	1069	9	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174207
760	1070	10	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174208
761	1071	11	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174209
762	1072	12	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174210
763	1073	13	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174211
764	1074	14	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174212
765	1075	15	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174213
766	1076	16	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174214
767	1077	17	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174215
768	1078	18	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174216
769	1079	19	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174217
770	1080	20	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174218
771	1081	21	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174219
772	1082	22	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174220
773	1083	23	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174221
774	1084	24	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174222
775	1085	25	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174223
776	1086	26	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174224
777	1087	27	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174225
778	1088	28	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174226
779	1089	29	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174227
780	1090	30	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174228
781	1091	31	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174229
782	1092	32	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174230
783	1093	33	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174231
784	1094	34	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174232
785	1095	35	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174233
786	1096	36	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174234
787	1097	37	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174235
788	1098	38	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174236
789	1099	39	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174237
790	1100	40	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174238
791	1101	41	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174239
792	1102	42	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174240
793	1103	43	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174241
794	1104	44	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174242
795	1105	45	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174243
796	1106	46	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174244
797	1107	47	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174245
798	1108	48	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174246
799	1109	49	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174247
800	1110	50	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174248
801	1111	51	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174249
802	1112	52	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174250
803	1113	53	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174251
804	1114	54	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174252
805	1115	55	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174253
806	1116	56	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174254
807	1117	57	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174255
808	1118	58	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174256
809	1119	59	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174257
810	1120	60	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174258
811	1121	61	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174259
812	1122	62	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174260
813	1123	63	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174261
814	1124	64	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174262
815	1125	65	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174263
816	1126	66	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174264
817	1127	67	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174265
818	1128	68	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174266
819	1129	69	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174267
820	1130	70	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174268
821	1131	71	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174269
822	1132	72	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174270
823	1133	73	丸瓦	14.0	10.1	7.3	1.2	1.5	1.4	0.8	0.2	2.0	0.7	-	2.4	4ヶ小割	1	井戸	174271

表27 軒平瓦一覽

圖號番号	写真番号	社外	分類	瓦葺										全長	軒平	胎土	品質	通稱・部位	製法番号				
				上段端	下段端	葺源	瓦高	厚さ	幅	内区	外区	下	上							葺	葺	葺	葺
77 15	110	1	7B	平1-1型	22.1	21.0	2.0	3.3	1.4	1.9	二葺	4	0.7	0.7	2.5	0.3	2.4	2.2	X	1	葺2487	T2450	
77 16	110	2	7B	平1-2型	21.4	20.1	2.5	4.2	1.3	2.5	二葺	10	0.9	0.9	2.1	1.8	0.5	3.1	2.1	X	1	T2452	
77 17	110	3	7B	平1-3型	23.1	23.1	2.8	3.5	1.3	2.1	二葺	6	0.5	0.7	2.9	0.5	2.3	2.0	○	2	6-7葺	T2472	
77 18	110	4	7B	平1-5型	-	-	-	3.7	1.5	2.2	二葺	6	0.7	0.9	2.3	0.6	2.9	2.0	○	1	7-10葺	T2471	
77 19	110	5	7B	平1-6型	-	-	-	4.2	1.8	2.4	二葺	6	0.7	0.9	1.8	0.6	2.4	2.3	○	1	8葺	T2463	
77 21	110	6	7A	平1-7型	22.4	22.4	2.0	3.4	1.3	2.1	二葺	2	0.8	0.5	3.3	0.4	2.2	1.8	X	1	丹戸217	T2455	
77 24	110	7	7B	平1-8型	-	-	-	3.1	1.1	1.9	二葺	6	0.6	0.6	3.4	0.3	2.1	1.9	X	1	6-10葺	T2454	
77 25	110	7	7B	平1-8型	-	-	-	3.5	1.8	1.9	二葺	6	0.7	0.7	2.2	0.4	2.1	2.4	○	1	6-10葺	T2465	
77 26	-	-	-	-	22.7	-	-	1.9	-	-	二葺	6	0.8	0.8	2.1	0.6	2.8	2.0	○	1	6-9葺	T2460	
77 28	-	-	-	-	-	-	-	4.1	1.4	2.4	二葺	6	0.7	0.8	0.8	-	0.4	2.6	○	2	6-10葺	T2474	
77 28	-	-	-	-	-	-	-	3.8	1.4	2.2	二葺	-	0.8	0.7	-	0.5	3.5	1.6	X	-	2.5	T2477	
77 28	-	-	-	-	-	-	-	4.4	2.1	2.4	二葺	-	1.1	0.9	-	0.5	3.2	2.4	X	-	1.9	T2478	
77 28	-	-	-	-	-	-	-	3.3	1.4	2.0	二葺	-	0.7	0.5	-	0.5	2.4	1.3	X	-	1.9	T2481	
77 28	-	-	-	-	-	-	-	3.4	1.6	1.7	二葺	-	0.8	0.6	-	0.5	2.7	1.8	○	-	1.9	T2479	
77 28	-	-	-	-	-	-	-	4.0	1.7	1.9	二葺	-	1.4	0.6	-	0.5	2.8	2.6	○	-	1.9	T2480	
77 28	-	-	-	-	-	-	-	3.7	1.6	1.5	二葺	-	0.4	-	-	0.3	-	-	-	-	1	T2431	
78 1	110	8	7A	平1-23型	-	-	-	4.4	2.5	2.1	特殊文	6	1.3	0.8	1.7	-	0.5	3.6	2.5	○	-	2.3	T2455
78 1	110	8	7A	平1-23型	-	-	-	4.9	3.1	2.6	特殊文	6	1.0	0.6	0.8	-	0.9	3.0	3.5	○	-	2.3	T2482
78 2	110	9	7B	平1-2型	-	-	-	3.1	1.5	1.8	特殊文	8	0.5	0.7	0.9	-	0.5	1.5	0	-	2.2	T2483	
78 3	110	10	7B	平1-3型	-	-	-	3.2	1.7	1.1	特殊文	8	0.7	0.8	1.1	-	0.7	3.1	3.6	X	-	2.2	T2484
78 4	110	11	7B	平1-6型	-	-	-	4.6	2.1	2.6	特殊文	8	1.0	0.8	-	0.6	3.2	3.1	○	-	1.9	T2486	
78 5	110	12	7B	平1-7型	-	-	-	4.8	2.2	2.6	特殊文	8	1.1	0.8	-	0.7	3.2	3.4	○	-	2.5	T2487	
78 6	110	11	7B	平1-8型	-	-	-	3.7	1.5	2.1	-	-	0.7	0.8	-	1.7	0.2	2.6	2.9	○	-	1.9	T2488
78 9	111	2	7B	平1-2型	23.1	22.7	3.1	3.6	2.0	1.9	側	6	0.8	0.6	2.6	3.1	0.5	2.9	2.1	X	-	1.9	T2481
78 9	111	3	7A	平1-2型	22.8	23.5	3.3	3.8	2.0	2.0	側	4	0.7	0.5	4.5	-	0.5	2.1	1.6	X	-	1.9	T2454
78 10	111	4	7B	平1-3型	-	-	-	2.9	1.3	1.7	二葺	4	0.7	0.5	-	3.1	0.5	2.9	2.4	-	1.9	T2490	
78 11	111	5	7B	平1-4型	-	-	-	2.7	1.5	1.8	二葺	8	0.9	1.0	1.0	-	0.6	4.1	3.8	○	-	1.9	T2489
78 12	111	5	7B	平1-4型	-	-	-	4.5	1.6	2.3	二葺	8	0.9	1.0	1.0	-	0.6	4.1	3.8	○	-	1.9	T2491
78 12	111	6	7A	平1-7型	21.1	21.5	3.1	4.0	1.6	2.6	二葺	8	0.8	0.6	1.4	1.8	0.5	2.2	2.3	X	-	2.3	T2450
78 13	-	-	-	-	-	-	-	3.9	2.0	2.3	二葺	8	0.7	0.7	0.9	-	0.4	3.0	1.5	○	-	2.0	T2463
78 14	111	7	7B	平1-2型	-	-	-	3.6	1.9	2.3	二葺	8	0.6	0.6	-	1.1	0.4	3.2	1.8	X	-	2.1	T2454
78 16	111	8	7B	平1-3型	28.9	27.7	4.3	4.5	2.6	2.5	二葺	6	1.1	0.9	2.2	2.5	0.4	3.9	2.9	○	-	2.1	T2457
78 17	111	9	7B	平1-4型	-	-	-	3.6	1.5	2.1	二葺	6	0.4	1.0	2.0	0.4	0.5	2.6	2.1	○	-	1.8	T2468
78 20	111	10	7B	平1-5型	-	-	-	3.8	1.6	2.3	二葺	6	0.8	0.7	-	2.8	0.4	3.3	2.2	○	-	1.9	T2466
78 20	111	11	7B	平1-6型	-	-	-	4.5	1.9	2.7	二葺	-	1.1	0.6	-	-	2.4	2.4	-	-	1.9	T2485	
78 19	111	12	7B	平1-7型	-	-	-	4.5	1.6	2.3	二葺	-	1.4	0.9	-	-	0.4	3.0	3.4	○	-	1.7	T2484
78 23	112	1	7B	平1-6型	-	-	-	3.9	1.5	2.4	二葺	-	0.7	0.9	-	0.5	2.7	2.0	-	-	2.6	T2485	
78 22	112	1	7B	平1-6型	-	-	-	4.4	1.2	2.4	二葺	-	0.9	1.0	-	0.6	2.9	3.0	○	-	1.9	T2486	
78 22	112	1	7B	平1-6型	22.6	22.6	3.4	3.9	1.2	2.1	二葺	-	0.8	0.9	2.6	1.9	0.5	2.9	2.0	○	-	2.3	T2487
78 24	112	2	7B	平1-2型	-	-	-	3.6	1.8	2.1	二葺	-	0.6	0.9	-	-	0.6	2.5	2.1	○	-	1.7	T2488

3. 土製品

(1) 犬形土製品 (図79、写113・114)

①前提

今回の調査ではこれまでの調査事例を大きく上回る数の犬形土製品が出土している。また、これに加えてこれまで認知されていなかった非常に小型の犬形土製品の存在も明らかとなっている。なお、今回の調査で出土した犬形土製品については、すでに検討を行っているのであわせて参照いただきたい(江浦2000)。以下では、上記の拙稿を基軸として事実関係を中心に報告を進めることにしたい。

②出土点数

今回の調査で出土した犬形土製品は完形で出土したものも少なくないが、多くは破片として出土している。したがって、正確な出土点数は把握できないが、頭部を中心とした個体識別作業によって少なくとも102個体の出土を確認している。ただし、これ以外にも接合しない脚部の破片等も多く、なおかつその中には焼成や色調が明らかに異なるものもあり、厳密には特定できないものの、その数はさらに増加する可能性が高いものといえる。ただし、後述するように出土した犬形土製品の多くは小型品であり、B類として分類した大型品は可能性のある破片を含めて10点前後と僅少である。

今回の調査では一地点から100を超える犬形土製品が出土したことになるが、同時存在か否かの検討は必要であるが、これまでのように一地点から多量に出土することはないとされてきた見解とは異なる点で非常に重要な意味をもつものといえる。

③出土遺構と層位

今回の調査で出土した犬形土製品は表28にも示したように遺構からの出土は全体として多くなく、6～10層とした整地層などのいわゆる遺物包含層からの出土が大勢を占めている。

しかし、冒頭でも記したように今回の調査では豊臣大坂城段階の包含層および遺構埋土のすべてを対象として水洗選別作業を実施した際に、その対象となる土砂が非常に膨大となり、作業ヤードの関係もあって厳密には峻別できたとはいえない状況にある。とくに、6層ないしは7層出土のものが比較的分別できているのに対して、7～10層としているのはこのような状況に起因している。同様に遺構の埋土についても井戸や土坑などは厳密に区別しているが、溝や落ち込みなどの遺構埋土については、可能な限りベルトコンベアーを振り分けるなど区別するよう努めたが、結果的には完全に峻別することはできなかった。したがって、包含層としているものの中にも本来は遺構内に埋没していたものも多かった可能性が残されているといえる。

上記のような状況を勘案するならば、わずかな点数をもって出土遺構の傾向を云々することはできないが、出土遺構の傾向のみを瞥見しておくことにする。

すでに記したように表28は完形に近いもののみを取り上げているという条件付であるが、出土遺構をみると、犬形土製品は井戸もしくは土坑から出土することが多い傾向が看取される。また、最も重要な点としては一遺構から複数の犬形土製品が出土していることになる。たとえば、井戸328では井戸枠に転用された14段目の桶内埋土の水洗作業で大小2点の犬形土製品を検出している。高さ1mの井戸枠内の埋土を一括して水洗しており、厳密な意味では同一層か否かは断定できないが、深さ16mの井戸内の埋土としては同一層とみなしても大過ないものと考えている。

このほか、土坑538からは大小4点の犬形土製品が出土しており、先の井戸328以上に一括性が高い一群として評価できる。また、後述するように大ききの異なる大小の犬形土製品がセット関係にあったこと

も示唆する資料であるといえる。

なお、調査地全体を巨視的にみた場合、井戸328が調査地の南端近くであるのに対して、土坑652は調査地北西隅、土坑592は調査地北東部に位置しており、一箇所に集中するというよりも比較的広範に分布する傾向が看取される。

なお、今回の調査で出土した犬形土製品はいずれも豊臣前期の遺構もしくは包含層からの出土であり、後期に下る遺構等からの出土は確認されない。

④計測と分類

すでに記してきたように、今回の調査では100点を超える犬形土製品が出土している。ただし、そのうちの約半数近くは頭部のみであったり、脚部のみの破片である。表28には完形もしくは完形に近いもので一定程度の計測値を提示できるもの71点のみを掲げている。本文中で掲げる番号および図番号はいずれもこれと対応している。

ちなみに、法量については口の部分から後脚もしくは尻尾などの最高突出点までを正置した状態で水平方向に計測したものを「体長」、おなじく、正置した状態で垂直方向に脚部から耳部分までを計測したものを「体高」、頭部・胴部を問わず、最大幅を測る部分を「体幅」として掲げている。なお、計測値のうち、斜体字は欠損によって計測不能であることを示し、数値はいずれも残存値を表している。

また、「焼成」の項目は焼成および色調の特徴を示している。4種類に大別が可能で、「G」は土師質で灰褐色、「W」は土師質で乳白色、「R」は土師質で赤褐色、「B」は瓦質に近い土師質で黒褐色を呈するものを表している。

なお、今回の調査で出土した犬形土製品は意匠および法量から大きく2種類に分類が可能であり（A類およびB類）、A類は意匠的には共通するものの、法量からさらに2種類に分類可能であることが看取される（A i 類およびA ii 類）。

A類は体長5.5cm以下、体高5.0cm以下で、垂れた耳とその直下に刺突によって表現される目などの特徴が酷似して共通するものであり、体長4.5cm、体高4.0cmを前後するA i 類、意匠は同じくするものの、体長3.5cm、体高2.0cm前後ときわめて小型のA ii 類に細分可能である。

また、B類は完形品がなく法量的には不確定要素を含むが、残存する各部位からみて体長8cm、体高5cm前後を測るものと考えられる。

なお、B類は扁平な胴部と立ち気味で先端が尖り気味の耳、体に比して小振りの尻尾をもつものであり、何よりも決定的な違いは刺突による目の表現がみられないことにあり、意匠面でのA類との相違は著しい。また、焼成面でもA類が基本的に土師質に焼成されているのに対して、B類ではむしろ瓦質焼成に近く、黒色系の色調を呈するものが多い。

なお、今回の調査では豊臣前期以前のものとはされる意匠のやや異なる大型品に類似する犬形土製品は出土しておらず、いずれも豊臣前期以降に出現したとされる犬形土製品のみである。

また、1点のみであるが、32の犬形土製品はA i 類の範疇で捉えうるものではあるが、当該例を除くすべてが正面を向いているのに対して、本例は意図的に顔を右側に向けている。

⑤同工品の抽出

出土した犬形土製品を一瞥した段階で気づく点は、全体として共通した製作技術による裏付けをもち、また、意匠的にも共通し、非常に似通った仕上がりととなっている点である。

しかしながら、一見すると同じようにみえる犬形土製品も注視することによってある興味深い事実に気

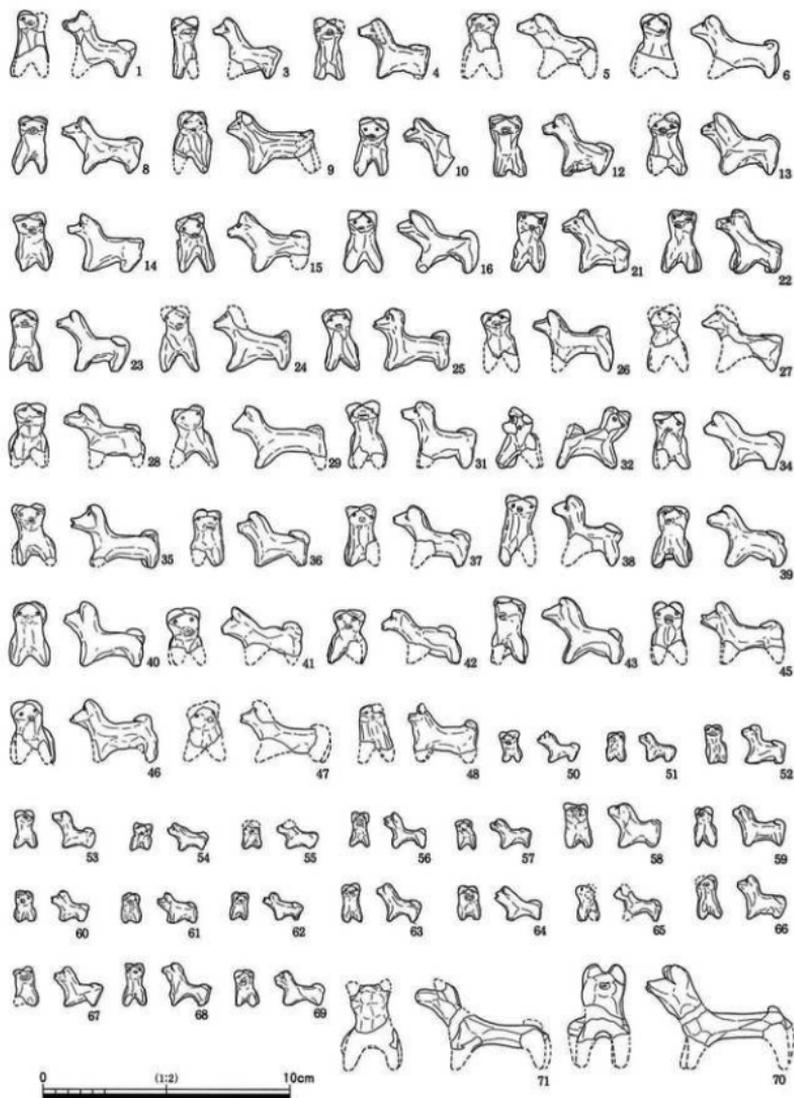


图79 犬形土製品

がつく。それは形態や様相、さらには製作上の細かい癖などが酷似したグループが抽出可能である点である。さらに、きわめて小さいA ii類では顕著ではないが、A i類とした体長4.5cm、体高4.0cm前後のものでは上記のグループが法量面でも近似した数値を示していることが看取される。

このように、今回の調査で出土した犬形土製品はすべてが相互にまったく相関性のないものではなく、その中からは共通する特徴をもつグループを抽出することが可能である。

なお、上記のような共通する犬形土製品の抽出にあたっては、本来であれば各部位の形状や製作技法などの諸属性を個別に検討する必要がある、それらを総合的かつ客観的に検証する必要がある。しかし、今回、その対象とした犬形土製品は、全体がきわめて小さく、したがって個々の相違点もきわめて微細な事象として表れている。もちろん、各部位の形態や調整技法を細分して特徴づけることによって類似品の抽出は可能である。しかし、その作業は結果的にはきわめて煩雑になることは必至であり、帰結するところは肉眼観察による相互の比較識別による抽出と大きく異なるものではないと考えている。

したがって、今回の検討では筆者の観察による類似品の抽出を基本とし、これを補充するものとして法量および焼成・色調といった属性のみをとりいれる。なお、この識別作業は決して難しいものではなく、形態、調整技法、色調、法量ともに酷似する一群の抽出は比較的容易である。

なお、以下ではその一部の事例について冗長にならない程度に記述しておく。

単刀直入に記してゆくと、今回出土した犬形土製品のうち、出土点数でB類を上回るA類では上記に示したような諸属性が共通するグループを少なくとも6群抽出することができる。ここではそれぞれを「同工A」～「同工F」と表記している。

なお、「同工」とは「手ぎわや細工が同じであること」を示すものではあるが、ここではさらに一步進めて同一工人の手によるものであるとの推定に基づく狭義の意味合いで用いる。

同工A 同工Aとした一群は3・4・12・23の4点であり、顎下を強くナデ上げる調整面での特徴、後脚が内傾する点や低平な尻尾の表現などが共通する。また、刺突による眼孔も直径1.5mm前後と他例と比較して大きめである点も共通する(写115)。

なお、同工Aとした一群は図81に示したように法量的にもまとまりがあり、体長4.0～4.5cm、体高3.2～3.7cmの範囲におさまる状況が看取される。手捏ねの製品でありながら、法量が5mm程度の範囲におさまる事実は非常に興味深く、大局的にみた場合、ほぼ同大といってもよいものといえる。したがって、ここで抽出した4点の犬形土製品は同じ大きさ、同じ形、同じ作り方で製作された一群として評価しうるものといえる。ただし、色調では土師質で乳白色を呈するものが多いものの、少なくとも4のみは褐色系の色調を呈するなど若干の差があり、これを積極的に評価するならば、同工品でありながら、同時焼成ではない可能性も考慮する必要がある。

同工B 同工Bとしたものは9・29・46の3点である。29および46は体長がやや異なるものの、まさにウリ二つである。また、9は他の2点と完全に相似形ではなく、色調などきわめて微妙な違いがあるものの、全体として特徴が共通していることから同工品に含めている。

円錐形の顔に小さな眼孔をもち、胸部は胴長で断面円形に近く作られるなど特徴が共通する。また、表面の調整はきわめて丁寧なナデ調整を行い、出土犬形土製品中で最も丁寧な成形を行う一群であるといえる。また、この一群は意図的か否かの判断は難しいが、首をわずかに上げている。そのほか、尻尾は9が欠損して不明ながらも、他2例はいわゆる「巻尾」を表現して作られており、写真図版113・114に示したように、その形状は酷似していることが看取される。

なお、同工Bとした一群は法量的にもまとまりがあり、同工Aと同様に法量が5mm程度の範囲におさまる状況がみとれる。したがって、ここで抽出した3点の犬形土製品は9がはずれる可能性があるものの、同じ大きさ、同じ形、同じ作り方で製作された一群として大過ないものといえる。

同工C 同工Cとしたものは21・22の2点である。側面観は同工Bと似通っているが、同工Cとした一群は左耳が逆し字状にナデつけられるという他例にはみられない決定的な特徴がある。これは明らかに製作の際に生じた工人の癖のごときものを顕在化したものといえる。なお、両者は法量的にも数mmの差があるのみで、ほとんど寸分違わぬものとなっている(写115)。

同工D・E 同工D・Eとしたものは53・68の2点と56・62の2点である。これらはいずれもAⅱ類とした3cm以下の手捏ねによる製品であり、大きさがきわめて小さいことから、共通する特徴が顕在化しにくく、同工品の抽出は容易ではない。ここでは同工D・Eとして総体としてみた場合、非常に共通する部分の多い各2点を掲げているが、Aⅰ類の同工品と比較した場合、その確度は必ずしも高いものとはいえない。また、これらのうち、同工Dは同工Aと形態的には共通する要素も多いことを付記しておく。

同工F 同工Fとしたものは24・35・47の3点である。大局的にみた場合、同工Bと似た特徴をもつものであり、全体に丁寧なナデ調整によって仕上げられている。顔は円錐形に作られるが、口の先端部が小さくラップ状に開くのが大きな特徴である。また、尻尾は同工Bと同様にいわゆる「巻尾」を表現して作られている。しかし、本例は巻き上げられた尻尾の先端が尖り気味である。焼成はいずれも土師質であり、色調も赤褐色できわめて酷似しており、色調のみを基準に分類、抽出した場合においても上記3点はグルーピングが可能である。

完存する資料がなく、グラフには示していないが、法量的にも同工Bに近く、まとまっている状況が看取される。

なお、B類については出土点数が少ない上に完形品がないことから、検討の対象から外したが、口の表現のあるものとなないものがあり、同工品か否かは別としてグルーピングが可能である。

⑥総括

以上、同工品の抽出を行ったが、同じ工人の手になる製品をかなり高い確度で抽出可能であることが明らかとなった。この事実は非常に重要な意味をもっており、これはとりもなおさず、犬形土製品の生産が単発的に行われたのではなく、各工人でその製作過程において一定の癖がでるほどの手慣れた作業工程を経て、一定量の製作を継続的に行っていた可能性をも示唆するものといえる。

また、多くの犬形土製品では同工の認定が困難である。これらの犬形土製品については同一工人の手によるものでありながらも、その特定が難しいばらつきのある製品と考えることも可能ではあるが、一方で多数の工人がその生産に関与していたとの状況も想起されるところである。

なお、現状ではその産地については言明できないが、同工品の抽出等の検討によって、手捏ねの製品でありながらも規格品ともいえる犬形土製品の生産に複数の工人が関わっていること、その生産にあたっては熟練した製作技術に裏付けられていること、出土品の多くが土師質焼成であることなどが明らかとする点は非常に示唆的であるといえよう。

また、Aⅱ類としたきわめて小形の犬形土製品の存在は非常に示唆的であり、当該品は手捏ねの土製品としては限界に近いほど小さいものであり、需用者側のニーズなどその製作にあたっては一定の必然性が背景にあったものと考えられる。

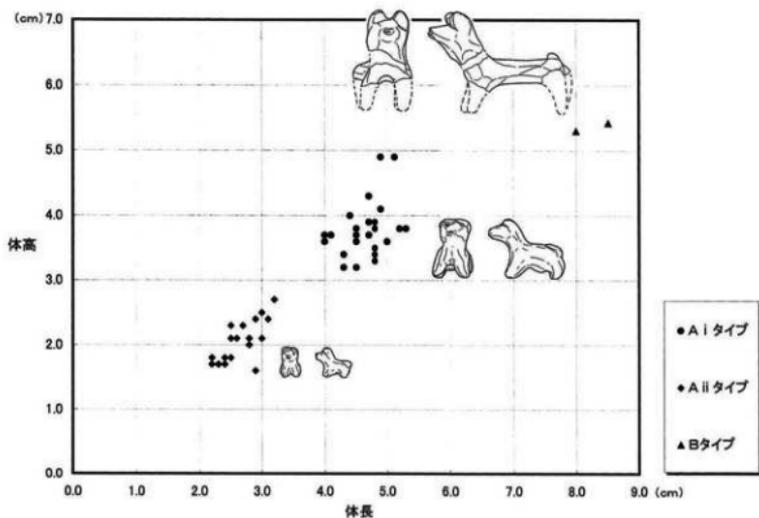


図80 犬形土製品の法量分布

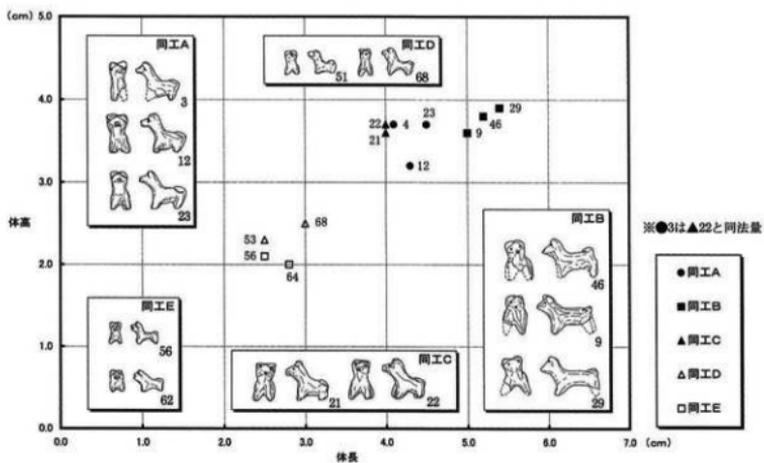


図81 同工品の法量分布

表28 犬形土製品一覧

番号	トナリ	遺構・層位	タイプ	残存部位	体長	体高	体幅	構成	同工関係	地区	登録番号	発掘番号
1	7A	井戸328 14段目	A1	頭部左部分、両前脚以外	4.5	3.2	2.2	G			1023	T 表 82
2	7B	鉢淵ハナチ内 埋土	A1		2.7	2.3	2.2	G		B-J1, F-a1	793	
3	7B	トナリ集積遺構491 埋土	A1	左前脚以外	4.0	3.7	1.6	W	同工A	F-b1	908	T 表106
4	7B3	土坑592 埋土	A1	左耳、左後脚以外	4.1	3.7	1.8	G	同工A	I-J10	1469	T 表107
5	7B4	土坑538 埋土	A1	頭部右側、両脚以外	4.9	2.8	2.2	G		F-b2	1505	T 表 81
6	7B4	土坑538 埋土	A1	両前脚、右後脚以外	5.1	4.9	2.2	B		F-b2	1506	T 表 86
7	7B4	土坑683 埋土	A1		4.8	4.8	2.4	G		F-a1	1799	
8	7B5	土坑662 埋土	A1	尻尾先端以外	4.9	4.9	2.2	W		B-J4	1788	T 表 10
9	7B	6層	A1	左耳、前後脚、尻尾以外	5.0	3.6	2.3	G	同工B	I-J10	801	T 表 2
10	7B1	6層	A1	右耳、胴部～後脚以外	3.3	3.5	2.1	G			1803	T 表 79
11	7B1	6層	A1		3.4	2.1	2.2	G		B-J1, F-a1	857	
12	7B1	6層	A1	尻存	4.3	3.2	1.9	W	同工A	B-J1	879	T 表105
13	7B1	6層	A1	右耳、右前脚以外	4.5	3.7	2.3	B		III-a10	876	T 表 75
14	7B1	6層	A1	左後脚以外	4.5	3.6	2.1	B		III-a10	876	T 表 69
15	7B1	6層	A1	左後脚以外	4.8	3.5	2.3	G		B-J1	879	T 表 90
16	7B5	6層	A1	右後脚以外	4.8	3.8	2.4	R		F-b4	1179	T 表 73
17	7B1	7層	A8	頭部、右前脚以外	2.8	1.8	1.5	G			1548	T 表 65
18	7B1	7層	A1	頭部、両前脚以外	3.1	2.2	2.3	W			1588	T 表 64
19	7B1	7層	A1	頭部、右前脚以外	3.2	2.2	2.3	G			1588	T 表 76
20	7B1	7層	A1	頭部～頭部、右前脚、左後脚以外	3.8	2.3	2.1	G			1588	T 表104
21	7B1	7層	A1	尻存	4.0	3.6	2.0	G	同工C		1588	T 表 95
22	7B1	7層	A1	尻存	4.0	3.7	2.4	W	同工C		1654	T 表 94
23	7B1	7層	A1	右後脚以外	4.5	3.7	1.9	W	同工A		1541	T 表 4
24	7B1	7層	A1	両耳以外	4.5	3.8	2.2	R	同工F		1548	T 表 62
25	7B1	7層	A1	左前脚先端以外	4.5	3.8	2.1	R			1585	T 表 92
26	7B1	7層	A1	両前脚、右後脚、胴部右側以外	4.7	3.9	1.9	W			1548	T 表 77
27	7B1	7層	A1	両耳～後頭部、両前脚、胴部以外	4.8	3.2	2.1	B			1438	T 表 85
28	7B5	7層	A1	両脚先端以外	4.8	3.8	2.3	R	同工G	B-J4	1500	T 表 84
29	7B4	8層	A1	両脚先端以外	5.4	3.9	2.5	R	同工B	F-a2	1860	T 表 57
30	7B1	9層	A1	両耳、口、両脚、背中心～臀部	4.2	4.2	2.2	B		I-J10	2844	T 表103
31	7B	7・8層	A1	両前脚以外	4.4	4.0	2.3	R			1629	T 表 74
32	7B	7・8層	A1	口、前後脚、尾～臀部、胴部右側以外	4.5	3.8	2.3	W			1802	T 表 12
33	7B	7・8層	A1		4.7	3.8	2.6	G			1629	
34	7B	7・8層	A1	右前脚以外	4.8	3.4	2.2	G			1884	T 表 72
35	7B	7・9層	A1	左前脚、右後脚以外	5.3	3.8	2.5	R	同工F		2448	T 表 7
36	7B	7・10層	A1	右前脚以外	4.3	3.4	1.9	W			2503	T 表 98
37	7B	7・10層	A1	左前脚、尾以外	4.5	3.7	1.9	R			2485	T 表 71
38	7B	7・10層	A1	左前脚以外	4.7	4.3	2.3	R			2503	T 表 76
39	7B	7・10層	A1	尻存	4.7	3.7	2.5	W			2486	T 表101
40	7B	7・10層	A1	右耳、右前脚、尾以外	4.8	3.9	2.3	G			2485	T 表 11
41	7B	7・10層	A1	両前脚、左後脚以外	4.8	3.5	2.0	R			2503	T 表 83
42	7B	7・10層	A1	右耳、左前脚、右後脚、尾以外	4.8	3.3	2.4	R			2503	T 表102
43	7B	7・10層	A1	右前脚以外	4.9	4.1	2.4	W	同工G		2503	T 表 5
44	7B	7・10層	A1	右目を除く顔面～両前脚含む腹部、左後脚以外	4.9	4.1	2.3	R			2450	T 表 86
45	7B	7・10層	A1	前後脚、右耳先端以外	5.0	2.9	2.1	W			2480	T 表 80
46	7B	7・10層	A1	両前脚、右後脚、左後脚先端以外	5.2	3.8	2.5	R	同工B		2503	T 表 78
47	7B	7・10層	A1	両耳、両前脚、尾～左後脚以外	5.3	3.4	2.1	R	同工F		2503	T 表 58
48	7B	8・9層	A1	左耳、両脚以外	4.3	2.4	2.2	B			1795	T 表 96
49	7B	8・10層	A1		3.5	2.3	2.1	G			2078	
50	7A	井戸328 14段目	A8	尻存	2.5	1.8	1.1	W			1156	T 表 55
51	7B4	土坑538 埋土	A8	尻存	2.2	1.7	1.1	G		F-b2	1204	T 表 3
52	7B4	土坑538 埋土	A8	右耳以外	2.6	2.1	1.5	G		F-b2	1204	T 表 93
53	7B1	6層	A8	尻存	2.5	2.3	1.3	W	同工D	B-J1, F-a	901	T 表 68
54	7B1	7層	A8	尻存	2.3	1.7	2.2	W			1548	T 表 67
55	7B3.4	7層	A8	頭部以外	2.3	2.4	1.1	G			1083	T 表 66
56	7B3.4	7層	A8	尻存	2.5	2.1	1.3	G	同工E		1083	T 表 13
57	7B	7・8層	A8	尻存	2.4	1.7	1.2	R			1857	T 表 61
58	7B	7・8層	A8	右後脚、尻尾以外	3.2	2.7	1.7	G			1629	T 表 93
59	7B	7・9層	A8	尻存	3.1	2.4	1.3	G			2248	T 表 61
60	7B	7・10層	A8	尻存	2.2	1.8	1.2	R			2510	T 表 97
61	7B	7・10層	A8	右耳先端以外	2.4	1.8	1.2	G			2503	T 表 59
62	7B	7・10層	A8	左後脚以外	2.4	1.7	1.1	R			2503	T 表109
63	7B	7・10層	A8	尻存	2.7	2.3	1.2	R			2450	T 表 87
64	7B	7・10層	A8	尻存	2.8	2.0	1.3	G	同工E		2503	T 表 6
65	7B	7・10層	A8	左耳、左前脚以外	2.8	2.1	1.4	R			2503	T 表 88
66	7B	7・10層	A8	右耳以外	2.9	1.6	1.5	R			2503	T 表 99
67	7B	7・10層	A8	右前脚、右耳先端以外	2.9	2.4	1.5	G			2503	T 表100
68	7B	7・10層	A8	左前脚先端	3.0	2.5	1.4	W	同工D		2510	T 表 9
69	7B	7・10層	A8	左耳、左目部分以外	3.0	2.1	1.4	W			2485	T 表 60
70	7B	7・8層	B	頭部(右耳先端除く)、胴部	8.5	5.4	3.5	G			1804	T 表 8
71	7B	7・8層	B	頭部(両耳除く)、胴部	8.0	5.3	3.4	G			1857	T 表 89

資料科に保存中

(2) その他の土製品 (図82、写115)

豊臣期の包含層から出土した土製品には先に報告した犬形土製品以外では土鍾などがある。犬形土製品以外の土製品の出土量はさほど多くなく、図82にはその大半を掲げていることになる。遺構から出土したものはなく、いずれも包含層から出土したものである。

1～3は宝珠形の土師質の土製品であり、それぞれ法量が異なっている。1および2は下面が凹形にくぼんでおり、3は円形の線刻がある。3の下面にある線刻は接合時の接着力を高めるために行われたものである可能性が高く、したがってこれらは単独に用いられたものではなく、何らかの製品を構成する部品の一部であると考えられる。

4～9は土器もしくは陶磁器片を転用加工した土製円盤である。直径には微妙に大小があり、4が約1.5cm、5・6は1.9cm、7～9が2.0～2.1cmを測る。4～7は土師器片を転用したものであるが、それ以外は施釉陶器片を利用したものである。8は天目筋と考えられる鉄軸陶器片を転用したものであり、9についても部分的に鉄軸が残る。なお、後者は中心に直径1.5mm前後の穿孔がある。

後に報告する骨もしくは角で作られた雙六駒が1.8cm前後の直径をもつことからみて、若干の大小はあるものの雙六駒として使われていた可能性も示唆される。

10～21および25は土鍾である。10～21は同じ形態をもつものであるが、法量によって大きく2分でき、10・11はやや小形である。ほぼ全体が残る11の質量は1.4gである。12～21のうち、ほぼ完存するものの質量は17が3.7g、18が4.0g、20が3.5gと近似しており、21のみ7.3gでほぼ倍の質量である。なお、13・14・18・19・21はいずれも赤褐色を呈して堅緻に焼成されている点で特徴が共通している。

25は大形で両端に側面から穿孔を施したものである。一方の小口のみ焼成後に浅い溝が彫られている。質量は42.9gである。

23・24は土師質の土玉である。欠損しているがほぼ球形を呈するものである。

22は側面形が菱形、断面円形を呈する土師質の土製品である。弥生時代の投弾のごとき形態を呈するが、非常に小形であり、用途は不明である。質量は6.7gを量る。

なお、図には掲げていないが、写115-7は瓦質の土製品であり、型押しによって獣脚の先端部分が表現されている。指はほぼ平行する5本であり、各指には綾杉状の刻みがある。幅2.0cmを測る。

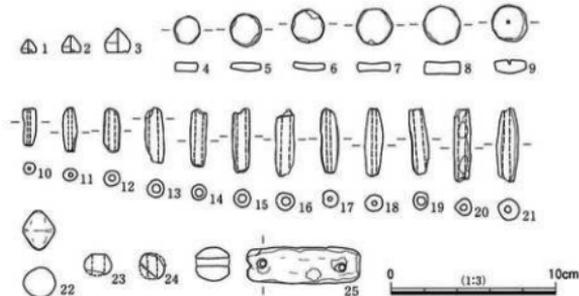


図82 土製品

4. 木簡 (図83～85、写116～120)

木簡は包含層を中心に66点を確認している。出土した木簡は一部が7A地区の井戸から出土した以外はいずれも7B地区から出土したものであり、層的にみてその大半は豊臣前期のものである。

なお、ここで取り上げるものは折敷、柄杓の柄などに墨書があるものなどを含む広義の意味での木簡である。

出土した66点の木簡の内訳は墨書が確認できるものは63点、墨痕は認められないものの形状等から付札木簡である可能性が高いものが3点である。なお、広義の木簡には将棋駒も含まれるが、これについては木製品の項であわせて報告したい。

墨書が確認される木簡には少なからず文字を書いた付札木簡が確認されるが、図案など文字以外の墨書も多い。材質はヒノキが多く、それ以外は基本的にスギである。

報告では出土した木簡のうち、比較的残りのよいものを抽出し、文字が判読できるものについては釈文とともに掲載している。なお、木簡の釈文および型式名については基本的には古代の木簡と同様に木簡学会の表記方法に準拠している。

内容が判読できたものについては釈文を掲載しているのですが、ここでは繰り返して記述しないが、とくに重要な木簡についてのみ若干取り上げておくことにしたい。

84-8は穿孔のある短冊形の木簡である。表面には上段に2行、下段に1行の墨書がある。上段左側の墨書は判読できないが、右側には「申三月廿五日」と書かれる。下段には「刑マ右衛門」なる人名が記されている。裏面にも墨痕が確認されるが不明瞭である。

上段右側の「申」は干支による年代表記の略であると考えられ、層位との関係からすると、西暦1596年にあたる慶長元年である蓋然性がきわめて高い。

83-6は下半が不明瞭となっているが、中央上方に「たるかず」と書かれており、その右肩に「十二」と小さく添えられている。裏面の墨書は薄れているが、同じく「たるかず」と書かれていた可能性が高い。

同様に83-7は「たるかず」と書かれた木簡である。表裏面とも部分的には判読できない部分を残すが、基本的には同じことが書かれていたものと判断される。これらを総合すると当該木簡には中央に「たるかず 五千七百卅入」と物品名と数量が書かれ、その右肩に「十二月廿八日」という日付が記された木簡であるといえる。

これによって、先に記した83-6の木簡に記された数字も12月を示すものであり、基本的には同じ内容をもつ木簡であるといえる。その内容物は不明ながらも年末に樽にいれられたものが、多量に運び込まれた状況を垣間見ることができ、のちに報告する液用枡の複数出土との関連からも重要な意味を有するものである。

これ以外の木簡については個々に詳述しないが、内容が判読できた付札木簡のいくつかについては釈文を掲げてはいるが、簡単に触れておきたい。

84-6は「さばさし」と物品名および数量が書かれた下に「三郎へもん」という人物名が記された付札木簡である。83-5とともに区画Dからの出土である。

83-8は切り欠きをもつ032形式の付札木簡である。切り欠きの上部には「二」、下部には上から順に「はな」、「べにや」、「助右衛門」と書かれている。切り欠き部分には紐の痕跡が残っている。

なお、冒頭でも記したように、広義には将棋駒も木簡に含まれるが、将棋駒については木製品の項で後述することにしたい。

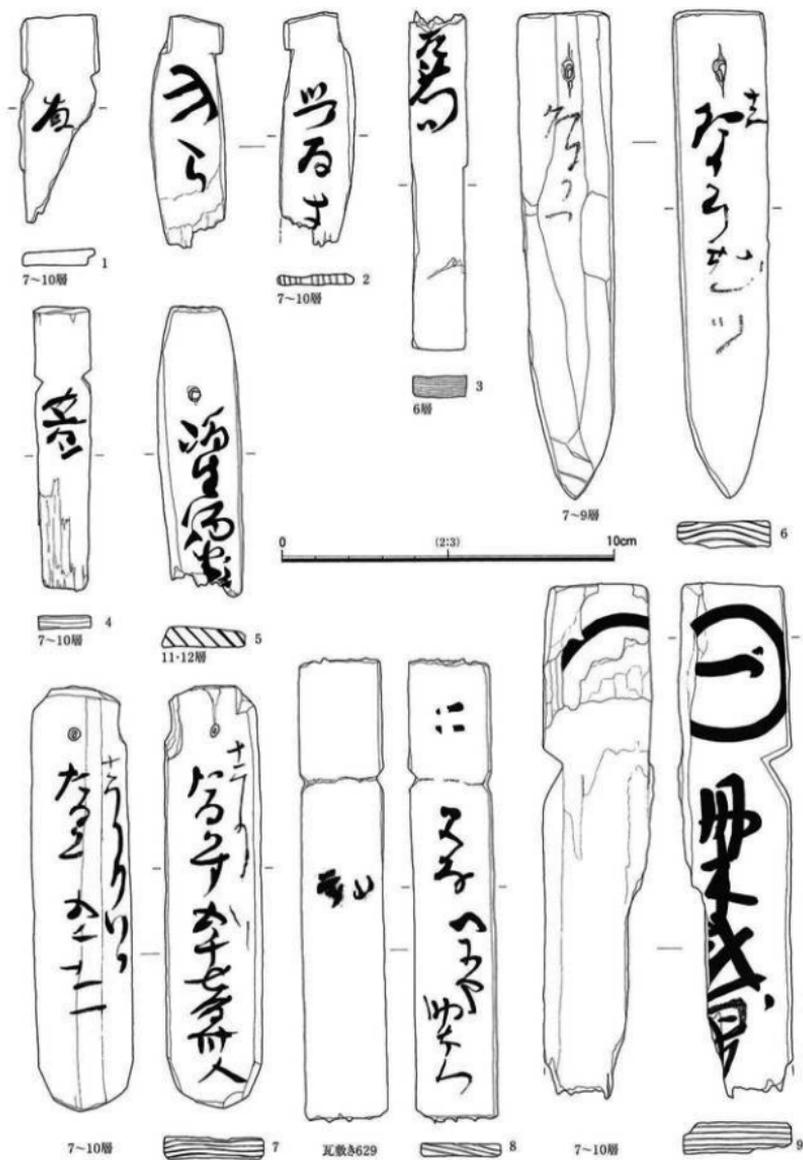


图 83 木簡 (1)

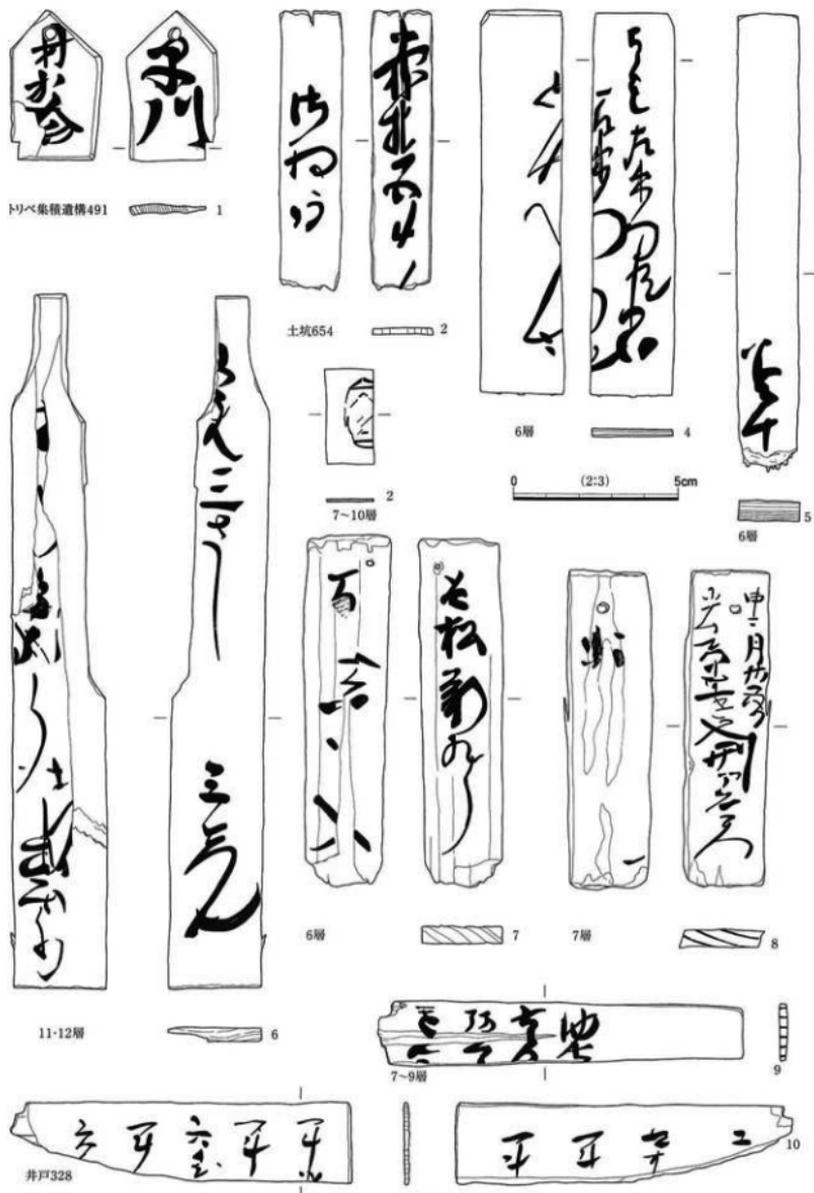


図84 木簡(2)

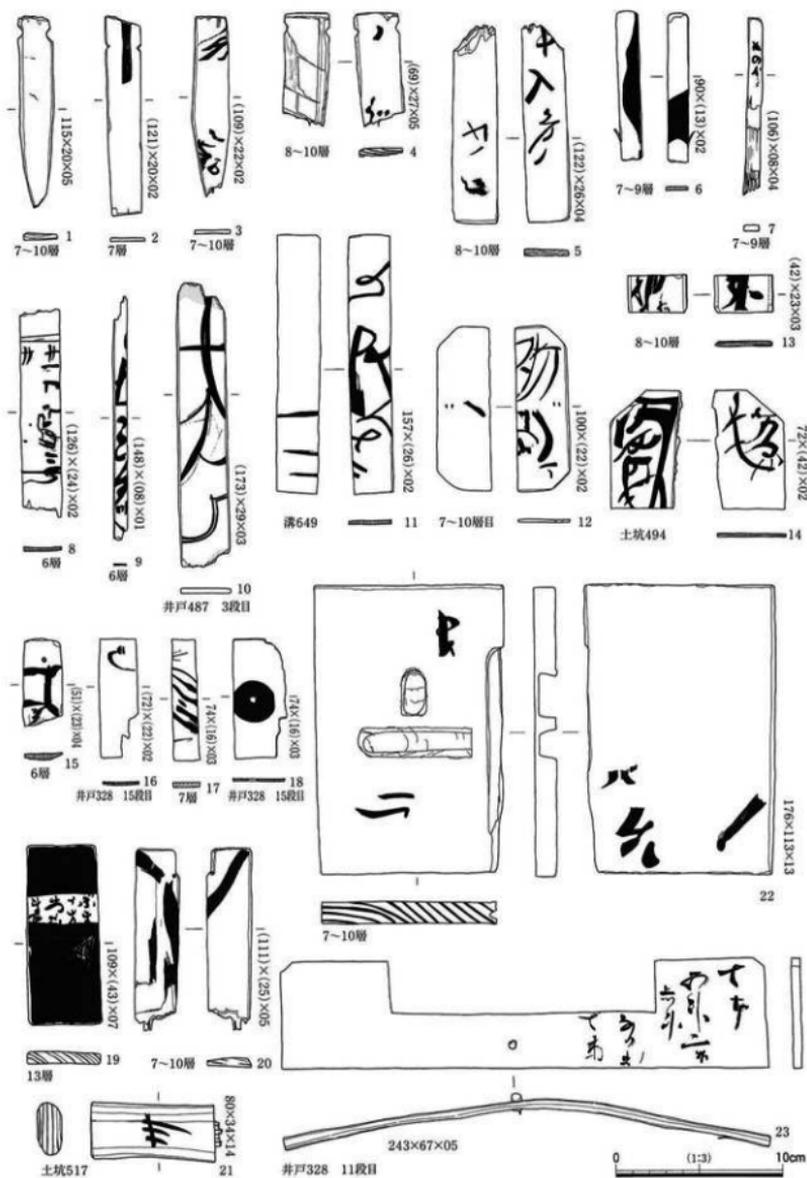


图85 木簡(3)

5. 木製品

今回の調査では多種多様な木製品が出土している。用途不明の木製品も多いが、以下では基本的には図版に掲載した順に報告を進めてゆくことにしたい。なお、木製品の報告にあたっては、同一種の遺物が複数個出土しているものについては別に項目を立てて、記述を進めるがそれ以外のものについては用途不明木製品とともにあわせて報告することにした。

(1) 箸 (図 86-1～18、写 135-1～15)

豊臣期の遺構および包含層から多量の箸が出土している。出土した箸の大半を対象として計測作業を行っている。接合作業を行ったわけではなく単純にはいかないが、箸の出土点数は破片を含んでおよそ12,500本を数える。破片の総延長は1432.27mとなり、標準的な箸の長さを24cmとすると、計算上は推定5,968本、2,984膳の箸が廃棄されていたことになる。

出土した箸には丁寧な面取りを行った断面円形に近い両口の箸と断面方形の片口がある。前者と後者の比率はおよそ7:3である。また両口の箸には破片を含んで漆塗りのを3点確認しているが、全体の比率からすればきわめて少ない。

図86には漆塗りの箸と長さの異なる箸のうち、代表的なものを抽出して掲載している。86-1・2は6層から出土した漆塗りの箸である。長さはわずかに異なるがおおむね25cmを測るものである。塗りは赤と黒のツートンカラーであり、いずれも赤が8cm前後で残りの17cmが黒である。両口の箸ではあるが、赤漆が塗られた側が両者ともわずかに細い。

86-3～18はいずれも遺構出土の両口箸である。それぞれ長さが異なり、3・4は24cm前後、5～8は25.5cm前後、9・10が27cm前後、11・12が28cm前後、13・14が28.5cm前後、15～18は30cm前後を測るものである。なお、出土した完形品の箸をみると、その多くは24～26cmを測るものであり、上記の15～18のように30cm前後を測る長い箸は特異な一群といえる。

本報告ですべての箸を組上に掲げることはできないので、とくに出土点数が多く、しかも一括性が高い遺構を中心に報告することにした。

今回の調査で検出した遺構のうち、箸の出土点数がとくに多いものは井戸328・井戸487・井戸628、土坑592などである。なお、このうち井戸487のみが豊臣後期に帰属する遺構である。各遺構から出土した箸のうち、完形品のみを抽出すると井戸328から30本、井戸487から97本、井戸628から20本、井戸592から64本となる。このほか、井戸538から12本の完形品が出土しているが、これ以外の遺構では10本を超えるものはない。

各遺構の破片を含んでの出土点数をみると、井戸328では破片を含めて387点の箸が出土しており、その総延長は4072.2cmを測る。当該遺構から出土した完形の箸の平均長は24.3cmであり、計算上は168本の箸が出土したことになる。

井戸487では破片を含めての総出土点数が568点で総延長は10724.1cmとなる。当該遺構から出土した完形の箸によって算出した箸の平均長は25.8cmであり、計算上、約416本の箸が捨てられていたことになる。

同様に井戸628では総出土点数が369点で総延長は4901.1cm、同時に出土した完形の箸の平均長は24.1cmであり、計算上、約203本の箸が廃棄されたことになる。

また、土坑592からは破片を含めて416点が出土し、総延長は8136.6cmを測る。当該遺構から出土した箸は全体に長く、完形品の平均長は28.3cmである。計算上、約288本の箸が廃棄されたことになる。

なお、ここで取り上げた遺構から出土した箸の長さをグラフ化したのが図91である。各遺構から出土し

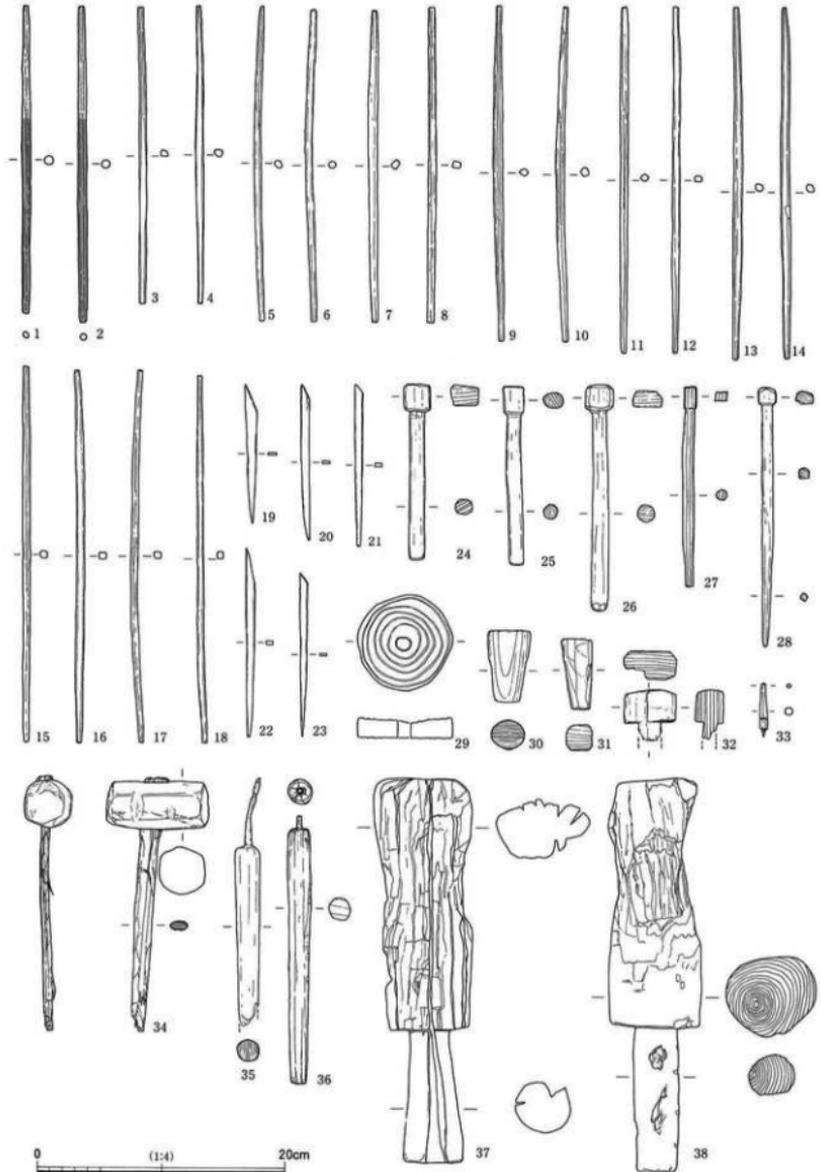


図86 木製品(1)

た箸の長さをみるとかなりばらつきがあるが、留意されるのは土坑592出土の箸の多くが30cm近い長さでまとまりをみせていることである。当該遺構の箸はその大半が8寸半以上の箸で占められており、かつ一括廃棄されている状況を勘案するならば、ハレの席で用いられた箸が一括廃棄された可能性が高いものと判断される。この場合、単純には割り切れないが、計算上の推定本数が288本であることから、一人一膳の箸を用いた場合、144人分の箸が捨てられたことになる。

同様の視点で各遺構での出土状況を見ると、井戸328では箸の出土が井戸枠の10～12段目に集中し、同様に井戸487では井戸枠の3段目からまとまって出土している。このように、井戸からの出土であっても一括廃棄に近い状況が想定され、土坑592で想定したような、一時的に多くの箸が消費されて廃棄されるような席が設けられていた可能性が示唆される点で重要である。

(2) 楊枝 (図 86-19～23、写 136-8～12)

楊枝はいずれもいわゆる黒文字である。10点前後出土しているが、ここでは残りのよい5点を図示した。いずれも上端を斜めに切り落とし、先端を尖らせている。法量は幅は0.6cm前後で一定であるのに対して長さには若干の長短があり、86-19が11.3cmと最も短く、86-22が15.4cmと長い。

また、出土遺構では箸が多量に出土した井戸328および井戸487において同じ層順から出土しているものがみられるのは留意される点である。

(3) 木栓 (図 86-30～32)

木栓は多数出土しているが、ここでは3点を図示したのみである。86-30・31は差し口が細くなる形態である。86-32は側面観がT字形で細い部分が円柱形を呈していることから木栓とした。同様に89-49も木栓である可能性が高いものである。

(4) 大工道具 (図 86-33～38、写 139-1～4・9・10)

大工道具は錐、木槌のほか、珍しいものとして矢壺の軽子が出土している。なお、大工道具および建築部材については相模大工棟梁、前場幸治氏のご教示を得ていることを付記しておく。

86-33は朱壺の軽子である。多角形に削り出した細い木棒の先端に円錐形の鉄針を付けたものである。木棒には紐を結束するための浅い筋が彫り込まれている。わずかに赤色顔料が付着していることから、墨壺ではなく、朱壺に付属するものであることが分かる。

86-34は木槌である。柄が細く、一般的な大工仕事に用いられたものではなく細工用などの細かい仕事に用いられたものと考えられる。このほか、86-37・38も縦型の木槌、いわゆる才槌である。藁打ちなどに用いられた可能性も皆無ではないが、打撃を受けた部分が欠損して大きく窪んでおり、ここでは大工道具として報告する。両者とも芯持ち材を削り出した一木作りで、大きさは2点とも近似している。

86-35・36は錐である。86-35は柄の部分に欠損しているが、86-36はほぼ完存する。一方、86-35では鉄歯が曲がりながらも残存しており、四つ目錐と考えられる。

なお、大工道具と考えられるものとして、ヤリガンナ状の鉄製品が出土しているが、それについては鉄製品の項で報告する。

(5) へら・しゃもじ (図 87-1～11・16、写 136-1～7)

へら・しゃもじは多数出土している。本報告ではその一部を掲げたのみである。

87-1～9はへらであり、柄と先端を肥厚させた刃部をもつ形態は基本的に共通している。ただし、刃の厚さや先端の尖り具合などは微妙に異なっている。また、87-6・7のように柄の部分に紐かけのための穿孔を有するものもある。形態は似通っているものの、87-9は刃の部分を中心に漆が付着し、漆工に関わる

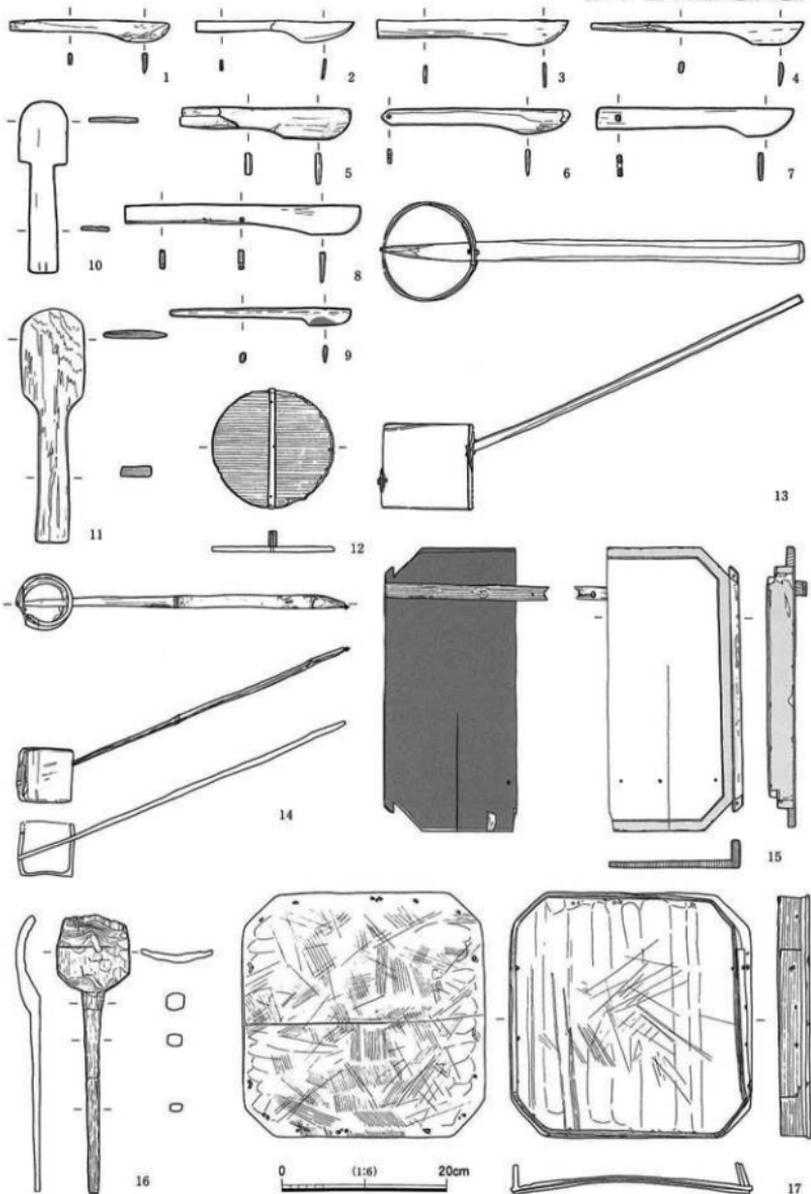


図87 木製品(2)

道具であるといえ、すべてが調理具ではない。

87・10・11はしゃもじである。この2点以外にも出土しているが、大きさや形態は大きくかわるものではない。また、87-16もスプーン状を呈する柄の長いしゃもじである。前者が飯用のしゃもじ、後者は煮物や汁物に使われたものであろうか。

(6) 柄杓 (図 87・13・14、写 139・11)

柄杓は数点が出土しているが、柄の部分までがほぼ完存しているのは、図78に示した2点のみである。

87-13は底板失っているが、曲物で作られた柄杓であり、柄は完存する。全長1mを超える大型の柄杓である。一方、87-14は竹製の柄杓である。柄のみならず合も竹製であり、合は節の部分に底にしている。合の部分を中心に黒色に変色している。非常に小型であり、茶道具である可能性が高い。

(7) 折敷 (図 87・15・17、写 135・16)

折敷は漆塗りのものを含めてかなりの数が出土しているが、ここでは遺存状態の良い代表的な2例を掲げた。87-15は漆塗りの隅切折敷である。完存していないが、隅を落とした方形の底板に木釘で組み合わせの側板をつけるものである。底面には2本の角材が平行して付された痕跡が残るが、現状では1本しか残らず、欠損している側には木釘の痕跡が3箇所に残るのみである。なお、残る1本も鉄釘を用いて打ち込まれており、明らかに仕上げの方法が異なることから、これも後補であると判断される。漆は赤と黒の2色を使い分けている。87-17は隅を落とした方形の底板に桜皮で側板を綴じるものである。1尺を意図して作られたものと考えられる。底面の裏側にはとくに顕著に刃物痕が残っており、組板のごとき使われ方をされた可能性がある。

(8) 羽子板 (図 88・1～6、写 124)

今回の調査で出土した羽子板は図88に示した6点がすべてである。

基本的な形態は同じであるが、法量は微妙に異なっており、最も小さい88-1が長さ24.0cm、最も大きな88-6は38.7cmを測る。前者は8寸、後者は1尺3寸を意図して作られている可能性もある。なお、88-2・4・6には片面のみ赤色顔料による彩色がある。88-2および88-6は表面に千鳥格子状の模様がある。この彩色は上面および側面にもみられるが、裏面にはみられない。また、88-4は側面と上面の小口にのみ彩色が残っている。全般に必ずしも表面の残りは良いとはいえないが、顕著な形での敲打痕は認められない。土坑538からは3点の羽子板が出土しており、大きさの異なる羽子板が同時にセットで存在していた可能性も示唆されるところである。

(9) 将棋駒 (図 88・7～10、写 121・1～4)

将棋駒は4点が出土している。土坑482から出土した駒が豊臣後期に下る可能性が高い以外はいずれも豊臣前期に遡る包含層中からの出土である。

88-7はヒノキの柾目材の「飛車」、裏面には「龍王」の文字がある。文字は流麗な漆書であり、駒尻が厚いことなどの特徴から、いわゆる水無瀬系の将棋駒の要素をもつものである。

88-8は方形を呈するモミ製の将棋駒である。他例と比較すると稚拙な墨書で表面には「桂馬」、裏面には「金」と書かれる。形態、筆跡ともに水無瀬系と考えられる他例とは一線を画する将棋駒である。

88-9は土坑482から出土した「歩兵」の駒である。材質はカツラ。裏面には「今」の文字がある。表裏面ともに文字は漆書である。水無瀬系の駒である。88-10はカヤ製の「歩兵」。土中での圧密もしくは乾燥のためか、外形が変形している。88-9と同様に裏面には「今」の文字がある。表裏面ともに文字は漆書である。変形が著しいものの、水無瀬系の駒であると考えられる。

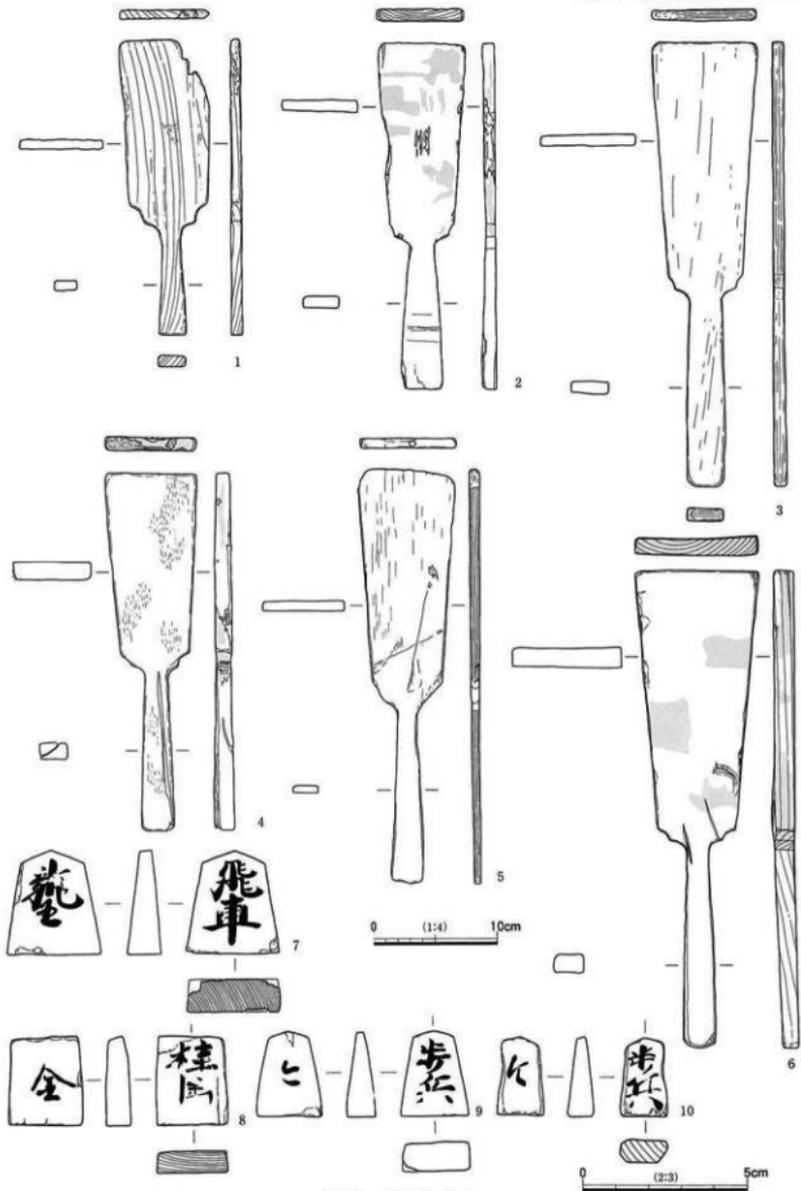


図88 木製品(3)

(10) 算盤玉 (図 89-1~6、写 136-13~16)

算盤玉はその可能性があるものを含んで6点が出土している。ただし、確実に算盤玉と判断されるものは3点である(89-1・2、写 136-13・15・16)。また、断面がやや丸みを帯びた 89-3 も算盤玉の可能性があり、算盤玉だとすれば中国的な形態を呈していることになる。このほか、89-4~6 に示したやや扁平な木製の玉が出土している。算盤玉の項で取り上げてはいるが、穴の径が小さいなど、算盤玉ではない可能性も残している。

(11) 数珠玉 (図 89-7~25、写 137-12)

木製の数珠玉と考えられる小型の玉は19点出土している。乾燥や圧密などで変形したのも多い。しかし、出土した数珠玉を瞥見すると扁平な一群が大勢を占める中であって、89-15~17 などのように厚みのある一群が含まれていることが看取できる。また、89-20 は小型ではあるが、T字形に穿孔が施されており、母珠であると判断される。

(12) 灯明台 (図 89-38~40・46、写 136-25~30)

灯明皿台は10数点出土している。写真136に示したように端部の形態差から3種類に分類できる。このうち、89-40 はほぞ穴に差し込むような形態を呈しており、造り付けの灯明皿の台である。なお、89-46 も形状から灯台の台座である可能性が高いものと判断している。

(13) 柄 (図 89-45・47・48、写 139-5・6)

柄のうち、刀装具に関わる柄は別に報告する。89-45 は組み合わせ式の柄である。表面には2箇所に着金の痕跡が残り、その内側には鍔を表したと考えられる線刻が彫られている。裏面には中茎がはいる浅い窪みが彫られている。

89-47・48 は上記の 89-45 とは異なり、刀代の可能性を有するものであるがここで触れておく。89-47・48 は法量はやや異なるものの、ほぼ同じ形態を呈するものであり、両者とも一方の小口側にホゾが彫られ、先端を尖らせた板材が差し込まれている。板材の先端はいずれも欠損しており、いかなる製品かは不明である。両者ともに側面からみた場合、中位がくびれた輪鼓形を呈している。また、墨書があることから木簡とともに図示しているが、85-21 も同じものである。

(14) 容器類 (図 89-51・52、写 139-8)

89-51・52 ともに長方形を呈する割り抜きの容器である。さほど丁寧な造作ではなく、89-52 の内面にはノミ痕が明瞭に残る。鳥のえさ箱のような形態を呈しているが、用途は不明である。

(15) 人形 (図 90-1~12、写 122)

木製の人形は12点が出土しており、そのすべてを図示した。

90-1・2 はほぼ同大で同じ形態をもつものであり、胴部には側面方向から2箇所穿孔がある。この穿孔は貫通している。90-3 は遺存状態は悪いが、同じように側面に2箇所穿孔があり、基本的に同じ系統の人形であるといえる。2箇所穿孔は手足を付けるためのものと考えられ、『江戸二色』に掲載される相模人形のような使われ方をしたものと考えられる。90-1 および 90-2 は造作が酷似しており、対となるものであった蓋然性が高い。

90-4 は烏帽子をかぶった人を表現した一木作りの人形のカシラである。烏帽子および目と口には墨が残る。頭長は3.6cm、ノド木長1.2cmを測る。首の楕は広くカマ穴はない。

90-5 は井戸247から出土したものであり、豊臣後期以降に下るものである。扁平ではあるが全身像の人形である。下面には釘でついたような刺突痕が残る。なお、表面の一部は焼け焦げているが、かろうじて目

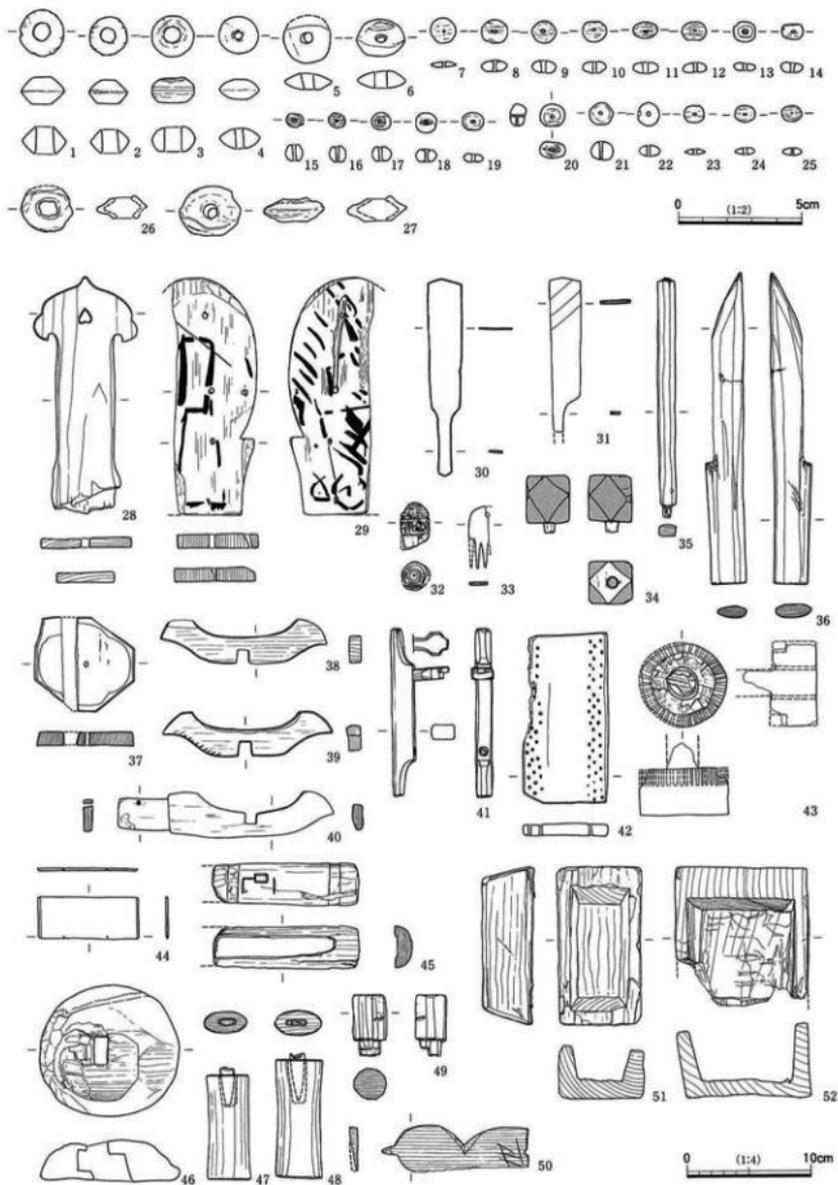


図89 木製品(4)

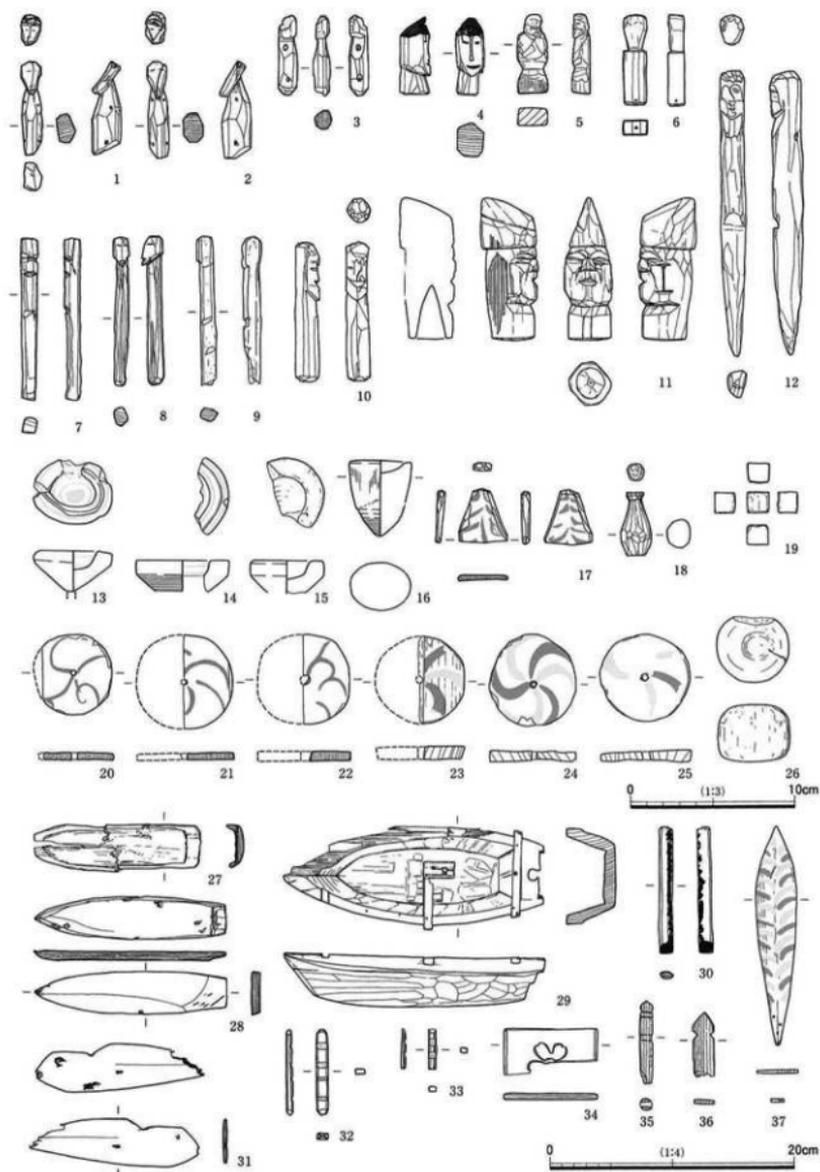


图90 木製品(5)

木製品である。右舷前方を欠損するが、それ以外は比較的良好な状態で遺存している。船体は一本作りであるが、船梁は別体で木釘で固定されている。なお、船梁は舷側の切り込みからみて元来は3箇所であったと考えられるが、前方のものは欠落している。後方には舵を設置するためのものと考えられる切り込みがあるほか、内底面には長方形の薄板が木釘で打ち付けられている。

(18) 刀形代・鳥形木製品 (図 89-36、90-30・31、写 121-6・7)

90-30は先端を欠損しているが、墨書で波紋が描かれた刀形代と考えられるものである。89-36は木刀状の木製品であり、これも刀の形代である可能性がある。また、90-31は側面観を基軸とした鳥形木製品である。尾部は欠損している。目は墨書、口は切り込みで表現される。胴部中央には横長の切り込みがあり、羽根が付されていた可能性が高い。また、下面の小口にも同様の切り込みが確認されることから、細い棒の先端に付けられていた可能性も示唆される。

(19) その他の木製品

以下、これまでの項目で報告できなかった木製品について簡単に触れておくことにしたい。

86-24～28は一方の端を肥厚させた有頭棒状木製品とでもいうべき木製品である。法量的には図示したものが標準的なものである。多数出土しているが性格は不明である。

87-12は蓋である。木釘で取っ手を付している。なお、今回の調査ではこのような蓋や曲物、あるいは曲物の底板が多量に出土している。

89-26・27は種核に穿孔を施したものである。現在でも一方から息を吹きかけると音がなることなどから、笛として使われていたのではないかと憶測する。89-28は下部を欠損するが、上部を装飾的に造作した板状木製品である。上部中央には猪目透かしが彫られている。位牌である可能性を考慮して赤外線スキャナーで墨書の確認を行ったが、文字等は確認できなかった。89-29は表裏面ともに墨書による文様が施された板状の木製品である。複数の穿孔がみられ、一部では穿孔部分をつなぐように溝が彫られている。元来は卒塔婆の空風輪であったと考えられるが、いずれの面も比較的丁寧に削られており、最終的には転用されたものと判断される。89-30・31は柾目の薄板を加工した板状の木製品である。後者は江戸時代の遺跡から出土する小かまぼこの板とされている木製品と法量や特徴が一致する。89-34は面取りを行った漆塗りの立方体である。一方に円柱形の突起があり、漆器の蓋などのつまみである。89-41は糸巻きの一部で、89-43は傘のログロである。

90-17は将棋駒のような形を呈する板状の木製品であり、表裏面ともに墨書で綾杉文が描かれている。90-37は羽根のような形状を呈する板状の木製品である。綾杉文がベンガラと考えられる赤色顔料と墨書によって描かれている。基部には直径約1mmの穿孔が3箇所に認められる。90-18は水瓶、90-35は宝珠をもつ欄干のミニチュアと考えられるものである。90-19は形状および法量からサイコロの可能性があるが目がなく断言できない。90-32・33は棒状の木製品に刻みを施したものであるが、性格は不明。90-34は漆塗りの箱などの側板と考えられるものであり、花の透かし彫りがある。同様に写136-23は漆塗りで透かし彫りが施されている。

そのほか、図示していないが、写137-13に掲げた木製品は形状および鱗が墨書で表現されていることなどから、魚をモチーフにしたものと考えられるものである。下部は直線的に加工されており、大きく抉り取られている。両側面からは小穴が貫通している。下面の抉り込みと小穴の関係からみて、元来はこの穴に車軸を通した小さな車輪が付けられていた可能性が高いのではないかと憶測する。正月に女子が遊んだ綱車の祖形のようなものであろうか。

表29 豊臣木製品一覧(1)

図版番号	写真番号	トシ	層位	遺構名	種別	最大径	長さ	幅	厚さ	高さ	実測番号	
86	1	136	1	7B 6層	漆塗箸(筒口)		25.0	0.7			Tf2536	
86	2	136	2	7B 6層	漆塗箸(筒口)		25.7	0.8			Tf2535	
86	3	135	3	7B 3段目	井戸487		24.1	0.6			Tf2544	
86	4	135	4	7B 3段目	井戸487		24.3	0.6			Tf2543	
86	5		7A	井戸328	箸(筒口)		25.7	0.6			Tf2541	
86	6		7A	井戸328	箸(筒口)		25.5	0.6			Tf2541	
86	7		7A	井戸328	箸(筒口)		25.4	0.8			Tf2540	
86	8		7A	井戸328	箸(筒口)		25.7	0.7			Tf2540	
86	9	135	5	7B 3段目	井戸487		27.3	0.8			Tf2545	
86	10	135	6	7B 3段目	井戸487		27.2	0.7			Tf2545	
86	11	135	7	7B 3段目	井戸487		25.7	0.7			Tf2546	
86	12	135	8	7B 3段目	井戸487		28.2	0.6			Tf2546	
86	13	135	9	7B	土坑592		28.7	0.6			Tf2542	
86	14	135	10	7B	土坑592		28.6	0.7			Tf2542	
86	15	135	11	7B	土坑592		30.6	0.6			Tf2538	
86	16	135	12	7B	土坑592		30.3	0.6			Tf2538	
86	17	135	13	7B	土坑592		30.3	0.6			Tf2539	
86	18	135	14	7B	土坑592		29.9	0.6			Tf2539	
86	19	136	8	7B	井戸796	楊枝(黒文字)	11.3	0.7			Tf2547	
86	20	136	9	7A 11段目	井戸328	楊枝(黒文字)	12.8	0.6			Tf2550	
86	21	136	10	7B 6層		楊枝(黒文字)	13.2	0.6			Tf2551	
86	22	136	12	7B 3段目	井戸487	楊枝(黒文字)	15.4	0.6			Tf2549	
86	23	136	11	7B	土坑494	楊枝(黒文字)	13.3	0.41			Tf2570	
86	24	136	17	7B	土坑501	右面棟柱木製品	14.4	2.4			Tf2570	
86	25	136	18	7B 6層		右面棟柱木製品	14.6	1.7			Tf2571	
86	26	136	19	7B 9層		右面棟柱木製品	18.4	2.3			Tf2572	
86	27	136	20	7B 6層		右面棟柱木製品	16.3	0.9			Tf2575	
86	28	136	21	7B 7層		右面棟柱木製品	21.1	1.0			Tf2565	
86	29		7A 土割断面6	井戸247	木製付置(用途不明)	7.5		1.6			Tf2 34	
86	30		7B 7~10層		木柱	3.4		3.2	5.8		Tf2138	
86	31		7B 7~9層		木柱	2.4			5.7		Tf2158	
86	32		7B 7~10層		木柱	4.2		2.3	4.1		Tf2330	
86	33	139	1	7B 6層	榊子(朱塗)		4.3	0.6			Tf2456	
86	34	139	4	7B 6層	木桶		20.7	8.2	3.8		Tf2 78	
86	35	139	2	7B 6~10層	木桶		20.3	2.0			Tf2520	
86	36	139	3	7B 6層	榊子		21.7	1.9	1.7		Tf2 77	
86	37	139	9	7B 8層	木桶		31.6	8.0			Tf2560	
86	38	139	10	7B 7層	木桶		32.3	7.5			Tf2559	
87	1		7B 7層		へら		19.3	2.5	0.6		Tf2 80	
87	2	136	1	7B 6層	へら		19.3	2.6	0.3		Tf2566	
87	3	136	3	7B 8層	へら		23.4	3.2	0.4		Tf2573	
87	4		7B 7層		へら		25.8	2.9	0.6		Tf2561	
87	5		7B 10層~		へら		20.9	3.2	0.9		Tf2 81	
87	6		7B 6層		へら		22.9	3.1	0.8		Tf2557	
87	7	136	4	7B	土坑513	へら	24.0	3.5	0.6		Tf2564	
87	8		7B 6層		へら(備物の底版転用)		28.6	3.6	0.6		Tf2556	
87	9	136	2	7B 7層		へら(漆付着)	22.0	2.2	0.7		Tf2562	
87	10	136	6	7B	土坑513	しきりこ	21.2	5.9	0.5		Tf2567	
87	11	136	7	7B 6層		しきりこ	26.8	7.7	1.3		Tf2544	
87	12	139	7	7B	土坑501	蓋	14.8		0.7	2.6		Tf2581
87	13		7B	土坑501	柄杓		51.3	12.1			Tf2543	
87	14	139	11	7A	井戸331	柄杓(竹)		39.6	6.8			Tf2 7
87	15	135	16	7A 土割断面6	井戸247	折敷		34.8	(19.9)	3.3		Tf2568
87	16		7B 1段目	井戸487		折敷		(34.2)	8.7			Tf2 25
87	17		7A 土割断面6	井戸247		折敷		29.4	29.2	4.0		Tf2 6
88	1	124	1	7B	井戸731	羽子板(スギ)		24.0	6.8	0.8		Tf2462
88	2	124	2	7B 6層		羽子板(スギ)		28.0	6.8	1.0		Tf2460
88	3	124	5	7B 6層上面		羽子板(スギ)		36.1	8.4	1.9		Tf2461
88	4	124	3	7B	土坑538	羽子板(ヒノキ)		29.0	7.2	1.3		Tf2458
88	5	124	4	7B	土坑538	羽子板(ヒノキ)		33.6	7.8	0.8		Tf2459
88	6	124	6	7B	土坑538	羽子板(ヒノキ)		38.0	10.0	1.6		Tf2 37
88	7	121	1	7B 7層		梓根刷(麻布)		3.2	2.8	1.0		Tf2 38
88	8	121	2	7B 6層		梓根刷(麻布)		2.7	2.1	0.7		Tf2 34
88	9	121	3	7B	土坑482	梓根刷(歩尺)		2.6	2.0	0.9		Tf2 27
88	10	121	4	7B 7~9層		梓根刷(歩尺)		2.4	1.4	0.7		Tf2 52
89	1	136	16	7B 6~10層		磨盤玉		1.9	1.7	1.1		Tf2 90
89	2	136	13	7B 6~10層		磨盤玉		1.5	1.5	1.0		Tf2 89
89	3	136	14	7B	埋込500	磨盤玉		1.7	1.7	1.0		Tf2524
89	4		7B 6層		磨盤玉?		1.5	1.6	0.8		Tf2532	
89	5		7B 7~9層		磨盤玉?		(1.6)	2.0	0.7		Tf2253	
89	6		7B 7~10層		磨盤玉?		1.3	2.0	0.7		Tf2198	
89	7		7B 7~9層		数珠玉		1.0	1.0	0.2		Tf2326	
89	8	137	12	7B 8~10層		数珠玉		1.0	1.0	0.5		Tf2 88
89	9		7B 6~10層		数珠玉		0.4	0.7	0.7		Tf2 88	
89	10		7B 6~10層		数珠玉		0.8	1.0	0.5		Tf2525	
89	11		7B 6~10層		数珠玉		0.7	1.0	0.5		Tf2525	
89	12		7B 6~10層		数珠玉		0.8	1.0	0.4		Tf2525	
89	13	137	12	7B 8~10層		数珠玉		0.8	0.8	0.3		Tf2 88
89	14		7B 7~10層		数珠玉		0.5	0.9	0.4		Tf2210	
89	15	137	12	7B 8~10層		数珠玉		0.4	0.7	0.6		Tf2 88
89	16	137	12	7B 8~10層		数珠玉		0.6	0.7	0.6		Tf2 88
89	17	137	12	7B 8~10層		数珠玉		0.7	0.7	0.6		Tf2 88
89	18	137	12	7B 8~10層		数珠玉		0.8	0.8	0.6		Tf2 88
89	19	137	12	7B 8~10層		数珠玉		0.7	0.8	0.3		Tf2 88
89	20	137	12	7B 8~10層		数珠玉(母珠)		0.9	1.0	0.6		Tf2 88
89	21	137	12	7B 7~10層		数珠玉		0.9	0.9	0.8		Tf2208
89	22		7B 7~10層		数珠玉		0.9	0.9	0.7		Tf2209	
89	23		7B 7~10層		数珠玉		0.7	0.8	0.2		Tf2211	

表30 豊臣木製品一覧(2)

図版番号	写真番号	H/F	層位	遺構名	種別	最大径	長さ	幅	厚さ	高さ	実測番号	
89_24		7B	6~10層		板状木製品		0.7	0.8		0.3	Tf2525	
89_25		7B	6~10層		板状木製品		0.7	0.8		0.3	Tf2525	
89_26		7B	7~9層		釘	(1.8)	2.1			0.9	Tf2554	
89_27		7B	6層		釘		2.0			2.4	Tf2553	
89_28	137	7B	8~9層		板状木製品(墨書)		19.4	8.1	0.8		Tf2521	
89_29	137	27A	11段目	井戸328	板状木製品(墨書)		19.3	6.5	1.1		Tf2519	
89_30	137	47B	8~10層		板状木製品		16.0	2.8	0.2		Tf2558	
89_31	137	57B	4c層		板状木製品(小かまぼこ板)		12.6	2.5	0.3		Tf2577	
89_32		7B	7~9層				3.8	2.3	2.3		Tf2905	
89_33		7B	7~10層				5.2	(1.0)	0.3		Tf2286	
89_34		7B	7層				3.5	3.9		4.6	Tf2917	
89_35		7B	7~9層		つまみ(漆器)		19.5	1.4	0.9		Tf2316	
89_36		7B	7層		刀形代?		25.2	3.1	1.0		Tf2987	
89_37		7B	7~9層				7.6	2.1+4.7	1.1		Tf2998	
89_38	136	27B	7~10層		灯明風台		13.1	3.5	0.9		Tf2125	
89_39	136	28B	7~10層		灯明風台		13.7	3.6	1.0		Tf2576	
89_40	136	30B	8層	土坑538	灯明風台		17.4	3.4	0.8		Tf2574	
89_41		7B		土坑494	塗漆		13.7	4.5	1.2		Tf2100	
89_42		7B					13.9	6.9	1.0		Tf2578	
89_43		7A	土層断面	井戸247	傘のクロ			7.1		5.8	Tf2913	
89_44		7A	上・中層	井戸247	釘			8.0	0.3	3.4	Tf2914	
89_45		7B	7~9層		釘		11.6	3.4	1.2		Tf2171	
89_46		7B	7~9層		釘		11.1	10.0		6.1	Tf2568	
89_47	139	57B	7~8層		釘		9.0	3.5	1.7		Tf2555	
89_48	139	67B		溝643	釘		10.2	3.8	2.0		Tf2569	
89_49		7B	7~10層		木栓		5.0	2.6	2.5		Tf2283	
89_50		7B	7層				11.8	3.8	0.6	4.3	Tf2553	
89_51	139	87B	6層		割り抜きの容器		12.8	6.8	1.5	4.2	Tf2563	
89_52		7B	7~10層		割り抜きの容器		11.2	10.6		6.1	Tf2140	
90_1	122	57B	7層		人形		1.2	1.7		5.8	Tf2982	
90_2	122	47B	7~8層		人形		1.2	1.8	0.8		Tf2983	
90_3		7B	7~10層		人形		1.1	1.0	5.0		Tf2193	
90_4		22B	27B	6層	人形		1.6	2.0	4.8		Tf2986	
90_5	122	37A	6層	井戸247	人形		1.8	1.1	4.9		Tf2914	
90_6		7B	7~10層		人形		1.4	1.0	5.5		Tf2522	
90_7	122	87B	7~10層		人形		1.0	0.9	9.9		Tf2527	
90_8	122	77B	7~9層		人形		1.0	1.1	9.2		Tf2984	
90_9		7B	7~9層		人形		1.1	0.8	9.0		Tf2179	
90_10	122	67B	7~10層		人形		1.5	1.4	8.6		Tf2487	
90_11	122	17B	7層		人形		2.9	3.3	3.8		Tf2985	
90_12	122	97B			人形		1.5	1.8	17.4		Tf2488	
90_13		7B	6層		塗漆			4.7			Tf2563	
90_14	137	67B	6層		塗漆	(5.6)				1.9	Tf2528	
90_15	137	77A	11段目	井戸328	塗漆	(4.4)			(2.0)		Tf2529	
90_16	137	87B		トリアイ壁遺構691	塗漆	3.8				4.6	Tf2527	
90_17	121	57A	14段目	井戸328	板状木製品		3.3	3.0	0.5		Tf2940	
90_18	137	177B	8~10層		木製のミニチュア		1.4	1.7		3.9	Tf2999	
90_19		7B	7~10層		傘のクロ		1.2	1.2	1.2		Tf2201	
90_20		7B	6層		塗漆?	(4.9)			3.4		Tf2945	
90_21		7B	7~9層		塗漆?	(5.8)			0.4		Tf2977	
90_22		7B	6層		塗漆?	(5.5)			0.6		Tf2936	
90_23		7B	7層		塗漆?				0.8		Tf2984	
90_24	137	107B	6層		塗漆?				5.6	0.6	Tf2946	
90_25	137	97B	6層		塗漆?				5.5	0.7	Tf2526	
90_26	137	117B	6層		塗漆?				4.3		3.5	Tf2531
90_27		7B	7~10層		彫形木製品		13.4	3.6	1.2		Tf2212	
90_28	137	147B	8~9層		彫形木製品		18.5	3.4	0.7	0.7	Tf2950	
90_29		7B		土坑633	彫形木製品		21.0	8.4	1.0	3.9	Tf2960	
90_30	121	67A	12段目	井戸328	刀形代		(10.4)	1.0	0.5		Tf2122	
90_31	121	77B		溝621	彫形木製品		(13.5)	3.7	0.3		Tf2105	
90_32		7A	7段目	井戸328	釘		7.0	1.0	0.4		Tf2161	
90_33		7B	7段目	井戸328	釘		(3.3)	0.7	0.4		Tf2917	
90_34	136	227B		土坑712	釘の細線?		7.5	3.7	0.5		Tf2102	
90_35	137	167B	7~8層		欄干のミニチュア		6.9	1.0	0.9		Tf2291	
90_36	137	157B	7~8層				(5.3)	1.7	0.4		Tf2288	
90_37	137	37B		土坑494	板状木製品(羽根形)		18.0	(3.2)	0.3		Tf2530	
	116	37B		土坑538	木製		(26.8)	(3.0)	0.4		Tf2118	
	116	47B		土坑538	木製		(13.2)	2.5	0.2		Tf2119	
	116	77B		土坑538	木製		(4.3)	(4.0)	0.2		Tf2117	
	117	17B		土坑538	木製		(9.8)	3.4	0.7		Tf2120	
	117	27B		土坑538	木製		10.6	4.3	0.3		Tf2107	
	117	37B	6層		木製		(9.3)	(2.0)	0.2		Tf2110	
	117	67B	6層		木製		(12.0)	(1.3)	0.2		Tf2113	
	118	47B	7層		木製		(36.2)	1.0	0.9		Tf2115	
	119	57B	8~9層		木製		(17.2)	10.0	0.4		Tf2106	
	119	57B	8~9層		木製		(6.2)	2.4	0.2		Tf2112	
	120	57B	8~9層		付丸木桶		(13.5)	2.9	0.5		Tf2116	
	135	157A		土坑592	漆							
	136	157B	6~10層		板状木製品		1.5	1.5	1.6		Tf2989	
	136	197B	9層				18.4	2.2	1.4		Tf2572	
	136	237B	6層									
	136	247B			方形木組み579							
	136	257B	7~9層		灯明台		10.0	2.8	1.0		Tf2260	
	136	267A		井戸328	灯明台							
	136	297B	7~10層		灯明台		(12.6)	4.8	1.1		Tf2187	
	137	137B	8~10層		彫形木製品(細車?)							
	137	187B	8~10層									

6. 下駄

(1) 前提 (図96～103、写125～130)

今回の調査では、中世から江戸時代までの遺構垣土および包含層から、破片を含めて216点の下駄が出土している。

大半は豊臣大坂城段階のものであるが、江戸時代以降のもの2点(4層出土)、豊臣大坂城以前と考えられるものが4点(11～13層)出土している。したがって、豊臣大坂城段階に帰属するものとしては210点を数えることになる。なお、この210点のうち1点は未製品、2点は歯の部分のみの出土である。この2点の歯については下駄台部と接合しないことから、個別にカウントしている。

出土遺構および層位については一覧表(表31～33)に記した通りである。なお、豊臣大坂城段階のみならず一覧表には当該期を相前後する時期の下駄についても同一の一覧表に含んでおり、図版等についても分けることなく一括して掲げている。ここでは他の遺物と同様に短期間のうちに盛衰した豊臣大坂城の特異性を鑑み、豊臣大坂城関連の下駄については一括して報告を進めることにする。

なお、すでに再三にわたって記してきたように、今回の調査では地形的に高い7A調査区は大きく削平されており、したがって下駄についてもその大半は谷状を呈して落ち込む7B調査区からの出土である。点数的にみても比較的まとまった数量の下駄が出土しており、しかも、形態や材質、木目の状況からセット関係にあると推定されるもののほか、明らかに同一規格を意図して作られた規格品と考えられる下駄も確認できる。

したがって、今回の報告では全体的傾向を把握しうるようにほぼ全容を残す128点を網羅的に図示して掲載している。図版全体としては各種の下駄の出土比率におおむね対応しており、一覧表に拠らずとも出土下駄の傾向について一瞥して分かるようにしている。なお、個々の番号については一覧表と対応している。

なお、下駄の個別的特徴については一覧表に記した通りであり、ここでは下駄全般にわたる属性について総括的に記述を進めることにしたい。

(2) 分類 (図92)

下駄の記述を進めるにあたって最低限の分類を行っておくことにしたい。すでに、各地の遺跡で出土した下駄については市田氏や岩田氏などをはじめとする多くの諸先学の研究があるが(岩田1985、四柳・下村1996、市田2000)、ここでは今回の調査で出土した下駄を中心に分類を行う。なお、分類にあたっては基本的な部分では市田氏の分類案に準拠している。

今回の調査で出土した下駄はその構造からこれまでも指摘されているように大きく連歯下駄、無歯下駄、差歯下駄の3種類に大別できる。これをそれぞれ順にⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類とする点は市田氏の分類と同様である。しかし、点数的には多くはないが、歯を釘で打ち付けたものがあり、この中にはきわめて粗雑なつくりのものもあるが、一方で比較的精巧に作られた下駄も含まれている。したがって、ここではこれらについては新たに付歯下駄と仮称し、Ⅳ類として分類しておく。

次にこれを断面形、すなわち歯の形状を中心に細分し、Ⅰ類では分類図に示した7種類に、Ⅱ類では2種類に細分している。Ⅲ類の差歯下駄については今回の調査で出土したものはいずれもいわゆる露卯下駄であり、ほぞ穴の数などの細部は異なるものの、基本的に形状については共通しているため細分は行っていない。また、Ⅳ類については鉄釘を打ち込む方向によって2種類に分類している。なお、一部の下駄では歯の折損を補修しているものもあり、この場合、上記の分類基準でいくと、前歯がⅠ類、後歯がⅣ類と

いうものもあるが、今回の分類では補修による変化は考慮せず、下駄が製作された段階での形状をもって分類を行っている。

そのほか、上記の分類に加えて、分類図に示したような平面形態による細分を行っている。

なお、平面形の分類ではa～cを2種類に細分しているが、これは長さに対する幅の比率が2:1を境として幅が狭いものと広いものに細分している。したがって、一覧表中でI 1a1類としたものは平面形が幅狭の長楕円形を呈する2枚歯の連歯下駄をI 2b1類とした場合、幅狭の長方形を呈するいわゆる庭下駄を示している。

また、これ以外に歯の形状のほか、塗りの有無や文様や刻印などの細部についても図105に示したように分類を行っており、さらに歯の磨り減り具合についても観察結果を表記している。

(3) 出土状況

今回の調査ではすでに記したように豊臣大坂城関連の下駄が210点出土している。全体的傾向としては、遺構からの出土が80点で約38%、それ以外の130点、約62%が整地層を含む包含層からの出土である。なお、出土遺構および出土層位は、三の丸造成以降の遺構面が大きく削平されていたこともあって、その大半は豊臣前期のものと考えられるが、盛土である6層から出土しているものや井戸の一部から出土しているものについては豊臣後期以降の下駄も含まれている。

また、冒頭で記述したように豊臣期の遺構は地形的に高い南半の7A地区では徳川大坂城築城にともない大きく削平されている。そのような中において井戸328では5点の下駄が出土しているものの、7A地区から出土した下駄はこれがすべてである。一方、北半の7B地区では谷部からは豊臣期の遺構面を重層的に検出し、ここから残りの205点の下駄が出土している。

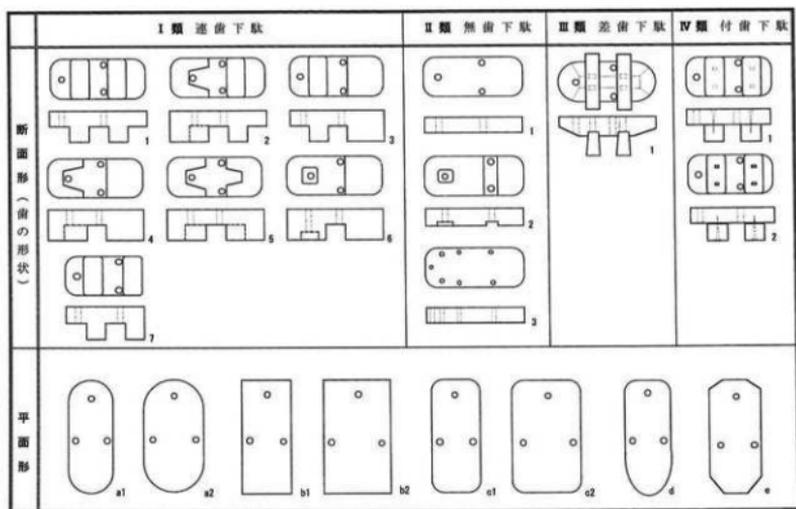


図92 下駄の分類

出土遺構および層位については一覧表に記しているのですが、ここでは繰り返さないが、概要のみ記しておく。遺構から出土した下駄の多くは井戸や土坑（ゴミ穴）などからの出土が多く、また、出土した下駄の歯が著しく磨耗しているものが多い点などから、廃棄されたものが多いことを窺わせている。

遺構出土の下駄では土坑538から10点出土しているほか、井戸628から6点、井戸328および井戸731からそれぞれ5点が出土している。これ以外の遺構はいずれも4点以下の出土であり、その多くは1点のみの出土である。このうち、井戸628から出土した下駄ではⅡ2b1類の99およびⅢ10、Ⅳ1b1類の100および109は法量や形態的特徴のほか、木目までが一致しており、同時にセット関係をもって作られ、かつ同時に埋没したものであることが判明するものである。

整地層ならびに包含層出土の下駄では6層から33点、7層から41点の出土を数え、比較的まとまった数が出土している。なお、包含層出土の下駄でも同一規格で作られた下駄を見出すことができるほか、Ⅰ1a1類とした83および108などは法量・形態ともに酷似し、歯の磨耗度も近似するなど、セット関係であった蓋然性が高いものと考えられるものである。このほか、113と133も別遺構からの出土ではあるが、イギリを材質とするなどの特徴が共通する下駄であり、セット関係にある可能性がある。

(4) 組成

210点の下駄のうち、細片であることなどから分類が不明なものが30点のほか、未製品1点がある。また、連歯下駄（ⅠⅠ類）であることは確実ながらも平面形状が判然としなないもの8点を含んでいる。

分類が不明なものの30点と未製品1点を除外して全体的傾向を概観すると連歯下駄（ⅠⅠ類）が161点と全体の約87%を占め、ついで無歯下駄（ⅡⅡ類）が10点で約5%、差歯下駄（ⅢⅢ類）と付歯下駄（ⅣⅣ類）がそれぞれ7点で約4%を占めている。

歯の形状および平面形状を含めた細分類で見ると、Ⅰ1a類が80点で全体の約37%を占め、次いでⅠ4b類が17点で約9%、これにⅠ1c類とⅠ7a類が10点、約5%で続いている。

(5) 塗り下駄

下駄に漆で塗りを施したものは15点出土しており、全体の約7%である。うち13点は平面形が楕円形を呈する連歯下駄であるⅠ1a類、1点はⅠ2a類、残る1点は歯の部分のみの出土であるが、面取りが行われていることなどから、Ⅰ1a類である可能性が高いものである。

なお、塗りのみられるⅠ1a類の下駄の多くは裏面や歯の角を面取りするものが多く、出土した下駄群の中でも丁寧な造作を行う一群である。また、法量をみるとⅠ1a類の74とⅠ2a類の206が小振りではあるが、それ以外はいずれも長さ約21cmを測るものが多い。

今回、出土した下駄に関しては、塗りを施す下駄は基本的に平面形が楕円形を呈する連歯下駄にのみみられる特徴であり、さらに後述する規格品が多くみられることは留意すべき点であり、まさに下駄職人の手による下駄であるといえる。

(6) 刻印（図102～104）

下駄の台表に線刻や焼印などの刻印を有するものを27点確認している。これらは大きく2種に分かれ、一方は台表の全体に斜格子などの線刻を行うものであり、他方は台部の後方に線刻や焼印によって記号などをいれるものである。

前者は数量的には少なく、96と176の2点が出土しているのみである。96は長さ16.0cm、176は長さ18.9cmとやや小振りである。全体に使用による摩滅のため不明瞭であるが、横断する圏線と斜格子紋様を施している。

残る25点が後者に該当し、その内訳は焼印によるものと考えられるものが6点、線刻によるものが19点を数える。刻印の種類については図104に示した通りであり、多くとも同一種類の刻印をもつ下駄は2点が出土しているのみである。なお、ここで掲げている120のみは江戸時代の層準からの出土であり、注意されたい。

以上のように、全体としてはまとまりがなく非常にバラエティーに富んでいる状況が看取されるが、このような状況にあって、X字形の刻印を施す127および189は下駄そのものの形態や特徴が共通するものである点で留意されるものといえる。

(7) 技法の特徴

製作技法についても簡単に触れておきたい。

まず、第一に緒穴の形状とその穿孔方法をみておきたい。緒穴の形状をみると大多数は円形を呈しているが、平面方形を呈するものも5%前後の割合で確認される。方形を呈するものは細身の鑿によって穿孔されたものと考えられるが、全体に粗雑な作りの下駄が目立っている。他方、平面形が円形を呈するものには2種類が確認され、一つは不整な円形を呈するもので鑿などによって円形を意図して穿孔されたものと考えられるものである。また、もう一方は整正な円形を呈するものであり、断面部分に炭化した部分が観察されることなどから、焼いた鉄棒を用いて穿孔を行っていた状況が看取される。なお、この穿孔技法を用いた下駄は、面取りを行って塗りを施すI 1a類に多いが、116などはIV 1a類でありながら、同様の穿孔を行っている。

今回の調査で出土した下駄では鼻緒の残るものは皆無であったが、緒穴に木栓状の棒が残るものがあり、鼻緒の付け方を考える上において参考となる。

緒穴に木栓が残るものは4点(99・108・119・213)が確認され、このうち99のみは断面三角形のくさび状の材であり、他例とは一線を画する。99を除く3点いずれも後緒穴にのみ、木栓状の棒が残るものであり、先端を尖らせた整正な円形を呈する材をほぼ緒穴いっぱいに入挿するものである。後緒穴での鼻緒の装着に際して、袋状に加工した鼻緒の心材として三角錐の材を用いて固定していた可能性が想定される

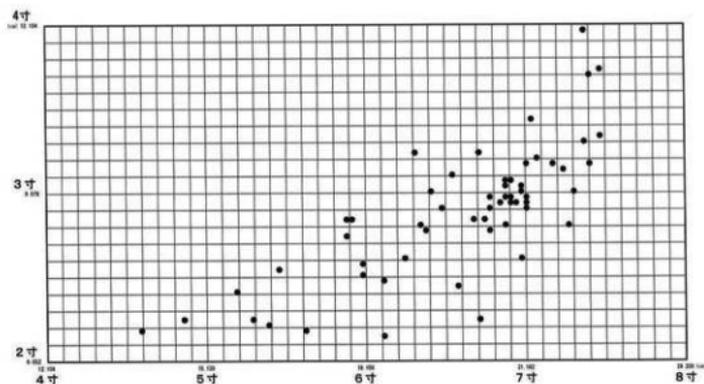


図93 下駄の法量グラフ (I 1a類)

ものである。なお、この技法についても基本的には面取りを行う丁寧な造作を行う I 1a 類にのみみられるものである。

(8) 材質

下駄の材質についてはすべてを樹種鑑定したわけではないが、肉眼観察で異質な材質のものを抽出していくつかの下駄を鑑定し、傾向を把握するようにつとめた。写真図版に掲載した54点のほか、肉眼観察でも材質の異なるもの1点を加えた55点を鑑定の対象とした。

その結果、下駄に用いられた木材はスギ・ヒノキ・ケヤキ・マツ科・イギリの5種が確認された。樹種鑑定の結果、多くはスギ・ヒノキが占めている。また、III類としたいわゆる露卯下駄はいずれもケヤキであり、これにより下駄の種類により木材の使い分けが行われていた状況を取看することができる。そのほか、特徴的な点としてはイギリを用いた下駄が確認される点である。

(9) 補修痕跡

補修痕跡がみられる下駄が12点出土している。

その大半は欠損した歯を鉄釘を用いて補うものであるが、5のみは欠損した後歯を露卯下駄の差歯技法を用いて補修したものである。85・213は折損した前歯を2本の鉄釘を用いて補うもので、同様に81および128は折損した後歯を鉄釘を用いて補修するものである。

これ以外では擦り減った後歯に鉄釘のみが残るものがあり(23・74・91・105・139・152)、これについては板材を付加することによって補修したと考えられるものであり、121では鉄釘を用いて付加された板材が残っている。

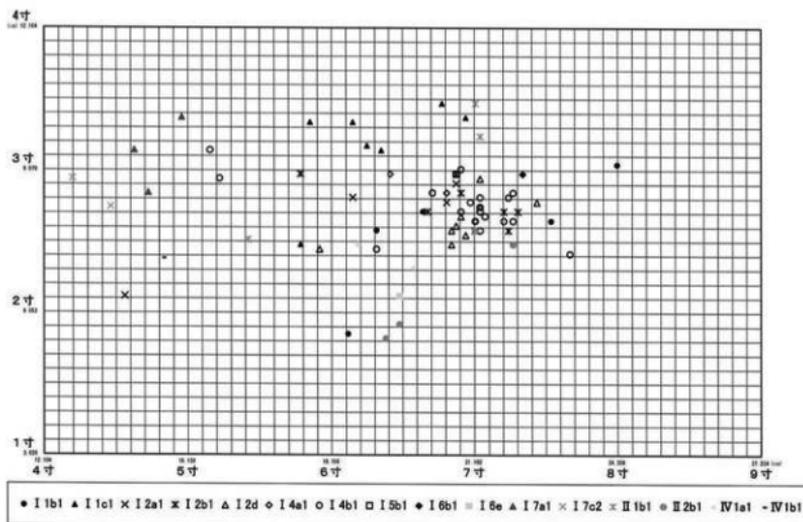


図94 下駄の度量グラフ (I 1a 類以外)

(10) 規格品 (図95)

今回の調査で出土した下駄のうち、これまでの報告でも再三にわたって記述してきたように、面取りを行うとともに漆塗りが行われる I 1a 類の下駄に関してはきわめて丁寧な造作が行われている。

これらの I 1a 類の下駄は法量が酷似し、平面図を投影すると緒穴の位置までもが正確に一致する状況が看取される。ちなみに、これらの下駄は長さは 21.2cm 前後を測り、最大幅は 9.1cm 前後を測るものである。

豊臣前期末頃の 1 尺の長さが計算上 30.26cm 前後であったとの推定(岩田1994)からこの法量をみると、実にミリの単位までの精度をもって正確に 7 寸 × 3 寸を意図して作られている状況が看取することができる。

現状では同一工人によるものとはまではいえないものの、一定の尺度をもって少なくとも同一規格で生産された下駄群であるという点で評価できよう。

(1) 特徴的な下駄

今回の報告では出土した下駄の個別の特徴については触れていないが、ここでは一項を設けて特徴的な下駄についてのみ付記しておくことにしたい。

10 は II 3d 類と分類した無歯下駄で、1 点のみが出土したものである。ただし、この下駄のみ緒穴がなく、いわゆる草履下駄であると考えられるものである。前方に 6 個、後方に 2 個の小穴が穿孔されており、前方の小穴の一つには草履を固定するためのものか、木釘が残っている。

58・164・174 は I 7a 類とした連歯下駄であるが、台部が後歯のところでもまっすぐに切断された形態を呈するものである。法量・特徴からみて 3 点ともに別個体であると考えられ、下駄の一つの形として厳然と存在していたものといえる。

後緒穴の位置からみて、かかと部分がはみ出した状態で履かれていたものと考えられ、特別な用途をもつ下駄であったのかもしれない。

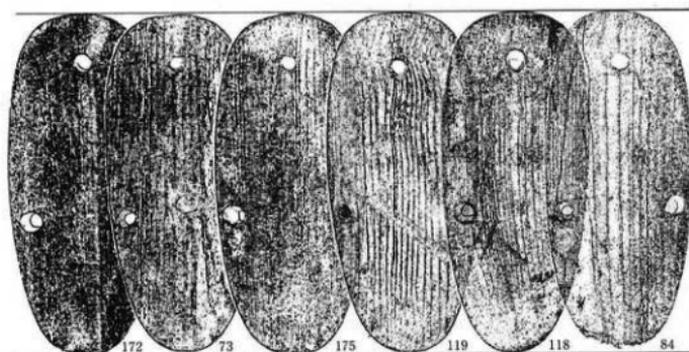


図 95 下駄の規格性 (1 : 3)

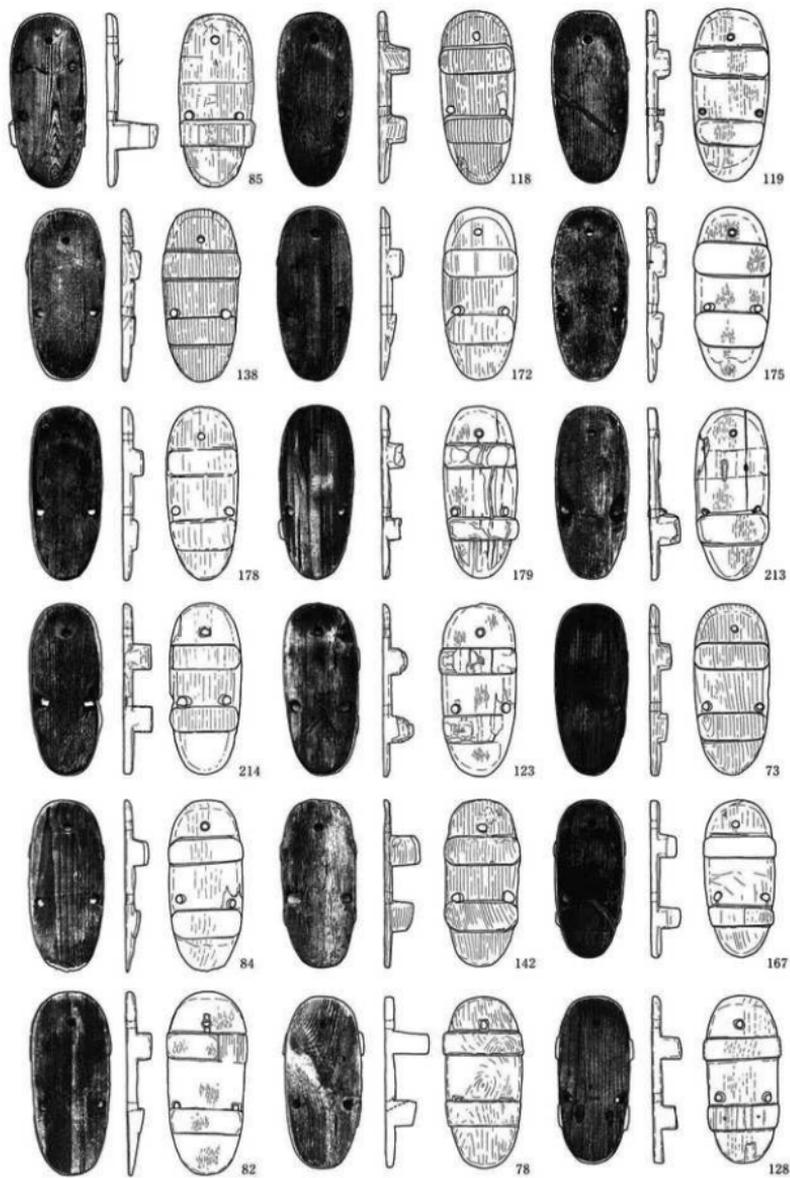


図96 下駄(1)(1:6)

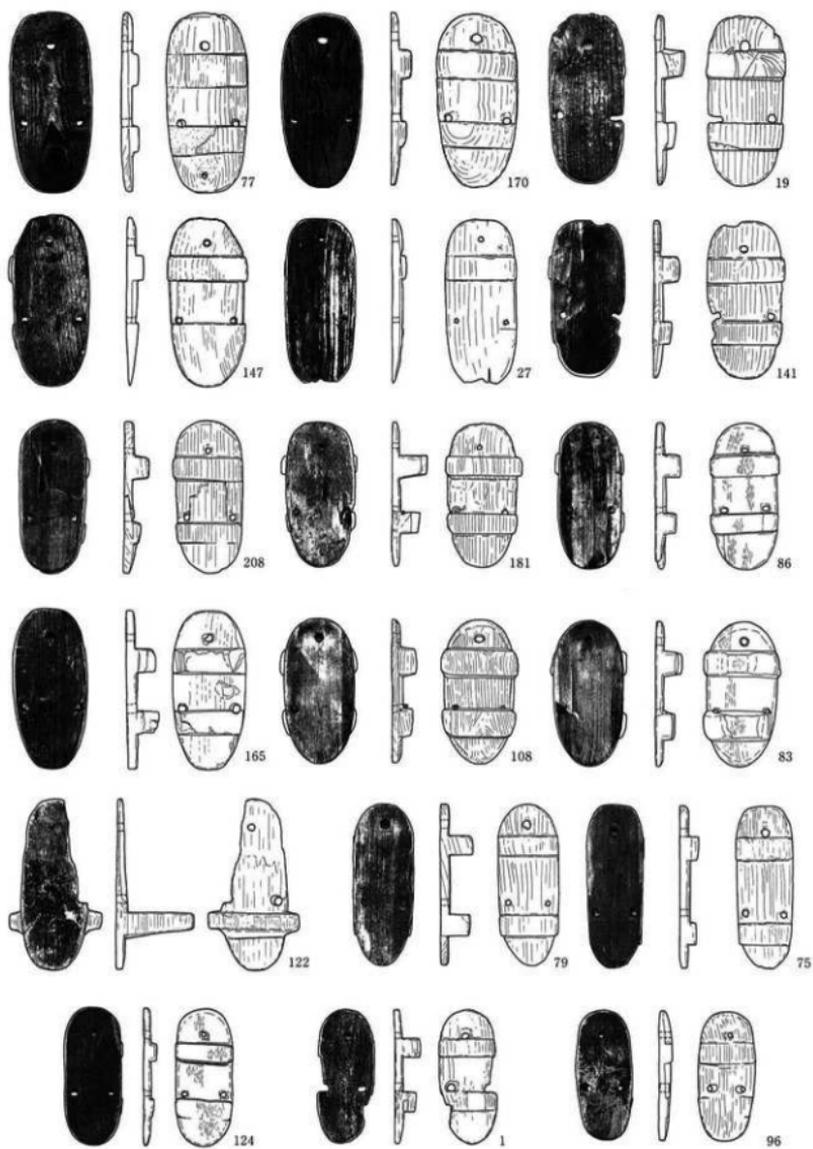


图97 下駄 (2) (1:6)

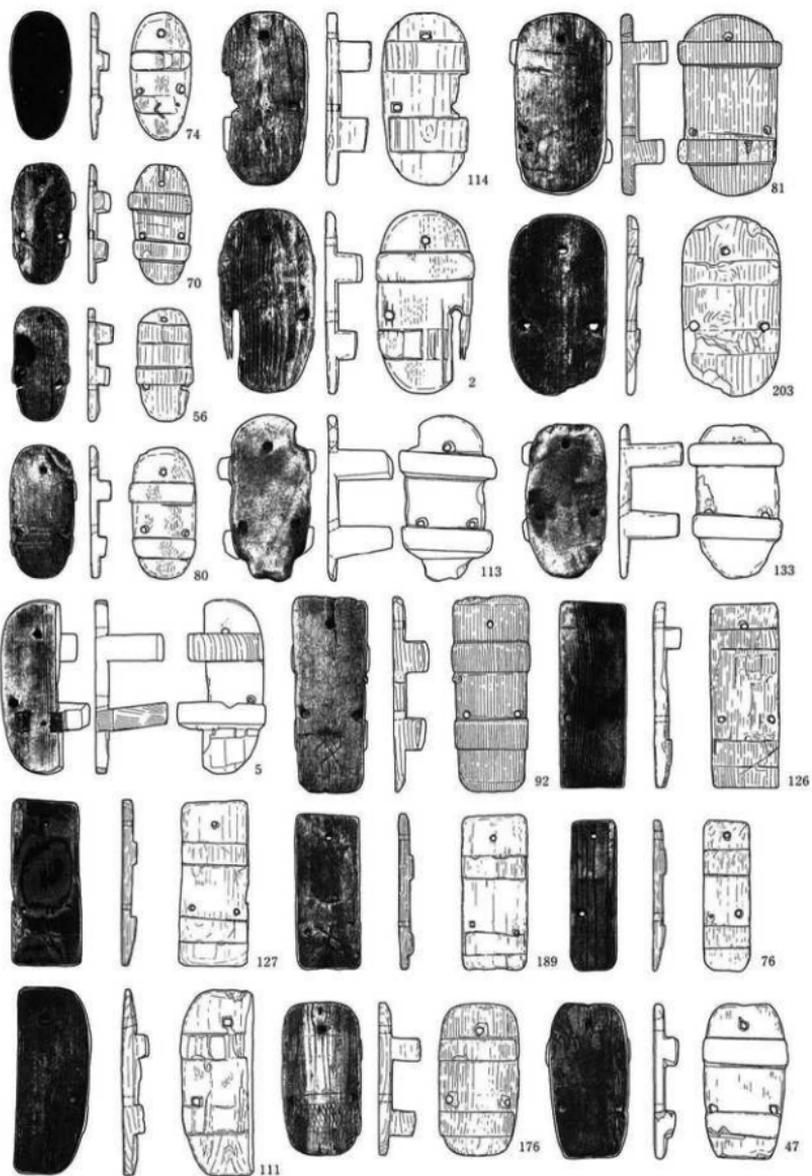


図98 下駄(3)(1:6)

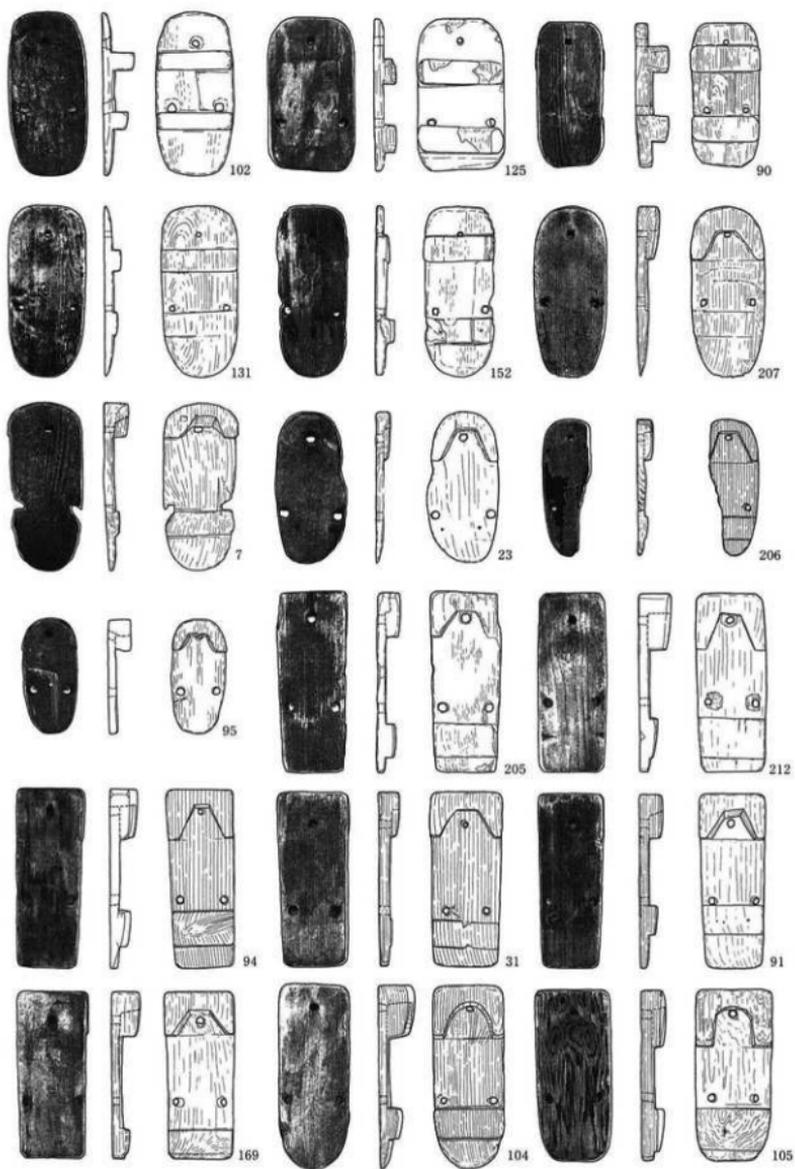


图99 下駄(4)(1:6)

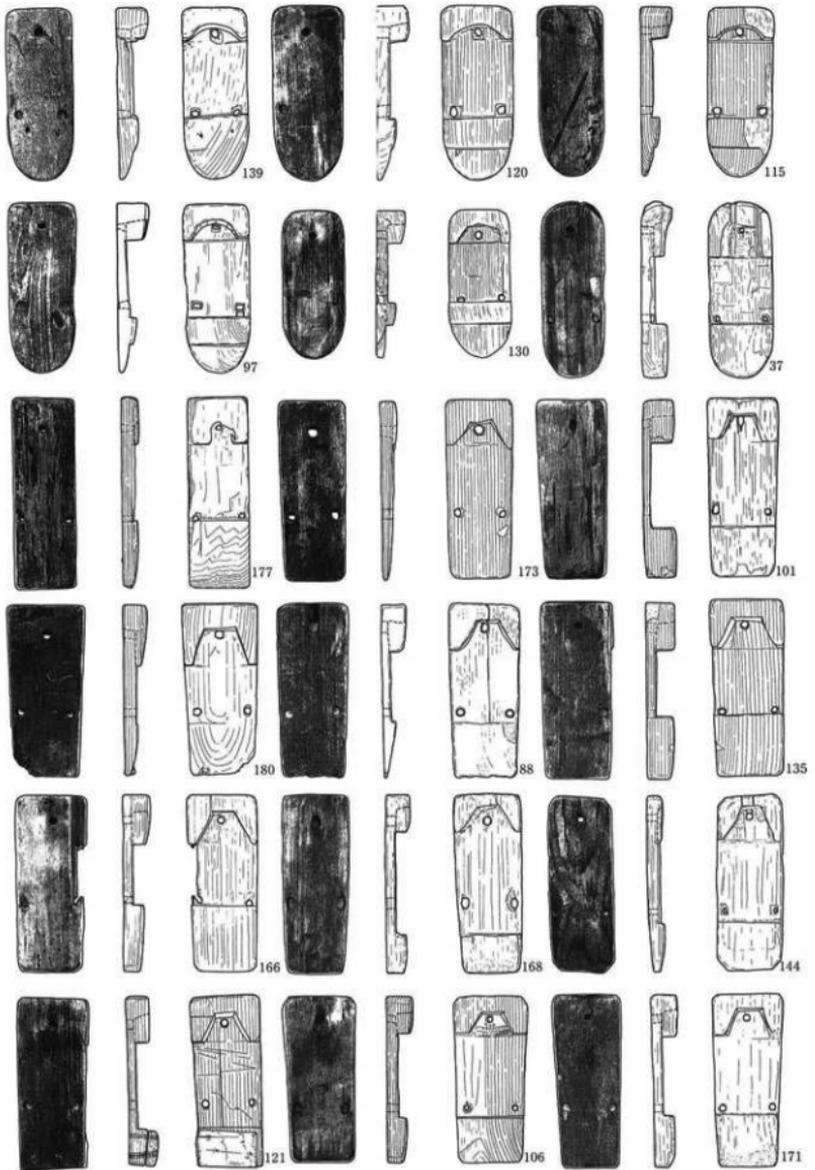


図100 下駄(5)(1:6)

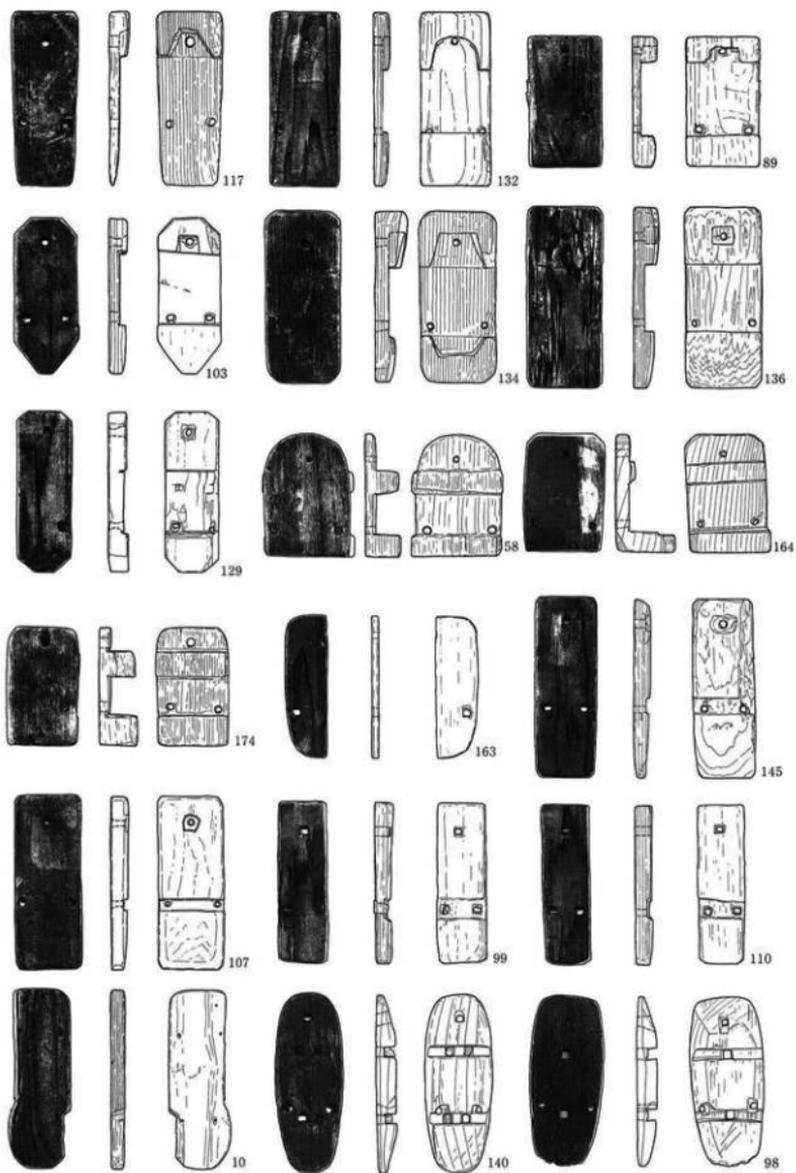


图101 下駄(6)(1:6)

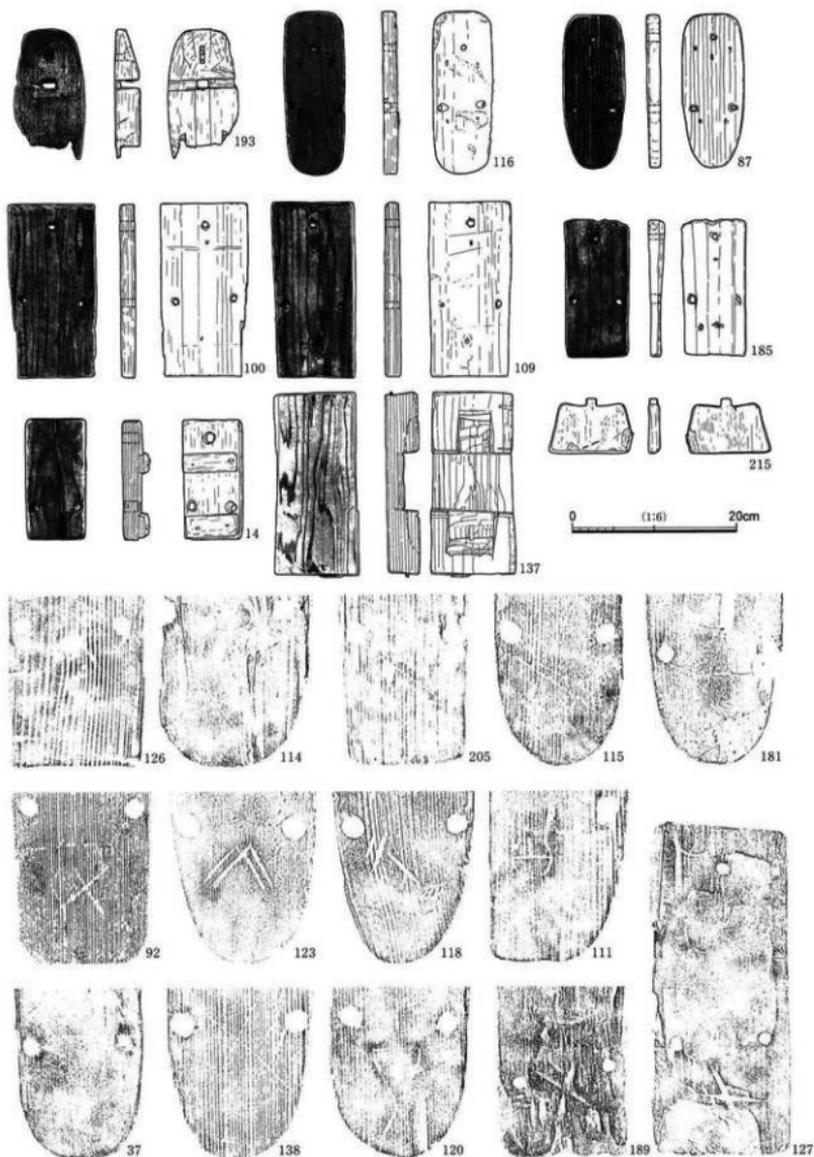


図102 下駄(7)(1:6)と刻印拓影(1)(1:3)

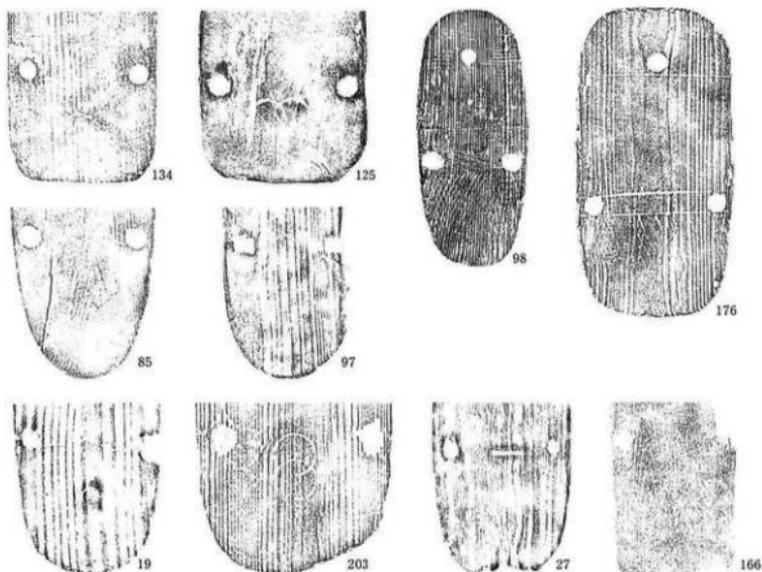


図103 刻印拓影(2)(1:3)

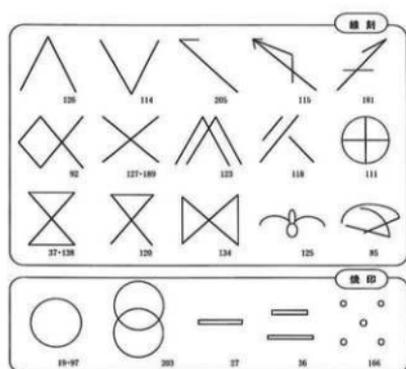


図104 刻印一覽(模式図)

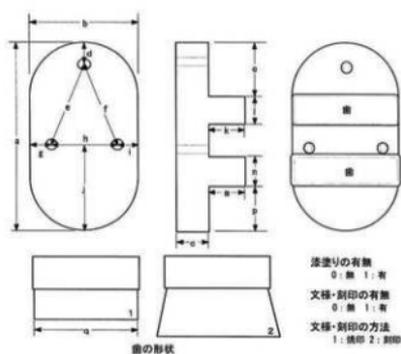


図105 下駄の計測・観察部位

7. 櫛

(1) 前提 (図 107、写 123)

今回の調査では、豊臣大坂城段階の遺構埋土および包含層から、破片を含めて31点の櫛が出土している。当該期以外ではすでに報告を行った古代の櫛が1点出土しているのみであり、また、江戸時代以降では櫛払いが1点出土しているものの、櫛そのものの出土は認められない。

出土遺構および層位については一覧表(表34)に記した通りである。なお、一部の櫛については出土層位が7~9層もしくは7~10層となっているが、これらはいずれも包含層の洗浄作業によって見出したものであり、厳密な意味では出土層位および地点を特定できないものである。

なお、すでに再三にわたって記してきたように、今回の調査では地形的に高い7A調査区は大きく削平されており、したがって櫛の多くについてもその大半は谷状を呈して落ち込む7B調査区からの出土である。しかしながら、削平を免れた井戸328では4点の櫛が出土している。

櫛の個別的な特徴については一覧表に記した通りであり、ここでは全般にわたる属性について総括的に記述を進めることにしたい。また、櫛の歯については土中における経年変化で折損したり、変形しているものが大半であるが、今回の報告では変形している歯については一部で復元的に実測を行っていることを付記しておく。

(2) 分類 (図 106)

今回の調査で出土した櫛はいずれも挽歯技法による木製の横櫛である。大きく解櫛と梳櫛の2種類に別れるが、平面形態はいずれも棟の部分が円弧を描き、肩部(耳)が角張った形状を呈する点で共通している。

しかし、棟の部分の断面形状をみると、背の部分が丸く加工されるものなど、矩形に仕上げられるものに分類が可能であり、ここでは「解櫛」と「梳櫛」という歯の粗密に加えて、棟の断面形状についても図106の4種類に分類を行っている。A類は断面が丸いもの、B類は断面が逆台形を呈するもの、C類は大局的にはB類に似るが、山形を呈して頂部に稜線をもつもの、D類は大局的にはA類と似るが、頂部が尖り稜線を有するものである。

また、これ以外では挽附歯か否か、漆塗りの有無などについては個別に観察し、一覧表に記している。

(3) 出土状況

今回の調査で出土した櫛のうち、遺構から出土したものは10点を数え、それ以外の21点が整地層を含む包含層からの出土である。なお、出土遺構および出土層位は、三の丸造成以降の遺構面が大きく削平さ

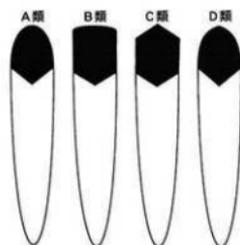


図 106 櫛分類図

れていたこともあって、その大半は豊臣前期のものと考えられるが、盛土である6層から出土しているものや井戸のうち、井戸487出土のものについては豊臣後期に下るものである。

また、冒頭で記述したように豊臣期の遺構は地形的に高い南半の7A地区では徳川大坂城築城にともない大きく削平されている。そのような中であって井戸328では4点の櫛が出土しているものの、7A地区から出土した櫛はこれがすべてである。一方、北半の7B地区では谷部からは豊臣期の遺構面を重層的に検出し、ここから残りの27点の櫛が出土している。

出土遺構および層位については一覧表に記しているため、ここでは棟

り返さないが、概要のみ記しておく。遺構から出土した櫛の多くは井戸や土坑（ゴミ穴）などからの出土が多く、これについては他の遺物の出土傾向と大きくかわるものではない。

出土点数が少ないことから、相互の関係を類推することは困難である。しかしながら、そのような状況にあつて井戸328の11段目井戸枠からからは同一層準から解櫛と梳櫛が同時に出土しているほか、その上下から2点の櫛が出土している。また、井戸487からも同一層準から2点の解櫛が出土している点は留意される。

(4) 組成

すでに分類の項目で略述したように今回の調査で出土した櫛はいずれも挽歯の横櫛である。その内訳をみると、梳櫛は22点、解櫛は9点であり、出土比率ではおよそ2：1で梳櫛が多い。

また、棟の部分の断面形状にはすでに記したような4種類がある。個々の特徴についてはすでに記してきたので繰り返さないが、数量的にはA類が17点と多く、次いでB類が12点を数える。C類およびD類はいずれも1点のみで主流ではない。

(5) 形態と法量

なお、櫛の多くはその形態ゆえに遺存状態が悪く、その全容を知りうるのは5点に限られる。

107-9および107-15はほぼ全体が完存する櫛である。両者の法量は長さが8.6cm、幅4.7cm前後を測り、棟幅がわずかに異なるものの、背幅に至るまで全体の法量が酷似している。107-15が解櫛、107-9が梳櫛ではあるが、一定の規格で製作されたものであることは明らかである。当時の尺度に規制されていた可能性も考えられるが、長さは2.83～2.84寸、幅が1.56～1.57寸となり、尺度との明確な整合性は見出しがたい。

107-16および107-19はやや大振りであり、いずれも長さが9cmを超えるものである。ただし、上記の

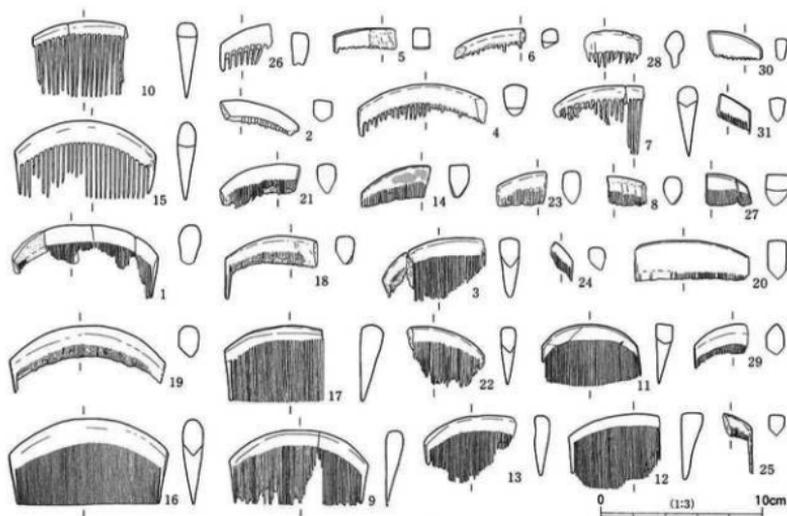


図107 櫛

2点の櫛とは1cm前後の長さの差を有するのみであり、概括的には両者間にさほど大きな法量差があるわけではなく、両者を包括して長さ3寸前後の櫛とみることも可能である。

しかしながら、107-11の櫛は長さが5.977cm、幅3.739cmを測るものであり、他例に比して明らかに小振りの櫛であるといえる。これを当時の尺度に置き換えると長さは1.98寸となり、長さ2寸を意図して作られたものである可能性も示唆される。

また、107-11の櫛は棟の上方、すなわち背の部分からみると、一方の辺はほぼ直線であるのに対して、その反対側の辺は中央部分が緩やかに膨らんだ形状を呈している。これ以外に107-9・12・17なども断面形状がシンメトリーにならず、一方の側だけが背と直角となっており、これらの櫛に関しては表裏の区別がなされていた可能性がある。

(6) 漆塗櫛

櫛に漆で塗り方を施したものは3点出土している。

このうちの107-14は仕上げの漆の塗膜が断片的に残るが、107-4と107-19は下地の漆が残るのみである。全体の出土点数が少ないこともあって、形態との相関関係は見出しがたい。

表 34 櫛一覧

図版番号	写真番号	トシ	遺構名	層位	種別	分類	長さ	幅	棟幅	背幅	備考	測測番号	
107	1	123	7A	井戸328	11段目	解櫛 A	(69.54+25.35)	42.16	11.52	12.64		Tf473	
107	2		7A	井戸328	11段目	解櫛 B	(48.90)	(13.77)	(10.33)	(11.30)		Tf474	
107	3		7A	井戸328	13段目	解櫛 B	(50.76+20.04)	(38.08)	10.04	11.91		Tf478	
107	4	123	4	7A	井戸328	14段目	解櫛 C	(78.74)	(28.66)	14.83	13.73	漆塗・挽附櫛	Tf470
107	5			7B	井戸487	解櫛 B	(37.86)	(13.86)	(11.74)	(10.66)	挽附櫛	Tf475	
107	6			7B	井戸487	4段目	解櫛 A	(43.70)	(14.50)	(8.45)	(10.69)	挽附櫛	Tf476
107	7	123	7	7B	土坑494	埋土 解櫛 A	(44.17+10.90)	42.21	(8.83)	(12.35)		Tf471	
107	8			7B	土坑501	埋土 梳櫛 A	(24.18)	(17.89)	(11.18)	(11.23)		Tf477	
107	9	123	9	7B	土坑513	埋土 梳櫛 A	85.61	47.14	10.10	11.14		Tf 95	
107	10	123	10	7B	土坑581	埋土 解櫛 A	(36.21+22.59)	47.39	8.52	11.55	挽附櫛	Tf466	
107	11	123	11	7B	6層	梳櫛 B	59.77	37.39	8.67	10.14		Tf463	
107	12	123	12	7B	6層	梳櫛 B	(55.71)	(44.09)	(9.16)	(12.92)		Tf467	
107	13	123	13	7B	6層	梳櫛 A	(56.66)	(43.12)	(15.50)	(9.07)		Tf468	
107	14	123	14	7B	6層	梳櫛 B	(44.73)	(22.14)	(10.85)	(12.23)	漆塗	Tf 8	
107	15	123	15	7B	7層	梳櫛 A	85.98	47.69	18.12	11.72	挽附櫛	Tf 9	
107	16	123	16	7B	7層	梳櫛 A	98.28	53.72	16.32	12.69		Tf 94	
107	17	123	17	7B	7層	梳櫛 A	(59.93)	48.14	9.05	13.27		Tf465	
107	18			7B	7層	梳櫛 A	(56.06)	39.63	9.68	12.22		Tf469	
107	19	123	19	7B	8層	梳櫛 A	94.03	36.05	14.28	11.77	漆塗	Tf464	
107	20			7B	7-8層	梳櫛 B	(70.31)	(23.37)	(18.15)	(11.67)		Tf289	
107	21			7B	7-8層	梳櫛 A	(48.42)	(18.13)	(9.54)	(10.97)		Tf290	
107	22			7B	7-9層	梳櫛 A	(47.21)	(38.45)	(11.49)	(10.91)		Tf306	
107	23			7B	7-9層	梳櫛 A	(30.66)	(20.15)	(11.83)	(11.61)		Tf310	
107	24			7B	7-9層	梳櫛 A	(14.57)	(21.03)	(7.54)	(9.51)		Tf257	
107	25			7B	7-9層	梳櫛 B	(19.38)	(37.14)	(9.62)	(9.64)		Tf256	
107	26			7B	7-10層	梳櫛 B	(31.29)	(27.96)	(11.45)	(11.20)		Tf196	
107	27			7B	7-10層	梳櫛 B		(18.73)	(8.98)	(13.98)		Tf197	
107	28			7B	7-10層	梳櫛 A	(34.12)	(23.30)	(12.97)	(12.43)	挽附櫛	Tf194	
107	29			7B	7-10層	梳櫛 D	(32.63)	(26.79)	(13.59)	(10.53)		Tf196	
107	30			7B	7-9層	解櫛 B	(42.51)	(19.30)	(18.68)	8.95		Tf311	
107	31			7B	7-9層	梳櫛 B	(19.61)	(14.11)	(10.83)	(9.86)		Tf161	

※単位はcm